

奇譚クラブ

1958年 3月号



3月号

空想小説 魔教団 NO.8 土路草一
緊縛映画雑誌 シナリオとその周囲 黒河徹也

昭和三十三年三月二十日印刷 (第十二巻三月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年三月号

3

奇譚クラブ

昭和三十三年三月二十日印刷 (第十二巻三月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



IBM. 2805

婦女子襲撃事件の顛末……岸本 青柳
七月号の批評と感想……竹村 茂一
フエチンズム詩集より……並原 新一
読者通信

九月号（復刊第十八号）

【定価 二百円】（〒8円）

女体屈伸測定器……四馬孝・画
いけにえの町娘……滝川 子
新緑の陽を浴びて……須川 令子
「括られちやつたワ」……秋 千恵子
緊縛映画名場面集……榎月太郎提供
縛られた女優たち……千葉栄市提供
洋面スチール二題……編集部選定
「征服者」——「魂術師の応」
病徒然草……柳沢 吉保
告白「夢の線」……皆川 孝子
異説八百屋お七「幻想炎の娘」……（後編）
壯烈大和撫子……沼山 秀三
ある夢家の手帖から……沼山 秀三
探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎 勉
美女を十字架にクギつけ（生）にえのまわ
りて肉体の狂宴……東 一郎
相撲草……土俵四股平
ワイド映画の縛りシーン……嵯峨美也子
和装教室（長橋祥彌れ場の巻）……白 紅次
魔女裁判に関するフット（続）……甲斐 仁
「苦しみ求めて」(1)（細への憧れ）……近藤 正三
「苦しみ求めて」(2)（細への憧れ）……近藤 正三
家畜人ヤプー（第九回）……沼山 秀三
「短信」……山下 真一
赤い煉瓦の家……津々 一平
体談「水兵生活と輝」……内田 武雄
ビーチボールの魅力……佐田 春雄
残虐な女性……森本愛造・訳
医学幻想……古井 直哉
映画速報欄……千葉 栄市
告白「女性志願者の夢」（前編）……真崎 伸一

麻生保氏の生活と意見(二) 麻生 保
切腹随想……兵頭 庫一
私の本箱から（単行本、雑誌の責め場
面）……星 光一
美少年処刑の図「笑い」……山口 幸一
菊池会「例会報告」……筑紫美弥子
現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正
フエチンズム「赤い下書き」……高木 栄二
痛められし桃の実（第二回）（マリ
アンの手記より）……鴉鳴吐夫・訳
続・濃滅の前夜（完結篇）……十路 草一
読者通信

十月号（復刊第十九号）

【定価 二百円】（〒8円）

口絵
賣面「鼻いじめ」……四馬孝・画
縛られた女優たち（場面集）……
緊縛写真「グラマー・ガールのニ
スタイル」……阿部秀・榎月太郎・提供
賣面「地下倉庫」……北原純子・画
洋面スチール二題……
「古城の剣豪」——「指紋なき男」
絵物語「お加代源三郎旅日記」……
告白「女性志願者の夢」（後編）……藤木 仙治
女性の悲鳴について……真崎 伸一
「苦しみ求めて」(2)（細への憧れ）……近藤 正三
「苦しみ求めて」(2)（細への憧れ）……近藤 正三
を持つ女性の手記より……沼山 秀三
終戦奴隷（或る勤労動員女学生の手記
より）……高木 栄二
私の好きな女靴……波路 洋
「吊し責め」の実験（奇譚俱樂部集
告）……古井 直哉
女性化願望と男性思慕……岸本 青柳
家畜人ヤプー（第十回）……沼山 秀三
東京の人よ何を穿く（腰巻とパンティ
と）

ふんどし……松原三千代
「艶美なる捕物帖」……牧高志文・画
ある夢家の手帖から……沼山 秀三
大陸暴行列車（内附烙印38号の女の
手記）……本由 由郎
可憐なサド、可憐なマゾ 佐々木ツトム
製糸工女……木口 房代
緊縛映画「再映画化作品について」……
告白「恋する夫人への手紙」(二)……阿部 秀
アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐 重八
痛められし桃の実（第二回）……鴉鳴吐夫・訳
「マリアンの手記より」……鴉鳴吐夫・訳
「美女達のお尻が風船をつぶすアイ
スヨー」……清水 恵二
マゾヒズムへのいざない……天野 哲夫
女性切腹随想……田谷 敬生
和装教室（古典模倣矢新御供の巻）……
雑報と雑感……白 紅次
院陽権通信「アブ・マニア雑談」……
捕縛入門……赤井 茂
戦争未亡人の告白「ヒップ受難」……
美容病院（第一回）……花田 育子
モデル志願の女性より……久留木 栄
架空小説「残虐芸術展覧会」……伊藤 晴雨
雑誌通信「捕縛を中心として」……
フランソワの手記……山梨 参次
読者通信

〇十一月号（復刊第二十号）

【定価 二百円】（〒8円）

口絵
賣面「拘束服」……四馬孝・画
滝川子面集……滝川 子
舞妓（まいこ） 予後（よこ）

緊縛写真「猿ぐつわと細目」……
縛られた女優たち（場面集）……
東映「朝焼け富士」……三浦 光子
宝塚「題不詳」……尾上さくら
サジスチックな洋面スチール二題……
伊映画「カルタゴの女奴隷」……
米映画「異教徒の旗印」……
口責めと幾何学図形……久留木 栄
悲しきマゾヒストの告白……三根 耕二
性倒錯の男と女……山下 真一
美容病院……久留木 栄
体談「つばきの沼」……白 紅次
「秘蔵の黒髪」……白 紅次
ある夢家の手帖から……沼山 秀三
「苦しみ求めて」(完結)……沼山 秀三
私の好きな女靴……波路 洋
女性ホルモン服用の実験報告……古井 直哉
再映画化作品について(2)……阿部 秀
私の本箱から……沼山 秀三
タイアナ夫人……星 光一
妙齡美人の吊責め……岸本 青柳
ジエームス・ディーンのこと……伊藤 晴雨
残虐芸術展覧会……山梨 参次
私のキタ・セクスアリス……沼山 秀三
創作「東京自殺クラブ」……沼山 秀三
「麗いた動静士」の物語……沼山 秀三
告白「アヌス自虐体験記」……沼山 秀三
あらびやの奴隷市……沼山 秀三
不良グループの私刑……沼山 秀三
アブ・モード・オール・スクラップ……沼山 秀三

女はらきりの夢……矢桐 重八
雑報と雑感……白 紅次
終戦奴隷（後編）……沼山 秀三
マゾヒズムへのいざない……沼山 秀三
下着通信……沼山 秀三
特異な角度から(3)……沼山 秀三
「演出」……沼山 秀三
家畜人ヤプー（第十一回）……沼山 秀三
正高節夫・沼山 秀三



奇譚クラブ

復刊第二十五号
三月 号 目次

巻頭口絵

責画 蠟 涙(ろるい)	四馬 孝・画
滝れい子画集 五輪 塔	滝れい子・画
写真「腰元折檻」A後手吊責V	村井知可子
写真 ニュー・ガールの緊縛模様	大塚 啓子
縛られた女優たち	阿部 秀・提供
大映「冥土の顔役」毛利郁子 東宝「柳生武芸帳」久我美子	
東映「大名囃子」勝浦千浪、常盤光世	
緊縛映画スチール A千原しのぶの巻V	藤木仙治・提供
東映「快傑黒頭巾」 東映「はやぶさ奉行」	

緊縛映画雑誌

シナリオとその周囲	黒河徹也 18
ガーベラの甘き香り	辻村 隆 28
大阪屋花鳥 (女牢名主)	小坂多美枝 39
家畜人ヤブー	沼 正三 42
女体切腹 屠腹乙女桜 (後篇)	藤山秀緒 58
探偵小説にあらわれた地獄絵巻	高崎 勉 62
悪魔の唄、江戸川乱歩の「盲 獣」	
映画速報欄「緊縛映画誌上封切」	阿部 秀 69
『女体風俗』和装開眼の巻	牧 高志 70
体験記 椿 事(ちんじ)	青葉慎一 74

麻生保氏の生活と意見 (六)	麻生 保 80
漁村風景 (種にまつわるある少年のエピソード)	山口幸一 81
美容病院	久留木 栄 84
被虐の一日 (2)	吉田慈一 92
昔物語にあらわれた「男責」について	菅 良太 96
十三人目の奴隷	夢原狂介 98
街で見つけたフェチズム	とろろ・かつひこ 106
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正 110
最近の時代劇の縛り映画から	嵯峨美也子 112
映画通信「縛られた女優達」	南方佳男 113
「強盗事件に関する」	
新聞記事についての一考察	南 時夫 114
女将と女装の種々責	岸本青柳 121
マヤの黄昏	山川和男 132
ある夢想家の手帖から	沼 正三 134
女性文身考	南方 純 138
マゾヒズムへのいざない (6)	黒田史朗 150
マニア通信(ボクの責め方続編)	宝塚二三夫 152
魔教団 NO.8	土路草一 154
正月の時代劇映画より	
初姿縛られ女優	大河原珠樹 160
臨時増刊号「ある夢想家の手帖から」	発行予告 162
読者通信	164

通信「最近号の感想と批評」近藤 一
読者通信

○十二月号(復刊第二十一号)

【定価二百円】(千8円)

口絵

「夜脱衣場」(ハリツケ) 四馬孝・面
「夜の脱衣場」(マダム) 滝れい子・面

「夜の脱衣場」(マダム) 杉原虹児・面
映画紹介「縛られた女優たち」 阿部秀・提供

新東宝「修羅八荒」 遠山 幸子
大映「女孤屋敷」 近藤美恵子

写真「縛られた女体」 本誌写真部撮影
(2ページ) (ボリウム) (雑誌) (光沢)

洋面スチール二題
米映画「キング・コング」

米映画「壮烈カイバ・銃隊」
「カラシヤの教典」 西小路公彦

マゾヒズムへのいさな(第三回) 天野 哲夫
創作「ゆうべのお客様」 近藤 一

時評「麻生保氏の生活と意見」 麻生 保
「靴への愛慕と踏まれる喜び」 波路 洋

黒いベチコート 鴉路 吐夫
黒いベチコート(前篇) 藤山 秀緒

家畜人ヤブー(第十二回) 沼 正三
ワイド映画の縛りシーンから

「逆比例」 嵯峨美也子
「逆比例」 牧高志・文面

「逆比例」 岸本 青柳
「逆比例」 久留木 栄

「逆比例」 白金 紅次
「逆比例」 山下 真一

「逆比例」 伊藤 晴雨
「逆比例」 残虐芸術展覧会

ある夢想家の手帖から 沼 正三
ある女給の体験(6) 目下 絹子

白人の娘のこと 内田 武男
探った秘密 須藤 律夫

帝國海軍の私刑 香川 隆二
「真実は誰も知らない」 辻村 隆

ナースと流腸(ツレさんの流腸記) 岩村美智子
ケンちゃんのこと 柴崎 黎子

男奴隷のことども 皆川 黎子
本誌紹介「緊縛映画一覽」 編集部編

読者通信
○新年号(復刊第二十二号)

【定価二百円】(千8円)

巻頭口絵
「三浦右衛門の最期」 佐々木ツトム

「我が娘を鎖で監禁」 桂 牧次郎
お伊勢参り 近藤 一

時代小説「女賊変化」 海野 繁
「手記」私のいたつち 南 保

「マゾヒズムの告白」 杉本 真三
犬の生霊 青山 芳樹

女体切腹秘話 愁風連 楓月 太朗

奇ク十二月号難題 辻村 隆
夜光る 正三 純

生首礼讃 沼 秀
家畜人ヤブー 阿部 正三

緊縛映画速報欄
読者通信

編集後記
○臨時増刊号(復刊第二十三号)

【定価二百円】(千8円)

口絵
「外七篇八葉」 滝れい子面「拷問」

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「三浦右衛門の最期」 佐々木ツトム
「我が娘を鎖で監禁」 桂 牧次郎

「お伊勢参り」 近藤 一
「時代小説「女賊変化」」 海野 繁

「手記」私のいたつち 南 保
「マゾヒズムの告白」 杉本 真三

犬の生霊 青山 芳樹
女体切腹秘話 愁風連 楓月 太朗

奇ク十二月号難題 辻村 隆
夜光る 正三 純

生首礼讃 沼 秀
家畜人ヤブー 阿部 正三

緊縛映画速報欄
読者通信

編集後記
○臨時増刊号(復刊第二十四号)

【定価二百円】(千8円)

口絵
「外七篇八葉」 滝れい子面「拷問」

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

「拷問」 滝れい子面
「拷問」 滝れい子面

蠟 涙 (ろうるい)

綱で固定されて身動き出来ぬ双つの乳房の間に立てられたローソクからは、
蠟涙がたらりたらりと胸の上に流れてくるのであった。

四 馬 孝・画



五輪塔

滝 子・画



「腰元折檻」



責吊手後

(モデル)……村井知可子嬢



ニュー・ガールの緊縛模様
その三



モデル 大塚啓子嬢



東映「大名囃子」勝浦千浪、常磐光世（前名谷鈴子）
世の中の非道な男達に痛めつけられた女達を助け、女だけの城を築こうとの信念
に生きる当り矢お今（勝浦千浪）は矢場を鬼倉本陣のやくざ共に襲われお豊（常
磐光世）と共に縛られる。

縛られた女優たち (緊縛映画)



大映「冥土の顔役」毛利郁子「透明人間と蠅男」で話題のグラマーとしてデビュー以来、二本目の出演で早くも縛られ猿ぐつわをされる。真偽の程はつきびらかでないが、この写真の猿ぐつわのハンカチは小道具ではなく自分の持物で蛇の鱗刀のような柄だともある。



東宝「柳生武芸帳」第一部 久我美子 深窓の令嬢として育った彼女が「三つの恋の物語」でデビューして以来十年、初めて猿ぐつわをされ縛られた写真である。これで「鞍馬の火祭」の岸恵子「黒い河」の有馬稲子と、にんじんくらぶの三人は仲良く縛られたことになる。

緊縛映画スチール／＼千原しのぶの巻
 藤木仙治 提供解説
 東映映画「快傑黒頭巾」千原しのぶ



大友柳太郎主演のシリーズもの。縛られ吊られているのは千原しのぶ。島田、長じゆばんの純和装で前手錠、クサリ吊りというポーズは珍しい。映画では星十郎の目明しがクサリをひくごとに、千原しのぶの身体がジリジリと上にのぼり、両足が床から離れてゆくカットがあった。



東映映画「はやぶさ奉行」千原しのぶ
 片岡千恵蔵主演の遠山金四郎シリーズ。昨年十一月封切られた、いわゆる東映スコープという大型スクリーン。弓の折れのムチはいささか定石ながら、このスチールの構図はなかなか味がある。



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 3月号

(第十二卷 第四号 通刊第百五号)

緊縛映画雑誌

シナリオとその周囲

黒 河 徹 也

シナリオは、良く建築の設計図にたとえられます。シナリオが、しっかりしていなければ、良い映画は生れない訳です。しっかりした秀れたシナリオとは、映画の特質を最も適確に内包したシナリオの事です。

僕が新年号に引用した『黒い河』『純愛物語』を今一度読み返して頂けば、つまらない説明など全く無用であることが判って頂けると思います。『黒い河』でも『純愛物語』でも一読すれば、そのシーンが克明に眼前に展開する筈です。そこには生々しい描写があり生きた人間が表現されているために、くつきりしたイメージが読者に与えられ、映画演出

家は、そのイメージを映画技術を駆使して正確に視覚化し秀れた映画を生み出す訳です。

シナリオは同じように文字を連ねても、小説とは根本から異なるものです。ただ單に読んで面白いシナリオが、立派な映画を作るものではなく、映画独自のテンポの流れに乗って主題を正確に読者に訴え印象づけるシナリオこそ、よいシナリオと云える訳です。

映画と小説の鑑賞形式の相違と共にシナリオと小説の読み方も異ならねばなりません。小説は謂わば、観念を通じて形象を捉える努力を読者自身がしなければならず、想像力、思考力なしでは成立しません。しかし、生々

しい写実性を持った映画の土台であるシナリオは、逆に形象から観念への方を辿るものです。小説の場合は、内面的思索的方向をもって言語を駆使して、何処までも人間心理の隠れた深みに立入ります。シナリオは表情とか行為とか、会話、又はモンタージュなどによって人間や事件を描きます。映画が外面的感覚な特徴を持っている以上、これがシナリオの宿命でしょう。

新東宝で昭和二十八年の春、封切った『縮図』は、新藤兼人がシナリオを執筆し、彼自身演出して製作したものです。最初、彼は溝口健二に演出を奨めたが、種々の理由から断

られたそうです。シナリオ作家が主演者の俳優を推定し、又は演出家を頭に置いてシナリオを製作する場合は、なるべくそれらの人々のイメージに合致するように心掛けるのが常道です。新藤兼人は松竹時代劇「我が恋は燃えぬ」（本誌昭和二十八年三月号）に描かれた女優たち（掲載）のシナリオを書いて演出の溝口健二と顔を合わせておられますので、恐らく溝口好みのシナリオを心掛けたと思われます。

縮図は自然主義文学の巨峰の一つで、徳川秋声晩年の作であり、銀子という女の半生が、大正という社会を背景にして鋭く捉えられています。男の愛玩用でしかなかった女性の悲劇を、映画では昭和十一年から十二年の間の出来事として描いています。貧しい家に育った銀子が辿る屈辱の半生と、彼女をとり巻く庶民の喜びと悲しみを、異様な熱気をこめて映画は描いております。

千葉の蓮池から、見習いの短い期間を終えて牡丹という名で芸者になった銀子は、芸者屋藤本の親爺の磯貝に純潔を犯され、ほのかな初恋を寄せていた医学士の栗栖を諦めねばならなくなり、執拗に迫る磯貝に必死で抵抗します。我が子の苦しみを見るに見兼ねた父銀蔵は、店の品物を売り払って銀子を連れ戻します。謂わば悲劇の第一歩であり、彼女の人生を決定する重要なやま場の一つを、シナ

リオはこう描いております。

磯貝のかみさんが亡くなり、彼は銀子を後

釜にと企みます。銀子は眼に一杯涙をためて部屋を駆け出し、その足で栗栖に会って帰る途、



42 栗栖の家の表 塞がるように磯貝が立っている。

磯貝「なにをしてたんだ」

銀子「……………」

磯貝「こんなことだろうと思ってたんだ帰るんだ」

と手首を掴む。銀子、急にわけの判らない怒りがこみあげて来て、強く振り払う。

磯貝「バカ……………」

いきなりビンタを張る。(WIPE)

43 藤本の座敷

裸にされた銀子、布団でくるくる捲かれて転がされている。磯貝、そのそばで酒を飲んでいる。銀子、手足をバタバタやって暴れながら喚く。

銀子「なにをしゃがるんだ！ 殺せ、殺せ、バカ！ バカ野郎！」

磯貝、せせら笑って酒を飲み

磯貝「お前の体には、金がかかってるんだ。煮て喰おうと焼いて喰おうと、わしの勝手だ。性根が癒るまで懲しめてやるからそう思え」

銀子「畜生っ、バカおやじ！ バカ野郎！」

磯貝、やにわに首にかけていた手拭を喚く銀子の口に巻きつける。銀子、唸りながら猛点と暴れまわり、足でテーブルを跳ね返す。(WIPE)

44 荒川堤

明るい太陽がふりそそいでいる。銀子は体を投げ出すように、草の上に寝そべっている。彼方の鉄橋を、汽車が汽笛を鳴らして東京の方へ渡って行く。銀子、体を起してそれを見ていたが、ゆっくり誘われるように立ち、堤防を歩いて行く。

こうして銀子は一旦、東京の我が家に帰ります。佗しく仕事をする父や内職を続ける母、小学生の幼ない妹まで働きに出ねばならない余りに貧しい我が家の生活を見て、再び銀子は藤本に帰ります。

48 藤本の階下の階段口

浜龍、千寿番、二、三段の処から、そつと様子をうかがっている。磯貝の唸鳴る声、磯貝の声「そんな事で胡麻化されると思うか！」

49 居間と座敷

銀子、居間にじっと坐って、強情に口をつぐんでいる。磯貝、酒気を帯びた顔で、そのそばに突っ立っている。

磯貝「栗栖の若造と、どっかで逢って来たんだろう。そうにきまってるんだ。さあいえ、何処で逢って来た。何をしてきたんだ」

銀子、黙って立ち出て行くとする。磯貝、その手首を掴む。

磯貝「おい、なぜ黙っとるんだ。何とか

言わんか」

銀子、黙って振り放す。磯貝、追いますが前に塞がる。

磯貝（急に哀願的に）「わしはな、本当にお前が可愛いんだ。お前にはそれが判らんのか…………お前さえ、大人しくしてりや」

銀子、すり抜けて行くとする。磯貝いきなり肩を掴んで引き倒す。

磯貝「強情な奴だ。ものを言わんのか」銀子、依然として固く口をつぐみ立とうとする。磯貝、かっとならば眼をむき銀子の髪を掴んで引き倒す。銀子、歯を喰いしばって、その手にすがる。磯貝、そのままずるずると座敷へ引きずって行く。

磯貝「お前がその気なら、こっちにも考えがあるんだぞ」(WIPE)

50 同じ座敷

長襦袢ひとつにされた銀子、抜帯で両手を後に縛られている。依然として強情に口をつぐみ、じっと磯貝をみつめている。磯貝、息を弾ませて立ちあがるように突っ立ち、

磯貝「さあ、はっきりと約束しろ。もう栗栖には会わんと約束しろ」

銀子、押し黙っている。

磯貝「お前がいくら強情はっても、わしにお前を、どうにでもすることが出来るん

だぞ」

のしかかろうとする磯貝を、銀子は足をあげて蹴る。磯貝、おおり立てられたように、むくむくと起き上る。銀子、縛られたまま、居間へ逃れる。磯貝、追って肩を掴み抱きすくめる。銀子、ベツと唾を吐く。磯貝、思わずひるんで手を離す。二人、一瞬、睨み合って荒い呼吸で対立する。襖が開いて銀蔵がぬつと顔を出す。磯貝、不意のちん入者に微かな動揺。銀蔵、黙って銀子に進み、縛られた扱帯を解く。

銀蔵（静かに）「お銀、帰ろう」

銀子、張りつめていた心が、ぱらぱらと解けて崩れたように、わっと父の胸にしがみつく。

銀蔵「よしよし泣くな。お前の様子が変わったから来てみたんだ。……よかったよ。来てみて。……さあ、帰ろう」

磯貝、虚勢をとり戻して

磯貝「帰ろうたって、そう簡単にいかないよ」

銀蔵（強い眼で振り向き）「この子に金がかかってるっていうんだらう。耳を揃えて返してやるから、あしたにでも取りに来い」

（WIPE）

WIPEとは画面を右から、又は左から拭くように消しつつ、次の画面を出してくる場

面のつなぎ方です。

勿論、小説には、こんなセリフはありません。映画の主題となっていて人売買の悲劇といったことも、小説ではあからさまに描いておりません。が、小説を脚色するには原型は一旦、粉々に解体され、そこから映画の中へ映画の法則に従って再生産され、その過程の中でシナリオ作家は、小説の活字の裏に敷き詰められている真実を、正確に感じとり具象化する訳です。

引用した部分は、売られて行った銀子の悲劇の最初のクライシスとして相応しいものであり、転落の坂を転び始めた銀子を観客に強く印象づけるものです。が、それと同時に、売られた貧しい女の哀しみが、じんと観客の胸に伝わって来ます。

このシナリオは、その年のシナリオ・ベスト・テンの中に入賞して居り、銀子は乙羽信子、父銀蔵は宇野重吉、磯貝を菅井一郎が演じております。尚、本誌二十九年十二月号に升岡金吉氏が「縛られた女優達」の中でも紹介されています。

映画にもピンからキリまである如く、シナリオにも、秀れたもの愚劣なもの様々です。赤穂浪士の討入り後十年、江戸の町に、死体に四十七士の討入り衣裳をかぶせた殺人事件が相次いで起る——という奇怪な物語の東映

「妖異忠臣蔵」（本誌二十九年十一月号「女優の縛られ映画」に紹介）は、シナリオそのものも奇怪です。終り近く定石通り、ヒロインお蝶が赤穂浪士に遺恨を持つ実は贗小判贋造団の一味に捕えられ、様子を探りに来た巾着切お勝も捕えられ。

130 夜の義士屋敷の内部の三

毛利が先行して土蔵の扉を開く。小山田がお勝を引きずって来て

小山田「今夜は夜っぴいて廻りものにしてくれる故、先ずそれまではゆっくりと休息しろ」

言下にドンと突き放す。お勝はよろめき込んで

お勝「まあ、お蝶さん！」

片隅にお蝶が、猿ぐつわをされて縛りつけられている。

このシナリオには描写がなく、説明があるのみのようです。しかもその説明が、お勝が敵の本拠に乗り込んで捕えられながら、縛られているのか、いないのか判らぬの間が抜けています。ここから遙か十五シーン後の144義士屋敷の内部の三場面でようやく、お勝、お蝶の縄を切る。場面となり、やっとお勝が縛られていないことが判ります。それにしてもお蝶救出の鈍いことはじれったく、ここから四シーンを経たシーン147で、やっとお勝がいきなり猿ぐつわをとって

お勝「さあ、お蝶さん」
お蝶「はい」

縄をかなぐり捨てて立ち去る。

ことになります。この映画の内容は、時代劇であっても一種のスリラー物であり、矢つぎ早やのサスペンスが積み重なって、始めて面白くもなる作品ですが、そうした配慮の全くないのは残念です。更に何よりも、人間が描けていないことは致命的です。お蝶、長谷川裕見子、お勝、山根寿子が演じています。

映画を歴史的に見てみますと、始めは何かの事件を描くことが最大の目標だった訳です。筋を伝えることが最大の目標だった訳です。

それが「感情」を描くようになり、今日ではただ情緒の流れだけでは最早、芸術としての評価に堪え得ない段階に来ております。人間性の探求、性格の掘り下げから、人間の中の真実を描き切るまで映画は成長してきています。そのような意味から、今一度、題名のみコケ脅しの「妖異忠臣蔵」を見てみますと何の妖異さもなく、何だ、これでも映画か？ 紙芝居と違うのか？ とも考え込まされ、その点、まさに妖異そのものです。シナリオが、その奇怪さに寄与していることは明らかです。

「黒い河」を書いた松山善三に、佐藤鉄章の原作から脚色した「若い魂」というシナリオがあります。

昔は鰯で栄えた北海道、江差の町も今は漁場の移動で、さびれてゆく町になっている。防波堤で囲まれた漁場も佗しい。海岸沿いの道を、一台のトラックが相当なスピードで飛ばして来る。町中に入ったトラックは、つるが屋の前で停る。運転手の男が、つるが屋の二階へ怒鳴る。「おい、珠ちゃん！ 珠ちゃん」二階の窓から今起きたのか、しどけない寝間着姿の女が顔を出す。一見して娼婦と判る身のこなしである。「なんじやい、やかししいの」「済まねえな、珠ちゃん迎えに来たんだ。まだ寝とるんか！」「ちよっと待って……いまお化粧中や」つるが屋の二階は、ひどく散らかっている。敷きつ放しの寝床。そこここに転がっている煙草の吸殻。ノサツブの春子が隣室に怒鳴る。「珠子、するめやの弘が迎えに来とるが」煙草をふかしていた葉子が「珠ちゃんも物好きやね。弘に惚れたんかね」ぶうっと吸いた煙が輪にならず崩れたまま天井へぶつかる。隣室との襖があいて珠子が顔を出す。「姐さん、ちよっと行つて来ます」「珠子、あんた弘にあんまりサビスせんとき。若い男はカッとなつたら始末におえへんで」「弘のトラックには、何時もハッパを乗せとるというではないか。ボーンと来たら、それで一卷の終りや……」春子と葉子の忠告を聞き流して珠子、ふっと笑いながら襖をしめる。咳をしながら階段を降りてゆ

く。見送って葉子はボーイと煙草を皿につつまみ「姐さん、大丈夫かね。珠ちゃん……ひどく悪いんでないかね」と自分の胸を指した。「函館で凄いかせぎ方したんだってね」「仲間の客、横取りして切り出しで突かれたっていうのよ。年は若いが」「なんで、こんな町へ来たんだらう……室蘭でも札幌でも、あの子なら何処だって」春子は床にころっと転がって「変屈なんだろう。この商売には、ああいうのがなんぼでもいるよ」

シナリオ「若い魂」の最初の部分シーン、No1からNo7までの要約です。これだけで判るように、ヒロイン珠子はよからぬ商売の女です。生れながらの娼婦はいない訳で、ここにドラマが成立します。一人の女が社会の中をどのように歩いて娼婦になったか。しかし、ただそれだけを描くものなら、單なるメロドラマか、又は底の浅い社会的ドラマとなるので通例です。処が松山善三は、泥沼から抜け出そうと呻きながら益々深みに落ち、遂には破滅に至る一人の娼婦の生涯を、男と女の相剋の中で残忍に捉えながら追求しています。運命にもて遊ばれるヒロインを、ギリギリの心理に追い込み、そこに女の真実を捉えようとする処は「黒い河」に似ております。——貧しい育ちの珠子にも、女学生時代ただ一度、清純な恋があったが、金のため学校も途中で止め、サロシに働き始める。ダンサーとしての



珠子には、昔の純な面影は微塵もなかった。放心したような顔で煙草を喫う珠子、酔ってマンボを踊る珠子。自堕落に笑う顔には、もう悲劇の影もない無意味な生涯が続き、そうした或る日、嘗て珠子の胸に明るい火を灯し

た男が現われる。僕は今でも君を愛している。男を見つめる珠子の眼に涙が一杯浮んで、珠子と男はしっかり手を握り合った。数日後、珠子は新しい人生を生き抜くために、田舎の我が家へ帰った。そこでの日々は、珠子にと

って愉快だった。気狂いじみた東京の生活が、ずっと遠い昔のように思われ、今度こそはという生活への張りが、珠子を限りなく勇気づけた。夜の道を珠子と男がゆっくりと歩いて行く。幸福そうな二人の足どり。男と別れて――

シーン 76 道

真暗な道を珠子が帰って行く。遠く珠子の家の灯が見える。

77 家近くの道

珠子が帰って来る。道の片側は、大きな農家の生垣になっている。納屋の側を通り過ぎようとした珠子が、ぎくっとして立ち止る。珠子の前に、手拭で頬かぶりした男たちである。その一人が無言のまま千円札を一枚、珠子の前へ突きつける。

珠子「なんですか――」

男「金払えばいいんだらう」

男が珠子の手を掴む。その手を振り払って、

珠子「なにをするんです」

男「いいじゃねえか、ショートタイムだ」

珠子「――」

いきなり、ぱっと珠子が逃げようとするが、その時、別の男が珠子に躍りかかる。大声を出そうとする珠子の口へ、手拭を押し込む。もう一人の男が珠子の腕を捻じあ

78 納屋の中

暗い。藁が一杯つんである。荒々しく戸口が開き、珠子をはさんで二人の男が軋り込む。必死に抵抗する珠子。ぱしっ！とすさまじい音をたてて珠子の頬に飛ぶ平手打。あつて息をのむ珠子の、手拭を押し込められた口から血がにじみ出る。続けて二つ、三つ、すさまじい音をたてて平手打ちが珠子の頬に飛ぶ。くずれるように倒れる珠子。その上に男の黒い影がのしかかってゆく――。

こうして珠子の生きてゆく道に一つの危機が訪れ、ドラマの中で大きく珠子は揺れ動きます。

途中をとんでラストを見えます。初めに書いたイントロダクションの部分が、そのままラストに連ります。

トラックの運転手、弘に連れられて珠子はかもめ島にやって来ます。薄幸の中を、よろめきながら生き耐えた珠子の、最後にふさわしい淋しい島です。ここで純朴な弘の求愛を感謝しながら、自分の余りの汚れに耐えかねて、運転台からこっそり持って来た鋤山用のダイナマイトで自からの命を絶ち切ります。シナリオは、珠子の心と体を汚したのは誰であり何であるかを、激しく読者に訴えかけておきます。

同じ作家の作品である「黒い河」のヒロイン静子は、何処を切ってもドス黒い血の流れる自分を救い自分を取り戻すために、暴力で自分を犯した男を殺してしまうのですが、その結末はどちらも異様です。そう言えば「黒い河」のシナリオの非情な暴行シーンのドギツイ描写は「若い魂」の暴行シーンと、その残酷な感覚の鋭さで似ております。そうして一度はずれた猿ぐつわの下から「助けて！」と絶叫する静子の口に、再び男の手が猿ぐつわをかける。暴行直前の行為をリアルに描いた「黒い河」の息づまる描写と「若い魂」の口に押し込められた手拭に血がにじみ出るという激しい異常な描写は、今までの日本映画になかったものだと思います。

「黒い河」が、有馬稲子の持ち込み企画であったと同じように、「若い魂」も、同じにんじんクラブの一員、岸恵子が永い間あたためていた企画です。「雪国」に続いて、彼女の自主的な出演希望で、製作開始直前までいったのに、彼女自身のロマンスのため挫折したのは如何にも残念です。しかし演出を予定されていた「黒い河」の小林正樹も乗り気なもので、やがては他の主演者で、という希望もあります。それにしても、日本の女優の中でも知性派の彼女たちが、どうしてこうした暴行シーンを含んだ、謂わばマゾ的な悲惨な性格の女性を演ずるのに懸命になるのか、みなさ

んと共に考えてみたいと思います。それに、いま一人の同人、久我美子に当たって、あの「柳生武芸帳」の緊縛ぶりは普通じゃない。縛られてする演技への積極性以前に、縛られようとする能動的な心の動きが、彼女自身にあったのではないかと思われ、そうこう考えているうちに私には女優という職業の殆どが女性がマゾじやないかしらと、思われてもくる。このあと、大映「花の兄弟」の三田登喜子（本誌三十一年九月号紹介）や、新東宝「すつとび千両旅」の嵯峨三智子（本誌二十九年十一月号紹介）このシナリオは、人情千両旅」となっていますが、他にも二、三のシナリオを書きたいのですが、長くなりますので除きます。

次に一世の奇人、葛飾北斎を描いた猪俣勝人の「北斎」を紹介したいと思います。猪俣勝人には「現代人」「悪の愉しき」「広場の孤独」といった真向から現代社会に立ち向う社会ドラマと、奉教人の死「北斎」といった芸術至上主義的な作品があり、そのいずれもが傑出したシナリオとなつて実を結んでいます。最近、佐分利信監督の日活製作「悪徳」のシナリオを書きあげています。芥川龍之助の原作から脚色した「奉教人の死」は、久我美子が強い愛着を示しており、遠からず製作されるものと思われませんが、この作品も、本誌の読者の一部の方々は大いに食指の動くモ

チーフを持っていますことを附記します。余談になりました。本筋に入ります。

江戸、護国寺の境内。とにかく大変な人だかり、屋根にも松の木にも人が鈴なりになっている。人々の口から感嘆の声も聞かれる。

「一体、何があるんです」「絵ですよ。奉納絵を描いてるんです。北齊が」「え、浮世絵の北齊が……」「百二十疊敷もある紙へ、一筆でダルマの絵を描くというんですから……」

尋ねた町人は「ヘエツ」と驚き前へ出ようとする。とにかく大変な騒ぎ。百二十疊敷もある大画布の上を、今しも北齊が敏捷に駆け廻る。太筆は忽ち雄渾な大達磨の画を描いて行く。そして最後に小筆をとって、北齊と銘を入れる。ドツと起る拍手と歓声。――取り巻

き連がやってくる。「流石は北齊先生だ。何時もながらお見事なことだ」「こんな大きなものを一筆で描けるものは、日本中探したって、一寸見当らないでしょうな」「世界中でもでしょうな」北齊は出来上がった絵を見つめながら呟く「こんなもの、ほんの座興さ」奉納絵の主催者の角丸屋が来る。「さあ、さあ、先生、とにかく賑かに繰り込もうではありませんか。今日は一つ角丸屋が吉原の大門をしめ大盤振舞い致しますよ」ドツと湧く取り巻き連。

このシナリオの導入部です。北齊の奇人振りがうかがえます。

いまをときめく浮世絵師、北齊。だが、その妻と子は身窄しい裏長屋で佗しい暮らしをしている。長い間の病苦と生活苦で苛まれた妻のおそのは、煎餅蒲団に身を横たえ、いまはただ死を待つばかりであった。娘のお栄が、台所からお粥を持って来る。「お母さん、さあ、お粥が出来てよ」「ありがと……」か細い母の声に「駄目よ、どんどん食べなさいや。昨夜から何も喉に入れてないじゃないの」「今度は私も覚悟してるよ」「何言ってるのよそんな気の弱い……」「お前にも世話ばかりかけて……」「よしして！そんな莫迦な話！」

激しく言って、ふと、お栄の口から絶望的な溜息が出た。じっと切なげに母の寝顔をみつめる。奉納絵だか何だか知らないけど、家の者も放っておいて神も仏もないもんだと父が恨めしい。そんな娘の愚痴を、おそのは「だけどね、お栄。絵描きというものは、絵のことした頭にないようではいけない、いい絵は描けないんじゃないや……」と言って聞かすが、母と違つて勝気なお栄は「待って、お母さん。お母さんはいいい人だわ。一生、お父さんの絵の犠牲になって、それで一寸も怨みもしないで……それを考えると、私はむしろ腹が立つてくるの！こんな優しい妻を犠牲にしな

ければ、絵というものは描けないものだとしたら……そりや私も絵描きの娘です。お父さんの絵の立派さは判ってるわ。おそらく葛飾

北齊の名は歴史に残ると思うわ。でも、その陰に一生、陽の目もみないでボロ切れのように放り出された妻のいることを誰か知ってるかしら……。それじゃ、あんまり惨めすぎるじゃないの……」「ねえ、お栄、夫婦の間と

いうものは、そんなもんなんだよ。私はね、仕合せな一生を送ったと思ってる……お父さんには感謝して死んでゆける」「イヤよ、お母さん……そんな悲しいこと言って」お栄はワツと泣き崩れた。おそのも、ふと涙ぐむ。

佗しい時が二人の上を流れ、夕暮、ガラツと戸が開いて息子の多吉郎が帰ってくる。座敷へ黙って上ると、父の仕事場の辺りをあちこち探す。「どうしたの、兄さん」お栄の声に返事もしない。「お金なんかありませんわ家には」「又、親父がみんな持ってっちゃったんだ」「兄さんだって、何よ、バクチばかりやって……お母さんがこんなに悪いって言うのに」「だから心配してんじやないか。親父は家に寄りつかないし、せめて俺がなんとか薬代でもと」「バクチで稼いで、お母さんが喜ぶと思うの。第一、兄さんは一度でも勝ったことなんかないじゃないの」「やめてくれ、お説教は。これでも親父よりまともなつもりだぜ。女房が死にかかっているっていうのに、今日も吉原の大門しめて乱痴気騒ぎをしているっていうじゃねえか！江戸中、大評判だぜ」「まあ、吉原へ」「俺あ、あんな奴

北齊の名は歴史に残ると思うわ。でも、その陰に一生、陽の目もみないでボロ切れのように放り出された妻のいることを誰か知ってるかしら……。それじゃ、あんまり惨めすぎるじゃないの……」「ねえ、お栄、夫婦の間と

いうものは、そんなもんなんだよ。私はね、仕合せな一生を送ったと思ってる……お父さんには感謝して死んでゆける」「イヤよ、お母さん……そんな悲しいこと言って」お栄はワツと泣き崩れた。おそのも、ふと涙ぐむ。

佗しい時が二人の上を流れ、夕暮、ガラツと戸が開いて息子の多吉郎が帰ってくる。座敷へ黙って上ると、父の仕事場の辺りをあちこち探す。「どうしたの、兄さん」お栄の声に返事もしない。「お金なんかありませんわ家には」「又、親父がみんな持ってっちゃったんだ」「兄さんだって、何よ、バクチばかりやって……お母さんがこんなに悪いって言うのに」「だから心配してんじやないか。親父は家に寄りつかないし、せめて俺がなんとか薬代でもと」「バクチで稼いで、お母さんが喜ぶと思うの。第一、兄さんは一度でも勝ったことなんかないじゃないの」「やめてくれ、お説教は。これでも親父よりまともなつもりだぜ。女房が死にかかっているっていうのに、今日も吉原の大門しめて乱痴気騒ぎをしているっていうじゃねえか！江戸中、大評判だぜ」「まあ、吉原へ」「俺あ、あんな奴

は、親とも子とも思えないんだ」涙がこみあげて、多吉郎は家をとび出した。その後姿へ「多吉郎、何をいうの。そんなひどいことを……あんな立派なお父さんをつかまえて」母の声に、ふとお栄の胸がつまる。

吉原では、北齊は米粒の中に雀を二羽も書いた、花魁を裸にして異様な気魄をこめて写生したりする。多吉郎が母の急変を知らせに駆けつけるが、筆先を動かすのを止めないありさま。夜中、やっと我が家に帰った北齊は、おその顔にかかった白布にギクリと息をのむ。お栄がたった一人、その傍に茫然と坐っている。涙も枯れ果てた感じで——。北齊は黙って、おその顔を見詰めているうちに「おい、筆と紙を持って来い」と怒鳴る。お栄は何かその激しい語氣に圧されて隣の仕事部屋から筆と紙を持って来て北齊に渡す。北齊は憑かれたように、おその死顔を描き始める。お栄の眼に、烈しい感情がこみあげ「お父さん、お父さん……」それ以上、言葉が続かなかった。北齊は描きあげた絵をボイと枕許に抛り投げると、そのまま家を出る。川つぶちには晩春の川風が吹いて、北齊はその中を茫然と歩み去って行く。街を行く北齊。その空虚な瞳。居酒屋に入る。出された酒を一息にのむ北齊。ふと、その顔が哀切にゆがみ「おその」と呼びかけるように呟く。ギラギラと涙が溢れてくる。

ここから、貧しい若い二人が知り合う二十年前の回想に入ってゆきます。

シナリオに描かれた北齊の青年時代の、ひたむきな絵への情熱は、鬼気をおびて読む者に訴えかけてきます。絵の中に生き甲斐を見出す男と、その熱意に動かされてゆく可憐なおその模様は、出来るなら全部ここに写したいのですが、かなわぬことなので一部を引用します。

春朗（北齊の青年時代の名）がぼんやり街を行く。突然その眼が町の公示板に吸い寄せられた。見るみる激しい好奇の色が顔面に浮ぶ。やがて春朗は、一方に向って夢中で駆け出します。薄ら寒い冬のことです。

51 獄門 首

晒されている重罪人の首——。一杯の人だかり。その人垣をかき分けて、春朗が一番前に出てくる。異様に光る眼で見ていたが、忽ち懷中から絵筆をとって帳面を開きスケッチを始める。人々は変な顔をして春朗を眺める。

52 おそのの家の表

長屋の連中がひしめき合って家の中を覗き込んでいます。カン高い父親弥助の罵声が聞えてくる。

弥助の声「さあ、どうだ。これでも彼奴を思い切らねえか。ええ、これでもか、おその……」

おそのが折檻されているらしい。おそのは悲痛に堪えている。

弥助の声「あんな貧乏絵描きは今日限りキツパリ思い切りますとハッキリ言うんだええ、言うまでは許さねえから俺は！」

53 家の中

おそのが弥助に打ち据えられている。母のおとくが、やっと二人の間に割り込んでとく「さあ、おその。早くお父っあんに謝っておしまいな。お父っあんだって、お前が憎くって叱ってるんじゃない。みんなお前を倅せにしたいばかりに言っているんだらね……そこんとこをよくわきまえて気持よく丑松さんと一緒になっておくれ」その「お母さん、それだけは、それだけは勘弁して……」

弥助いきりたって「ま、まだ、そんなことぬかしやがるのか！ そっちが強情張るんなら、俺にも考えがあるぞ！」

とく「おその、謝るなら今の内だよ！ お父っあんが本当に怒ったら、それこそどんな目に遭わされるか知れやあしないんだから……」

弥助「おとく、もういい、こんな奴は口で言っても判るもんか！」

とく「さあ、早く丑松さんと一緒になるからって、お父っあんに……」

その、（決然とした面持で）「おっ母さ

んその話だけは私きっぱりお断りします」
 弥助「うぬ！ぬかしたな」(矢庭に、おそのを捻倒して)「おい、おとく、縄を持て来い。縄を！」

とく(オロオロして)「お父っあん、なにをするんだ！」

弥助「ええい！こんな奴、いいから持ってくるんだ！こんな奴にや、こうでもしなきゃ判らねえんだ！」

54 表

おそのの悲鳴——。たまりかねた長屋の一人が中へ飛び込むが、すぐ振っ飛ばされて出て来る。ドタンバタン——と、弥助の怒号、おとくの泣声、おそのの悲鳴。丁度そこへ春朗が帰ってくる。

春朗「何かあったんですか」

長屋の人、A「何かあったもないもんだ事の始りはお前さんじゃないかよ」

春朗「え、俺の事……一体、どうしたと言うんです！」

長屋の人、B「さあ、早く行って助けてやんなさい！」

と言っているうちに、後手にキリキリ縛り上げられた、おそのを弥助が引きずり出して来る。

春朗(驚いて)「あっ、おそのちゃん！」

その(悲痛に)「春朗さん！た、助けて！」

春朗、走り寄るが弥助のため突き飛ばされる。後から、おとくがオロオロと出てくる。

とく「だ、誰か、お父っあんを止めておくれ！おそのが殺されてしまう……」

春朗や長屋の連中、止めようとするが猛りたつた弥助には歯がたたない。

55 井戸端

弥助、引きずってきたおそのを、その場に引据える。

弥助「さあ、おその」

その「春朗さん！」

と悲痛に叫ぶおそのに、弥助がザア——と水をぶっかける。おそのの悲鳴——。続いてまたかけられる。遂に、おそのは観念したのか、ヂツと唇を噛みしめて堪える。その何物かに祈るような、ひたむきな顔。それが却って弥助の怒りに油をそそぐ結果となり、立続けに水をかける。血の氣を失って苦痛に堪える、おそのの凄艶なまでに哀切な姿。駆け寄った春朗、一瞬、棒立ちとなっておそのを見つめる。その瞳が、或る不思議な輝きに動き出すと、ものに憑かれたように二歩、三歩、前へ出る。最早、彼には周囲の人々の存在など眼中にない。懷中から絵筆と紙を取り出すと、忽ち筆を走らせる。長屋の連中、呆れ返る。

長屋の人、A「一体、これが惚れた男の

することかね……」

長屋の人、B「全く、呆れ返っちゃって私にあ……」

長屋の人、C「気が狂ってるんだ。あいつは」

長屋の人、A「弥助のこと、鬼のような親だと思ったが、彼奴は弥助以上だ」

長屋の人、B「まったく人間と思えませんね」

弥助も、おとくも春朗の姿には呆然としてしまう。おそのは唯、がっくりと項をたれてしまう。だが、熱に浮かされたように春朗の手は、非情に紙をすべって行く。弥助、さすがにおそのが可愛想になる。黙って縄をほどきにかかる。その時、始めて春朗の眼が弥助の方を見る。

春朗「あ、おじさん、待って下さい。もう一寸ですから！絵が描き上るまでそのままにしないで下さい」

弥助は、もう我慢ならない。

弥助「ふ、ふざけるな！この非人情野郎奴！」

と春朗を蹴倒す。そして、おそのを抱きかかえるようにして家に入ってしまうが、春朗は尻持ちをついたまま、尚も絵筆を走らせる。ただ夢中で——。その姿は、まさに鬼である。絵の鬼である。

(未完)

ガーベラの甘き香り

辻村 隆

一
静かな靈山寺の境内はつゝじの満開だった。奈良市に編入されても、富雄川に添った、鼻高山の麓のこの辺り一帯は、奈良市と云うには余りにも田舎びた風景である。

春の陽は眩しく、眠気を誘う様な昼下りに、私は人気がない地獄洞の前に立っていた。バラ庭園の化石植物、メタセコイヤの植樹帯を眺めて昇った数丁に、私はすっかり疲れを覚え、身体中汗ばんでいた。

八角造りの地獄洞は、洞内の鬼気迫る様相とは打って違ってなどやかに、春の陽ざしに白く輝やいている。

私は驚色のカーテンを潜って洞内に入る。螢光灯の間接照明は、地獄に叫ぶ千体の餓鬼亡者を、異様に美しく浮び上らせていた。

東洋一の太浮彫と呼称するには些か物足りぬが、十三坪のコンク

リート造りの洞内に、唯一人、地獄相を眺めていると、そこはかとなく鬼気が身辺にぞくぞくと襲ってくる。

大鷲に似た怪鳥に眼球をえぐり喰われている黒縄地獄——。銅狗という獣が、物凄く臭い息を吐きかけて亡者を悩ます阿鼻地獄——。舌を抜かれていた大叫喚地獄——。亡者が互いの肉体を咬い合っている活地獄——。そして私は叫喚地獄のレリーフの前でハタと釘付けされた。両手両腕を縛られた亡者の口中に、熱湯をそそぐ恐ろしい光景が、こよなくサジストの夢を満足させる責めの形相としてぞくぞく身に迫って来たからである。

異様の物の怪が、ヒタヒタと私の身辺に迫ってくる様に思えて、ハッと顧みる。

人の気もない筈の洞内に、何時現われたのか、一人の女性が吐く息も押えているかと思われる静けさで、ヒソと焦熱地獄の、数多の

亡者の釜ゆでに見入っているではないか。

仄蒼い堂内にすんなりと浮いた、彼女の楚々たる容姿は、場所が場所だけに、魔性の化身めいた妖しさを放っていた。

阿鼻叫喚の地獄図——、奈落の果の別世界と迷い込んだ様な錯覚に陥り乍ら、その癖私は、彼女の後姿に喰い入る様に見魅つていた。大の男ですら、独りぼっちでこの洞内にいると、ぞくぞくする異様な肌寒い感覚に襲われるのに、妙齡の女性ひとり、しかも異常な執着をもって、熱心に見惚れている。彼女は果して何者なのだろうか——。

一見、未婚のようではない。洒落たウールの着物に一越の茶羽織の薄紫が、陰惨な場所柄とはちぐはぐに、ひどく艶めかしい。

透き通る肌の白さ。たつぷりと重たげなうなじの黒髪。嫋々とした風情の中に異例の美しさをたたえて、私は眼を見はる思いで、激しい興味と好奇心を覚えたのだった。

一、二歩知らず知らず、私は彼女の後ろに近附いた。コツコツとコンクリートの床に反響する足音に、ドキリとしたように彼女はふりむいて、さっと白磁の顔を緊張させた。

「御見学ですか——」

「……………」無言で彼女は、充分に要心した顔でうなずく。

「怖くありませんか、たったお独りで…………」

「いえ、別に…………」

小さくつぶやく彼女の髪が、細かく震えて、豊かな黒髪に挿した一輪のガーベラが、微かに揺れる。紅のガーベラに私は彼女の情熱の、抑制されたほとばしりを見た。彼女にとって、地獄洞での、得体の知れぬ男の近付きは、恐怖を覚えるにやぶさかではなかったに違いない。確かに彼女は危惧を感じていた。

その人は軽く一礼すると、黙々として入口に足に向けた。未だ見ぬ地獄図の幾許かに、一沫の未練を残し乍ら…………。

目に見えぬ糸に引かれるように、私も後を追った。パツと眩しく照りつける堂外の春の太陽が眼にしみわたる。

「突然に言著をかけたなりして失礼しました。場所柄だけに、お役に立てばと思つたものですから——」

改めて私は彼女に会釈する。昼下りの太陽が、やわらかく彼女の警戒心を解きほぐしたのか、その人はモナリザにも似た微笑を浮べて、黙容した。どちらからともなく、私達はバラ庭園に這入り、立札茶席、緑亭の白い板張りのベンチに腰を下した。

「ガーベラですね。もう咲いたのですか——」

私は言葉の継穂もない儘、花に呼びかける。

「温室咲きですよ。私の家の庭が広いものですから、あれこれ花を愉しんでいるんです。ガーベラをよく御承知なんですね——」

私はこの花が、南阿原産の情熱のシンボルであること。別名西洋たんぽぽともいうこと。菊科植物の株分けで叢生すること。アフリカでは思春期の若い娘が、黒髪にガーベラを数多飾りつけて、恋慕う男の情慾を挑発することなど、花に托して、彼女に喋った。

ガーベラからバラに話題は移り、今眼前に七彩に咲き乱れる二千株の鮮やかな色彩と強い香りは、私達二人をヒタヒタと押し包んで行った。

花言葉から話はスムーズに進んだ。私は彼女の言葉の端々から、隴氣乍らその身上を知るに到った。

始めに想像した通り、やはり彼女は未婚ではなかった。併し彼女の夫は一年前テレーで亡くなり、この富雄の、靈山寺続きの、東光院靈園に葬ったこと。有り余った亡夫の遺産で豊かな、子供のない独り暮らしのこと。月に一度靈園に詣でる時、魅かれる様に靈園の傍らの地獄洞に没入すること。

そして、彼女の姓名が、灰藤百合子であること。灰藤家が、昔、大和郡山の城主柳沢侯の家臣として、祿五百石を戴いた歴つきとし

た武家であったこと。今も灰藤家が郡山市の周辺の、筒井、平畑の辺りに点在していることなど、熱っぽい口調で話してくれた。

灰藤——ハイド——ハイド夫人……。

私は奇妙な連想に、我知らずつぶやいていた。

「灰藤——ハイド氏を連想しますね。」

「呀っ／＼と思ったが遅かった。知っていたのだろうか——。私達の間に、空気の流れが一瞬止まってしまった程の静けさが流れた。

春の陽ざしを受けて、片側にかげりをつくって、掩い被ぶさるような長いまつ毛の下に、キラリと冷たい、そして鋭い眸が、じっと私を見た。それも瞬間にかき消されて——。

「ホホホ、何の事ですか、それ——」

「いや、別に……」

私はどぎまぎして苦笑した。

「始めての方に、本当に長話して御免なさいね。でも、なんだか以前からのお友達みたい。先程お名刺も載いて、こうしてお話していると、淋しさがまぎれて、何だか人生が愉しくなってきたわ。お話の様子ですと、相当お顔が広いようですけど、私、実は、最近までいた小間使が、急に暇をとりましたので、困っているところなんです。お心当りでもないでしょうか——」

「ええ、ありますとも……。早速にでもお世話しましょうか——」
近頃の女中難を承知の上で、私は咄嗟に快諾した。灰藤夫人とのつながりのチャンスとにらんだからだ。

「まあ——、本当に……。助かりますわ、私——」

私の人柄がそうなのか。肌触りがいいというか——。いつも見知らぬ人が、数刻にして、十年の旧知となり得る機会に思まれているらしい。こうして、私は若き未亡人、灰藤百合子を知った。しかも荷厄介な世話まで引受けて——。

私は灰藤夫人の持参した、サンドイッチを遠慮なくほほばり、ポ

ットの紅茶を百味して、彼女が近鉄富雄駅前から呼ばした、差し廻しのハイヤーに同乗して、つつじ薫る霊山寺を後にしたのは、永い春の日も流石に傾いた夕暮れ刻だった。天平八年創建のこの寺の山肌に面してそびえる巨勢金岡作の三重塔が、残り陽を浴びて赤々と夕空に映えて美しくかった。

はしなくも知った灰藤夫人——。この若く美しい未亡人から、やがて綴る様な、妖しい奇怪な物語りを得ることが出来るのは、その時、私は夢にも想像しなかったのである。

二

灰藤夫人との約束を果たす為、私はかねて懇意にしている和歌山の海南市のR君宛に速達を出して、小間使い依頼の件を申し送った。

R君の住む海南市の漁師達には、子沢山と、生活の口減らしからいい奉公先があれば出したがっている家が相当多いと、かねがね聞いていたからだ。事実、新制中を卒業すると、若い娘達は、ほんの僅かの伝手すら求めて、都会へと憧れ、出たがっていた。

折返して来たR君の返信は、早速にも上阪させるとの、私にとって甚だ都合のよい返事だった。端麗な灰藤夫人の、あのモノリザの如き妖しい微笑みを、フト胸に描くと、私は一小間使いの幹旋が、夫人との交際の足がかりとなる事を祈らずにはいらなかった。

脳裡を去来するガーベラの甘い香り——。又しても、私は夫人に恋慕したのでろうか。

白いというより、蒼味がかって、上等の陶器を思わせる様な肌理の細かい肌、つんと形よく伸びた鼻。異様に濃く見える眉毛。紅もささないに、鮮かすぎる程赧い唇——。

私の思索の中で、夫人は全裸で、のたうち廻り、躍動し、夢幻の彼方で、地獄洞の羅刹に鞭打たれ、百鬼夜行の茨の道を、雁字搦目に縛られて、引曳り廻されているのだ。

それも東の間、夢の中の花園では、夫人自身が蝶になって、ひら

ひらと戯れ舞っていた。夜半眼ざめては、心に秘密をもつ自分の、満たされぬ愉悦を、心から噛みしめるのであった。

指定の日阪和線の天王寺駅まで、私はR君と娘を出迎えに行った。

娘は十八だといったが、一見子供っぽく見える。海辺の陽に焼けた、小麦色の肌に、若さは溢れて、お下げの髪がいじらしく、大都會の水に馴れば、半年もすると立派に美しくなるかに思えた。

所用のあるR君と昼食後アベノで別れて、節子という、その娘を連れて、私は灰藤夫人の住む、梅林で有名な枚岡に向った。

駅に降り立って山手に数分、白い土塀で高く囲まれた夫人の豪華な邸宅を、聞く事もしに容易に探し当てた。

旬日振りに、私は夢に見た夫人の、こぼれるような笑顔に接した。応接室の窓ごしに、高塀で遮ぎられた、贅美を尽くした庭園のあちこちに、ガーベラが或いは朱く、或いは紅に群生しているのが見られた。

耳が遠いという老婆に、あれこれと指図して、節子を小間使い部屋に落着かせた後、私は広々とした十二帖の奥座敷へと通される。夫人の軽やかな手付のシェーカーから湧出る、旨酒に私は蕩然とする。幾度か、夫人と私のグラスがカチ合っては、快い酔が加速度に私の体内をかけ巡って行く。今こそ思う存分、何の妨げもなしに、今日までの想い出に耽る事が出来るのだ。

私の何気ない誘ない——。それをサラリと受けて、冷んやりとした手ざわりで私の手を外すと、謎めいた微笑を浮べて、夕時に立上る。はぐらかされて私も立つ。確かに私は何かを焦っていたに違いなかった。

片時も夫人の面影を忘れ得ぬ儘に、それでも仕事に追われて数ヶ月は経った。

何の前触れもなしに、思いもかけぬ頃、節子から会社に至急会って欲しいとの電話があった。

ナンバの北極で出会った節子は、見違える許りに色白に美しくなっているが、妙に体のどこかにやつれが目立った。

「一体どうしたの、突然——」

「もう、辛抱出来ないんです。苦しくって……」

そういうと、今まで耐えていた涙がどとと溢れたかのように、節子は激しく泣きじやくり出したのであった。

「あんな、優しい灰藤夫人に、何が苦しいの。訳をいって御覧よ——」

「あの奥様が優しいですって?——」

反問する様に、キラリとうるんだ眼を上げると節子は、堰を切った様に喋り出した。

彼女の言葉の一つ一つに、私は唯啞然とし、呆然とするのみである。

些細な理由でお仕置をされる。お灸を据えられたり、冷水を浴びせられたり、縛られて庭の松の根元に半日も放って置かれたり、ローソクを持たされて何時間も立たされたり、その他数え上げればきりが無いというのだった。節子は時にはいい難そうに、又、スラスと本を読む様に私に語って聞かせた。

兎も角も、これでは体が保たないから、海南へ帰らせてほしいという。

私は真偽に途迷い乍ら、幾許かの小遣を与えてその日は別れた。激しい疑惑の影が、夫人の艶然たる微笑にオーバーラップして渦を巻く。翌日、私は会社を早退して夫人を訪れた。

「まあ——、飛んでもない事ですわ。私がそんなひどい事するとお考えになります?——嘘も甚しいわ。貴方のお世話でしたので、今迄我慢しておりましたが、あの娘はとんでもない喰わせ者でした。始めの一カ月許り神妙にまめまめしく働らいてくれましたが、暫くして馴れて参りますと、私の留守の間に勝手に着物やお金を持ち出

しては、家に送ったり、小遣に使っていたようです。余り横着なので軽くたしなめますと、不貞腐れて、数日はものもいりません。ここを飛び出すきっかけとなりましたのも、あの日、私が留守の間に出入りの洗濯屋を引き入れて、奥の間で変なことをしていた時、早い目に切上げて戻って参りました私に、ありありと現場を見つけられ、流石に弁解の仕様もなく、少し手きびしく叱りつけたのを根にもって、そんなありもせぬ事を作って申上げたので御座いましょう。お信じになるか、ならぬかは、貴方の御判断にお任せ致しますわ——」

「……………」

私は混乱してしまった。夫人の言葉に酔ったかの様に、反って私はそんな娘を世話をした責任を感じて来た。

その事よりも、灰藤夫人とこうして話していられる事で、心の隅々まで、温かいものが流れてゆく様だった。

「ひどい事になりましたね——」

笑った。

笑った私に、夫人のひんやりとした手がスーッと私の手にかぶさって、

「いいのよいいのよ。貴方さえ判って戴けたら。お久し振りだからうんと御馳走するわ。御ゆっくり出来るのでしよう——」
その儘手をとって応接間を出る。



自分でもとまどい乍ら、私は憑かれた様に意の儘になっている。何かしら、じりじりと歩一歩、自分の心が夫人に傾むいてゆくのをどうしようもない。

私の吐く息の荒さを、夫人は頬に感じて、フト顧る。私の手が夫人をぐっと引寄せる。

「馬鹿ねえ——」

ニツと笑って夫人は押し返す。そして私は今宵も飽食した身の、どこかに充ち足りぬものを感じ乍ら夜道をほろ苦く下ったのである。我からいい出した代りの小間使いの世話という心重い荷物を背負って——。

三

温馴しい、心優しい文子が、フト涙ぐんで、ソツとモヘアのオーバーコートを着ごと二の腕辺りまで捲くり上げた。痛々しくも、手首に紫痕が深く跡を残して、くつきりと白い肌をくまどっている。

家内の遠縁に当る文子を、行儀見習の名目でやっと納得させて、灰藤夫人の許へ連れて行ったのは節子が逃げて帰ってから、一週間後であった。

あれから半年——。寒さの厳しい節分の夜、文子はやっと逃れて来たと、私の表をホトホトと叩いた。

まざまざと肉体の刻印を見て、私はかつての節子の話の真実性を信じぬ訳にはいなかった。

「私で七人目だそうですよ。誰も続かないんですって。昔の言葉に外面如菩薩、内面如夜叉というのがありますが、あの奥様にぴったり当て嵌る言葉ですわ。」

あんな優しい奥様が、何かの拍子にまるで人が変わった様になられるの。それはそれは怖しい事を、次から次からお考えになって、私もうこれ以上いると殺されてしまいますわ——」

「フーム、事実だね。それは……」

私は啞然となり乍らも、反面サジストとしての激しい興味が湧然ともり上って来た。

私はその事実の正体を細大洩らさず聞きたかった。矢張り灰藤夫人は、ハイド夫人に外ならなかったのか。あの靈山寺での、私の一言に、チラリ光った鋭い針の様な瞳、あれが謎の微笑に隠された、

フト覗き見たハイド夫人の真実の姿なのか。

私は妻を去らせ、文子を追求した。隠されていた有閑夫人の驚くべき真実を聞き出す為に——。

「奥様のあれが術なんです。早寝の婆やが寝た後、奥様は私にお茶を入れる様お命じになりました。特に濃目のお茶がお好きで、私は言われていた通り、奥様の寝室へ持って参りました。下ろうとした時『チヨイトお待ちと』いわれたので戻りますと、『見て御覧、お茶に蠅が浮いてるじゃないか』と申されます。驚いて近づく私に、奥様はお湯呑の中から、汚ならしそうに死んだ蠅をつまみ出し、急に人が変わった様に、ザブリとお茶を私に浴びせられました。あれは十月末の事でしたから、その時分蠅が這入っている事自体が可笑しいと気付いたのは後になってからでした。謝りましたけれどお許しにならず、私の髪の毛を掴むと、いきなりズルズルとベッドのそばまで引曳って行かれ、『主人に蠅入りのお茶を吞まそうとした罰にお仕置をするんだよ』と叫ばれまして、一生懸命お詫びした私の言葉もお聞きいれにならず、ベッドのマットの底から麻縄をとり出される、私の両手をベッドの鉄柵に縛りつけて仕舞われました。

そうしておいて、卓上のいつも召上られるキュラソーを二三杯立て続けにおおられて、私の方をじろりと見られた眼は、私のかつて今までに見た事もない、それはそれは怖ろしい冷めたいまなこでした。

どうなる事かと、ブルブル震えている私に、つかつかと近寄られた奥様は、いきなり私のスカートを引きちぎる程の強さでお剥ぎになり、セーターとジューミーズをくるくると私の頭までたくし上げて、腕毎上半身を包み込む様に腕のところで縛りになって、私が泣声を挙げると、何か鞭の様なものでピシリと背をお打ちになってから、ラジオのスイッチを入れられて、可成り大きな音でジャズをおかけになりました。スルスルと下履きが足首まで下げられるのを、私は

もう半分失神した様になって意識していましたが、突然、私のお尻にビシリと鞭が当たると、飛び上る様な痛みが、ジーンと背骨まで突きぬけまして、私はもう大声で『堪忍して堪忍して、助けて——』と泣き喚いでいたのです。発止々々とお尻に鞭が走る度、私は縛られた両手で必死にもがいて、逃れ様と果敢ない努力をしました。鼻がツーンといがらくなって来て、ヒリヒリと焼けつく様な痛みが下半身一杯に拡がって、私は奥様が気でも狂われたのではないかと慄然としました。セーターでスッポリ蔽われた顔は、次第に息苦しくなって、ハアハアと吐く息のみ激しく、もう私は救いを求める声すら囁れて、鉄柵に縛られて両手の引つる痛みも感覚なく、だらりと体は伸び切っております。

無気味な静けさが暫らく続いたかと思うと、触られても飛び上る程に腫れ上ってお尻に、奥様が何か軟膏の様なものを擦り込んでおられました。縄を解かれても、しばし起き上れず、私はベッドに縋って、しくしくと泣いていたのです。

『可愛いベットちゃん、お休みしましょうね——』

もう何時もの優しい声にかえられた奥様は、静かに私の体を抱き上げると、御自分のベッドの上にそっと俯伏せに、お尻の痛くない様寝かされました。一晩中、奥様は私のお尻を撫でさすられ、フト唇を押しつけられたりなさっては、これがあの怖ろしい奥様だったのかと見違える程に手厚く介抱下さいました。

私はいつしか母親に叱られた子供が甘える様に、ぼってりと盛り上った奥様の乳房の谷間に顔を埋めて何時までも泣きじやくっていったのです。

その夜、私は奥様から、こんな世界もある事を始めて知らされ、何ともいえない欲びが体中をかけ巡って、私は奥様のお手のなすが儘に身を委ねておりました。奥様のお命じになる事のひとつひとつが驚異でもあり、こんな事を奥様にして差上げてもいいのかと、フ

ト空恐ろしくも思ったりしました。

お出入りの呉服屋が来て、私に分に過ぎたウールの新着の着尺を買って下さった時は、あの死に絶えそうな痛みすら、欲びにかわる程の嬉しさだったのです。

だけど、私のこの甘い考えは浅はかでした。三日に一度、五日に一度、何かの拍子にフト憑かれた様に急変なさる時、情客赦もなく雨の様に鞭は振りそそぎ、いいえ鞭だけではないのです。それはそれはおぞましい、いうにもたえぬ事を、平然となさるのです。

ガーベラの赤く咲き狂う、あの広い庭の中央へ、私の首に太い首輪を嵌められて引張って行かれ、四隅に杭を埋められた真中に、私を俯伏せに大の字になさると、杭の四隅に私の手足を、伸びるだけ伸ばして縛りつけられ、

「お前は私の女奴隷なんだよ。いいかい、主人のする事には絶対背けないんだよ。分ったね。分ったら、どうぞ御主人様お好きな様に虐めて下さいとお言い。」

と申されて、私に無理矢理復誦させるのです。奥様はハイヒールで私の顔を踏みにじり、さも愉しそうに、まるで蛇か蛙でも弄ぶ様に鞭でお尻を叩かれたり、油絵具を持ち出して来られては、どんな絵をお描きになるのか、私の首の辺りからお尻の辺りまで一面に、書きなぐられては、ホホホホと大声で笑われて、私の苦痛もお構いなしに、興がのれば一時間でも二時間でも、そんな事をなさっておられるのです。挙句には、私を四つ這いにさせて、お馬の代りにして、お尻をビチャビチャと鞭で叩き乍ら、首輪に手綱をつけて、広い庭中を乗り廻され、私より重い奥様の重量に耐えかねて、私がへたばってしまつと、白い美しい歯を、キリキリ噛み鳴らされて、「畜生！ 立て——、立て」と力任せに所嫌わず鞭打ちをなさるのです。

この非情の庭が、奥様にとっては、又とない快樂の庭でもあるの

でしよう。果ては、私を後手に縛って、広い家中を追い廻して、ベッドにお入りになって、私の苦しい一刻の奉仕を済ませた後、ケロリといつもの優しい奥様に戻って、やっと私はクタクタの体を開放されるのです。

肌色のブラジャーの先端を開けて、その先に巧みに電球を取付けられ、電気のコードで縛られた先をソケットに挿し込ませると、パツと私の両の乳房の先の電球に光が入って、私は夜中じゆう、寝もやらず人間電気スタンドとなって、奥様のベッドの傍らのテーブルに踞っていた事もありました。

まるで水槽の様な、四面硬質硝子張りの、私一人スッポリ這入る硝子檻を造られ、私をその中へ押し込められると、空気が抜きの穴の開いた硝子板を、陳列ケースの硝子戸の様に頭上にギリギリギリと真鍮の溝に添って嵌められて、ベッドに長々と横たわりになられた儘、眼前の私の肢態を観察なさるのです。

気が向くと、穴からコーヒ等を流し込まれては、私はそれを口でじかに受けねばならないのでした。食物もまるで餌の様に、穴からポイポイと放り込まれました。

丸三日間、そうして観察なさったのですが、泣いても、叩いても、喚いても、ワーンと硝子檻に反響するだけで、一向に効果もなく、激しい生理現象に迫られて哀願しても、きき入れては下さらず、私



はまるで羞恥心をなくした動物の様に、奥様の眼前で人間本来の姿をむき出しにして、消え入る思いでいなければならぬのでした。

糞尿にまみれた浅間しい姿を、赤裸々にお見せするのは、鞭打ちに勝る精神的な苦痛でした。

お仕置がすんだ後、私は泣く泣く自からのものを、浅間しくも潔

めねばなりませんでした。

和服姿の端麗優雅な奥様と、私に鞭を加えられる時の、真黒のガウンにハイヒール姿の奥様とが、一つの体の中に住んでいるとはどうしても思えませんでした。瓜二つの善悪の奥様が二人、入り替り、立ち替り、或る時は私を優しく慰さめ、或る時は私に屈辱の限りを尽すのかと、夢うつつにもうなされて、優しい奥様に取組って、さめざめと泣き崩れていても、夜半、夢を破られて、悪鬼に等しい、もう一人の奥様が、私の髪の毛を引っ掴んでは、形相も凄まじく荒々しく拉致されて行くのでした。

幾度か逃げ帰ろうとしては、優しい奥様が、私に両手をつかれて哀願なさるのです。その度に私の心は力弱くも挫けて、その儘になつていたのですが、とうとう昨夜のあのひどい仕打ちには、この儘いつ迄もいれば、いつか近いうちに、命までもなくすのではないかと、つくづく怖れおののいて、思い切って逃げ出してきましたのです。

昨夜は何時になく冷え込みのきつい夜でした。こんな夜、奥様のお仕置は絶対に御免蒙りたいと、私は精一杯に反撥心を旺盛にして床にもぐり込みました。サラサラと戸外に牡丹雪が、音もなく降り積っている様でした。

うとうととしていた私は、敏感に、カチリとノックを廻す音にハット眼覚めました。午前一時を廻っていたでしょうか。スーッと冷い風が頬をなぶって、私の眼前に黒いマスクをつけ、スラックスの上にオーバーを羽織った奥様が佇立していらっしやいました。

習慣性とは恐ろしいもので、私はあれ程反撥心を感じ乍ら、思わずしらずフラフラと立上っていたのでした。

黒い仮面の眼許りが、何時に似げなく鋭い光を放っておりました。黙々と奥様は私の寝巻を剥ぎ、素肌になさると、オーバーのポケットから麻縄をとり出され、キリキリと後手に縛られて、ぐいと後手

の縄を締め上げられると首にかけられ、胸に廻して、本縄に縛られました。

「お歩き——」

夢遊病者の様に私は、ガタガタと震えるように自分の室から追い立てられる様に出ました。よろめく私の背に、ビシリと鞭がなり、カッと焼けつく病みが全身を走りました。

背中から腰の辺りが、氷を当てた様にゾクゾクと寒いのに、顔はほてって熱く、喉がひりひりと痛んで生唾を呑み込むのがやつとです。脇腹がズキズキ痛んでくる。息もきれぎれに身をよじらせている私を、冷酷の権化の様に奥様は凝視しておられます。

牡丹雪の沈々と舞い狂う、深夜の銀色の深沈たる丑満刻に、私は髪につもる雪を払いもならず、全身鳥肌にして、松の太木に吊り下げられているのです。

断頭台の様な四段の台上に立たされた私は、奥様が台の下から持ち出した太縄で更にぐるぐる巻きにされて、長く突き出た太枝にかけて、体をぐいと引っ張られ、松の根元にしっかり巻きつけておしまいになると、台を押しやって外されたのです。

体を踴めて、私は芋虫の様に吊られていました。体の重みで瞬間すーと下った枝振りから、ドサリと積雪が私の体を蔽っておちて、ユラユラとゆらめいて私はそんな哀れな自分の身体を、如何ともなし様もなかったのです。首がしまって来ます。手首の感覚はとつとに失われて、脂汗もかれ果て、フツと気が遠くなりかけては、死ぬかも知れないと心の何処かでわめいていました。生駒蔵がゴーツと吹き寄せてきた時、私は遂に気を失ったのでした。

ウーーンと耳鳴りがします。うつつに私は奥様の両手をとって、いつも私がされる様に、巧みに奥様を縛っていました。ヒイヒイ悲鳴をあげる奥様を私は引き曳って、豊満なお尻をパチパチ叩き乍ら、何処迄も無限に引き曳って行くのです。

川が流れているのです。私は奥様の首根っこを押えつけると、川面にぐいと突込みます。ガボガボガボと飛沫と気泡をまき散らして、奥様は多量の水を呑み込んだのです。私は尚もこれでもかこれでもかといふ再々三々四々、首を突込みました。見る見るうち奥様の下腹部が膨れて、充満した水は今にもはちきれそうです。

「お願い——、縄をといて——」

奥様は私に哀願するのです。私は容赦せず、その態を木蔭のベンチで快よげに眺めているのです。

奥様の顔が醜く歪むと、ザーッと滝の様に流れ出しました。いつ迄もいつ迄も、長い間——。止まるところを知らず、奥様は排出するのです。苦しい——。苦しい——。私はタンクの口からポンプで、ドンドン奥様の口に流し込む水が、食道を通り、腸内に奔流を起して、奥様の排出口から流れる水は、川となって延々と流れて行くのです。

ウーソンと、何処からともなく、梵鐘の響きに似たこだまが返って、私の耳に飛び込み、耳の中で幾十匹となく蜂がウーソンと暴れている様で、私はころげ廻っていました。小さく、小さく、奥様は御自分の排出した水に流されて豆粒の様に忘却の彼方に押し流されて行きました、遂に姿を没しました。蜂が耳から飛び出して行く度にウーソンと響いて、段々に静かになり、柔かい太陽が、私の体の隅々まで、温く快く射し始めた——と思ったら、私はウーソンと永い昏迷から醒めたのです。

優しい奥様が、私の全身を懸命にマッサージを続けておられるのを夢うつつで、いとおしく感じ乍ら、私は再び深い眠りに陥入ってしまったのです。

四

文子の長い打明け話は終った。

ここにも又一人、ハイド氏がいた。しかも私に輪をかけた実践型

の超美人が……。

私は文子に充分の休養を与える様、家内に細々注意して、近鉄に乗り込んだ。

私は何と迂かつてあった事か——。今にして思えば、靈山寺での地獄図に異常な関心を示していた。あの時の灰藤夫人に、既に或る種の思いを致すべきであった。

夫に死別した彼女の、抑圧された欲情を満足させる手段として、次から次へと、小間使いに魔手を伸ばしていた彼女に、私は今更乍ら、美貌に隠遁した悪女の、恐るべき執念を発見した。ハイド夫人——。何といみじくも姓は体をいい現わし得たものであろうか。

私は呼鈴を押した。やっとして老婆が顔を出す。風邪気味で休んでおられると、くどくどという。同好の徒と知った厚顔ましきで、私は遠慮なくズカズカと奥に通る。

寝室の前で一瞬ためらったが、思い切って扉を開く。

豪奢なベッドから頭を上げた夫人が、弱々しく、ニツと笑みを投げて寄越す。

この美顔に私は瞞着されていた。併しそれは憤りではない。同好の士を得た喜びに私の全身はゾクゾクしている。

努めて平静を装って、私も笑顔を返す。

「矢張りハイド氏でしたネ——」

「文子さんがお喋りしたのネ——」

「何もかも——」

「どうなさるおつもり。訴えなさる？」

「いや——、とんでもない。」

夫人は私の意図の奈辺にあるかを窺う様に、捷毛をかげらせて眸をきらりと光らせる。私は黙々と、鞭を打振る仕ぐさをした。

「私に？——」「……………」

フト、謎の微笑みが、夫人の頬をよぎる。スツと起上ると、黒い

タイツを腿高く履く。黒い仮面が半面を蔽う。黒いガウンをさつと脱ぐとすつと立ち上った。

豊満な肉体が桃色に色づいて、子を産まぬ双つの隆起は、ピーンと盛り上って見事だ。

白い陶器さながらの全身に、しみ一つない。私は眼昏む思いで、暫し呆然と見惚れた。

夫人はベッドの下から、鞭をとり出す。仮面の奥の眸がキラキラ輝やいて、サツと一せん、素振りをくれる、黙って私に差出した。夢に迄見た美女を鞭打つ光栄に浴した私は、震える指先に力を籠めると、颯っとないだ。シューと風を切って、夫人の背を発止と打つ。ウーと軽く呻いて、夫人はベッドに打伏す。打伏した夫人の双臀目掛けて、誤たず私の鞭は飛ぶ、スーッと朱をはいた様に、白磁の肌に鞭跡がみみずに這う。

一振り毎に、右に左に夫人はのたうつ。

ガウンの腰紐がキリキリと、夫人をしめつけて、白魚の十指が背で空間に舞うごめく。私はかつて映画に見た、情婦マノンの最後のシーンのように、夫人の両脚をとって肩にかけ、だらりと逆さに垂れ下った重みをしつかと全身に受けとめて、廊下に出る。パントマイムは続く。黒髪がサヤサヤと床に這って、夫人の縛られた後手がしつかと私のズボンを掴んでいる。夫人の吐く息は荒い。無人の境に行く私は、どこをどう廻ったか、いつしか元の寢室の前へと出る。

ドサリとベッドに投げ出した夫人の体に、私は又してもあくなき嗜虐の鞭を加える。

マントルピースの太い蠟燭に目をつけて、私はそれに火を点じる。ボタボタと臘涙が、夫人の胸に、腹に、仮面の上に、細かい白いしぶきをまき散らして容赦もなく、点々と続く。

嗜虐に飽気なくあき果てた私は、全身を投出した夫人の乱れ髪に、

花瓶のガーベラを一片手折って飾る。そつと唇を近づけて行く。

「解いて——、解いて……」

始めて夫人は私によって塞がれた唇を、押しのけると強く叫んだ。敢て、私は激情を押通さない。私のハイドの心はすべて満たされたからだ。

嗜虐に狂い、私のサジズムに身を委ねた夫人にも、自らそこに貞操の限界はあったのだ。

私の嗜虐から解放されて、彼女自身充ち足りた気持に緩されたのだろうか——。

素早く身じまいを整えると、文子のいう所謂、優しい奥様に一瞬変貌した。

そこには、先刻の狂痴のかけらもない。静かに見仕舞を直して、夫人はいった。

「私には、私の生きてゆく道があるのです。私の情念に限界がある限り、今後、節子さん、文子さんの様な娘達を求めても、それはそれだけの事。自己満足の限界を踏み外してまでの行為はとらないつもりです。夫は不能者でした。それが私にこの様な悲しい運命を植えたのです。だから夫は私のこの悪癖のよき理解者でもありません。夫の死後も私は何ら不自由しないのです。可哀想に思うのは、私の性向を知らぬ人達だけです。貴方には判って戴けると思います。例え夫は亡くとも夫に貞淑でありたいと願う私の気持、同じこの道に耽溺する私達なら、これからもよき御友達であって欲しいのです——」

私はもう何もいえない。

彼女は黙々と白い柔かい片手を差し出す。私は万感の想いを籠めてぐつと堅く握手し、潔よく部屋を去った。宵闇にガーベラが一入赤く広い庭に咲き狂っていた。

(完)

大^{おお}阪^{さか}屋^や花^か鳥^{ちよう}

(女牢名主)

2

小坂多美枝

さて、向う通りの平の女囚達の中に窮屈な
恰好で坐らされたお園は、ものの一刻もそん
な姿勢では辛抱できません。大体、この女牢
内の生活に耐えられるのは余程、身体が丈夫
で下層の生活になれたものでないと駄目なの
です。お園のような大家のお内儀には、不馴
れというより全く無理な暮しなのです。吐

きそうな程度むんむんする悪臭の中で、お園
は泳え切れずに、右足を床に刻まれた定め
線の外に延しました。途端にお浪の罵声が飛
びます。
「この新入り、図太いどすべただ。早々から
掟破りをやるとは、見上げた心掛けだよ。お
前さん」



びっくりしたお園は、すばやく延した右足
を引込めて、顔を床板にすりつけんばかりに
土下座して、
「何卒お許し下さい。本当にこれからは気を
つけますから、御勘弁下さい」
哀れにも大家のお内儀が、女郎風情にパツ
タの様に頭をベコベコさせて、あやまってい

ます。

「ふざけるな。このあまつ」

と、いいさま花鳥を振り返り、

「名主様。お仕置は例の通りで」

「ふーん、そうさな。いつもの通り可愛がっておやり」

お浪は、お園の襟首を掴んで、ずるずると牢内の中央に引きずり出します。

例によって、夜たか上りのお仕置役の助番達がかげより、助勢します。

これから、お園に加えられる定めのお仕置は、極め板捧げといわれるもので、仰向きに寝て両足を垂直に上に上げて股を開き、足の裏で極め板を捧げ持ち、その極め板の上には水を入れた手桶が載せられるという趣向なのです。

「やい、早く足を上げやがれッ」

怒声を挙げて一人の淫買が、お園の顔を殴りつけます。

「ヒーツ」と喚き乍ら、お園はしぶしぶ両足をあげます。両足に纏いつく囚衣の裾や腰巻は、股が開かれるにつれてバラリと捲れ、お園の白い太股はいやでも牢内にむき出しになります。意地の悪い夜たかの一人は、腰巻を更に捲ってお尻迄も丸見えになる様にするのです。

やがて、開かれた足の裏の上へ極め板がのせられ、更に手桶がのせられます。実際こん

な恰好は、ものの十分も辛抱できるものではありません。やがてお園は、苦しさの余り顔を真赤にして、たらたらと脂汗をにじませ乍ら、堪えきれず幼児のように大声をあげて、

「あーん、あーん、あーん……」

と悲鳴に似た泣き声で泣き出します。他の

女囚達は、お園のそんな様子を面白そうに眺め乍ら、

「何とまあ、でっかいお尻じやないかよ」

アハハハと、一同は大笑いです。

素人女にとってそんな猥らな嘲罵を加えられるのは、肉体的な責苦よりはるかにつらいのです。冷かされる度に、ぶるぶる太股をふるわせて、極め板を落すまいと必死に泳ぐ。その度に一際大きく泣き声を挙げるのです。隅の隠居のお亀が、もうよかろうと名主の花鳥にとりなす迄、お仕置は続けられたのです。

さて牢内に落間といわれる土間があり、その片隅にはいつも四斗樽に水が張ってあります。これが又私刑の材料に使われるのです。

向う通りの狭苦しい所へ、大福餅のように押込められて、ヒーツという新入りが、未だ入ったばかりで何にも知らない時に不潔な食事に当たったりして、腹痛を訴える事があります。

「あー、お腹が痛い」

こういうと、他の女囚達はある期待にクスクスと笑い出します。

花鳥は、

「おー、おー、新入りさんはお姫さんだとよ。お腹が痛いよ。さ、別荘へ入れていたわっておやり」

新入りは、楽にしてもらえるのかと思って大喜びです。所が、どうして別荘どころか、どんな寒空でも衣類を全部ひんむかれた上に冷たい水の入った四斗樽の中に腹迄、水につかって正座させられ、両手は万才の時の様な恰好をさせられる。何という残酷さでしょう。がたがたぶるぶる新入りの顔は生きた空もないのが普通です。

しかし人間は、殊に女は、環境に対しては浅間しい程順応性が強く、こんな事位では決して死にませんし、逆にきたえられて行くものです。

お園も案の定「お腹が痛い」を訴えて水漬けにされました。

四斗樽の中でがたがたぶるぶる震え乍ら

「お園、腹いたがなりました」

と悲鳴を挙げますが、お浪は

「何々のお園と、はつきりとおいい。何度いきかせたら判るんだい」

といいさま、足を上げてお園の顔をけるのです。

お園は「ヒエーツ痛いッ」と悲鳴をあげま

す。

こうした日々を過したある日の事、今日はお園が御奉行所に引き出されてお白州のお裁きを受ける日です。

朝のうちに型通りに女牢から引出され、非人のかつぐもつこに乗せられて御奉行所へ護送されたお園は、お白州に引出されて

「やい、お園、その方手代の万吉としめし合せて待合茶屋の明日春にいたり、密通いたした段罪科明白である。あり体に白状致せ」

「いいえとんでもない、そんな密通なんて滅相もございません」

「うーぬ、此の段に及んで白を切るとは不屈仕極、図太い性根だ。この女を牢問いにかけてませい」

白状しないばかりに哀れなお園は、お奉行所の拷問蔵の中で牢問い（拷問）にかけられる事になりました。先ず鞭打、後手に縛り上げられて双肌を脱がされ、あらわな背中の後に立った相撲とり上りのお仕置役が、何の容赦も見せずに青竹の先を割ってゆわえた鞭で力一ぱい一ツ二ツとピシリピシリとしばき始めます。

千もたたけば、真赤なみみずばれからは、たらたらと血が流れ始めます。

先ず五十打つのが定法で、拷問蔵の中は陰惨な悲鳴に充ち充ちます。

ここで、ありもしない事を白状してはと、

お園は必死となって五十の笞打ちに堪えましたが、全く氣息えんえんの状態です。

併し笞打ちを切りぬけても、それに続く、石抱き、となるともう駄目です。これは、まともな方法で受けければ、絶対に泥をはかされず。

牢名主の花鳥は、やはり放火の嫌疑でこの石抱きをやらされましたが、前の名主のお龜の伝授で、これを切りぬけました。

その口伝というのは「女牢を出るときに持っているお金を口の中に含んで行き、引出されて泣柱へ縛られた時に、先ず一個の金を口から出して見せると、石を膝に乗せる時に係りの非人は、役人の方へ自分の尻を向けてその金を取り、更に石を乗せる時も、今の様に二度三度としていくと、金の威光で非人達が自然と石を持上げて痛みを少くしてくれるのです。其時、自分の前歯で上唇を噛切り、血を吐出して氣絶した振りをすれば、其のまま下げられる」というわけです。花鳥は、こうして子殺しお龜に教えられた通りにして、石を三枚抱いても白状せずに下げられて来て、約束通り牢名主の地位を譲られたのです。

併し、入牢に際してつるを持って入らなかったお園には、勿論こんなに口伝は授けられません。腰巻を捲り上げられて太股をむき出しにして、泣き柱に後手に縛りつけられたお園の膝の上に、先ず重さ一枚十三貫の伊豆石

がのせられました。

「ウウウーッ、痛たたッ」

「さ、有体に白状いたせ」

「あゝあ、口惜しい。覚えございません」

非人は面白そうに見物し乍ら、お園の膝の上に乘せた石をゆすぶり始めます。

「ギヤーッ」

何ともいえない悲鳴が挙りますが、役人は更に一枚石の追加を命じます。お園の向う脛には既に三角石が食い入って、皮が破れています。そこへ追加の石が置かれたのですからたまりません。

「もう白状します。許して、石をどけて、痛いッ。痛いッ」

お園の悲鳴に吟味役は

「では確かに密通致したな」

「あー口惜しい。はい確かに致しました」

こうして無理無体に自白を強いられて、ツメ印を押さされます。こうして自白によって罪科は確定したお園は、やがては斬首される運命となるのです。

こうして散々痛めつけられたお園は、再びがんじがらめに縛り上げられ、非人の担ぐもつこにのせられて伝馬町の女牢へ送り返されるのですが、こうして落ちた（自白した）女囚は、牢内ではもう誰にも相手にされず、再び花鳥等にいじめられる事になるのです。

（未完）

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤブー

沼

正

三

第二十二章 畜籍登録

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤブーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別

一 光幕を隔てて

予備檻の中央では——
金属の床にベタリ胡座した麟一郎が、漸く拷問——肉体検査のことを彼はそう思い込んでいた——から解放されて、ホッと一休みしていた。煙草を吸いたいな、という欲求が昨日迄は運動後に必ず熾烈になったものだが、今は、その気持が、空腹感からの赤クリームへの食欲に吸収されていた。幾皿も舐めた赤クリームの味が（彼自身は知らぬタークアン混入度の減少から）少し宛変って来てたことは気附いていたが、初めの頃の身体の融ける程の美味とは違った独

荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たボーリーンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやって來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤブーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

麟一郎はクララと無理心中を試みて失敗し、去勢されて予備檻に入れられ家畜適性検査を受けたが、クララは別荘の白人達と歓談しつつその検査の模様を立体映写盤で観覧した。一同は更に隣別荘のマック少年も加え、六人で予備檻にやって来る。……

特の異味異臭が、今度はしつかり舌と鼻を俘虜さうごにしていた。知らず知らず彼は——丁度煙草の味を解したり、阿片で中毒したりするのと同様に——赤クリーム系の菓子類（十七章五）への嗜好を植えつけてしまっているのだ。

あれほど肉体を酷使したにも拘らず、殆んど疲労感はなかった。クリームに混ぜられたビタミンYの効果で筋肉内の疲労素が全部分解されてしまうからなのだが、麟一郎にはこれもクリームの効目と思えこの未知の世界の医学力に驚かされた。

彼の身体は、適度の練習をした後の様な、完璧のコンディションの下にあったが、心はあべこべに空虚だった。拷問を受けた時、その名を呼んだ恋人が遂に現れなかった失望がボカリと胸に穴を明けていた。両膝を立てて腕で抱き、例の指輪を片手に握り締めつつ、

——クララは、來ないのだろうか？ 確かにこの宮殿の何処かに居る筈なのだが……それとも、彼女が死ななかった様に聞いたあの話が嘘……いや、そんな筈はない、クララは吃度生きている！ 吃度來て呉れる！……今度逢ったら、どんなことがあっても反抗すま

い。昨日のことをすぐ謝ろう。二度と乱暴はしませんが誓おう。赦すと一言貰う迄はどんなことでもしよう。この地獄の檻から脱れる道は、唯一つ、俺がヤブーでないことを知っているクララに頼るしかないのだ。……だが一体何故來て呉れないのだろうか？ 俺のこの有様を知らずにいるのか、知ってても具合が悪くて來られないのかそれともわざと來ない程怒ってるのか？ それとも又、忘れちゃったのか、あり得ないことだが？……ああ、それにしても、君は一体何故昨日あの円盤の中へ入ろうなんて氣を起したんだ、こんな取り返しのつかぬことになって……

とつ、おいつ、彼が思案していた頃、上階から生畜舎へ導く動廊——斜面ではエスカレーター、平面では動路になる仕掛の貴族専用の廊下——の上では、クララが、予備檻の構造や畜籍登録の手順などの説明をボーリーンから受けていた。

「……良くて？ そうやって洗礼が終ると、今度は登録カードに記入して、番号が決まるの。この記入は係員が一切やって呉れるわ。こちらは訊かれたことを答えて最後の署名だけ……」

「そう……」

「そうすると、番号を打った鑑札を呉れるわ。これは貴女が自分でヤブーの首輪に付けてやらなきゃならない。權利宣言の鞭ラッセルって三遍打って貴女の所有權が正式に公証——妾達が証人になつてね——されるんだけど、その前に鑑札を付けておかねければならぬのよ。妾達は片視光幕の外にいるから、貴女一人で中に入って首輪に署名するの……」

「首輪をしてるの、もう？」

「ううん、それはね、檻の首輪用金具が閉じると首輪になるの。その首輪に首を入れさせるには餌をやれば良い……」

「餌？ あのクリーム？」

「そう、先刻大分舐めさせたらしいから、今度はタリクアン・零ゼロで試やって御覧なさい」

「それで召使には解るのね」と少々頼りない。

「首輪には所有者名と家畜名を記入するの。電気焼筆ブレンディング・ペンを使うんだけど、直接じゃなく、金具が首輪の間は痛がらないから……」

「痛がるって……？」

「間接電烙技法インディレクト・ブランディングといってね。首輪の外側に書いた通りが、あとで輪を締めてから、肌の方へ烙印やいされるの、その時は苦しがるわ」

「まあ、肌へ焼き込むの……」

クララは吃驚したが、ポーリーンは平然と話し続ける。

「そう。それから、鑑札かんさを付けて、床こに下して、片足を首根くちツ子に掛けながら、鞭を三度加える。一鞭毎に唱える文句があるの……」

ふん、ふん、と肯いて聴く中、動廊は生畜舎に一行の六人を運び込んだ。

予備檻よびえんと表示のある室の扉が開いた。

皆がそろそろ入る。中央の檻の周囲を片視光幕ひんしこうまくが取り巻いていることは承知しているクララだったが、入って行って、先程縮小立体型で眺めていた当の檻と、その中に両膝を抱えている男の姿を見出した途端、彼がヒヨイと顔をあげて、その視線が彼女の方を射た時には、思わず、彼が彼女に氣附いてこちらを見たのではないかと錯覚さくかくを起した。

麟一郎としては全くの偶然だった。明るく揺れ動く光の壁の彼方に何事が起ったか、見ることも聞くこともできぬ彼である。ただ、五官を超えた本能的な予感が、彼に何かあると告げたのだったかも知

知れない。待ち焦れた救主クララが、そこに立っていると知らずに、光幕を隔てて、こちらを見ている彼。広い額の下の黒い眼は苦難にめげず輝きらいている。

健康そのものの様な筋肉の逞しき、無精髭が伸びているが、への字に結んだ口許の厳しき、昨日迄の彼女なら、その男らしき溢れる容貌に、人種を超えて心惹かれたに違ちがいなかった。——だが、今、相手に知られず視線を返すクララの眼には、動物園で動物を観察する人の示す様な好奇心丈が露骨だった。

二 物々交換取引

「クララ、どう？、譲って呉れる？」

突然ドリスの声だ。眼は壁上の家畜適性検査結果性能表の数字を慌たわだしく追っている。

「そうねえ」

クララは生返事しつつ、その表をうち眺めた。略字と数字との簡潔な表示で良くは理解し兼ねたが、ドリスがIQ一四七の箇所を指して

「知能指數一四七か、もう一寸で、読心家具テレパスになるのになあ」

と惜しそうにいうのに反対して

「いや、愛情指數一〇八、慕主性係數正5プラスだろ。この係數はひどく高い。こういう奴は主人以外の人に対しては読心能テレパシーがぐんと減るんだ。一四七ならクララ嬢なら或いは読心能化できるかも知れぬという所だ、標準値一五〇より低くても、慕主性でカバーしてね。然し失敗の可能性もあるし……」

とセシルがその下のAQ一〇八、LC5とある数字を指で押えるのを見、更に、

「羞恥度（一次）は負^{マイナス}7に減ってるけど、自尊心（一次）は負^{マイナス}8、批判度（一次）は負^{マイナス}9でたっぶりだし、服従度^{1.5}、卑屈度^{0.5}は、調教前の値としても極く低い。調教訓練の楽しみにはこの畜化度の低さが大切なよ。クララ、これは大した掘出物だわ」というポーリンの言葉とか、

「それに徳目指数が勇敢度、忍耐度以下殆んど満点だし、肉体諸元の方は先刻見た通りの素晴らしさで、ホラ、総合値がこの通り一二二になってます。ネ……」などウィリアムの説明とかを聞いて、表の見方と内容が段々分って来た。

セシルが、声を潜めて囁いた。

「これは絶対に人に譲るべきものではありませんよ。この慕主性^{ロヤルティ}係数^{ロヤルティ}でも、大したものですよ。あの水中自転車^{ウォーター・バイシクル}（河童のビュウのことである）が欲しかったら、こいつの玉と取替にすれば良いんですよ」

玉^{ボール}という意味が分らず、問い返そうとした時、ドリスが、先程の問を又繰り返した。

「クララ、譲って呉れる？」

クララは檻の方に眼を遣った。檻の中では首うなだれた麟一郎が何を考えているのか——こちらの話声の聞える筈はないのだ——泣いていた。

涙が床を濡すのを見ている中、彼女の脳中に昨日円盤内で、彼の涙が自分の長靴を洗うのを眺めた時の光景が甦って来た（七章一）そして、その直前、彼女が彼の耳許で囁いた言葉も。

……それが愛情の試金石だというなら、その試練を受けて見ましょう。麟、妾誓うわ、貴方を何時迄も愛するってこと。二人は

離れないんだわ

殆んど反射的に、彼女はドリスを見返りつつ、確答を発した。

「いいえ、妾譲らないわ。譲れないの」

適性検査の結果の素晴らしさが、彼女の心をずっと否定の方へ引き寄せていたことは否めないが、この時彼女を断乎たる拒絶に踏み切らせたのは、彼女が想起したあの誓言を重じようとする意識からだった。——麟一郎が、もしそれを知らされたとすれば、大いに感謝すべきだし、又したに違いない事実である。

——つまり約束をした。馬鹿だった、妾は。

という後悔めいた感情に一瞬襲われたが、考え直して見れば「試練を受けよう」とはいつたが、「試練に堪えて見せる」といつたわけではない。「二人は何時迄も一緒」といつたが、「夫にする」と約束したのではない。愛人としてでなく、愛玩動物としてでも「愛する」という誓言に嘘はない筈だ。

——リン。妾は誓を破りはしない。ドリス嬢^{きん}の申出は断ったよ。

妾はお前を妾の手許で可愛がってあげる、ヤブーとして……

「じゃ、先刻ビュウ——あの水中自転車^{ウォーター・バイシクル}を欲しいって話だったけどあの話は取消ね？」

ドリスが挑む様にいった。

「……………」

「あの外に犬のニューマも附けるのよ」

ドリスは喰い下る。すると、

「然し、ビュウとニューマじゃ、このヤブーに引き換えるには不足だよ、公平に見て」

セシルが助舟を出した。

「クララ嬢^{きん}は放浪中、我々が鞭撻用に飼うのとは又違った可愛がり方で奴^{やつ}を飼ってた様ですからね」と、両女性間の先刻の交渉を知ら

ぬ癖に、ウィリテムがクララに意味あり気にウィンクしながら、セシルに同調して、「そういう愛玩物を貰うのは遠慮して、仔種を取ったらどうです。決闘士が欲しい丈なら、それでも良いわけでしょう？」

「うん、だって、妾、独占したいんだもの、この型の決闘士を」とドリスは執拗だったが、セシルから

「だったら、玉ごと貰っちゃえば良い……」と智慧を付けられると「それもそうね。二つ共貰えるなら、仔種は独占できるわね」と素直に肯き、クララに

「どう？、玉とビューの物々交換は？ 代用品だから、犬は付けないわよ」

「ヤブー自体はあきらめて、剔出單丸で我慢するってのよ」ポーリーンが解説的に口を添えた。「玉とカップの交換取引って訳ね」

「あの、リンの身体から切り取ったのを？」

「そう。玉は今去勢鞍が持つてゐる。一つは畜籍登録番号を付けて金庫に保存し、一つは料理に使うのが普通なんだけど、……」(十五章三・五)

「それを二つ共欲しいのよ」とドリスが姉の発言を引き取った。

これから麟一郎を去勢するというのだったら、クララももう少し躊躇したかも知れないが、既に去勢が済んでる現在、彼女は何の迷いも感じなかった。あの逆吊りになった哀れな奴の「お助け下さいまし」という嘆願は尚耳にある。自分には用はない——とこの時はクララはそう思っていたのだ——麟の去勢單丸で贖えるなら、廉いものではないか。

「妾には異存はないわ」

「じゃ、これでOKね」ドリスも満足した様にいった。「ビューの登録名義変更は、いつでも御随意の時に仰言つて。急ぐことはない

けどね。……」

こうして、クララは、ビューの命を唯助けてやる丈の為にさえ、一旦は手放そうとした麟を自分の所有として確保した上、ビューの命も救い、しかも自分の従畜(※)とすることに成功したのだった。

(※註。移動性も個性もない家具や建築材料化したヤブーに対して、個性あるヤブー系動物を個畜と呼び、これを更に作業を主とする役畜と主人の身邊に侍らせる従畜とに分つ。従畜をPanicleというのは、ズロース同様に、身近で内密の用を足させるという点から名付けられたものだ。)

三 新 畜 登 録

「あ、大変なこと忘れてた。クララ嬢に説明する方に気を奪われて肝心の洗礼の液体を取らせとくのを……」

ポーリーンが急に慌てていった。マック少年が不思議そうな顔をする。ウィリアムが目配せしながら、小さな声で

「心配御無用。先刻ソノマの間で気が附いたから、膀胱を使わせたよ。少し遅れるけど、ここへ持つて来る……」(前章四・五)

「ああ、良かった」と、この家の女主人はホッとしながらいった。

「じゃ、妾達外出の予定で忙しいから、洗礼が遅れるなら、その前に登録をしておいて貰いましょう。……ねえ、クララ、それで良いわね？」

「ええ、構わないわ」

すっかり任せきりのクララは、ポーリーンとウィリアムの話の内容も全部は分らなかったが、マック少年という客人もいることなので、あたりさわりのない返事をしておいた。

「さ、それじゃ、先に登録を……」

ポーリーンが、今迄片隅に控えていた登録係を手招いた。進み出

て来たのは、三十台の白人女性である。適性検査の様に学問的な事項ではなく、事務的行政的面の仕事は、一切女性が担当しているのだ。勿論平民である。貴族と違って平民は皆職業を持つのだ。彼女はジェーン・クレイとて、畜人省畜籍局地球分室欧州支局登録課に課長代理を勤める練達者である。先程、分類課のコラン博士と交替し、この家の人々が来るのを待つ——登録課に出頭する代りに係を呼び寄せることのできるジャンセン侯爵一族の様な大貴族に対しては、彼女の方から催促することは許されないので——間に、準備を整え終って、あとは登録者本人に関することが残っている丈である。

若夫人から「この方よ」と教えられて、クララの前に来たジェーンは、靴からカードを取り出して傍の机上に置き、更に上衣の裾の蔭、右腰帯からぶら下っている羊羹状の細長い筒を取り外すと、中から一匹の矮人ビグミーを摘み出し、これをそのカードの上にそっと置くと鄭重にクララに礼をし、さて、

「女王陛下の御名において、登録に先立ち、二三の質問を致します。」

貴女の姓名は？」

「クララ・コトウィック」

先刻打ち合せた通りにクララは名乗った。机の上で何かが動くのが視界の隅に写り、目をやると、矮人がステッキ風の棒を持って、カードの表面を棒の先で擦りながら走っている。どういう仕掛なのか、棒が当って過ぎたあとにツツツと綺麗な字が印されてゆく。既に CLARA COT と書かれ、WICK と綴り終るところだった。

これは机矮人デスク・レグマンの一種で活動筆ライティング・ペン（生きたペン）という生きている文房具だ。持っているのは矮人用の写字棒である。昔の口述筆記機タイプライターの様に嵩ばらず、しかもどんな早口でもついて行けるし、字体も自在に変えられる便利なものだ。嵩ばらぬといっても万年筆見たいに小

さくはないから、誰でもが身に付けているのではないが、ジェーンの様な書記事務関係者は、必ず一匹を携帯用筆筒に入れて、昔の矢立見たいに腰からぶらさげているのである。

「このヤブーを捕獲したのは？」

「一九五六号球面で、復活祭の一週間後に」

婚約指輪を交換したあの舞踊会エンゲージング・ダンス（十七章二参照）の日——今年はそれが彼女の誕生日にも当たっていたのだが——の事を咄嗟に思い出しながら、クララは答えた。

——「永久永久に貴女あなたの所有もの」と麟の誓った日が、妾が彼を捕獲した日だわ。

活動筆ライティング・ペンは、棒をひきずる様にして、カードの上を走っている。

「貴女の所有権は完全ですか？」

——彼は妾以外に全然女を知らなかった筈。

「イエス」

「将来これに異議を唱える者はないであろうことを誓えますか？」

「イエス」

「この飼育に関する一切の責任——飼育の権利は又飼育上の義務を伴いますから——を負えますか？」

「イエス」

「これを何と名附けますか？」

「リン」

「宜しうございます。では、署名サインなさって下さい。カードと引き替えに、登録済鑑札をお渡ししますから……」

署名用のペンはボールペンに似て普通のペン先ではなかったが、滑かに書けた。署名欄以外は美しい活字で印刷した様に全部書き込まれている。身長体重体温脈膊等身長・体重・体温・脈膊（昨日皮膚竊スキン・スネッチの中で計測されたものだ）から始めて、先程壁上で見た性能表の諸数値もすべて写し取

られてある。

クララは、推定年令という欄に地球年二三年二月とあるのに驚いた。麟一郎の誕生日を知っている彼女が正確に計算して、丁度二三年二月になるのである。推定とあるし、生年月日の記載がないから、彼自身の口から聞かず、肉体検査の結果から算出したのだろうが、素晴らしい正確さだ。

然し、この詳細なカードの何処にも「瀬部麟一郎」という表示はなかった。TEⅢN・241267という番号とRIN(C・C)の名前とが、このヤブーの個体の識別の為の正式表示として、カードの右肩に記されていた。それだけであつた。瀬部麟一郎という人間臭い名前は永久に不要になったのだ。

——RIN(C・C)というのはクララ・コトウィック所有のリンの意味に違いないけど、番号の数字の前にあるTEⅢNは何かしら？……

カードを返すと、登録係の婦クレイは、キビキビした動作で、番号彫りのある金貨見たいなものを手交しつつ

「女王陛下の御名において、畜籍局地球支局欧州分室第三特別区登録番号二十四万二千二百六十七号土着ヤブーの捕獲を登録致します」

TEⅢNというのは、地球支局(Terra) 欧州分室(Europe) 第

三特別区(Ⅲ) 登録の土着ヤブー(native yapoo) という意味なのであつた。第三特別区とは、近時シシリ島を含む南伊方面に別荘

が増加して以後特設された出張所の管区である。数年間に二十四万という数字は、生ヤブーの数字などから見れば桁違いの小ささであるが、別荘利用のできる階級に属する限られた数の人々が、鞭の染しみの為にヤブー諸島から捕獲して来た数丈だということを考えると、必ずしも少いとはいえないだろう。麟一郎はその二十四万二千二百六十七番目の一匹として受け入れられたのである。二十世紀の地

球においては一個独立の人格として——一人の生命は全地球より重い、といわれる、その貴い人間の一人として——濶歩し得た瀬部麟一郎は、イース世界においては畜籍に入ってしまったのだ。心も身体も、一女性に所有せられる——彼を飼育する権利も義務も彼女のみに属する——一匹の動物、土着ヤブー・TEⅢN云々号に墮し去つたわけである。二十世紀世界の彼の本国の戸籍簿から、失踪によつて彼の名が抹殺されるのはまだまだ先のことであろうが、彼の実は現に四十世紀の地球に在つて、畜籍簿に登録せられてしまった。彼自身はまだ何も知らぬが、彼は既に瀬部麟一郎と呼ばれるに値しなくなつた畜生なのである。(今後の記述はなお麟一郎の名を用いるであろう。然し、読者諸君は、それを單にTEⅢN241267号の冗長を避けた個体の同一性の符牒と解され、決して人格の表示と見ない様に、お願いする。)

四人畜対面

「それでは権利宣言をどうぞ」

登録係の婦人が慎ましくいう。万事、来る途中で聞いて来た順序通りだ。これから、一人で光幕の内部に出て行つて、型通りの儀式をせねばならぬ。臆してはいけない。

「ヤブーにクリームを。タークアン零でね」

クララは、いかにも物慣れた風を装つて、部屋の隅に控えた黒奴B2号に命令した。

「は、畏りました」

麟一郎——或はTEⅢN241267号——が先程泣いていたのは、故郷の父母を偲んでのことだったのだ。渡欧の時の羽田空港で歓送して呉れる友人達の蔭で母や妹がハンケチを目に当てていた姿

が臉に浮ぶ。嬉し涙と思ったが、何か不吉な虫の知らせだったか……父親似の自分と違い、母親似で美貌の妹百合枝は、今どうしているだろう。兄妹二人きりで仲も良かった。今年は十九才。変り果てたこの兄の有様を見たら何といおう……

その時、例の井が動き出すのを認め、彼の想念は即座に中断されてしまった。

そして、代って、猛烈な食欲が全身を占領した。長く煙草を吸えなかった愛煙家が一本の煙草の転がっているのを見た時に、こんな全身的感情を経験するだろう。腹這になって潜穴から首を差し伸べる動作の素速かったこと、クララは、一同と共に思わず失笑しつつ、残飯バケツを提げた豚飼の方へ鼻を鳴らして馳せ寄る豚を連想し、蔑みの念を懷いた。

「首を突き出したが運の尽きとは知らずに張り切ってるね。」とセシルが言えば、「浅ましいもんですね。」とこれは少年チヤールズ。

「畜生ってそんなものさ。食欲丈なんだよ。」

光幕の向うでの一同の笑声や話は、強力空気幕の消音装置に遮られて届かず、何も知らぬ鱗一郎は全身を食欲にして待つ。井が戻って来る。直ぐ舌を伸したいのを必死に堪えた。許可なしに舐める



と電撃が来る。家畜化の第一歩として先刻散々仕込まれたことは忘れられないのだ。

「よし！」

先刻とは異う女の声に聞き覚えがある様で、オヤと一瞬動作を停止させるものがあつた。然し、クララと日本語とを連結することが

余り意想外だったのと、舐めたい一心とから、次の瞬間には、彼はもう何も考えず、夢中になって舌を動かしていた。恋しさと飢しさ寒さを比ぶれば、恥かしながら飢じさが先、という奴だ。舐め出した途端、例の逆U字の金具が下りて首筋を押えたが、毎度のこととして、苦にはならない。

ペロペロペロ。

半分程も舐めた時だ。

井にかぶさる様になっている彼の視野に人影が写り、ハッとして顔をあげた彼は、思わず

「あッ」

と叫んだ。

クララが正面からこちらへ近附いて来るのだ。男物の様な上衣とズボンは緑を主調にした柄物で、男性的な中に優美を感じさせる。トッパコート風のマント、赤革のハイヒールの半長靴、片手に何か万年筆見たいなものを握っている。顔は彼の方に微笑みかけている様だが……

——クララ！

慌てて檻に戻ろうとしたが、金具で首を押えられていて駄目。ああ、待ちに待ったこの人に逢うのに、何という恥かしい姿勢だ。潰れて蛙見たいになって……

——そうだ。金具は井に連動してるのだった（十八章二）。井が空になれば緩むんだ。

思い附いて、もう一度井の中に顔を突込み、残りを急いで舐め上げる。全速力！

それを、クララは索漠たる気持で見守っていた。昨日までの愛人として、心の奥底に残っていた僅かの愛情も、先程ソーマの間で彼

の口から発せられた健気な言葉に感じて復活しかけていた好意も、消えて行った。彼が何故又井に向ったかを察する術もなかった彼女は、暗然として、

——こんな獣だったんだわ、此奴は。妾を認めてからでも、まだ汚ならしい餌の喰べ残しを忘れずに、そっちを舐め終ろうってのだね、何て浅ましい畜生だろう！ 豚！

昨日彼女の私室での対面は旧愛人同志の再会であつたが、今こで行われているのは、人間と畜生との初対面というべきだった。クララは片手をあげて合図した。

舐め終って金具の緩むのを期待した瞬間、逆に、金具丈残して、檻の四周の格子も腰板も、顔の真下に今迄あつた井も、忽ち消えてしまったのだから麟一郎は驚いた。気が附くと檻の台——これと逆U字金具丈が残ったのだ——が多少高くなっている。

今迄顔の下にあった井がなくなつたせいで、クララの靴先が見える。丁度彼女のお腹の辺りに首丈を突き出している見当か。肩から下は台にうつ伏せになっている。四肢は自由だが、どうもがいても首枷の金具の為姿勢は代えられない。まな板に錐一本で留められた鰻さながらだ。

何か一抹の不安を感じつつも、尚、自分を救いに来てくれたに違いない、との感謝を籠めて、麟一郎はいった。二人の間の用語だった独逸語で。

「どうもありがとう……」

「お黙り！」

クララは家畜語で叱った。前にいるヤブーより後の光幕の蔭で彼女の行動を見守っている五人の白人の方をずっと気にしている彼女は、ヤブーとの独逸語の会話など聴かれなくなつたから。

麟一郎は驚いた。

——クララが日本語で喋った?!

だが「お黙り」という言葉附きの中に含まれた強い禁止の意味は喋り出したい彼の気持を抑えるに足りた。一つには、「クララの気持を害ねない様、何事も服従しよう」と先刻決心していた通りの打算でもあったが……何か引掛るものがあった……そうだ、今し方一目彼女を見た時の、こちらを視ていた彼女の茶色の瞳、薄ら笑を浮べた様な口許、その表情に、今迄ついぞ感じたことのない冷酷さがあったのだ。それが「お黙り」という高圧的な命令に通じる様な気がする。……然し、それでもなお彼は彼女を救出者と信じた。藁をも掴みたい絶望感の中で唯一つの心の支えたる信念、それを捨てることができなかった。

——クララは俺のことを怒ってるのだ。昨日のことがあるから、無理もないけど。……だが、最後には救ってくれる。俺の行為を懲らしめ、反省させてから赦して呉れる。……他の人の手前もあって、わざとああいう態度を……見せてるのだから?

台が高くなった上、クララが一步近寄っている。もう上眼遣にも彼女の顔は見えず、豊かな胸の隆起が目に入る丈だ。

その双の脹らみが台から突き出した彼の後頭部に軽く押しつけられた……彼女の両手が彼の首金具の方に寄って行った。

——鍵を使って外して呉れるのか?!



急に幸福になった。もう解放され、抱擁され、そして彼女の乳房に顔を埋めんとするかの様な気持さえ起した。……が、仲々、金具は緩まない。金属の表面を摩擦する音がする。何か書いてある? カチンという物音に、胸躍らせた時、台は急速に下降し始めた。案に相違、金具は元の儘だ。

——どうしたのだ？ クララ！ 解放して呉れないのか？

読者にはお分りであろう。クララは、間接電気焼筆を以て、金具——後でこれが首輪に変わるのだ——の家畜名の欄に Rin と書き、所有者名の第一欄に Clara Cotwick と署名し、鑑札を錠で附属させ教えられた通りにやったのである。麟一郎は、事情を知らぬから、勝手に嫌喜びしたり、不思議がったりしてるのだ。

五 権利宣言の鞭

デクレアリング・ラッシュ

台が下降する。突き出された頭部がクララのズボンに沿って下り、少し離して踏み開いた両足の赤い半長靴の間に、顔を床に当てる様にして止った。台は床の一部に変わったのだ。首筋を金具で押えられて、床上に平たくなってる旧愛人の姿を、クララは見下した。取り出してピンと三尺に伸ばし、同時に一歩退って、左足を引き右足を前に出し、身を低めつつ彼の首筋に右足を掛けた。高い尖った踵の先を項に載せ、土踏まずで首金具を跨いで脊椎上端を靴先で踏みながら、大きく右手のモーション。背中を斜にビシッと一鞭入れて、教った通りの文句で叫んだ。

「これ余の捕獲品なり。何人が異議ありや？」
同時に足の下から、ムーツ、とこみあげる様な呻き声がして、麟



一郎が五体をばたつかせ、その動きが靴底を経て伝って来た。いかにも「生き物」を踏んでいるという感じである。自由な両手で首筋の上をまさぐり、踏んでいる半長靴を探し当てると、片手で踵を握み、片手で甲の方を叩く。口がきけないので何かの意志表示らしい。「降参です。赦して下さい」といいたい様に力ない合図だ。身体の一箇所しか拘束してないのに、この柔道の達人は、今や全く無力化

して彼女の靴の下に慄え、彼女の鞭に脅えて哀訴してゐるのだ。かつて感じたことのない恍惚たる征服の快感が湧き起った。生き物を支配する喜びに駆られた。相手を恋人と思つて見ていた時には夢想さえできなかったことだが……

瀬部麟一郎は正常な性愛感覚の所有者だった。彼はクララをこよなく愛していたが、彼女の虐待を喜ぶ様なマゾヒストではなかった。だから、全身の痛覚で彼女の鞭を味うと共に、憤怒が湧き起って、彼女への愛情を曇らせたのも、この場合の彼の心理としては当然だったろう。踏みつけられた時、彼は気が狂いそうな憤激を覚えた。無理もない。てっきり救いに来て呉れたと信じた最愛の恋人が裏切ったのだから。「彼女、怒ってるな」とは感じていたが、まさか、彼女迄が彼をヤブー扱いするとは思っていなかった丈に、心の傷けられることも大きかったのだ。

然し、そういう精神的苦悶を暫しふっとぼしたのが、鞭の激痛である。イースの俚諺に効果の鋭いものの例として「棒の初鞭」という位で、初めてこれを喰ったヤブーは、身体が真二つに切り裂かれる様に感じるといわれるのも誇張でない。そこで、棒が身体に触れると、そこに含まれた苦痛素が誘い水になって、打たれる肉体にも苦痛素を発生させる。これを棒の触媒効果と称し、他の鞭では得られぬ特長で、さてこそ、棒鞭打が土着ヤブーを怖れさせるのである。第一鞭を喰った麟一郎は、理性も感情もない唯の肉塊として反応せざるを得なかったのだ。

抗議しようにも、項の上のハイヒールが顔面を床に圧え付け、低い鼻も潰れそうだし、口も開けない。もがいても首金具で拘束されているから、まな板の鰻が尻尾を動かす様なものに過ぎない。踵を首の上から退かせようとして、手で掴んだが、力の入る姿勢でない

から駄目である。

——畜生！

と切歯した時、ビシッ、第二鞭、今度は背中の中右側だ。

「これ余の飼育畜なり。何人も異議なきや？」

凜とした声が響き渡る。

再び激痛が感情をふっ飛ばした。憤慨も何もない。唯、助けてくれーッ、と叫びたい許り。昨日、皮膚窯の中で焙られた時、何度この声なき叫びを発したことだろう。だが、あの時には、救助を求めるクララという相手があった。今、彼が、それから脱れたいと欲している鞭がその当のクララによって揮われているとは、何という皮肉であろう。彼は誰に向つて救助を求めれば良いのか？ 呻き腕きつつ、麟一郎は反抗する気概を失った。

ビシッ、第三鞭は左側に

「これ余の所有物なり。汝等余が証人たりや？」

この時、光幕のこちら側にいつの間にか歩み入っていた五人が、口を揃えて

「余等汝が所有権の証人とならん」

といったのを耳にしつつ、麟一郎は気絶してしまった。

第一鞭、第二鞭と、鞭に応じて足の下肉体が筋肉を躍動させるのを靴底で感じ取って嗜虐的な快感を楽しんでいたクララは、第三鞭と共に、ヤブーが身動きしなくなったので、靴にまとわりついた両手を蹴退けつつ、そっと項から足を引いた。項の上にはハイヒールの先で圧された所が浅い穴に凹んでいる。それが元通りになって行くのと同時に、背中に三条の鞭痕を生じ、みみず脹れになって赤く浮き上って来た。丁度N字形が背中に描かれた様だ。生体の反応、生きてゐる証拠である。唯の気絶だろう。

——あの厳しい肉体检査に耐え抜いた強健な身体を持主を、たったの三鞭で失神させるとは！

クララは棒の威力に今更驚かされたのだが、実は、三鞭は彼の頑健を示す数字であって、大抵の新畜は一鞭で気絶し、可成り強くても二鞭で足る。三鞭は最優秀の方であって、未だかつて、四鞭を必要とした新畜はないのだ。

登録係ジエーン・クレイが訊ねた。

「額には、今お描きになりますか？」

「紋？^{クレスト} そうね。IQが一四七で、LCが正5^{プラス}だろ、ひよっとしたら、骨彫にできるかも知れないから、今肌焼で描くのは止めとくわ。好きな時こっちでする」

ポーリンが横から代って返事して呉れた。クララは、額紋と聞いて、昨日円盤内で畜人犬タロの額にあるのを見て以後、屢々見かけるジャンセン家の紋章を想起し、自分の紋つまり、伯爵フォン・フトヴィッツ家の、盾と槍を握る鷲の模様の紋章を連想しながら、そつと諮問器に額紋の説明を求めた。

……畜人系動物の額に烙印される紋章です。貴族所有の家畜に限りです。尤もこれを施すと否とは自由で、譲渡を予定するものには烙印をしません。読心家具はある人に専属しますから、紋の変ることのない女性（女権制故、女性結婚しても姓や家紋が変らぬ）の場合は骨彫^{ほねはり}にします。これは額骨に形成層を彫るので、額の皮膚に手術して消しても、又下からその紋が現れます。一生その紋以外の紋が許されなくなるのです。これ以外は普通、焼肌^{やき肌}です。これは皮膚を焼く丈ですから、手術して除去できます。手術は、骨彫は専門技術を要しますが、肌焼は素人でもできる為か、貴族の皆様は自分で額紋描きをなさる方が多い様で、電気焼筆による畜肌焼彩技

法への入門には好適のものであるといわれています……

イヤホン
受話器を耳孔に挿して聴き入る彼女の前に登録係が立った。

「では、認証いたします」と前置して、声を張り上げると、「女王陛下の御名において、貴女をTEⅢN241267号の所有権者として公認し、貴女が彼を法律に従って（例えば、土着ヤブーも未加工生ヤブーの一種として、「畜人飼養令」によって、必ず首輪をすべきであるなど。二章二参照）飼育することを許可します。」

言い終ると、語調を改め

「失礼します。」

と片膝ついた。

「御苦労さん。じや引き取って頂戴。」

肩手札で答えると、婦クレイは満足して退出して行った。

こうして、先に登録によって畜生にされた麟一郎は、ここに正式に、クララに飼育される家畜となったのである。

六 蹴られ踏まれ鞭たれるリン

オライフ
土着ヤブーの表徴たるN字を背に描かれ、氣を失って横わるTEⅢN241267号。

「クララ、昨日円盤の中で妾の氣絶を回復させて貰ったわね」とポーリンが、笑いながら言った。「昨日のお礼に、妾がああのやり方で試してみるわ」

いきなり足を上げて、靴先で前に伏せた横顔を蹴った。

昨日のは平手打だったが、ポーリンの手がヤブーの頬に当るのでは、身分が違いすぎてまずいから、靴で蹴ったのは、当然のことであり、別段、殊更な悪意を以て報復的にしたのではない。ポーリンとしては、同じ様な氣絶の応急手当を好意からしてやっている

「もりのだ。なにしろ、黒奴ですら彼女の足蹴を受ければ終生の感激とする(十二章五)位だから、この足蹴の手当は賤しいヤブーにとって無二の恩恵に違いないのである。」

頬を蹴られて、首丈が横倒しになり、顔が見えた。目を閉じ、口は少しあき、よだれを垂らした、だらしない顔だ。クララが、その広い額から、額紋のことを連想し、自分の紋章がそこに烙印された有様をふと想像して、異様な昂奮を覚えた時、彼が身動きした。

意識の回復した時、靴の痛みがまだ麟一郎の頬に残っていた。先刻の鞭のあとだから、この足蹴もクララだと思つたのも無理もない。背中の焼けつく様な疼痛に又頬の痛み、思わずカッとなって、罵つた。

「クララ、何て酷いことするんだ、憶えてろ、僕は……」

言い終らぬ中に、項に又靴が掛かつて頭部を一転し、忽ち顔面が床に密着し、あとは言葉にならぬ。

「お黙りつて先刻言つたのを忘れたの！」

流暢な日本語である。その言葉附きから、柳眉を逆出た彼女の顔が想像できた。

リンが又独逸語で喋ろうとするのを急いで踏み潰したクララは、グイと足に力を入れて圧え附けた儘、傍のポーリーンに向つて、

「これに喋らせたくないんだけど……」

と言つた。何か猿轡にするものはないか、という程のつもりだった。

「舌の筒を」

ポーリーンは間髪を入れず、黒奴に命令した。B2号が進み出て、クララに一礼し

「首柳を外しまして、坐らせましてから……」

と言うので、彼女は右足を退けた。途端に又ヤブーが喋り出した。「クララ、赦して下さい。昨日のことは悪かった。謝ります。機嫌を直して下さい。……」

麟一郎は窮屈な首丈僅かに上げて——それでも、下半身しか見えなかったが——哀願した。独逸語をこちらが使つたのが氣に障つたのかと察したし、日本語を解すると分つたので、日本語で喋つた。恋しさ、懷しさ、それに先程の鞭撻を受けて以来の憎らしさ、更に又飢しさ、……様々な感情が胸の中に錯綜し、山程も言い度いことがある中で、特に謝罪を選んだのは、今し方苦痛と憤慨から、思わず彼女を罵つて、途端に靴で踏んづけられたので、

——怒つては駄目だ。我慢して先ず謝らねば。

と自分に言い聞かせ、必死に自制してのことだ。内心の憎悪を包んで、相手の氣に入られる様なことを言うなんて卑屈な行動は、麟一郎の過去において、一度として取られたことがなかった。それを敢てせねばならなくなったのは、彼が嘗て経験したことのない弱者の位置に追い落されていることを示すものだ。クララの靴を首の上から退けることが出来なかった時から、彼の心理状態は新しい局面に入つたのだ。鞭たれつつ鞭持つ手を舐めようとする犬の心理状態に比すべきものでもあろうか。彼は昨日迄の男らしい彼でなくなつて来たのだ。

尤も、麟一郎にはまだ事態の深刻さが理解されていない。クララの行動を、昨日の自分の暴行で怒っている為、イース人と一緒になつて自分を虐待するのか、さもなければ、イース人中に彼女の地位を保つ為、わざと自分をヤブー扱いにしているのだろう、と思つているのである。自分自身にヤブーの自覚を持たぬ麟一郎には、イース

人はともあれ、クララ丈は自分が本当の人間であることを知っていて呉れると思つていたので、彼女が、今は、彼は本当はヤブーなのだと思つてゐるなどとは夢にも考えていないのである。

だが、早口にそれ文喋つた時、

ビシッ

鞭が頬を横なぐりにした。

「あッ」

と悲鳴を上げると、その開いた口に、黒奴が素速く鉛筆程の棒を突込んだ。もう何も言えない。クララの手から垂れ下る鞭の先が顔の前で顫える。お黙りつてのに、何度言つたら分るの！「そういう無言の叱責をその鞭から聞かされる思いだ。麟一郎は揺れる鞭先を見つめていた。

独逸語で話されたくない自分の気持を——言葉にならぬ主人の意向をよく察する犬の様に——見抜いて、早速家畜語を使つた心根がいじらしく、これなら猿轡なんか要らなかつたんだとさえ思つたクララが、迷惑でもない彼の哀訴嘆願をビシリと一鞭で止めさせたのは何故だったか？ 彼女に言わせれば、恐らく、一旦「お黙り」と命じた以上、家畜語でも何でも、口をきかせては駄目にならないからで、あの鞭は当然のことだと答えるだろう。確かにそれに違いないが、もし、下意識顕出機（後述）にクララを掛けたとしたら、そういう表面的理由の下で、実は、先刻味つた鞭の喜び、支配の快感

責められる男性、虐められる男性十態十場面

滝れい子画「マゾヒズム画廊」

△分譲▽

大中判印画紙（タテ十八糎 ヨコ十三糎） 焼付 十枚一組 千二百円 略号（ろう）

を、もう一度味うことを狙つていたものだということが分るだろう。麟一郎が變つて行きつつあるのとは正反対の方向に、クララも變貌を遂げつつあるのだ。彼は卑屈な家畜に、彼女は驕慢な女主人に……。

黒奴は輪ゴム状のものを取り出し、両足首を揃えてこれをくぐらせた。金属ゴム製の緊縛輪である。もう一つを両腕を胴体に付けさせた上から掛けた。そしてその二つの輪を背から足首まで別に一本の金属ゴム紐で連結した後、首金具と床との接続部を解放した。

クララが今の鞭を揮つてからはんの数十秒の早業である。

俯してゐたヤブーの身体は、突然、操人形の様にぎこちなく、せっかちな動きを示して、次の瞬間には、台上にキチンと正坐してゐた。足首の輪と腰の輪とを背後で結んだゴム紐の縮む力で、この姿勢を強要する。両膝を揃えて坐る日本風の正坐は、イースでは、畜人（インダ・ブ・ヤブー）と呼ばれるが、この緊縛輪セットはヤブーに正しい坐り方を教えるのに愛用される訓練用具の一つなのである。

正坐したヤブーの首には例の金具が首輪化して纏つてゐた。肌に密着すると同時に、クララが電気焼筆で外側に書いた字が内側迄浸透して、直接肌に書いた様に烙印される。首輪の下に彼女の署名はこの先一生涯消えることはないのだ。

（次号予告。次章は畜人洗礼式です。麟一郎はクララの尿を注がれて、生れ代るのです。尚半人半馬なる乗用畜が紹介されます。）

△解説△

一、屋根裏の妖女

中二階の屋根裏は、さすがに人が住んでゐるだけあって奇麗に掃除はしてあったが板敷の上に薄いゴザが一枚敷いてあるだけだった。僕は黙つて巾広のゴムで胸から廻して後

手に縛られ、うっとり豊満な女の人の膝の上にもたれた。芳しい息が僕の耳もとに触れて、彼女はジットリと濡れたハンカチを僕の口に押し込もうとした。

二、黒帯と雪の足

俊介は柔道三段の猛者、今迄どんな強敵にもヒケを取らなかった菅沼道場四天王の一人である。しかし、その彼にも、苦手があつたのだ。それは師菅沼八段の一人娘奈々子嬢である。彼女は十八歳、親譲りの男勝りから女ながらも猛古着姿で道場に姿を現わすのだった。俊介は彼女の雪のように白い足を見る度に眼がくらくらとして、いつも彼女のよい弄り者になるのだった。今日も又、彼女のほつてりと肉づいた白い足で口を押えられ、左手を逆にとられて「ううう」と呻めきながら美女の足下に陶醉する自分を意識するのであった。

三、御寮さんと丁稚

今日は簾入りで店には誰もいない。御寮さんの部屋へたった一人で呼ばれた丁稚の定吉は下帯一本の裸にされると、後手に縛り上げられて仰向けに転がされた。

「そのまゝで一寸待っててや」

御寮さんの派手な浴衣が美しい肩をすべつて、定吉の顔の上にふわりと移り香が漂ってきた。

四、女学生と中年教師

「はいし、どうどう、はい、右へ廻って」
セーラー服のスカートを股のつけ根までまくり上げてストッキングも脱いで素足となつた女学生悦子は美しい瞳を上げて、馬になった教師の佐島に指図するのだった。教え子の美貌に身も心もとろけてしまった佐島は、馬

になつて部屋中を這い回るばかりか、鼻の隙子に穴を開けられ、そこへ鉄鑢を通して引っぱられるのであった。

五、禪かつぎの受難

支那服の美女は、手にした乗馬鞭をふけ上げるなり禪一丁で後手に縛られた取てきの背中に打ち下した。背、腕、尻と忽ち血のにじんだ赤黒い鞭痕が縞模様を作った。

「う、う、うう、ううう」

流石、肉体自慢の彼も、喰いしばった歯の間から呻めき声を洩らした。

「殺そうとは云わないからね、せいぜい苦しんでから白状するがいいよ。その身体じや、土俵にも上れないだろうからね」

六、二号さんと重役

「こりや、禿茶瓶、私の云うことが聞けないというの、従順にしないと、このゴルフのクラブで叩きのめすよ」

「その狼又はなんだね。そんなものは、とっておしまい。どうだい、私のお尻は重たいかい。しつかり這わないと、煙草の火を禿頭の頭に落つことすよ」

年若い美人の二号を持ったばかりに、堂々たる体軀の重役さんも、哀れな奴隷として愛妾の云うがままになるのだった。

七、従姉と中学生

「お姉さん、苦しいよ、勘忍して！」

女子大を出て相手に選り好みしたばかりに婚期を逸した朝子は、大柄で派手な顔だちの三十娘だった。従弟の年夫の顔を巨大な尻の上に敷いて両手首を背中縛り上げてしまった。年夫は朝子をはねのけようと一生懸命あばれ廻るが、十六貫以上もある朝子の全体重で押さえつけられては、潰された蛙のように

身動き出来なかった。年夫の目の前には、朝子の脂ぎった足の踵があつた。

八、愉しい苦行

雪は次第に激しく吹きつづつてきた。防寒具にリュックサック、それだけでも雪の山道を登って行くのは至難であるが、彼の首にはスポーツで鍛えた弾力のある美少女を乗せているのだ。「やっほ！、やっほ！」彼は、その重味に喘いで、思わず額の汗を拭う。しかしこの難行苦行もマゾヒストの彼にとっては何ものにも替え難い愉快でもあるのだ。

九、衣桁の陰に舞う鞭

「ああ姐御、一寸待っておくんない」
チヤリンゴの房は、手首と肘を前で合せて縛り上げられ離れの六帖に転がされていた。姐御は衣桁に着物を脱ぎかけ派手なトキ色の長襦袢一枚に、真赤な腰巻を太股もあらわに着こなし、房にリンチを加えるところだった。

「お前も仲間の掟ぐらい知っているだろう。さあ、深く、この鞭を受けておしまい」
姐御の白い肌は少年の踵を踏みつけ、手にした鞭は宙を切つて唸り出すのだった。

十、土牢の女王とスパイ

「いくらお前がうまく変装したって、その六尺禪が日本人という、れっきとした証拠なんだよ。どうだ、スパイということ白状するか、それとも、この私の奴隷にでもなるといふのかい？」

残置謀報網の一人として敵地に止まった憲兵中尉の溝川は、爛眼の女スパイにその変装を見破られ、地下牢へ放り込まれ、六尺禪一本のまま革手錠、革紐縛りに固定されて、彼女の訊問を受けるのだった。

屠^と腹^{ふく}乙^{おと}女^め桜^{ざくら}

(後篇)

藤 山 秀 緒

○ 由美は血みどろになって俯伏せにのたうっています。

能登守は、男のように両肢を揉みあわせて苦しむ由美を小気味よげに見下していました。が、やがて、家臣の一人を呼ぶと、何やら囁やき、

「由美。見事な最期じやのう。死にきれずにその苦しみ、女だてらに切腹などと申立てた罰ぢや。苦しめ。苦しめ。ハハハ」うわずった笑いをのこして奥へ消えて行ききました。

「さ、残念……。」

由美は苦しい息の上下歯をかねて口惜涙にむせびます。

「むうッ……むむむッ……。ウーッ」
由美は、遂に、四肢をこわばらせ、最後のけいれんに入りました。

「あうッ、あうッ……。ウムー、ウムーッ。」
明瞭な意識のもとで、すでに肉体は硬直のために機能をとどめ、凄惨な死の苦悶が彼女をつつみはじめます。

「むうッ……。むうッ……。」

びく、びく、と両手が虚空をまさぐり、両脚が屈伸しています。

そして、突然、きつと眼を見ひらいた彼女は、奥殿の方をぐっとにらみ、

「お、お、の、れ……。おのれッ！」
と喘ぎ喘ぎ絶叫するや

「ウーッ！」

とばかりに、腸から絞り出すように烈しい呻きをのこして、精根つき果てた男装の美貌を血の海の中へ沈めたのでした。

「それ、由美は息絶えだぞ。用意の品、これへ！」

立派な棺がはこばれ、由美は、その姿のまま、棺に納められます。そして、いとも鄭重に供揃をととのえて、死体は桂木左近の邸へ運ばれて行くのでした。

○

「由美どのの健気な最期、殿もいたく御賞美あって、遺骸は斯く鄭重に差し戻さる。ついては、左近一家の者、弔慰の恩召を以て、

御前にお召しなり。疾くお支度めされるよう。」

上使の言葉をきいた左近は、黙って、棺の蓋を取ります。臍腑をつかんで、手首まで朱に染まった両の手が、虚空に泳ぎ、かがめた両足、原型をとどめぬまでにさいなまれた腹部、襟あしから肩先へ、なまなましい打撲傷。

両眼は見ひらいたまま、恨めしげに齒をくいしばって、見るも無残な由美の姿。

「桂木左近、大方は察してござる。不本意乍ら、君命に背き、娘の霊を弔いまする。御上使、御免！」

左近は、抜討ちに上使を切って捨てます。「父上！」

一間を走り出る長女的美禰、三女のたえ。「美禰。たえ。姉は死んだぞ。これを見い。殿の御乱行がしのぼる。さぞ無念であつたらう。」

「姉上……」「由美どの……」

「泣いている処でない。上使を斬つた上は其方たちもかねての覚悟通り、立派に死んでくれ。殿の仰はみないつわり。いまのめのめと城中へ出向かば、見苦しき死にざまをさせられるは必定。殿の御計略の裏をかき、上使を斬つたは、せめてもの由美への手向。此の上は殿の討手をひきうけ叶わぬまでも仇を報いようぞ。」

「ハ、ハイ。立派に死にまする！」

美禰も、たえも、姉と同じように軍装をまとっていました。左近は、家の子郎党を集め一緒に死んでくれる者はここへ残れ、申渡します。誰一人、席を去る者もありません。嬉し涙にむせんだ左近父娘は、それぞれ持場を固め、力及ばず自刃するまで、討手を防いでくれるようにと頼むのでした。

美禰とたえは、表門と裏門にわかれ、僅の手勢をばげまして守備につきます。

○

能登守は、上使の戻りがおそいので、さてはと思い、様子を探らせて見ると此の始末。小ざかしき振舞いかなと、いよいよ猛り立つて討手をさしむけるのです。

左近の邸は忽ち討手に取囲まれてしまいました。戦うこと一刻。

「姉上ッ……」

「おお、たえどのか。裏門の様子は？」

「は、はい。もはや時の間と見えまする。裏門が破れては、万事休す。もとより敗るる覚悟のこのいくさ。父上に後をおたのみ申し、二人して自害いたしとう存じまする。姉上……。共にいさぎよう腹かき切り、冥府の由美のもとへ参りましょう！」

「たえどの。嬉しゆう思います。そなたから心静かに……」

「介錯御無用！ おさらば！」

男のように、はきはきといって、たえは男装の前をくつろげはじめます。矢叫びの聲が一きわ烈しくなつて来ました。

「ウウッ！」

ああ、遂にたえは短刀を腹へ突立てたのです。姉は、まばたきもせず、じっとたえを見つめています。十六才の蕾を散らす不憐さ。

「たえどの！ さあ、力のかぎり引廻すのじや！」

「む、むうっ……」

たえは、はげしく肩で息遣いしながら、刃をきりきりと引廻します。次第に傷口は血汐を吹き、じりじりと前かがみにのめりかける上体を必死に「ささえる彼女の意志。」

「うっ！」

腸へ切込んだのでしうか。たえは体を硬直させて、四肢をふるわせつつ齒をくいしばって泳いでいます。

「たえどの！ しっかり！」

「ア、アアッ！」

「泳えるのじや！」

「うむうッ！」

「泳えるのじや！」

「ウウッ……」

姉に励まされながら、じりじりと引廻して行くたえ。

「まだ足らぬ！ 右へ！」

「むむッ…ウーッ！」

「まだ足らぬッ」

「ウーッ…」

「もっと！」

「ア、アッ！」

「もっと！」

「ああむ、ウーッ…」

…あ、あね上…た、

たえは…たえは…

もう…」

「心弱い！ もっと、

力をこめて！」

「うむうっ…ウウッ

！」

菊の模様を織出した

錦の鎧下を着け、銀の

小手脛当をしたたえの

軍装が、烈しくのたう

ち、がばがばと血汐が

縁先を伝っています。

「ああ、ああむ、ア、

姉上…た、たえは

…たえはお先へ…参りまする。お、お見

届け…く、く、下さりませッ！」

「妹。断末魔のそなたが臍腑。思いのかぎり

かき切り、お城の方へ投げつけて死にや。姉

も追付け腹かき切って臍腑を見せる覚悟。気

おくれては不覚のもと。さあ、早う！」



寛げ、雪のような肌を

あらわすや、九寸五分

を取上げ、刀身に白布

を巻いて手早く袴を押

下げ、グッと刃を脇腹

に突立てるのでした。

「ウッ…」

「ああ、姉上…」

「うむうッ！」

「姉上！」

美禰は烈しく体をふ

るわせ、ずぶずぶと下

腹を割いて行きます。

二十六才の今日まで男

嫌いで通して来た美禰

には、どこか男のよう

な異様な魅力がありま

した。彼女の最期は果

して男も及ばぬ壮烈な

ものとなりそうです。

「むむむ…うむうッ

！うむうッ！」

美禰は腰をうかせ、抉るように短刀を右へ

引廻しています。

「ウム、ウムウッ！」

体をしごいて、ぐ、ぐっ！と刃を右脇へ引

付けた彼女は、

「い、妹！よ、よう見るのじや……こ、この刃……。刃の行方を！」

齒をくいしぼり、右脇腰を一抉りして、

「ああ、むうッ。……ウーッ！」
刃を上へ向け、諸手をかけた彼女は、りりしく呻いて、のびあがるように体を起こし、ぎり、ぎり鳩尾めがけて切り上げるのでした。

その時！

あわただしく駆け付けた桂木左近の姿。

「やや、兩人共すでに自害せしか！兩人死するいまはよく聞けよ。殿の御乱行將軍家に聞え、使者を以て隠居仰付けられ、殿を取巻く奸臣ども悉く罰を蒙ることと相成った。左近が武士も立ち、お家も元の平和に帰る。喜んでくれ！」

「え、ええッ！で、では、私共の、勝いくさでござりまするか。妹！」

「あ、おねさま！」「う、うれしう……ござりまする。さ、さり乍ら、一旦、殿に敵対せし……私共……お、お家の安泰を見るからは……も、申訳の死出の旅……こ、心静かに……し、死にまする。ち、父上！、お、おさらば！」

「待て！ 氣丈な其方たち。介錯も不本意であらう。心ゆくまで腹かき切り、立派に最期をとげるがよい。今となつてはそれがせめてもの父の情じや。高德の僧を招き、読経のう

ちに永眠せよ。苦痛をこらえてしばらく待て……。」

「は、はい……。か、かたじけのう……ござりまする……。と、こらえられるだけ……。こらえ……。まする。い、生きながらの引導……。こ、この上の、喜びは……。こ、ござりませぬ……。い、いざ、御用意を！」

左近は涙乍らに菩提寺へ急使を立てます。

致命傷に至らぬとはいえ、腹部を真一文字に或いは十文字にかき切っている二人は、いまは氣力だけがいのちを支えていて、すでに足先や手先は、こわばって来ています。

「……むうッ……うむうッ。——……」

「ウムー、ウムーッ……」

必死に呻きをこらえる二人。

○

二人は、家来にたすけられ、氣つけ薬の手当をうけながら、高僧の到着を待っていました。やがて、僧侶につづいて、近親の人々もかけつけて来ます。

広間の正面に白布をしきつめ、その前に僧と親族が並びました。

庭先で自刃した二人は、家来の肩をかりて最期場まで歩かねばなりません。

「お二方様、御用意よくば——」

「こ、心得た……。い、妹！」

「姉上！」

互に悲壮な美しさを保ちつつ、起き直ろう

と苦悶します。

ようようと思いで肩をかりた二人は、

「ううッ！」

一歩々々齒をくいしぼって泳えながら、読経の席へ進むのでした。

僧侶は、血みどろの二人を正面に据え立派な最期をたたえます。美禰は氣丈に答礼して男姿の自害なれば、切腹を選びしと言訳をします。僧は感じ入り、御最期まで、読経をつづけ申す。安らかに往生をとげられよ、とさとしします。

美禰は、一同にも一礼して、かく大勢お立合い下さるは身の面目、兩人が読経のうちに息絶ゆる最後の「太刀、御覽に入れます。妹、おくれまいぞ！」と云いさま、短刀を取り直して、左の乳房の下へグッと突立てます。

「ウーッ！」

妹もおくれじと、最後の力をふりしぼって同じく刃に伏したのでした。

読経は続けられ、二人は相抱いて、がっくりと息絶えます。

そして別間から聞えた呻き。

桂木左近も娘と共に命を絶ったのでした。

(おわり)

×

×

×



探偵小説に現われた

地獄絵巻

悪魔の唄『盲獣』
江川乱歩の

高崎 勉

昨年十一月号の奇クで、皆川のぶ子さんが私の紹介した同年九月号の「探偵小説に現われた地獄絵巻」について大そう喜んで居られました旨、読者通信の頁で拝見し、大変嬉しく思いました。奇クの愛読者の方の中にも探偵小説の好きな方があるのを知って、大いに喜ばしく思ったのです。

中でも乱歩の作品は倒錯趣味が濃厚で、奇クフアンの方なら、必ずや乱歩の作品も又お好きな方が多いのではないかと、思っ居り

ました処、はからずも皆川さんのお呼びかけを得て、実は私にとつては天にも昇る喜びなのです。そこで又しても、乱歩の作品を採り上げて見たくなりました。それには、何といつても、『盲獣』を見逃すわけには参りません。

私は、このような作品は前代未聞の大傑作だと思つて居ります。その独創性と、その倒錯性と、そして何ともいえない無気味な触覚

世界にうごめく、醜惡無比な人間獸。

何よりもこの作品を特異たらしめているのは、この作品の中で、「触覚芸術」という事が述べられている事です。次にこれを引用して見ます。

◎ 触覚芸術論

この世には眼で見る芸術、耳で聞く芸術、理智で判断する芸術の他に、手で触れる芸術が存在して然るべきである。

我々が日常手に触れるもの、例えば書物の頁だとか、ペン軸だとか、ステッキの握りだとか、ドアの取手だとか、毛皮の襟巻だとかは、目で見た形状、色彩等の他に触覚的な美しさが重大な要素となり、製作者はそれを念頭において製作しているに違いない。

これは、非常に卑近な一例にすぎないが、この程の美を、一つの芸術として扱って見る事は出来ないであろうか。(中略)

彫刻芸術は凹凸が多い芸術であるにもかかわらず、古来触覚のみの美を目的として製作した彫刻家はありません。彫刻家の狙う所は目で見た形であって、手で触れた形ではないのです。大理石を材料にしてさえ、決して触覚の事を第一として考えたわけではありません。

人間は視覚の事だけを考え、触覚の事を意に介さないのです。それは我々に目があるからです。しかし人間が犬や猫のように、嗅覚が鋭敏であつたら、この世にはもっとも匂いの芸術が発達したでしょう。それと同じく、我々に目がなかったら、この世にはもっとも手と手で触れる芸術が盛んになったに違いない。

乱歩は、触覚の世界を、さ迷う事の好きな作家で、『孤島の鬼』では迷路の闇の中の同性愛地獄を描き、親しき友人が怪物のように感じられる触覚地獄を現出せしめています。『闇にうごく』では闇黒世界に、人肉を漁る不思議な人間地獄を描き、そして本篇『盲獸』では、ついに触覚芸術を創造しました。

目で見た形と、手で触れた形とは同じでも感覚上には甚しい相違があるというのです。

従つて触覚的彫刻は、今あるが如き彫刻とはまるで変つたものでなければなりません。

そして、乱歩の『盲獸』は最初、殺人の為の殺人を、楽しんでいくかの如く見えるのですが、実はこの触覚芸術を創造する為の殺人であつたのでした。

◎ 悪魔の遺産

その作品は、何と異様なものであつた事でしようか？私は、そういうものを幻想しただけで、ブルブル戦慄してしまいました。その彫刻品は裸美人なのですが、一つの体に三つの顔、四本の手、三本の足を備えていました。しかもその顔その手足は、あるものは大きく、あるものは小さく、あるものは肥え、あるものは瘠せ、あるものは不揃いで、ちぐはぐに見えました。まるでピカソの作品見たいです。調和とか均整とかいうものが、美の要素であるなら、この作品は、美とは正反対のものに見えます。乱れた髪の下に一つの首がある。その首の三方に、三つの顔がついています。つまりこの女は、六つの目と三つの鼻と口を、備えているのです。その奇妙な首を、一本の腕がつきひじをして支えています。第二の腕は後頭部(と云つても、そこにも顔があるのですが)を抑えて、眩を空ぎまに立て、第三、第四の腕は、胸の前に何かを抱擁している形に、左右から交っています。反り胸は異様に広く、獣のように四つの大小不揃いな乳房が、ふくれ上っています。お尻のふくらみは三つに分れ、その間に二つの深い谷間が出来ています。そして足が三本、あるものは曲り、あるものは伸び、あるものは立膝の不行儀な形で、捩れ合っています。この彫刻の醜くさは、それ等の多すぎる手足の為と云うよりは、人体各部の釣合いが気でも狂つたように滅茶苦茶で、一見して人間という感じが少しもない所にありました。たと

えば、頭部が異様に小さく、首が恐しく長く、背中が普通の割合の倍も広く、腹部は板のようにベチヤンコで、お尻が異様にふくれ上っているという風に、その不釣り合いが、どんな微細な隅々にまで行きとどいているのです。

これを見た、見物人は、「何んでこんな馬鹿げたものを入選させたんだろう」と、あっけにとられ、そしてその馬鹿馬鹿しい形に、噴出してしまふのです。

所がこの作品の偉大さが、間もなく解る時が来ました。目の見える人には、これは馬鹿げた愚作としか思えなかったが、この作品が展覧会に出品されてから三日程すると、盲人の入場者が多数つめかけて来たのです。この不思議な彫刻の作者が、盲目である事を聞き伝えた為なのでしょう。いやこの作品には盲人を引きつける特徴があったのです。その証拠に、見物の盲人達は他の作品は少しもかえり見ず、ただこの不思議な彫刻の前に集まって、いつまでもいつまでもその女人像をさすっては、楽しんでいます。この物凄い彫刻の出品を頼まれた、K美術展覧会の有力な審査員的首藤秀秋氏なる人物が、悪魔のアトリエに彫刻品を見に出かけるのですが、これを一見して、心臓が早鐘のようにうち始めたのです。そして、腋の下から冷めたい汗がタラタラと流れました。彼は仰天したのです。その氣違いめいたかたまりの中に、閃めいている異様な美に、うちのめされたのです。彼は懐中電灯を投げ捨てて、その醜い彫刻に飛びついていき、そして彫刻家の鋭敏な両手の指が、貪るように彫刻の表面を撫ぜさすり始めます。

「素敵だ、素敵だ！この触覚はどうだ！この触覚はどうだ！実に素晴らしい！」

途切れ途切れに、訳のわからぬ世迷言をつぶやき乍ら……。

これが殺人鬼、盲獣の残した稀代の芸術品だったのです。そうです。彼はこの芸術品を完成する為に、次から次へと恐ろしい残虐な

殺人を行いながら楽しんだのです。

◎ 最初の犠牲者

彼は先ず、これと目指す女を物色すると、巧みに秘密の地下室に連れ込みます。その地下室の異様な事は一口に云ったら、それは悪魔の曲線なのです。

犠牲者の目に映るその部屋は、先ず何とも形容の出来ない不快極まる色彩の混乱です。色彩の雑音！色の不調和音！人を氣違いにするような配色！そのくせ、そこには強い色彩は一つもない。全体が陰気な灰色の感じで、その中にまるで不気味な腫物か痣のように、あるいは顕微鏡で見たバクテリアのように、種々雑多の異なった色彩が、全く不統一に滅茶苦茶に入り乱れ、のたうっています。もっと分り易く云えば、人体解剖模型の胃の腑や肺臓の内側等のあの何とも云えない恐ろしい色彩を、灰色にして、ペラボウに拡大したものを想像すれば、この部屋の感じに近くなると、乱歩は述べています。

ああ、それは悪魔の部屋でなくて何でしょう？

所が目が慣れるに従って、これは実は塗料を塗ったものではなく壁にしる、床にしる、種々様々の材料を組合わして作ってある為、その材料の生地の色の違いから生じた色彩の混乱である事が判るのです。

それにしても、乱歩は何んという怪奇な世界を発見したものでしょうか？

実際これは空想でなく、これと同じような感じの部屋をこしらえようと思えば、出来上るのです。それはともかく……。

こんな部屋に連れ込まれた犠牲者は、未だ自分の恐ろしい運命に氣がつかず、相手を自分の恋人のように思い込んでいるのですが、その内にこの部屋の有様が、もっとも異様な事に氣がつくのです。何気なく手をついた壁の何とも云えない手ざわりの異様さ！

壁のその部分には、お椀を伏せたような、突起物がウジャウジャと群っているのですが、その一つをヒヨイと押さえると、こんなにやぐみたいにグニヤツと動いて、押さえた場所が窪むのです。しかもそれは生暖かくて、生きた人間の肌ざわりなのです。犠牲者の美女蘭子は、ギョツとして手を引っ込め、よくあらためてその部分を見直しますと、それはゴムが何かで出来ているらしく温度は裏側から何か仕掛かしてある様子です。つまり、人間の乳房そっくりの手ざわりなのです。ふっくらとした酔っぱらいの顔のように、薄赤い乳房の形が身内がむづかゆくなるようなイボイボになつて、数え切れない程、びっしり群っています。その一つ一つが人間と同じ温度を保っていて、グルグル動くのです。しかしその群り集まった乳房一つ一つに違った個性を備えているというに至っては、恐ろしい感じがぞくぞくと胸に迫まるではありませんか。

蘭子は部屋中のあらゆるでこぼこが一つ一つ重大な意味を含んでいる事に、気がつきます。ある部分には断末魔のものがきがあり、大きな手首が美しい花のように群り閃めいています。ある部分には様々の形に曲りくねつた、そして一つ一つが得も云えぬ媚態を示した数知れぬ腕の群れが巨大な叢をなしています。ある部分には足首ばかりが、ある部分には膝小僧ばかりが、その他肉体のあらゆる部分がどんな名匠も企て得ない巧みな構図で、それぞれ個性を、嬌態を発散していました。その材料も、あるものはゴム、あるものは象牙様な物質、あるものは黒檀、あるものはビロード、あるものは冷めたい金属、あるものは柔い桐の木という風に種々雑多で、それがうごめき、躍り、形や音の不調和交響樂を奏でているというのですから、まさしく悪魔の部屋であり、悪魔の樂園であります。

その部屋が何故、気違いじみて見えるかというと、腕や股に彫刻した材料の、生地が着色をほどこさず、そのままさらけ出されている事が一つの大きな理由になっています。つまり元来黒いものが白

かったり桃色のものが白金色に光っていたりする為に、悪夢のような錯覚を起させるのでした。又、もう一つの理由は、それらの模造肉体が、手首は手首、乳房は乳房と、ほんの一部分ずつが、それだけで、一固りに群り集まっている事の他に、その大きさがまちまちで、乳房は実物大、膝小僧は一つ一つが三尺四方もある大きさ、又は小人島の小人のように異様に小さく、寄り集まっているという風に思い切り出鱈目に、投げやりに出来ているためでした。ふと気がつく、蘭子の踏んでいる床は、よくよく見るとこれは又、実物の十倍程もある巨大な女の太股です。うぶ毛の一本一本まで、精巧に作ってあるのです。目で追って行くと、それだけはあまり巨大な為に、沢山並べるわけに行かず、一人の全身が、やっと上半身まで続いています。小山のようにふくれ上つた、まるまるしたお尻が、その向うには肩から背筋へかけて偉大なスロープがつづいています。

蘭子はこの驚くべき視覚だけで、へとへとになって、目がくらみそうになっていましたが、どこかで香を焚いている事に気がつきます。香といつても無論並々のものでなく何か特別の挑発的なものです。蘭子は、始めこれを恋人の部屋だと思っていたのですが、実は悪魔盲獣の部屋なのです。彼女は、この部屋で、生き乍ら地獄の悦唐を味わっています。そして殺されるのです。

◎ 揺れ動く悪魔の部屋

盲獣は激しい香氣の中でも、蘭子の匂いを見分ける事が出来ると云って蘭子をおびやかします。蘭子は恐怖のため気が狂いそうになり、やけくその声を振りしほります。

「畜生！ お前は私をどうしようというのだ、さあ帰しておくれ、でないと私だって水木蘭子だ、何をするか知れないよ」

蘭子はレビエー団の女です。いい忘れましたが、この作品はレビエー盛んなりし頃の作品です。

「啖呵をきるね、俺はお前のその気性がたまらなく好きなんだよ。」

俺がお前をどうするか今にわかるよ。まあ、そんなにあわてなくてもいい」と盲獣はびくともしません。

乱歩は、二通りの女を好むようです。一つはしとやかで、純情で健気で日本風な所に近代的な教養豊の純粋なヒロイン、たとえば明智小五郎の夫人文代さんのような女性です。もう一つは、今の蘭子のような女性。そして乱歩が犠牲者にするのは、この蘭子型の女性なんです。抵抗性が強くないと刺戟がないのでしよう。それから乱歩の小説の悪人はよく獣のように舌なめずりをするのが好きで、他の作家の作品にない特徴です。

盲獣も、よく舌なめずりしますが、これはいかにも、獣の名にふさわしい行為であり動作です。盲獣はその部屋で、一大雄弁をふるって自分の大望を蘭子に語り聞かせます。それはつまり美しい女を自由にしたいというのです。盲獣は熱心にくどき乍ら蘭子に近づいて来ます。

「いけない、畜生畜生」

彼女はまるで犬か猫でも追払うような言葉を使います。

これも乱歩の好んで用いる所ですが、そのくせ、この誇り高い女王をあべこべに、奴隷の如き男に虐げさせている所が、一寸奇異な感じがします。

盲獣は手を合わせ拝み乍ら、切なくかきくどきます。まるで奴隷です。いや実際に奴隷にしてくれと頼むのです。

「踏みにじってくれ、唾を吐きかけてくれ、蹴飛ばしてくれ、蹴飛ばされても私は鼻をならして喜んでるのだ。決して怒りやしないのだ。頼みだ頼みだ」

「いけない、畜生、お前なんか踏んづけるのも、けがらわしい」

主人に叱られた犬のように、腹を床にくっつけてソロソロと這い寄って来る盲獣の進路から身をよけ乍ら、蘭子は毒々しく云い放ち

ます。

「どうしても、いやか」

「ああ、いやだ」

二人は子供のようになり、いがみ合います。

「よし、それでお前さんが、わしみたいなものの願いは、断じてきいてくれない事がわかった。しかしね、それと同じように、わしの方でもお前さんが何と頼もうが、泣こうが叫ぼうが、お前さんを再び娑婆に出すこっちゃやないよ(中略)」

かくて女対盲獣の斗争は始まります。

まるまると起伏した非常にすべすべした黒壇や朱壇や象牙の床を蘭子は、こけつまろびつ逃げ廻ります。盲しいた獣は、ハツハツと焰のような息を吐き、四つん這いになって恐ろしい早さで、彼女の匂と絹ずれの音と息使いを見当に執念深く追います。

どうもこの辺は、何か楽しい鬼ごっこのような描写で、乱歩は楽しみ乍ら書いたらしい。

しかし間もなく、この部屋全体が揺れ始めます。その揺れ動く部屋の中で、二人は取組合っているところころがり廻ります。

「畜生め、畜生め」

蘭子は最後の力をふりしぼって、相手を滅茶滅茶に殴り、引つかいたり喰いついたりして、死物狂いで戦います。悪魔の方も夢中でした。彼はそんなに逞ましくはないので、又必死です。野獣のように咆哮し乍ら犠牲者を押し伏せようと死力を尽します。

「ワハハハ、さあどうだ。これでもか、これでもまだ逃げようとするのか、ウヌウヌ」

地下室全体が、ひしめき乱舞し、怒号して揺れ動きます。追うものも追われるものも、耳も聞えず目を見えず、もつれ合ったまま、あるいは右に左に天地晦冥の大動乱の唯中に、ゴロゴロところがり廻ります。壁に群がる無数の乳房どもは、顔赤らめて風船玉のよう

にふくれ上り、この乳首からあたたかい乳汁をころげ廻る二人の上に雨のように注ぎかけます。そして蘭子は、この盲獣の恋人になるのです。そして地底の不思議な恋が始まります。

◎ 触覚 天国

「私は今までどうして、こんな楽しい世界を知らないで過して来たのだらう。ああ目のある人に教えてやりたい。お前さん方は悲しげな笛を吹いている按摩を見て、お可哀そうな盲人と気の毒がっているけれど、それはとんでもない間違いなのだ。」

と蘭子は、触覚の世界に、不思議な陶醉をおぼえるようになります。そして目のない下等動物共の、異様な甘いなつかしい感覚が判るような気がして来るのです。

◎ 情痴の極

触覚世界の男女に情痴の極がやって来ます。感覚のみに生きる人間に当然来るべき運命なのでしよう。理性のない感覚は天国を創り出しますが、又、地獄の世界をも創り出します。彼等は微妙なる触覚の限りを尽し、今やその微妙なるものに飽き呆れて来たのです。互に相手の肉体のあらゆる秘密を知り尽した二人は、どぎついプレイを楽しむようになりました。檻の中の二匹の猛獣の様にお互に相手の体を噛み合い殴り合い、傷つけ合う事を樂しむに至ります。それはそれで又、云い難き魅力がありました。傷つけられるものは、いつも蘭子でした。

「さあもっとひどく傷をつけて！ いっそその肉を抉り取って！」身もたえする蘭子を前にして、盲獣はどうとう恐ろしい計画を立てます。

「そんなに傷がつけてほしいのかね。そんなに痛い目が見たいかね。よしよしそれじゃ俺にいい考えがある。お待ち、今にね、お前が泣き出す程、嬉しい目に逢わしてやるからね」

彼は刃物を蘭子の腕にあてがったまま、ぐんぐん力をこめていき

ました。

「アッ、アッ」

蘭子は悲鳴とも快感のうめきともつかぬ叫びを立てて、身もたえします。

「もっとよ、もっとよ」

「よしよし、さあこうか」

彼女は遂に泣き出しました。痛いのが快いのかわからない感覚の中で、わめき叫びます。盲目の夫は、刃物に最後の力を加えるとゆりめりと骨がなりました。そして、アッと思う間に蘭子の腕は、肩から切断されてしまいました。噴き出す血潮、まるで網にかかった魚のように、ピチピチと跳ね廻る肉体

「どうだね、これで本望かね？」

盲目の魔獣は、闇の中で薄気味悪い笑を浮べています。しかし蘭子は、答えませんでした。気を失っていたのです。

そして、三日目の雪の銀座に怪事件が起るのですが、ここはもう奇クの領分ではなさそうなので省略します。

とにかく盲獣は幾人かの女を殺戮して、その女の美しい部分を呑み込み、彫刻のモデルにしたのです。

◎ 悪魔の最期

触覚美術の噂は一日と高くなり展覧会の入場者は閉会が近づくに従って、数を増していききました。そして遂に、展覧会最終の日がやって来た。その日も好奇心に燃える群集は、早朝から彫刻室へとつめかけて来た、そして彼等は、そこに目指す彫刻の上に、不思議な一物を発見して、ギョッと立ちすくんでしまった。……怪奇な彫刻の上に、一人の醜い盲人がおつかぶさるようになって、死に絶えていたのだった。彼の口からは、毛糸のような血のりが一筋タラタラと流れて、彫像の白い肌を美しく彩っていた。盲獣は、あらゆる女の肉体を漁り、その美を味わい尽した。そして遂に、殺人

にも飽き果てたのであろうか、それとも、彼の悪業の数々はすべて手段にすぎなくて、盲目の世界の芸術をこの世に残す事が、彼の最終の目的であったのか。彼の罪業の半ばを償うにあまりある、素晴らしい贈りものを残して、それに対する輝かしい名声、賞讃の声を耳にし乍ら、何んの思い残す所なく、盲獣は彼の作品を愛撫し乍ら、毒薬自殺を遂げたのである。だが次の一事は、恐らく何人も気づかなかったであろう。あの彫刻の一つの顔と一本の腕と一つの乳房は水木蘭子を、一つの顔と一本の足は真珠夫人を、二つの乳房と一つのお尻と腹部は大内麗子を、ある部分は漁村の海女を、又ある部分は、読者の知らぬ可哀そうな犠牲者を、それぞれにモデルとして、その触感がそっくりそのまま再現されていた事を！

乱歩はこのように書いています。

筋はこんなのですが、盲獣の著想は、乱歩の作品の中でも特色あるもので、代表作の一つに数えられています。前人未踏の触覚倒錯世界！私はこれを読んで体中が、いつまでも震るえてやみませんでした。

最後に、この作品の最大の残虐絵巻を、繰りひろげてお目にかけます。

◎ いも虫ゴローゴロ

この物語には、警官も探偵も、只の一人も登場しないのです。だから、このようなものはくだらない駄作だと云う人が、昔は多かったものです。しかし今になって、その価値が認められています。

それは、この作品が類を見ない妖気に富んでいるからです。中でも圧巻は「麗子人形」の章でしょう。私は随分、本も読みましたが末だこのような残虐シーンは、見た事がありません。それは一寸、風変りな残虐なものです。

彼は三人の未亡人の見ている前で、人肉料理を始めます。未亡人達はその犠牲者を、自分達の仲間の大内麗子だとは思わず、麗子の

人形だと思って見ているのです。三人の未亡人は、麗子の謀がうまくいって、盲獣が人形を人形と知らず本物の麗子だと思って、たわむれているのだと信じこんで筋穴から浴湯の残虐シーンを眺めています。白いタイルの流し場に、ぐったりと横たわっている白い物体は、ゴム人形だと思っているから、眺めていられたのです。裸の盲獣は、絞殺した麗子の足の方にうづくまって、ロレツの廻らぬ酔いどれ口調で、何か云っています。

「これさ、麗子さん、さすが勝気な美人後家さんも、意気地がないね、へへへ……、所でお望みに従いまして、これより最後の療治に取りかかりますよ。こいつは又、とても気持のいいやつでね」

こう云い乍ら怪物は、かたわらに用意してあった大きな出刃庖丁を拾い上げると、人肉料理にとりかかります。

「へへへ……、血だ。なつかしい血の匂いだ」

と、子供のように踊り上って喜んでゐる。(中略)

盲獣は斬り離れた五体を、一つ一つ毬のように放り上げては、ドブドブと浴槽の中へ投げ込みます。浴槽の湯は、血潮のために真赤に染っています。その中へ、血に狂った盲獣は、ザングとばかり飛込みます。赤い水しぶきが電灯の光を受けて、まぶしく散っています。それから、酔いと活動の為にヘトヘトになった怪人は、浴槽を這い出して、タイルの上をヌメヌメとすべっている五体の山の中へ、ベチヤンと腹這いになりました。

「へへへ……、芋虫ゴローゴロ、芋虫ゴローゴロ、へへへ……」

得体の知れぬ歌を唸り乍ら、彼は五体の山の中を、ゴロゴロ／＼と本当に断末魔のように、ころがり廻りました。のぞき穴の未亡人達は、この醜悪なる光景を最早、正視することが出来ませんでした。たとえゴム人形の切れ端にせよ、この刺戟は少し強すぎました。さすがの猛者連も、へとへとになってしまします。しかしこの犠牲者が人形でなく本物の麗子であると知った時、

「ワアア！」

と、地獄の亡者のような悲鳴をあげて、闇の庭を裏門目指して、こけつまろびつ駆け出しました。今にも盲獣の手が、襟首にかかり、わしないかと、生きた心地もなく逃げ出しました。

私は、これを読んで眠ったら、夢の中で「いもむしゴロゴロ」という悪魔の唄が聞えて来て、大分うなされた事を告白し、乱歩の『盲獣』の御紹介を終わります。

映画速報欄

阿部 秀

新東宝「角兵衛少年と天狗騒動」

柳生六之進（黒川弥太郎）に逢いたい一心から悪旗本、小森の屋敷へ訪ねて行ったお妙（沢村昌子）は小森のため言葉巧に欺かれて奥座敷へ連れ込まれ犯されそうになるが必死に反抗する。手こずった小森は、仲間達を呼び寄せて押えつけさせる。それでも必死に暴れるお妙。そこへ柳生六之進が帰って来たとの知せに「柳生様、助けて！」と叫ぶも空しく手拭の猿ぐつわを噛まされ、後手に床の間の柱に縛りつけられてしまう。そして数分後柳生六之進に毒薬を飲ませて来た小森のため

つけるシーンがあった。縛られて声も出せず身動きも出来ぬお妙の哀れな表情。そして切りつけた切先が運よく後手の縄目にあたり、猿ぐつわのまま逃げ廻るシーンが今回はカットされていて残念であった。

東映「疾風白狐党」

秘境、狐ヶ岳に住む山窩の一族は、復讐のため勝代（五条恵子）美世（千舟しのぶ）の二人を誘拐し、出陣の血祭として磔刑にする数カット、C級、縛りは、つまらぬシーンであったが、五条恵子の美しさが画面を引き締めていた。

洋画「OSSと呼ばれる男」

水爆の機密書類をめぐる展開するスパイ攻防戦。敵国スパイの本拠を偵察にOSS一七号（イヴアン・デニ）が出かけた後、助手の女間諜ミユリエル（マカリ・ノエル）はかえって敵国スパイに襲われる。ピストルを持って抵抗するが、やはり男と女、ピストルを拝つ手を逆に捻じ曲げられ後手に縛られソファに転がされる。文章に書くときだけで

あるが、映画そのものは殴られ口を押えられ髪の毛を引っばられ、こずき廻され喉をしめられて縛られるまでが、凄じサジティックなシーンの連続である。その上、縛られてからも一時もじつとしては居らず始終、身を跳き果は足まで縛られてしまう。そして一七号が帰って来て、スパイ達の格闘になると又、大変、ソファから転げ落ち膝を曲げ、後手に縛られた両手を使い足のハンカチをほどき、後から相手のスパイの足を蹴飛ばしたり、床に落ちているピストルを拾おうと転げ廻り、やっと拾いはしたが後手のため上手く狙うことが出来ず、その中、一七号が相手をKOすると、ピストルを捨て後手のまま今度はテーブルの上から鉄を持って来て、後手の縛しめを切つて呉れと一七号に渡す。処が一七号は直ぐ縛しめを切らず、そのまま数十秒話をする変った演出もある。A級

この映画は、マカリ・ノエルの他にも二人の女性が縛られこしないが痛めつけられるシーンがあり、最近の洋画では最も迫力のあつた映画と云えよう。

『女 体 風 俗』

牧

高 志

— 和 装 開 眼 の 巻 —

文・画

まさか裸で道中する人間は古今東西見渡しても無いんだし、東洋は江戸の東男あやまおとこでさえ禪を召されて夕涼みしたと拝聞する。してみると我々殿方の端くれが日常垂涎置く能わざる女人達たむけが何某かの衣布をおまとい遊ばされて歴史の波に乗り流行魔はやりまりで洗練されて今日の姿になった事は至極当然なことながら、事と装の段となると妖しい光に眩惑されて魂を九重の宙外に放出するに至っては最早やただ事ではない……などと騒ぐのが凡人のたわごとである。

映画『女体は哀しく』で島原おいらんの絢爛たる衣裳にうなづいて、ちよいと捲くりの真赤な腰巻に封切館を倍払って日参した奇特な御仁が

『君、こたえんよ』と抜かした事はむべなるかなである。

——で先ず斯く御披露した和装について女体をあしらひ、これを開眼の彼岸に漕ぎやらんとするには、世に謂うお禪から魂を入れなければならぬ。ただこの場合、如何に世の中が進もうとトリコットの前あき下ばきに、ストッキングではおよそ艶消しである。京は島原のおいらんが勇敢に素足でのす処にこたえんものがあるんだから、真実フリーから始めるんですな。もっともフリーと申しましてもいきなり一枚千両もする縮緬物では開眼処か眼がつぶれて了うから、そこは度々洗濯のきく木綿物が必要となつて来る。大巾のものなら布団屋さんに売っているから、一ヤール

半で白の晒を着れば充分だ。特に木綿物がお嫌いなら、今流行のナイロンかペンベルグで夏は格別涼しいでありますよう、最近の色が褪めないからお徳とも云える。

斯うした、いともくだらない注意を払って、愈々長襦袢を着る寸前までの各種各様を一つずつ御登場の女体に文句を云わず、両の手の自由を奪って開眼させるんだから、御苦労千萬な話ではあるが、どうせ女体を持つものなら、この方が楽しいのではあるまいか……と動くモデル嬢に物いをつけて

『お馬鹿さんねえ』とお返しされたことを白状する次第。

まあ何は兎まい図から御笑覧下さい。おおよそ、オーソドックスな高島田に金銀眼

も綾な振袖花嫁衣裳は下こしらえがびっくりする位面倒なものである。

コンクリートの高層建築物は地下工事で万事勝負がつくのと全く同じである、こと程左様に万艦飾の花嫁建築は伊達に急いで長襦袢なるものを装われないものらしい。物の本を引用すると、

『普段お使いのお腰をして、肌襦袢——つまり薄い純綿の晒巾かガーゼで幾分狭い目の衿幅物で衿附を斜にして紐で着て頂きます、次にお腰の上から裾よけを巻いて頂くんですが裾よけは裾の線を美しく出す大事な役目をするものですから、くれぐれも気をつけて下さいませ。それには矢張りお腰式の物をおすすめ致します。布地は足さばきがよくて裾がしつとりと落つく富士絹か羽二重、ジョーゼツト、夏なら平絹などがおよろしいでしょう。お色は上品なお色気のあるもの、花嫁さんなら絶対緋色でなければいけません。どうぞ当日は御新郎様から復古調でグロテスクであると仰言られようと目をつぶって悩殺なさいませね……は、余分だか何も媚を売る芸者衆ではないんだから、赤なんぞと御遠慮なさるは御無用。』

グロテスクは皺苦茶な婆さんが締めたらと云うことで寂しい赤茶けたものか白っぽいものは巻かない方が最初からまして御座んす。処で目も覚めるような緋色の裾よけをお巻

きになりまして、さあ、これからが難行苦行のギユウギユウ巻きと相成ります。

どうも朕自ら女体を前にして着付の榮譽を担った訳じやないから何処をどうしてグルグルになったか知らない白雀ながら

『そうで御座いますね、やはり花嫁さんですから斯うなさいまし。晒を半幅に打って、それを腰骨の下からお乳の上まで巻いては、半分折りかえし、ゲートルを巻くようにしっかりと巻くんでござますよ。何故ってそうなさいませんと葛たけた花嫁さんは出来上りませんもの。ただ余り結ぶこぶが多いとゴロゴロと体への当りが痛くなります、ホホホ……まあ御冗談ばかり、その方がって——それじや花嫁さんはポロポロお泣きになりますわよ、お屏風の前でお写真をお撮りになるんですしたらせめて長襦袢までも……左様で御座いますか、では一寸中座させて頂きましょう、どうぞ、



四

御ゆっくり……』と云う始末。ぐっと純白の襦袢に包まれた両の手を後に廻わして思い切り絞った縄の一線は先ず以て女体開眼の第一歩である。

『そのまま、そのまま、じっとして……が何んと長い苦痛であることよ。下半身を自由に上流でダムから流れる水を制限したように痛さを離れての黄金分割はオーソドックスながら色気満点ではあるまいか。』

欲を申せばこの儘曳いて行き度い処、若しぺた惚れたものとすれば新郎先生と替り得る勇気を持たねばならない、せつない気持は斯る女体を拝観する側に在ってこの女性には無

い筈で御座りましょう。
どうぞ、よしなにゆるりと御開眼なさりませ、と放言してこの女体ともお別れすることに致しましょうか。

さて、事すべてこうともなれば真赤な裾よけを好むと好まざるに拘らず召される女体はなで斬りにその結論を急がねばならない。

る図は今宵観劇にと粧いに気もそぞろの女性と対面してのお遊戯ごと。

『じや初めに手拭いのお乳押えをして、お腰をする、お腰はと……、失礼しました、ピンクで結構ですもの、どうせその上に赤の蹴出しを巻かれるんですから、暖房がきいても道中が寒いんですからもう一枚みやこでも……いや要らぬおせっかいを申上げて失礼しました。』

それからじかに下腹に六尺の晒を巻かれたんですか？ 成程、お腹をキュット締められた訳ですね、で次にこの裾よけを、上物のメリンスのようですけど違います、柔くてシャリシャリしてこれなら足さばきは苦にならないでしょう。あのあちらの長襦袢の色が淡い



る図

桃色ですから蹴出しは、どうしても赤系統でなくっちゃ場処柄も映えませんかや、粹処と大いに競って見て下さい。序てにくだいようですが、その裾よけは紐付でしょうか？ 後ろでお結びになれる、うっかりずいたら大変ですからその方が無難ですよ。そうしておいて、肌襦袢を召されたと云う訳、白のガーゼと。そして最後にお乳とお腹の中間を今一度晒してぎゅうっと締め上げた処であなたとお目に掛ったと云う次第で。どうも厚つかましくて何んていけず嫌かない野郎とお思いいなったんじやありませんか？

いや、それは誠に恐縮です。そうまで日本

趣味とは今の今まで御存知申上げずに数々の御無礼の段、左様ですか、御覧になるお芝居が金閣寺、じや雪姫がこうしてあなるんでしょ？ いえ、もう、あなたが縛られた姫を御覧になるんでしたら、何も——そうまでなさらないでも。そりや、ポーズは役者の生命ですからねえ、さも痛々しい恰好はつけますよ。つまり、一寸真似事でもなさいますか。太い紐が無くて上手には演れんでしょうけど、その細帯ともつかない白い紐を取って下さい。

肌襦袢の上からいきなりでは雪姫さんも至極無惨と云うもの、かまいません、じや、一つやって見ますよ。少々我慢して頂きますが、ほんの恰好だけですから深刻にならないように、どうも姿見の前では僕の顔まで写って艶消しですね、まあいいでしょ、どうです？

肌襦袢に蹴出し一枚の雪姫は、何も歌舞伎座の舞台でなくてもこのまま踊れすよ。如何ですか？ 御自分の縛られたお姿と云うものは。まあ一種の座興でしょうけれど、満更捨てたものでもないでしょ。それにお美しいからまた格別、序にセリフの一つでも仰言って頂けば九百円の一等席の価値はありますよ。いや、これは僕の云い分ですが——。アハハ



は 四

ハ』と声を殺して大いに笑った次第である。淑女を前にして何んたる失礼事ぞとお怒りになる前にもう一つある、拙い挿画ながらは図がそうである。

女人十九ともなれば肉付もふっくらと花ならば正に弥生の花盛り、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿が和装とあれば肌襦袢に代って東衿襦袢をじかに召されての緋色の蹴出しが、とんとお似合いと云う処。

『ホホホ、殿方のお覗きなるお部屋ではありませんわ、さつきからお話をお聞きますとお二人ともお縛りになったりして——何処に

女の人の眼が開くんでしょ？ だって訪問着を着てよそ様に掛ける時は下ごしらえが要りますものだから……ホホホ、まあ嫌やな方、どうしてそんなに腰の物が気になりますの？ そうでしようか、それじや芸者さんでもお裸にされたら堪能されますわよ、まあ御冗談ばかり、だって昔から女の特権ですもの。勿論お化粧をしてからお着物ですわ、でも、いきなりパタパタと着付しますと乗物が多いでしよ、どうしても着崩れしちゃうんですもの。ですから、こんな恰始をして長襦袢を着るんですわ。下着ですか？ 別段に、ホホホ、まあお人の悪い、そりや、しますとも。でも、今日は——ウフフフ、あたしみたいなお太福さんでも両手が無かったら美しいかしら？ いや、どうしてでしよ？ まあ恥かしいわ、そんな、だって襦袢にお裾よけ一つよ、いくら何んでも可哀いそうじやなくって？』

そこがそれ、女体風俗魅力と野暮ったさの

限界点とでも云う処なんです。仏作って魂をたたき込む開眼の大切な瀬戸際を識らない訳はないでしよ。識らないのならお教えしてもかまいませんよ。どうせ、その、大したわざでも、ないんだから、ちよいその両手を。『アラ、ほんとにお縛りになりますの。だって、こんな恰好じや、何かされてるみたい、柱により掛かれぼいんですの？ ほんとにどうにも手が駄目だわ。匪賊に拐された女のようにつて——嫌だわ、間諜の銃殺じやあるまいし、まあ嫌やな方、泥棒だなんて仰言つて。こうですの？ ファッションモデルでなくっておあいにくさま、顔がまづくてカメラが泣きますわよ、ホホホ、あたし肥ってましよう、ぶくぶくで御免なさい。前へこめつて、この位ですの？ お馬鹿さんねえ、だって本当のモデルさんじゃないんですもの、せつないポーズしろつて無理だわ。後手がしびれて痛いみたい、もう堪忍して——』

パチリでお終いである。以上三葉ともに天然色でなくて甚だ残念だが、先ず以て和装の第一歩から色気をたっぷり、おまけにアブ味を盛ったあたり如何なものでしよ。

——とするとお次は長襦袢と云うことになるんだが、どんな講釈がついて女体が泣くことやら本編紹介者は腕を振って鋭意執筆中につき、お好きな方はどうぞお待ちを——

(この頁終り)

体験告白記

椿^{ちん}事^じ

青葉楨一

工事場

もう三年も前のことになる。新学期が始つてまもない。ある晩であった。

私は、勤務先である学園の裏門を、ソツと忍びこむようにして這入ったのである。時刻は、九時を少し過ぎていた。

宿直室の灯が見える。当直は、年配のY先生だから、まア心配はいらない。

しかし、世の常ならぬ行為が目的である私は、他人に姿を見られるのは好ましくなかった。

私は、まるで犯罪者のように周囲に気を配りながら、三階建鉄筋校舎構築中の工事場へいくと、そこでホツと息をついた。

暈のかかった月が出ていて、ほのかに明るい。やっと外郭だけできている鉄筋校舎は、

黒々と聳えている。

私の計画は、その日の昼間、何気なく工事を見ていて、フツと思いついたものである。

思いついたとなると、もう自制はできなかった。私は、そこにどんな災難が待ちうけているとも知らずに、とうとう工事場へ来てしまったのだ。

私は、素早く着ているものの全部を脱ぎ捨てた。春とはいえ、夜気は冷く、肌にヒヤリとしてみる。

近代建築の持つ壮大なメカニズムと、裸体との組合せが、私をすっかり魅了していた。(その意味では、ビル構築の工事場のほうがもっと望ましかった)

少年時代から、頑固な裸体病を持っている私は、長ずるに及んで、よく裸体になった。しかし、いつも部屋の中では、感情が麻痺し

てくる。それには、新しい場所が必要であった。

初めの頃、私は多く野外を好んだ。雑木林・神社の裏山・野原・川の上流・海辺等々、当然のことながら、人目の全く無い場所が選ばれ、それらの自然の舞台は、また裸体によく調和した。

そのうちに、私はそれでは飽きたらなくなり、もっと強い刺激を求めるようになった。

バックとして、ノーマルな人々のおよそ想像のつかない場所。もっと判りやすいなら、ば、ノーマルな人間なら、絶対に、真ッ裸になどなる筈のない場所。そういう条件を充す場所の一つとして、鉄筋建築の工事場に、私の触手は動いたのである。

そこには、裸体とはまるで調和しない。さまざまなメカニズムがある。また山野とは違

い、人目に触れる危険性も伴う。そうした不調和、不安定感が、一種のマゾヒズムをいやがうえにも駆立てるのだ。

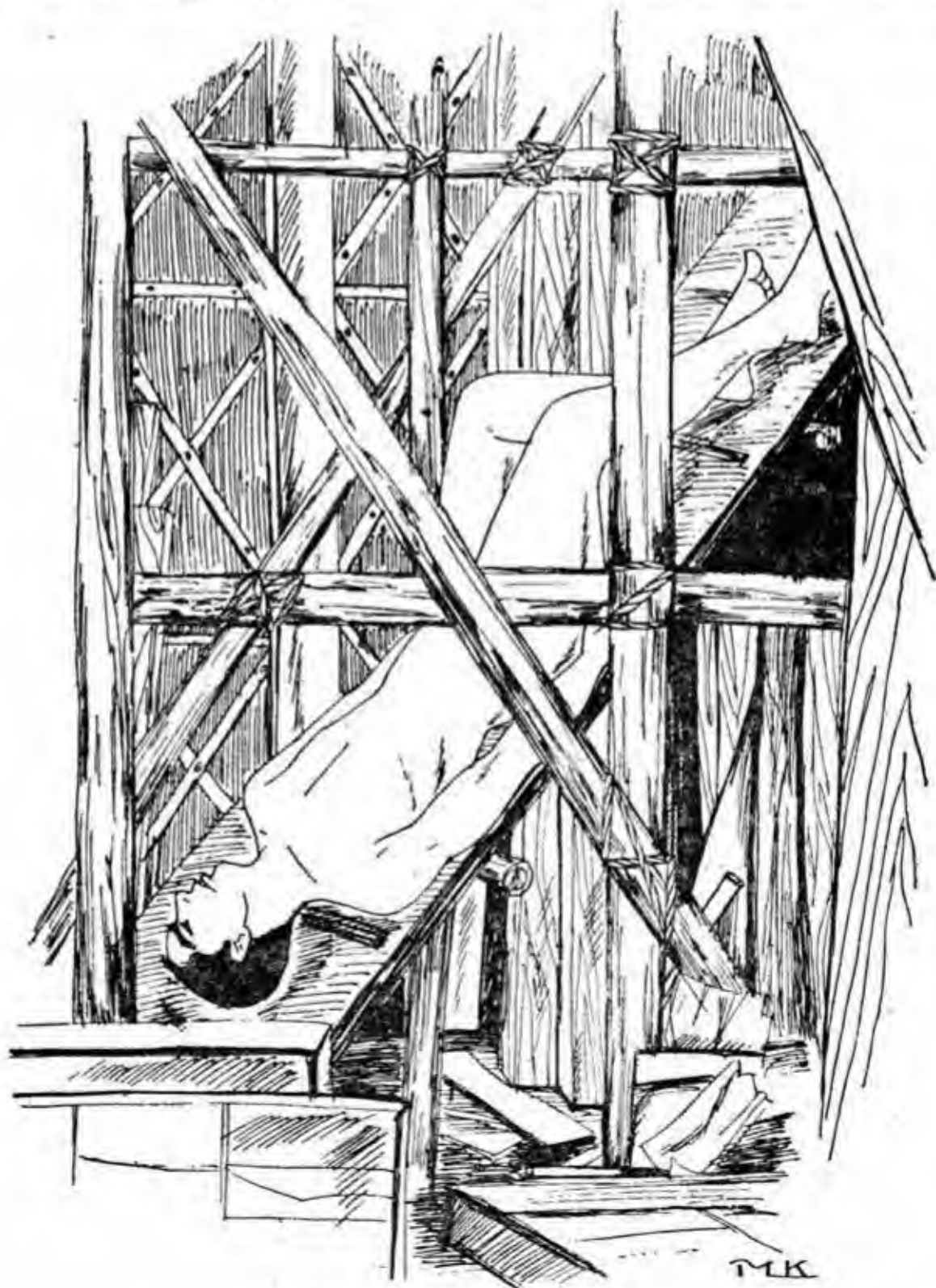
私は、コンクリート・ミキサーや鉄塔にとりついたり、まだ鉄筋の露出している三階の床を、歩きまわったりしたあげく、地上から一番上まで、足場にそって斜にかけである踏板の上に、頭を下にして仰向けに寝た。四十五度位の傾斜があり、下がった頭部が少しずつ充血していくのが、妙に快い。

視界には、湿ったような夜空と、輪郭の滲んだ月と、鉄塔の一部があった。

暫くして、我にかえったように起きあがった私は、不覚にもよろけて、(危イ!)と思ったときには、もう狭い板の上で身体の重心を失っていた。

冷い地面に転落すると、私はすぐには起きることができなかった。怪我をしなかったかと、少し身体を動かしてみたが、どこも痛くなかった。それで安心して、起きかけると、途端に腰に激しい痛みを感じた。

「痛ッ!」と顔をしかめて、手をあててみたが、別に血は出ていないらしい。打撲傷なのだろうが、疼痛はズキンズキンと深いところから起ってくるように思われる。骨でも傷めたのではないかと心配になった。そのまま横になっていて、おさまるものならばと、ジ



ツとしていたが、痛みは間歇的に襲ってくる。昂奮も陶酔もすっかり消え、こんな姿で倒れているところを他人に見られたらと思うと、気が気ではなかった。私は痛みを忪えながら、ジリジリと脱いである衣類のほうへ這って

った。

夜の工事場で、真ッ裸の男が、呻きながら、芋虫のように地面を這っているさまは、なんとも異様で滑稽に違いない。

グズグズしては、夜警が回って来る。

本当なら、人に助けを求める立場なのだから、それは望むところなのに、逆にそれを避けなければならぬ情けなさに、私は泣出しそうになった。

ヒタヒタと、かすかに登音が聞えてきた。とうとう夜警が回って来たのだ。

私は死物狂いで、衣類に手を伸そうとしたが、途端にまた激しい痛みが起って、反射的に身体を縮めると、呻声をあげた。

登音はますます近くなる。

うまく気付かずに行ってくればいいが、そんな僥倖はまず望めない。

私は、もう観念するよりほかなかった。真ッ裸のあさましい姿が、懐中電燈の光芒に照しだされる瞬間の羞恥に、全身を固くして息をつめていた。

「先生ッ！ まアこりやア一体、どうなさったンで——？」

あまりの意外な有様に、夜警の爺さんは仰天し、眼を疑うように、懐中電燈を近付けて、仔細に私の裸体を点検する。

私は、羞恥に身の慄む思いになりながら、「ひどい目にあっちゃったよ……」

といって無理に笑った。

「しかし、どうしてまた、真ッ裸に——？」

「わけは後で話すよ。怪我をしてるらしいんだ。痛くて動けない。すまないが、その衣類を取って着せてくれないか」

「ハイハイ」

爺さんがパンツ穿かせようとして、一寸腰を上げると、私は「痛いッ！」と悲鳴をあげた。

「そんなに痛むンですか？」

「ウン……腰のところがね。撲ったせいだと思ウンだが——一寸みてくれないか」

爺さんは懐中電燈で、腰椎のあたりを照して見ていたが、

「別になんともなっちやアいませんよ」

「色も変ってないかい？」

「へエ、赤くもなんともありません」

「おかしいな。とにかくこんなに痛むンだから、どうかなってはいらんだ——」

「医者へいったほうがよかありませんか」

「うん、じゃ、少し様子をみよう——すまないが洋服を着せちやッてくれ。痛くても我慢するから」

やっとどうやら洋服を着せてもらうと、爺さんの肩に縋ってみたが、下宿までそうして歩いていけそうにはなかった。

「ハイヤーを呼びましょうか？」

「そうだな。そうしてもらおうか」

電話をかけにいった爺さんが戻って来ると私は何枚かの紙幣を差出して、口止めするのとを忘れなかった。

「お爺さん。今夜のことは誰にもいわないでくれよ。あんまりみっともない話じゃないか

らナ。しかし、とんだ災難にあったもんだ。

おそろく間違いだろう。暗いンでよくは判らなかつたが、まだ若い男のようだった。いきなりとびかかって来て、裸にしようとするんだ。僕は驚いて抵抗したよ。でもおそろしく腕力のある奴でネ。とうとうこんな目にあってしまった——」

「へええ——だが先生は、なんだって今頃。こんなところに来なすったンだね？」

「うん、今夜は大分直ぐものをしてネ。脳が疲れたから散歩しているうちに、いつのまにか来てしまったンだよ」

「それはそうと、警察へは届けなくていいンですか？」

「いいよ。届けたりすると、後がまたうるさいから」

「しかし、怪我をさせられたンだから——」

「なアに、今晚寝れば癒ちちまうよ。大丈夫サ」

私は、苦しい釈明に大汗をかいたが、疼痛については、まだそれほど重大には考えていなかったのである。

手術室

その晩は、鎮痛剤をのんで寝てしまったが、翌朝は大分痛みが軽くなっていた。二、三日欠勤することにして、鎮痛剤をのんでは寝ていたが、薬がきれてくると痛みだすのに業を

にやして、外科へいってみる気になった。

院長のE先生は、身体を屈げさせたり、患部を叩いたり、脊椎を上から下へ順々に強く圧してみたりしていたが、

「一度レントゲン写真を撮ってみましょう」といった。

腰の痛みは、朝のんだ薬が効いているのか、ほとんど感じなかった。

「上半身だけ裸になって、ここへ寝てください」

レントゲン室へ案内して来た看護婦は、事務的にそう命じ、私がいわれたとおり、黒い金属の台の上へ仰向けに寝ると、すかさずズボンのベルトをはずし、ズボン下の釦をあげ、パンツの紐をといた。私は思わずハッとして、それらをすべて脱られるのではないかと緊張したが、彼女はそれだけのことをすると、サッサと出ていってしまった。

私は一応ホッとはしたものの、パンツの紐のゆるんだのが気になってならなかった。

やがて、眼鏡をかけた、レントゲンの技師らしい長身の男が現われた。

彼は、無言のまま、私の上体の位置を少し直したりしてから、いきなりパンツをずり下げた。私は、急にカッと脳へ血が上るのを感じた。

しかし、パンツは、かろうじて鼠蹊線のとこで止まり、危うく醜態をさらけだされる

のを免れた。

（よかった——）と息をつく一方では、何か期待を裏切られたような物足らなさを、私は同時に味わっていたのである。

レントゲンの所見は思わしくなかった。

顕著ではないが、カリエスの疑いがあるというのである。

打撲のショックで、潜在していたものが誘発されたのだらうといわれると、思いあたることがないでもない。

「すぐにギブス・ベッドを作りましょう。少し辛い、今のうちなら短期間で全治します。後で後悔しないように、是非そうなさい」

E先生は、私の返事も待たず、看護婦に何か命じた。

「今、準備させます。一寸お待ちください」

「先生、今日すぐにやるんですか——？」

「早いほうがいいですからね。なアに心配することはありません。すぐすみませう」

E先生は、なんでもないうに笑っているが、私にすれば、大変なことになったものである。

まもなく、看護婦が、準備の出来たのを報告してきた。

「さア、では手術室へいきましよう」

E先生に促されて廊下へ出た私は手術室と聞いただけで、もう胸がドキドキしていた。

手術をするわけでもないのに、手術室へ入れられて、どんなことをされるのかと思うと、妙に不安になってくるのだ。

手術室へはいると、入口で一人の看護婦が私をつかまえた。

「ここで服を脱ってください」

「はい……」

私は、上半身裸になった。

「アア、ズボンも脱らなさいアだめよ」

何をモタモタしているのだといわんばかりの、看護婦の言葉に、私は赤くなってズボンを脱いだ。

私のパンツを見ると、彼女は急に気がついたように、

「ア、そうだ。T字常、T字帯——」

と大声で云いながら駆けていった。

私は、パンツ一枚の、落着かない恰好で立たされていた。

T字帯というものを、見たことはないが、纏みたいなものに違いなく、そんなものをさせられるのかと思うと、情けなくなった。しかし、全裸にされるのではないらしいので、ホッと安心もした。

かなり待たせてから、さっきの看護婦が、かん高い声を上げながら戻って来た。

「ごめんなさい。T字帯がみつからないのよ

これで我慢してちょうだい。ね……」
彼女のつきだしたのを見ると、二枚の細

長いガーゼである。

(そんなもので大丈夫だろうか……) 私は心配そうに看護婦の顔を見たが、看護婦は、手早く一枚のガーゼを私の股に通し、もう一枚を腰に回して、先のガーゼの両端を押え、軽く結んだ。

「こちらへいらっしやい」

そう促されて、私は木のサンダルをつっかけると、室の中程へ進んだが、軽くガーゼをあてただけの腰のあたりが、気になってならなかった。

私は、看護婦の助けをかりて、身体の中だけしかない、おそろしく高い台の上に、俯伏せになった。

石膏の臭が、ブーンと鼻につく。

別の看護婦が、固い枕のようなものを、顎と胸と太股とにかかったので、私の胸はそれだけ台から浮上ったが、そのとき、私のまったく予期しなかったことが起ったのである。アッと思うまに、看護婦の手がのびて、腰からガーゼを抜きとってしまったのだ。

E先生は、婦長を助手にして、石膏に浸した繃帯を、次々と背中から腰へ貼りつけては重ねていった。

生暖かいヌルヌルした石膏が、次第に重みを加えてきて、やや苦痛に感じる頃、やっと作業は終って、ほとんど型のできあがっているギブスが、背中からとりのけられた。

私は、危かし恰好で

台から下りかかったが、今度は誰もT字帯はおろか、ガーゼさえもわたし

てくれない。仕方なく、

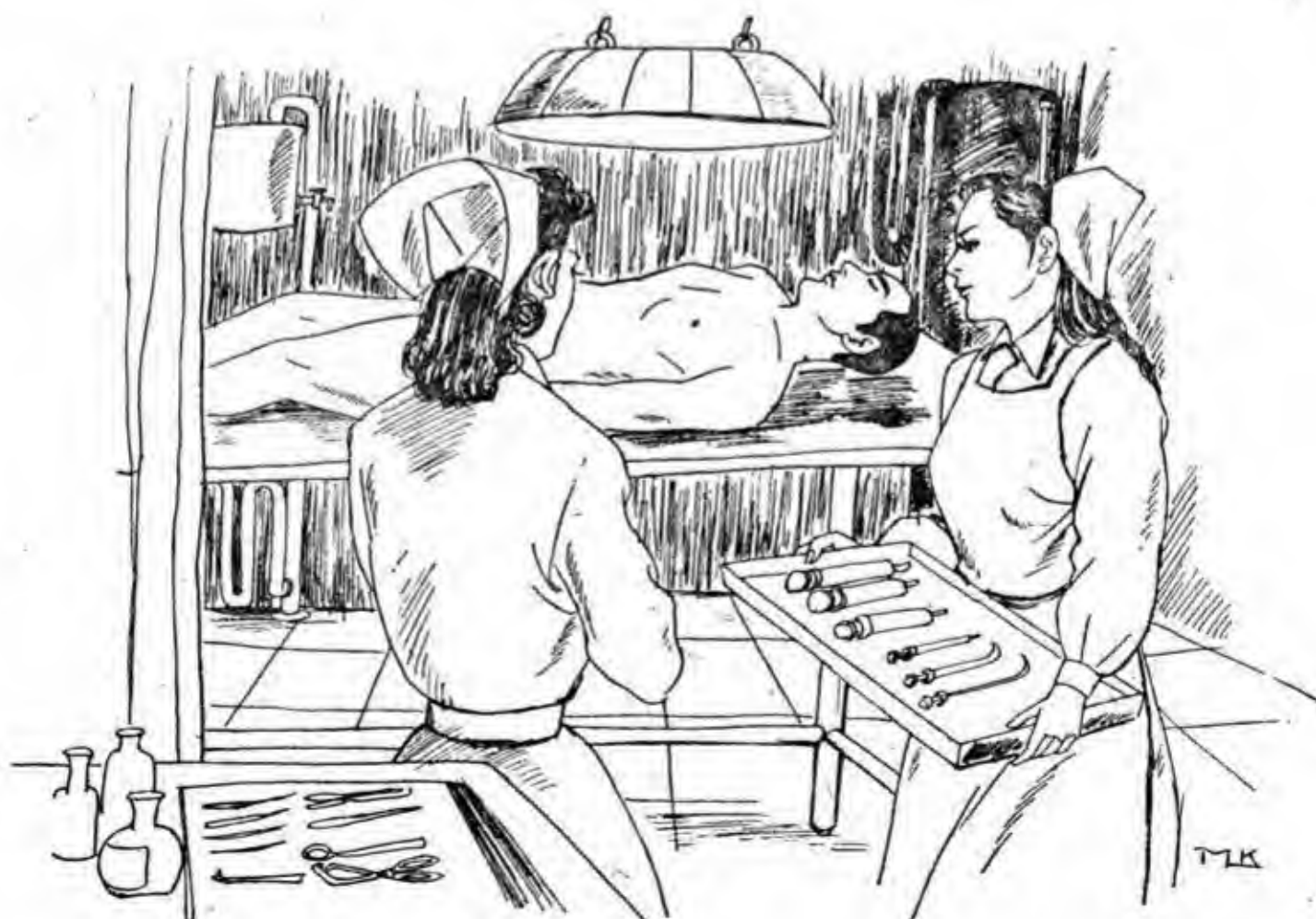
私は前を手でかくして台を下りたが、今まで無理な姿勢をしていたので、身体がふらつき、サンダルをはこうとして、つまずいてしまった。

「身体を洗いましょう」

室の隅にたらいが用意され、湯がみたしてあった。

「ちよっと熱いわね。今水をさしますから」

看護婦が水を汲んでくるあいだ、私はたらいのそばにしゃがんで待っていたが、すると、まったく不意に、不幸な事態が突発したのであった。いきなり、腰椎に電撃的な激痛が起り、私は「うっ!」と呻くと、コンクリートの床にのけぞったのである。



「ア、どうしたんですか?……」

看護婦が驚いて駆けよって来た。

「ううッ、急に痛みが、は、早く注射を」

婦長が、私を抱き起こすと、両手で胸にかかえた。私は油汗をたらして痛みを覚えながらも、前だけはしっかりと押えていた。

鎮痛剤が射たれたが、どうしたわけか、いつものようには効いてこなかった。

私は呻き続けていた。

「とにかく身体を洗ってしまおう。おい、君達——」

E先生は、看護婦達を指図して、バケツに湯を汲ませ、床に転がした私の身体へ、ザアザアとかけさせた。

「Nさん。手をとって——」

E先生にそういわれて、私は一瞬抵抗を感じたが、逆うわけにはいかなかった。

私は、眼を閉じると、手を離して、数人の若い看護婦達の眼に全身を晒した。

ソドミアである私にとって、同性に肉体を見られる場合は、激しい羞恥が、とりもなおさずマゾヒズムになるのだが、相手が異性では、屈辱と苦痛が、口惜しさと腹立たちさをそそるばかりであった。

私は、今でも、そのときの恥かしさを忘れることができない。思いだすたびに、身体が寒くなったり熱くなったりする。

その当座、私はE先生をひどく恨んだもの

だ。そして、この仕返しには、いつか必ず、E先生の裸体を見ないではおかないと、ひそかに心に誓いさえたのである。

さて、話はもどって、看護婦達は騒ぎをして私の身体を洗ってしまうと、担架を持ってきた。看護婦達は、よってたかって、私を抱上げ、控室のようになった板敷まで運んだ。

私は、もう気力もなく、両手をダラリと下げて、彼女達のなすがままに委せていた。フト気がつくと、半ば開いている戸口から、いくつかの好奇にみちた顔が覗いている。廊下で順番を待っている外来患者らしく、男も女も、子供さえもいた。私は、腹立たしきを通り越して、泣きたいような気持ちになりながら、一刻も早く衣服を着せてくれるよう祈っていた。

痛みは、ずっと間断なく続いていた。

「Nさん。痛みますか?心配いりませんよ。」

病室へいって、別の注射をしますから——」

E先生の声に、私は黙って肯いた。

「着物は痛みが鎮まってからにしましょう」

婦長はそう云うと、壁に掛かっていた診察着をとって、担架の上に仰向きに寝た私の身体へ被せた。

担架が持上げられると、戸口に寄っていた患者達が道をあけた。私はジッと眼を閉じていたが、大勢の視線が意識され、ヒソヒソと囁く声が耳にはいった。

病室のベッドに移されると、暫くして、一人の看護婦が、注射の用意をして現れたが、さっきは見かけない顔らしかった。

「大変でしたわね」

そう云いながら、彼女は毛布をはねたが、「アラ、なんにも穿いてないんですか?」

と驚いて叫んだ。

しかし、さすがに看護婦だから赤くなるようなこともなく、腰椎の両側に注射をすると、すまして出ていった。

痛みは少しずつ鎮まりかけてきたが、私は心中隠かではなかった。といって、誰に忿懣をぶちまけるわけにもいかなかったのでE先生の裸体を想像することで、気をまぎらわした。

E先生は、四十をいくつか越していたが、精悍な貌だちや、浅黒い皮膚の色は、まだ三代にしかみえなかった。肩巾が広く、きつと、筋肉質の逞しい肉体を有しているに違いない。E先生と二人きりなら、もっともっと恥かしい目にあってもいい考えると、ジーンと痺れるように、昂奮が這いあがってきた。

扉が静かに開いてE先生がはいって来た。私は少し眠ったらしい。

「どうです?少しは楽になったでしょう」

そういうと、E先生はベッドに近寄って、私の顔を覗きこんだ。

その髯の濃い、男らしい頬を、近々と見た

とき、私は、もう自分の心が、ハッキリと彼に傾きはじめていることを、知らなければならなかったのである。

あとがき

私は、半年余りで全快した。結局、カリエスではなかったらしいのだが、私は、そのことでE先生を責めようとは思わない。半年間のギブス・ベッドは苦しかったが、常にE先生と接していただける喜びもあった。

その後、E先生と私とのあいだが、同性愛関係に発展したといえ、小説らしいが、現実には、なかなか、そううまくいかなかった。いいかない。私の気持ちに変わりはないが、依然として片想いのままである。(完)

麻生保氏の生活と意見

(六)

麻 生 保

遠藤周作氏の「女王」をみる

しごこちない処もあったが、なかなか感じを出していた。プログラムにのっていた彼女の言葉を紹介しよう。

人間にはだれしも多少にかかわらず、マゾヒズム的な要素と、サディズム的傾向がある様です。そう云われてみると確かに思いあたる事があります。(中略) 遠藤氏は「サディズム的傾向は女性の方が強いのではないかと、それを拡大して行けば呂后になるでしょう」とおっしゃいました。下地は充分あるにしても一寸桁がちがいます。(後略)

榎本捨三著「戦雲アジアの女王」

十二月十八日から二十二日まで、六本木の俳優座劇場で、遠藤氏の「女王」が銀の会によって上演された。この戯曲については、沼氏も、僕も二月号の時評で取上げたから参照して頂きたいが、舞台にのせられた「女王」は浅利慶太氏のすぐれた演出によって、脚本だけを読んだ時に感じたような「から廻り」や、もの足りなさは一切なくなつて、異常な迫力と、あやしい迄の興奮と緊張があつた。特に、原作の指定では、番兵が伍奢を打つところを、呂后自らが手にした鞭で打つ様に演出しているなど、心にくいばかりだった。呂后に扮した東恵美子さんは、力演で、少

云わずと知れた金司令こと川島芳子の伝記風小説。少しものたりないけれど、多少食指

のうごくところもある。彼女が自分の誕生祝の宴席で当時中国一の名優・馬連良を怒鳴りつけ、ひどい恥をかかせるところなど――。それにつけても、これによつた新東宝の映画(高倉みゆき主演)の封切りがまち遠しい。

大映映画「花嫁立候補」

何ともクダナイ映画だが、麻生氏のような、乗馬女性のマニヤには、一寸楽しい。何しろ話の舞台が乗馬クラブだから、若くて美しい女騎手がふんだんに拝見出来るし、彼女等が障害とびの競技をする処などもある。但し、馬が女騎手からひどく鞭打たれたり、虐められたりする様なシーンは無いし、通常の意味でマゾ的な部分もまず見あたらない。強いて云うなら、八潮悠子が、ニヤケ男に扮した川崎敬三に平手打を喰わせる処ぐらいだろ

×

×

×

『漁村風景』

(禪にまつわる或る少年のエピソード)

山 口 幸 一

梗概

少年、正と妹は戦犯にて中国に抑留中の父の帰国を待ちつつ母と三人で東京の留守宅に淋しいながらも希望を持って暮らしていた。

母が突然の肺炎をこじらせて駆けつけた伯父夫婦の手厚い看護の甲斐も無く遂に二人の愛児を頼みながら不帰の客となってしまう。他に親類の無い二人の子供は伯父の家に引取られる事になった。父の刑期は三十年である。帰国する時は正も妹も、もう大人になってからであろうが、それでも生きて居れば又会える日があるかと、それを楽しみに二人の子供の生長を見守るのが、当然伯父夫婦としての義務であった。

伯父は外房州の漁村で祖父からの家業の漁

業をやっていた。発動機船二隻を所有する中流の漁師であるが、若い時は伯父自身も船に乗込み自分で働き家業に精を出した。最近は何年も取ったのであまり機船には乗らず、一人息子の竜雄を相手に磯釣などに興じていた。しかし一日でも海の生活は忘れられず元気がよければ必ず磯船を砂浜から卸し一日一杯海で暮らすのを楽しみにしていた。

この伯父の家に最近正が遊びに行ったのは去年の夏休みであった。正より一つ年上の竜雄は健康そうに陽焼けした皮膚と若鮎の様に伸び伸びと育った体軀を持った少年で当時まだ中学二年生であったが、高校一年生位の立派な体格をした少年であった。正の目を驚かせた事はこの竜雄が何時も真白の六尺褌を腹

一杯にきりっと締込んで伯父と海に釣に行ったり泳いだりして遊んだ事だった。

竜雄は水泳がすんだ後は別の乾いた褌を出して締めかえるのが常で、夜寝る時でも何時も六尺褌と腹巻を身につけていた。

正は水泳の時は母に買って貰った黒サッポータの上に水泳パンツをして後はすぐ白いパンツにはきかえるのが常であった。

都会の少年の正には六尺褌をしめた健康な竜雄の姿がまぶしく正は竜雄の様に何時も六尺褌をしめていたら気持がいいだろうなあと、思ひ、つくづく竜雄をうらやましいと思った事があった。

母が亡くなったと云う事はかえすがえす悲しい事で、毎日母を思って涙を流さない日は



なかったが、その涙のかわいた時、ひそかな小さな喜びが正の耳もとにささやきかける事は否めなかった。

『それは伯父の家へ引取られる』

『竜雄と一緒に生活』『晒の六尺褌を毎日締めさせられるのではないか』

こう云う悪魔のささやき、悲しみにくれた

正を新しい生活へと強い力で誘惑するのであった。

正は伯父の家へ引取られる事になった。

竜雄も喜んで迎えてくれた。正のひそかに期待した事は、次第に現実になって現れてきた。後は真新しい晒の六尺褌を与えられ、パンツは永遠に別れを告げなければならな

い。

竜雄と二人でそろって六尺褌一つの姿で浜で手伝ったり庭に水をまいたりするのは楽しい事だ。だが妹の前に褌一本の裸体をいやでも毎日曝さなければならぬ。

妹は正の褌が汚れた時は洗濯をしてくれるだろう。それは今迄正のパンツを洗濯した事があるから、当然それ位の手伝はしなければならぬ。それは何となくかしい又心臓がどきどきする様な歓喜ではなからうか。ひよっとすると竜雄は自分の褌も一緒に妹に洗濯させるだろう。又妹としてもそれは当然してやらなければならない。すると真白い褌の布の一端には『正』『竜雄』と墨で名前を書いてくれるだろう。

正の想像は限りなく広がって行くのであった。

時 現代

所 房総半島の漁村の中流漁師の家

登場人物 少年正 中学二年生

その妹 小学六年生

竜雄 中学三年生

伯母 正の伯母、竜雄の母

四十位、この家の主婦

茶の間

正と伯母と坐っている。

伯母「正さん等も今日から家の人になるのだから、竜雄さんを兄さんの様にして仲よくしなければなりませんよ。伯母さんも正さんと竜雄さんを何でも同じ様にして上げますからね」

正、都会育ちらしい稍華奢な美少年。

伏目勝。金ボタンの服を着ている。

「だまってるなずく」

この時、此の家の長男竜雄入ってくる。

竜雄 中学三年生。健康そうな身体

しかし顔はあどけない子供らしい美少年。

「お母さん風呂わいている？」

伯母「ああわいてるよ。正さんも一緒にお入り」

竜雄「正君、一緒に入ろう」

正だまってついて行く。

浴場

ズボンをぬぐ竜雄。ろうそくの様に裸になる二本の足。白い六尺褌がランニングシャツの下に見える。真裸になる竜雄。褌を器用に解く。

まぶしように竜雄の姿を見ている正。

浴室から出る二人。皮膚は桜色に上気し、むっちり張り切って四肢はその油気のため

滴をはじき飛ばし健康に輝いている。

脱衣室に入る二人。

伯母、脱衣室に入ってくる。手に白い晒布をたたんだものを持っている。

伯母「竜雄さん。まわしの取替え。はい。」

正さんも今日からまわしを締めなさい。この辺の子は中学生は皆まわしですよ」

顔を紅潮させて驚く正。

母の手から洗った褌を受取ると素早く締め竜雄白布を前に当てる所をじっと見ている正

伯母「正さんは都会の子だからまわした事ないでしょうが、竜雄は小学六年からまわしをさせましたよ。漁師の子は海に出る事があるから、何時もしゃかりふんどしをしめてないといけません。だからこの辺の子は大てい年中まわしをしています。正さんも今日から毎日ずつと締めなさいよ。一年もするとまわしの方がどれだけ気持ち良くなるか分りませんよ。竜雄も初め一寸お尻の割目にはまるのが気持ち悪いなんていってましたが今はもう長さも十三尺にして腹の上を四回位廻してきちんと締め込む様になりました。正さんはもう中学二年になってるから初めから長さを十尺に切って名前も書いて置きましてから竜雄さん四回廻しにしてきちんと締めて上げなさい。晒を受取る竜雄。」

正の肩にかかる白布。忽ち股をくぐらせて

尻からかけて後の割目に深く喰い込ませ巾広く腹の上を三、四回巻く。立褌の下をくぐらせてぐーっと締め上げ一端は前袋を包んで尻に回し二つ一緒にしてきちんと結び締める。その時正の妹、浴場に入ってきて兄の下帯姿を見て目を丸くする。

妹を見てはすかしそうな正。

竜雄「正君さあ縁側ですぞう」

褌一本の二少年、服を手に持って座敷を横切り縁側に行く。

縁側で足を伸ばして休む二少年。薄暗くなった縁先に少年の身体に巻いてある褌だけが白く遠くから見える。

浴衣を持って入ってくる伯母。

伯母「風邪を引くから二人とも早く着物を着なさい。そして御飯ですよ」

立ってそのまま浴衣を着る少年。白い浴衣に黒無地の帯を締める。

竜雄「正君御飯たべに行こう」

つれだって茶の間に行く二少年。

そのままテーブルの前にあぐらをかいて坐る二少年。

竜雄の浴衣の前が翻り、白い前袋が見える正、前褌が見えるのを気にして着物の前を神経質に何度も合せる。竜雄は平気。伯母、妹、伯父五人テーブルを囲む。伯母御飯を盛る。

静かに幕

美容病院

◇木村愛子の経験 その八

(河野副院長指導小野教官担当の基礎的苦痛訓練法と基礎的美容体操の一例)

久留木 栄

「やあ、お元気ですか。全く久しぶりですね。僕が君の目の前に顔を出すのは、三日ぶりですか、四日ぶりですか。木村さん」

体操指導教官小野茂夫は木村愛子の肩をたたくとそういつて微笑した。愛子は河野の研究室で、例の皮のスライ・ルイン・ワン一つの姿で、きょうの責め手を待っていたのだ。木村愛子は肩をたたかれると、無意識的に身を小さきみにふるわせ、思わず小野の顔をみた。すると小野と愛子の顔が真正面からぶつかった。愛子はとっさに虐げられるものの本能で思わず、顔をそむけようとしたが、不思議と、そうすることができず逆に鋭い視線で小野を見詰めた。小野も愛子の瞳を見詰めている。愛子の瞳は黒く澄んだ瞳だった。その黒い瞳の中に、強い意志の力を象徴するように水晶のかげらのような鋭い光りがあった。他から投げかけられた視線を鋭角的に反射しながら、その水晶のカケラは生きもののように光っている。その反射光は冷めたく、厳めしく、鋭い刃となって小野の瞳につきささった。

た。小野は愛子を一目見たとき、この水晶の光に恋を感じた。そして二目見たとき、小野は愛子のその反射光の中に聡明な理知の輝きを見出した。小野は、その理知のきらめきが、ともすれば熱狂的になりがちな小野の心を支えてくれるような感じがした。小野はこの理知にはげまされて、安心して研究に従事できる自信をよみがえらされた。そして小野は三度目、愛子の目を見たとき、愛子の目の中の水晶のカケラが紫色の焰にかわり、妖しい光りを放って燃えるのを発見した。その焰は不思議な情熱にもえていた。アセチレンの焰のような感じだった。小野はその焰をみたとき、自分の心も体も、それに溶かされるのではないかと疑った。小野はこの瞳の変化を充分みきわめたとき、ふと彼は、自分の恋はこの女によって、生まれ完成されるのではないかと思った。そして、その予感は何故か、絶対的なもののような感じがした。小野はゆっくりと愛子の顔から、瞳を放した。そしてこれから、自分の恋を完成するためにも存分

愛子を責めてやろうと思った。愛子がきわめて美しくなることは、愛子の目的をかなえるだけでなく、自分の恋を、自分の運命を決定づけるもののようにすら感ずるのだ。

一方、責められる側に立たされた愛子は、どう思っていたであろうか。愛子の心は、一口にいえば複雑であった。乙女の感傷というのも多分に含まれてはいたが、それよりもっと大きな動揺と、新たに見つけた新しい境地にせい一ぱい安住しようとする努力が重なりあっていた。そうして、はっきりいえることは、入院当初のように心が乱れてはいないということである。このことは愛子にとっては予想外な自覚でもあった。とにかく愛子は、自分の身の上によりかかった三、四日間の経験をまとめて、一つの結論らしいものを引出そうと無意識に努力していたのである。愛子が引出した新しい境地……考えというのは、第一に、この気狂いじみた男たち、いや女もふくめた人たちが、決して本当に心から憎むべき悪人ではないという確信を得たことであつた。第二に、この人たちは決して愛子の身を傷けはしないという信念をもって愛子を責める……という事実であつた。そして第三は、苦痛という感情が一概に唾棄すべき感情でないということにたいする覚醒であつた。こういうことは、これまでの愛子には考えられないことである。自分の敵を愛するという言葉は絶対絶命の境地に追込まれてからはじめて、感ずる感情といわれるが、愛子の感情はそこまで不知、不知の間に高められていたのである。だから愛子は、自分で思ったより以上に自分の心を平静に保てたのである。したがってこのことは愛子の気持を大らかにした。そして丸石デパートで起ったいゝんな事件、すなわち恋人とひそかに心の中で思っていた田山隆行を、特産課の売り、好村光枝にとられかかったことも、まるで遠い、現実とは違った世界のできごとのように思われ、自分がやきもきなっていたことが無性に口惜しかった。自分にはまだ大切なことがある。自分に持って生まれた特

性を、強い感受性を最高度に生かして、生き抜く必要がある。彼女はそう思った。そう思うようになっただけで美容病院への入院は意義があると思つた。我慢のならない責苦を意識的に我慢する気にはなれないが、そのひまひまに鏡にうつし出される自分の姿は全く自分の未知な自分の姿であり、あるときは痛ましく、あるときは悩ましく、あるときは、これが、デパートの売りだった木村愛子かと思われるながら驚嘆するくらい美しく、凄艶であつた。従つて木村愛子は案ずるほどに痛められてはいなかったのである。しかも適当に与えられる睡眠や、音楽や憩の一刻を利用した映画が、常に人心地を愛子に抱かせていた。従つて愛子は、反省、という淑徳に於ても充分生長していたのである。

こうした木村愛子が小野茂夫の目とぶつかったとき、直観的な何物かをつかんだことは疑いない。木村愛子は小野茂夫の中に鋭い鋼鉄の刃のような強靱な一瞥を見るとカッと体中に血が逆流するような羞恥心を覚えた。それと同時に彼女はとっさに相手の心が平静を欠いていることを読みとつた。

「恋しているのかしら、恋！」

と、相手の心を推測した。こんな推測を下すことはかつてないことであつた。あの田山隆行との交友のときも、そんな感じはなかった。ただなんとなくつきあつて、好ましいなと感じ、それからむしろ好村光枝ができてから、燃えあがつたような種類の感じかただった。それにくらべると、小野とのたった一瞥の目の光の中に見出した感情は何と強烈なものだろう。彼女は大きな恐れと、不安とをその中に感じた。激しい愛情の発端には恐怖と不安はつきものなのだ。しかも自由を失つた身の上で……木村愛子は本能的に今日は徹底的に責められるなと感じ、それと同時に責められる程に不撓不屈の火がもえあがるようにも感じた。そう思いながら別の面では四日ほど前、入院第一日目、カメラ撮影のさい自分の全身に喰入るよ

うな視線を投げかけていた小野茂夫を思い出し無意識的に現在の小野茂夫と比較していた。あの時の小野茂夫にくらべれば現在の小野茂夫は非常に進歩していると思った。あの時はまだ優柔不断な感じであったが、今日は明快な強い決意をもっていると思った。しかもあの日はただ逞しいという感じにすぎなかった男が、今日は、情熱的な体軀の内に理知をとりもどし、野生的なひきしまった表情の中に人生へ挑戦する激しい意慾をすら感ぜさせるのは一体どうしたことだろうか。

木村愛子は自然に胸の動悸が高くなっていくのをどうしようもなかった。その時、いつもの調子で悠然と河野副院長がやってきた。

「おや木村さん。今日はバカに張切って、いるじやないですか。小野君だと、それも愛想が良いのかね。」

開口一番彼はひやかした。

「今日は苦しいんだよ。うんと、しかも、絶対に容赦しないことになってるんだ。おや笑っているね。木村さん。これじゃ、美容病院一のやり手もカタ無しだね。よし、それではさっそく、悲鳴拝聴といくか」

そういつて河野がなにやら小野に目くばせをしたとき、愛子は耳のそばをヒュッと音がして、軽いショックで彼女の裸の肩にふりおろされるものを感じた。

「ムチだ！」

と思った瞬間、目もくらむような激痛が走ってきた。

「アオオオ」

彼女は例のプラスチックの猿轡の中で絶叫した。まるで野性の動物のような絶叫だったが、それでも外部には、犬の鳴き声みたいに聞えたにすぎない。彼女は一撃で椅子からころげおちた。その姿を見て小野と河野が顔を見合せてにやりと笑った。

愛子は床の上にはいつくばり肩でいきをしていた。体中の毛穴が

総けだち、恐怖が全身を包んでいた。愛子はこれほどはげしい痛みをかつて経験したことがなかった。愛子はおそるおそる、ムチで打たれた肩を眺めて見た。きつと赤くはれている、と想像していたのに不思議とそこにはなんの傷痕もなかった。一体これはどうしたことだろうか。愛子はわれとわが目を疑った。それと同時に肩にあたったやわらかい肌ざわりとその直後に感じた痛撃とは全く別の種類であったことを発見して驚いた。愛子是不審に思いながらも、いつしか体をおこし、さきほどと同じように椅子にこしかけた。すると小野教官がにやにや笑いながら、細いしなやかなプラスチックのむちを目の前で二、三回素振りをした。愛子はそれを目で追った。その一端がゆっくりと愛子のむきだしの左脚にまきついた。愛子はそれを目で見た。決して痛くない速度である。それにもかかわらず愛子は再び椅子からころげおちた。

「アオオオ」

と悲鳴をあげた。強烈な痛みが左足からつきあげてきたのだ。それと同時に愛子はその鞭がゆっくりと次々に見舞われるのを知った。肩、手、太ももなどから、激痛が次々におそってき、愛子は四肢がバラバラになるかと思った。床をころげ回り、のたうって逃げたが鞭の先はゆっくりと愛子の体を追った。いつしか部屋の片すみに追いつかれた愛子はもうろうとかすんだ意識の下で、まるで仏様を拝む恰好で手をすりあわせ、河野たちをおがんでいたのだ。河野たちの顔が見合され、奇妙な微笑がうかぶとやがて鞭の嵐がやんだ。それと同時に愛子はがっくりと前にくずおれた。

愛子は程なく気をとりなおした。部屋の片すみに寝かされ、池田フジから気付け薬をのまされていた。愛子は、思わず池田フジの手をにぎり、涙を流した。その時、河野が近づいてきた。小野も、例のプラスチックの鞭をもって近寄ってきた。愛子はそれを見ると、反射的に寝台をすりおち、後ずさった。ヒューッと威嚇のムチが小

野の手で宙に舞った。

アワ アワ アワ

と愛子は言葉にならない声を出して、しきりになにか訴えようとした。だがその訴えも無視された。小野の右手があらわな愛子のこの腕をつかむと愛子を寝台の上に引揚げたのだ。愛子は無意識的に無感覚的にされるようにした。

「スワレ」



と河野が命じた。愛子は坐った。その前に小野と河野は椅子をひきよせるとこしかけ、これからさも楽しい遊戯のはじまるような気持で愛子に話しかけた。

「どうですか、お嬢さん、第一の御馳走は気に入りましたか。フフちよつとばかしね。ほら涙を流していらつしやる。」

その河野の囁きともつかぬ言葉につられ、観念の色の蒼ざめた愛子の頬を涙がぬらした。

「いよいよ今日からねくすぐりや、かゆみと違つて基礎的美容体操の習得と、基礎的な苦痛訓練法の実習に入るんですからね。まず最初に、調教具としての電気ムチを紹介しとかねばと思つてね。ざつと件の如しというところですよ。どうです、もう一度このチヨコレートと、電気ムチをいただきますかね、ここでは電気ムチをチヨコレートというんですよ。命令を、素直にきかないときに与える調教具です。ウ、フ、フ、フ、フ、フ、」

河野はうすら笑を浮べ愛子の泪も意に解さない風だった。愛子の

泪は不思議と次から次に新しいのがわいてきた。しかし電気ムチときいた時、泪は急に涸れたように止った。

(そうか、そうだったのか)

恐怖ともつかぬ納得が放心の愛子の心の中によみがえった。

(どうりで痛みが、並大抵ではなかった)

とそう思った。それと同時にこれが序の口だとすると、これからさきはどのようなのだろう。と愛子は非常な恐怖が身体をつつんだ。

その恐怖を破るように河野の声が聞こえた。

「木村さん。苦痛というのを知ってますか。だいたい苦痛というのは言葉がわるいんでね、痛い!というのとだいぶちがうですよ。

苦しい! というのともちがうですよ。ちよつと辞書を見てみましょうかね。日本評論社の哲学辞典によると、苦痛は感覚として第一類皮膚感覚の中に入っています。複雑な意識現象の客観的方面も構成する最も単純な要素、知的な心的要素だそうです。ところがね

もつとくわしく勉強していくと苦痛はもっと重要な意義をもっているのですよ。なぜなら苦痛は快不快に直接関係があるからです。もともと皮膚感覚は、この苦痛の外に温度の変化を知るとか、触れた膚ざわりを知るとかいうのがあり、外からの刺激を知るといふ一連の働きがあるわけです。でそれを知るために苦痛の場合痛覚点(ペイン・スポット)があつて、それによつて苦痛を覚える。つまり一平方センチメートル内に約百五十ぐらいこの痛覚点があるというんです。触覚点の二倍から十倍、温度点の十ないし百倍の密度です。

もつともこの苦痛の感覚にはよくわからないところが多いんですがまあ、この理論でいけば棒や竹、ムチなどで体をなぐつて、みみず脹れをこしらえたり、骨を折ったりせずに相手に苦痛を与えることができる。つまり、電気や電波を痛点に働きかければよい……というわけなんです。どうです。こういうわけで電気ムチが生れたんです。これならいくら叩いても、あとが残りませんからねえ。どうで

す。ドイツのナチの拷問王だったしニトロハイムはナチ全盛時代に九十七種に及ぶ新たな拷問を考案したそうですがね。僕は断然彼が、被虐者の体を傷うのを嫌った、ということに一大共鳴を覚えるんでね。ところでいま述べたのは単純感情としての苦痛ですよ。これだけじゃ美容効果は少いんでね。美容効果を増すためにはこの単純感覚から発展して複雑な知識作用としての柔順な概念の習得や、複雑な情意作用としての快、不快感の調教にまで昇めねばなりませんからねえ、ひとつそれをこれから、はじめますか……」

河野は自分の言葉が愛子の胸の中におこさせるざわめきを計算しているかのように、一言一言ゆっくりと話すと、最後に断を下すようにいつて小野の方を見た。小野はいった。「すると、まず準備運動からですね。もう池田さんがちゃんとこの女につける苦痛感度測定装置もとりましたそうですよ。あとは美容体操に必要なサポーターをはめるだけです」

「じゃ、はじめよう」

河野は断を下した。すると池田アヤが相当強いゴム入り布でできたサポーターを両ひじ、両手首、両ひざ、両足くびにはめた。それから愛子はムチに追われるようにして研究室を出、地下二階の一番隅にある。特別美容道場へ案内された。と愛子はそこに一歩足をふみこんだ途端、アツといつて立棘んだ

見よ! そこには一人の少女が、脂汗を流して、跳躍訓練を受けていたのだ。

小野が口を開いた。

「木村さん、見覚えがあるでしょう。あのひと。断然素晴らしい肉体美だからね。あの人は四肢を素晴らしく発達させるため、毎日一時間ここに通ってくるのですよ。そう、思い出しましたか、貴女の美容訓練のお相手になった小桜さんです。いずれ貴女も、この跳躍訓練をやってもらいますからね。ゆっくりごらん下さい。」

小野はそういいながら、棒のように突立った愛子の横にきて、例の電気ムチで小桜美智代の体を指さしながら説明した。

「ほら、天井からバネが下っているでしょ。あのバネの中程に仕掛けがあつて、あの途中のボッチが天井の板にとどかないと手に、はめている皮手錠に電気が流れ、この電気ムチと同じ痛みが手首に走るわけですよ。それを起さないためにはうんと力を入れて足で床を蹴らねばならないわけです……」

(なるほど、そうされれば必死になる道理だワ)

愛子は汗水たらしてあえいでいるグランマー女優の小桜美智代に思わず同情を感じた。しかし彼女は自ら求めて毎日この苦痛訓練に通つていてのではないか！ それも自分の名声を売出すためとすればなんとという逞しい斗魂だろうか、木村愛子は呆然としていた。

全くグランマー女優、小桜美智代の体は、さながら、はねかえる人魚といつてよかつた。上半身は天井からぶら下つたばねに両手を真上にのぼして皮の手錠をはめられ、しかも両手をあわせてまるで長い一本の棒になつてぶら下つていた。それにたいし下半身はこれも両足首をゆわえられたままだ。そのような姿勢で両膝を前にまげて床を強くけると、体が立ったままの姿勢で垂直に上昇してゆく、それがやがて落ちてくる。またける。また上昇する。また落ちる。それをくりかえすだけだ。休むことを許されない。逃げ出すこともできない。正確に、しかも力強く、何度も、何度も、くりかえす以外にない。小桜美智代のブラジャー一枚ショーツ一枚の体から玉のような汗がしみ出て流れている。口にはもちろん精巧なサルグツワがはまっている。それでも時たま野性じみた声がもれるのは小野のいう電気ムチが作動しているからだろう。愛子はそれを見ただけで気が遠くなった。しかし、そんな気持は全く甘い感情に過ぎないことを愛子は忽ち思い知らされたのだ。というのは愛子のまず実施された準備運動としての歩行訓練によって、愛子はそれだけで完全に中

世紀の奴隷のようなみじめな気持にされてしまったから。

愛子はまず床より五十センチぐらい高くなった。丸い輪のリングの上に立たされた。このリングは巾も五十センチぐらいで電気のスイッチを入れると機械仕掛けで動くようになっていた。愛子はそこに追いあげられると、円の中央の太いパイプの柱から直角に出てきたパイプの一端に、とりつけたネジを例のプラスチックのサルグツワの前面の孔にさしこんで固定された。両手は邪魔にならないように背中にくくられたのはもちろんである。こうして準備がととのえられると小野は愛子から一メートルの間隔のところにもムチをかまえて立った。

河野がいった。

「さあ、スイッチを入れますよ。木村さん、最初歩いて下さい。台から落ちると死にますよ。小野君は歩く姿勢が悪かったら容赦なく叩いて下さい。最初は心棒を固定して台を回します。ヨーイ、ハジメ」

河野がそういつてスイッチを入れると台がゆっくり回りだした。愛子の体は当然台にのつていて後の方に運ばれようとしたが……口は心棒に固定されている。従つて自然愛子は台の回る速度と同じ速度で歩かねばならなかった。

「時速二・五キロ」

と河野がいった。愛子の普通歩く速度よりやや遅い速度だった。それでどうにか愛子はこの奇妙な速度でうまく調子をとって歩くことを覚えた。尻を軽く左右にふりながら歩くと歩きよいこともわかった。愛子は愛子のそんな奇妙な姿を眺める河野や小野、池田フジの侮蔑に満ちた視線を右側に感じながら、調子をとるのに一生懸命だった。

「五分後 時速五キロ」

と河野の声がした。その声にギクリとした途端、愛子は思わず足

がとちった。その途端、耳もとをかすめて小野の威嚇の電気ムチが通りすぎた。愛子はヒヤリと思わず皮のコルセットの下に冷汗が流れた。愛子はいつしか例の強制跳躍をやらせられていた小桜美智代が跳躍台からはずされ、助手の見知らぬ女と一緒に愛子のよろめく姿に見入っているのを知ってカッとなった。

「あら、あの人、木村さんとかいったわね。とっても美しい人なのよ」

と小桜美智代はその助手に語っていた。愛子はその声が聞くともなく耳に入ると、かすかな喜びに血が騒いだ。しかしそれは一瞬だった。

「時速 五キロ」

河野の声がした。愛子は急にピッチをあげねばならなくなった。

しかしまだスポーツで鍛えた愛子にとってはこのくらいの速さは歩くという形容で済まされる速度だった。しかしこんどは以前より真剣にならねばともすると遅れがちになり、プラスチックのサルゲツクを通じ心棒に体重を投げかけかかった。しかしそうすることはいかにも不自然であり、疲れが速いように思われた。その時、

「五分後、時速十キロ」



という河野の声がした。とっさに愛子は十キロですって！と心の中に反問した。時速十キロとすれば一万メートル六十分の速さだから、本年度日本選手権をとった男子一万メートルの林田選手の約半分の速度だ。しかしそれでも女子の身であれば、たっぷりかけらせられることは間違いない。愛子の心に絶望の霧が次第に濃くなっ

て覆っていった。しかもこの競技は止めることができない競技なのだ。

「時速十キロ」

いよいよ駆け足が始まった。ひよいひよい爪先きで蹴るようにして、ピッチをあわせていかないと、どうしても口の高さを固定されているのでうまく走れない。愛子のはかるやかに回転台をかけた。しかし、それは最初のこととで、すぐ体は疲れてきた。それにもかかわらず速度は機械のように正確なのだ。

「イチ、ニ、イチ、ニ」

いつしか小野が愛子の歩調に合わせて掛声をかけ、電気ムチをそのためにふって愛子を督促していた。愛子はそれだけに背すじがひえこむような感じがした。

「五分後時速十五キロ」

再び河野の声がした。五分後！まだ五分も走らされる。その上、速力がまだ速められる。走りながら愛子の顔に失望の色がありありと浮んだ。だが、それも一瞬、次第に速められるピッチに顔は紅潮して、愛子はかなりきついようだった。

「時速十五キロ」

無情な河野の声は容赦なくつづく、愛子は目先きがまっくらになるような感じた。時速十五キロといえばフルマラソンコースに直して二時間四十九分のタイムである。従って長時間走りつづけるのは男子でさえも可成り苦しい。まして愛子は女子だ。しかも不自由な姿で走らなければならない。愛子はもう心死だった。汗が玉のようになつて肌を流れてはねとび、胸が早鐘のように高鳴り、脇腹さえ痛くなつてきそうな感じがする。しかるに見物人たちはそんな哀れな犠牲者の姿をさも面白そうに眺めているのだ。名も知らない、小桜美智代と一緒に助手の女がフラッシュをたいて愛子を写した。その光が愛子の目の網膜に映した最後の光の様な感じが愛子にした。

愛子はいつしか口で台の上をひきずられるようにして走っていた。愛子はもう走るといふ感じが愛子自身になかったのだ。だがそれも束の間で、下の台の速度が俄に衰え、愛子の気持を再び正常な状態に保とうとするのだ。台がとまった。

「そのままの姿で休憩二十分」

と河野が命じた。愛子は肩であえぎながらプラスチックのサルグツワにはめられた心棒に口ですがっている。水が無性にのみたい。そういう気を知ってか知らずにか、河野は平気で愛子を台の上に立たせている。愛子という存在はここでは完全になぶりのものだ。愛子はそう思う。だがそれは間違いで愛子は意志力を持たない物質としてあつかわれてにすぎない。汗を流しても水ものまされなめさなのだ。一体これからどうなるのだろう……と愛子は思う。どうにもならないと知っても心配したがるのが人の常だ。愛子はふと孤独を感じた。人生の孤独というものは多勢の中にもあるものだということを知り、愛子ははじめて覚ったのだ。孤独の空しさ、寂しさ悲しさというものを、今更ながら痛感させられるというのも畢竟はこの社会という制度自体が多勢の作つたもので、個人の意志を得るものに外ならない……からなのだ。愛子はふとこれから耐えねばならない幾多の苦難な人生を思った。そんなものにくらべれば、こういった美容訓練の苦しみなど、まだましなものかもしれない。苦しまないより、苦しむ方がいいにはちがいないが、苦しみもバライエツイに富んで、盛沢山あれば、時間は瞬時に過ぎるものである。愛子は、それから気をとりのおして再び苦痛の連続に立ち向って行った。

(未完)

〔体験告白手記〕

「被虐の一日」

吉田 慈 一

△前号の梗概▽

被虐に憑かれた私は、はからずもKクラブという好伴侶を或る書店で発見しました。その雑誌を発見して三カ月位過ぎた頃、私は巻末の読者交歓欄でEなる女性の便りを見つけたのです。意を決して手紙を出した私に対して、E女は快く会ってくれたのです。そして彼女のアパートを訪れた私は、彼女から激しい鞭の洗礼を受けたのです。初めての経験でした。そして、私にとっては、今迄夢に描いていた憧れの女性からの虐待でした。昨日迄は全く見ず知らずの他人であった二人が、思うままに振舞うことの出来る女王様と惨じめ

な奴隷との立場になってしまったのです。

(一)

突然「ヒューッ」と風を切る音と共に激しい鞭の第一擲が尻の出っぱったところに見舞われました。覚悟はしていたものの「ウウッ」と悲鳴が口に出かかりました。続いて第二、第三の鞭が容赦なく「ピシリ、ピシリ」と腰や背に鳴り響きます。その痛烈な打撃は過去空想で感じていたいい加減な感覚とは余りにもかけ離れておりました。

最初のうちは、それでも悲鳴を洩すまいと必死に歯を喰いしばって泳いでいましたが、十回も続くと鞭の振り下される度に嫌でも動

物的なわめき声を出さずには居れなくなりました。そしてその激しい鞭打ちの苦悶の中から、あの期待し空想していた被虐の快感を味う余裕は完全に失われていたのです。若し両手足が縛りつけられていなかったとしたら恐らく最初の覚悟は御破算にして逃げ出た行ったかも知れません。幸か不幸か私の身体は身動き一つ出来なかったのです。

彼女は一鞭毎に罵倒する様な激しい掛声をかけてこれでもかと云わん許りに鞭を振り廻しております。背中、腰、尻、腿と舞い飛ぶ鞭の雨！

私はそれに対して、身もだえすら出来ぬ緊

縛の中に耐えていたのです。

その鋭い焼けつく様な痛みは、次第に重く
るしい鈍痛に変わって行きました。必死の叫喚
も次第にうめき声と変わり、意識もうろうとし
て半分現実の世界から遠ざかって行く様な気
が致しました。

三十分近くも続いたでしょうか、彼女は私
の悲惨な姿に多少でも哀れを催したのか、或
は彼女自身激しい運動に疲労を感じたのか、
漸く鞭振る手を中止して呉れました。

併し私の縄は未だ解かれません。全身のう
ずくような傷みに耐え乍ら、そのままの姿勢
でそっと顔だけ上げてみました。

彼女はグッタリと机に上体を凭せ乍ら血走
った眼で傷ついた私の身体を凝視していまし
た。髪は振り乱れて「ハアハア」いう彼
女の荒い息遣いだけが静かな室内に流れてお
りました。恐らく、この熱気を帯びた息遣い
も肉体的疲労からだけでなく異常な精神的興
奮から発散したものであったのでしょう。

幾らか全身の痛みも薄らいで来ました。

「お嬢様、どうか縄をゆるめて下さい。」
私は多少意識的ではありましたが、哀願す
るように云いました。彼女はそれに対して暫
くは何の反応も示しませんでした。やがて
無言の儘、立って縄をほどきにかかりました。

解かれても、暫くは手足が痺れてしまって、
元の恰好に戻りませんでした。私はホッと

して思わず大きな溜息をつきました。すると
それが彼女のかんにさわったものか、
「これで折檻が終ったと思ったたら大間違いだ
よ、もっともっと苦しめてやらなきゃ。」
と云うや私をそのまま正座させ、両腕を後

に回して高手小手に縛り上げ、更に幾重にも
胸と両腕に縄がギリギリ喰いこむ程強く縛り
つけました。そして正座のままの姿勢で別の
縄をもって太腿と足首を束ねて固く、手際よ
く縛り上げました。それでも彼女の御慈悲で



私の膝から腿のあたりにバスタオルを投げて覆ってくれました。緊縛感の点では先程より遙かに強烈でした。

彼女は暑くて耐らぬといった素振り、服を脱ぎ取り薄いスリッパ一枚になりました。そして私の坐らされている真前に椅子を運び、腰を下すと美味そうにジュースを喇叭飲みました。そして、その顔はこれからどんな方法でこの男を拷問にかけてやろうかと考えている様に見えるのでした。

私は身動きの出来ぬ身体で坐らされて居ながら彼女のむっちりとした肉づきのよい肢体を見つめてみると先程の激痛も忘れて、もっともっと強く責められたい衝動を感じるのでした。

彼女の充血した眼は如何なる残虐も敢てする女王の威厳を備えている様に私の眼には見えなかつた。

薄い下着を透して双つの乳房は隆々と恰も威圧するかのよう盛り上っていました。

四十五度に開かれた両脚からスリッパの蔭に白いスベスベとした大理石の様な太腿が覗いていました。ズロースのゴムが肌にピッタリと喰いこんでいる内股のあたりがちらつくと、私は思わず生唾を飲みこみました。私は白いフックラとしたこの二本の腿で自分の首を思いきり締めつけられたいと思いました。そうです。彼女の両股で首を締めつけられてそのまま死んでしまっても本望だとさえ思う

ようになりました。

こうした私の不逞なあこがれを彼女は私の表情のうちから見てとったのか、いきなり立上って私の首を抑えつけ、その上に馬乗りになり、足を前に伸べて宙に浮かせました。私は両肩でというよりも頸だけで彼女の重い全身を支えているのです。

うすい下穿を通して頸すじに感ずる彼女の肌の感触、両肩から私の顔を伝ってニョッキリ出ている二本の脚、更には彼女の熱気を帯びた全身から発散される香り高き汗ばんだ体臭、それらは私の官能を麻痺させてしまう程強い刺激でした。

併しその様な不自然な態勢はそう長くは続けることは出来ませんでした。首をそらすか、思いきり上体を前へかがめるかしなければ、私の頸の骨が折れてしまふようになったのです。私は耐りかねて後者の方を選んだのです。はずみを喰って彼女の身体は前につんのめりました。

瞬間、ハッとする間もなく彼女の罵声が飛んで参りました。

「やったわね、温和しくしていれば、いい氣になつて、反抗すればどんな目に会つか位は分っているだろうね」

「済みません、済みませんでした。」

私は繰返し頭を床につけるようにして謝つたのですが、彼女は心底から憤怒に燃えてい

る様子で、いきなり平手で私の両方の頬を交る交る十数回も力一杯殴りつけるのです。

「ガーン」と目が眩みそうになった私を、今度はその縄端を持って部屋隅まで一気に引きずって行きました。敷居の所まで来ると一旦足の縄だけをほどき、改めて両足首を束ねて縛り、その端を欄間の間にさしこんでグングン引っ張りました。私の身体は宙吊りになって行きます。それでも辛うじて後手に縛られた腕の肘と両肩と、そして後頭部だけが堅い敷居の上に残されました。これからどんな目に合わされるのか、私は七分の期待と三分の恐怖をもって彼女の出方を待っていたのです。

(二)

この場合、何よりも辛かったのは不自然な恰好に縛り上げられているということよりも浅間しい自分の姿が彼女の眼前にむき出しにされていることでした。この態勢に縛られていると自分自身の目にも否が応でも、自分の醜い恰好が映って来るのです。ただその耐え難い屈辱の念も、がんに搦めに縛られていては、どうしようもないのだという自棄的な観念でいくらか救われていたのです。若し何ら縛られることなしに、その様な恰好をしてると命令されたら、到底従うことは出来なかつたでしょうし、もし、無理にしたとしても、更に一層苛酷な精神的苦痛を味わねばならな

かったことでしょう。

もう私には、彼女とまともに視線を合わす勇氣はありませんでした。早く何でもいいから手を下して貰いたい氣持だったのです。併し実の所を云うと、もう鞭打たれることは沢山だと思っていました。第一これ以上同じような打擲が繰返されたら本当に私の身体がどうにかなってしまいそうな氣が致しました。よくこんな場合、雑誌などで見ると女の穿いているズロースを脱いで猿轡としてくわえさせたり、その排泄物を強制的に口の中に注ぎ込まれたりする所がありました。私は、その時フト自分も、そんな目に会わされたいなあと感じたのです。

何れにしても鞭の雨を全身に降らせるより彼女の若々しい、その肉体を誇示する様なやり方で私を凌辱し、屈従出来ない程、責められたいと憧れたのです。それに鞭打ちにしても若し彼女の方でも全裸になって振舞って呉れたら私の被虐感も倍加される様な氣がしました。勿論、そんなことは私自身の口から申せませんでした、彼女の方で、その氣になつて呉れないかなあ、とひそかに念じていたのです。

併し、私のこの贅沢で身動手な願いは彼女にそのままは通じませんでした。それどころか私の最も恐れていたあの鞭を手にして再び目の前に現れたのです。私は観念して潔く鞭

を受けようと眼を閉じました。

聊かの手加減もなく鞭は唸りを生じて私の汗ばんだ尻のあたりにまつわりついて来ました。一度中断されていた激痛が再び甦つてきたのです。私は苦悶に歪んだ顔で、かすかに眼を開いて見ますと、彼女の姿はのしかかるようにすぐ真上にありました。スリッパの裾をたくし上げてズロースの中に挟み込んでいます。下から見上げる私の眼には誇らしげに鞭を振り上げる彼女の勇しい姿は何倍かに拡大されて見えました。私は暫し鞭の苦痛も忘れて、恍惚としてその勇姿に目を見張りました。鞭を振る度に彼女の身動きするはりきった身体は私には一種神々しい許りに映ったのです。

それは今思い起しても、到底筆舌では表現し得ない、苦痛と快感の混合した凄しい許りの陶醉境でした。激しい容赦なき鞭の桎梏に氣も遠くならん許りに呻吟し乍らも、尚ゾクゾクする様な満足感が身体の内底から湧上つて来るのです。鞭の一打一打に口からついて出る悲鳴は地獄の責苦に喘ぐ亡者の苦悶の響きでもあり、感極つて迸り出る慟哭でもあったのです。

肉体の表面は耐え難き苦痛に慄え戦き、同時にその裏側では痺れる様な快感にうっとりとなつていたのです。私の肉体はこうした異常な官能の陶醉に火の如く燃えさかつており

ました。

何時の間にか私の口は彼女のねっとりした足の裏でピッタリとふさがれていました。もうその叫ぶ声もかすかなうめき声としかありません。彼女の方も私と同じように私の被虐の姿に悦に入つたのでしようか、益々猛り狂つて私の尻や腿のあたりを夢中に打ち続けるのでした。

三

そんな責苦が、どの位、続いたのでしようか。私には、その間の時間的観念が全然失われていましたから今もって、はっきりしたことは申し上げられないのですが、非常に長かった様な氣もするし、案外僅かな時間であつたのかも知れません。

ふと氣がついた時、ついに皮膚の一部が破れたらしく生ぬるいものが腰から背の方へ流れてくるのを感じたのです。その箇所が特別に痛いとは思いませんでしたが、急にそら恐ろしくなつて夢中で絶叫しました。

「やめて、やめて、やめて呉れ」

流石に彼女の方でも氣になつたか、やっと鞭を引っこめてくれました。

私は改めて全身に焼けつく様な疼痛を感じました。そして、その後意識を失つてしまつたわけではないのですが、心身にわたる異常な衝撃による疲労の為か、快い眠りに陥ってしまったのです。

再び眼を開いた時、傍には彼女の姿は見当らず、私は依然として元の儘の姿で縛られておりました。僅かではありましたが、(十分位だったらしい)その睡眠が自分自身を取り戻して呉れました。

未だ全身の痛みは消えていません。ビッシヨリかいた汗が冷え込んで、うすら寒い感じさえするのです。それと共に急に色々な事が心配になり出しました。先程の傷は一体どうなっただろうか、若し医者に行かねばならぬ様だったら何と云おうか、家の者に感づかれはしないだろうか、次から次へとそんな事が気になり出しました。

彼女はいつの間にかちゃんと衣服をつけて現れました。その顔には先程の狂った様な激しさは見られず、心なしか青ざめているようにさえ見えるのでした。そして黙って私の縄をほどきにかかりました。もうその時には、二人の関係は女王様と奴隷の立場から解放されていたのです。

「もう許して呉れるのですね」

彼女は微かに恥らしいさえ含んだ笑みを浮かべました。私の言葉が、いくらか皮肉に聞えたのかも知れません。

縄がとかれ、完全に解放されたものの、暫くは動く気になれませんでした。彼女は私の衣服と共に一杯のジュースを持って来て呉れました。

私はやっとの思いで立上って服を身につける時、見るともなしに洋ダンスの鏡に写った自分の無態な身体を見ました。腿から背にかけて全身が真赤に腫れ上り至る所にみみず腫れが出来て血が滲んでいました。縛られた痕は、くっきりと生々しい縄目の筋がつき、尻から背の方に一筋の血の流れた痕が浮きでておりました。傷口は幸い大した事は無い様でしたが、いつ迄も自分の姿を見ているのが恐ろしくなってきました。

私の着終るのを待ち構えていた様に彼女は「外に出ましょう」と促しました。

もう秋の日はすっかり落ちて、植込みのあたりは薄暗くなっていました。街路へ出て、私はなんととはなしにホッとしました。その爽やかな大気の感触が、肌に心地よく感ぜられました。

「痛かったでしょう、あんなに酷くやってしまつて、あきれた女だと思ひになりました」

?

「こちらこそ、意気地のない奴だと物足りなく思われなかったですか」

「もう、そのお話は止めにしましょう」

現実に帰った彼女には、あの場面を思い出すことはたまらない風でした。

駅が近づいて来ました。

「又今度、御都合のよい時、お邪魔していいですか」

「いいえ、矢張りあんな事はいけない事ですわ。今日のことは本当に夢だと思ってお忘れになって、もうお会いするのも止めた方がよいと思うの」

彼女の顔には動かし難い決意の色がありました。私とて決して今日のような事が健全な遊びであるとは思わない。併し折角めぐりあった好機を一回きりで捨ててしまうことは何としても惜しい気がしたのでした。色々と言葉を変えて懇願して喰下つてみましたが、効果

昔物語にあらわれた男責について

菅 良 太

泉鏡花の小説「由緒の女」の中に巷説として金沢地方に伝わる加賀騒動の結末が出ている。

これによると、浅尾の局が蛇責になると同じ頃、大槻内蔵之助が織田大炊守によつて全裸に剥かれ、荒木でつくった檻の中に

はありませんでした。逆に彼女の言葉に従う方が賢明だと思ふようになって、それではもう二度とお会いは致しますまい。今日のことはお互いに一夜の夢として忘れ去りましょうと約して別れたのです。

その日の体験は私にとって恐らく生れて最初の強烈な刺激だったのです。彼女の方でも同様に或はそれ以上に強い衝撃だったかも知れません。数日を経ても容易にその時の状況がちらついて頭から消え去りませんでした。彼女とても強く胸に焼けついて離れなかった事と思います。

それから一カ月程して、私は彼女との約束を敢然と振り捨てて、彼女のアパートを訪れました。よもや門前払いを喰わされることにはあるまいと思っておりましたが、意外にも彼女は、何日か前にそこを引払ってしまったいました。管理人に聞いても行先は分かりませんでした。それから程なくしてあのKクラブという雑誌も廃刊になったらしく本屋の店頭から姿を消して終ったのです。

私は今、この体験記を書終ってみますと、何故か最初の期待に反して、矢張り彼女とは永久に再会することはないだろうという予感が強まって来るのです。ただ、それとは別に新たな第二、第三の彼女が現われて来るのかならうかという漠とした予感がしてならないのです。

(了)

入れられる。その檻は上下にとがった釘がすき間なく植えつけてあるので、内蔵之助は立つ事もかがむ事も出来ず四ん這いになったままで苦しむ。人々はこの檻をかついで五箇山の豁谷の谷の上から吊して三日三晩苦しめたと書かれている。

又、池田屋騒動の発端になる勤皇志士古高俊太郎が新選組に捕えられての拷問も酷烈なものであるから紹介しておく。全裸逆吊にした上、その足裏に釘をうち蠟燭を立てた。又小柄で内股を突く等武士としての恥辱を加味した拷問である。又、黒田騒動に於ける紅陽上人の鉛熱湯責も凄惨なもので、遅い美男僧が全裸にされ背を断割られ鉛の熱湯を注がれる光景は一幅の責面である。

瀬川如泉の「与話情浮名横櫛」の木更津の赤間別荘の場も、現在は与三郎が赤間の乾分に両手を押えられる所で幕なのでつまらないが、原作によると赤間と乾分大勢の前に緊縛された与三郎が引据えられ、酒の肴に一寸だめしに遭う場面がある。更に顔に酒を注ぎかけたりして罵り物にする場面があるが、あれなど実際は姦通の仕置として全裸にして松の木に縛り上げ、手足、顔胸から内股に至るまで、なます斬りにしたものらしいのだが、そのような記事がどの物語にもないのが残念である。

幡随院長兵衛の湯殿の殺しも芝居では、沢瀉の水野家の浴衣か何か着ているが本当は全裸であつたらしく、素手の処を水野十

郎左エ門や近藤登之助のために斬られる場面は、きつと惨美を極めたものだろうと想像される。

長篠城の使者としての鳥居強右エ門の磔も戦国の物語としては面白いもので、水中をぐぐって来た直後なので襦一本という姿の逆磔は美事だったでしょう。

磔は、江戸時代には、女子のものは十字男子のものは股を開いた形の大の字であるのも興味あるもので、男子には苛烈で、女子には多少いたわりの気持があつたのでしよう。

石川五右エ門の釜ゆでは全裸で行われたらしく西鶴の「本朝二十不孝」の挿画には全裸でゆでられている図がある。日露戦後の時に軍事探偵の一人であつた鐘崎三郎が捕えられて全裸で炮烙の刑という油を引いた鉄板の上にのせられて火で焼かれるという最期を講談で聞いたことがあるが、これも男の責として美事なものといえる。

台湾の生蕃征伐の時に捕虜になった兵士が蕃社につれてゆかれ、全身に花の刺青を施されたという話を子供の頃聞いた覚えがあるが、今時太平洋戦争でも支那、又は南方で捕虜になった将兵に対する、拷問や刑罰についての資料は相当に多く、見当り次第集めているが、淫虐を極めたものが案外あり、生還して性的不能になったものや帰還の船中で不具の身を恥じて自殺したものもあつたことが散見している。

十三人目の奴隸 (二)

夢 原 狂 介

悪魔の囚われ人、本当にそうです。私とお嬢さんとは、ファッション・モデルだなんて、うまく欺まされて、こんな人買いの為に捕えられてしまったのです。

そして私達は今、彼等の為にセリ売りにされようとしているのです。番号を書いた札を胸にぶら下げられ犬の首輪のようなものを頸にはめられた私達は頸と頸とを鎖で繋ぎあわされてしまいました。

「お前達は知らねえから教えてやろう。ここは若い女を御所望の旦那方に、お前さんのような美しい人をお譲りする所なんだよ。相手の旦那方は皆、指折りのお金持だ。買って貰ったその日から栄耀栄華は望みのままだ。」

何という暴言、そして女性を侮辱した言葉でしょう。

「お前達は主人と召使だから、一緒に買って貰った方が嬉しいだろう。セットで幾らとね、もうすぐお前達の番が廻ってくるが、羅台

の上でおとなしくしないと、これが飛んで行くんだぜ」

と黒光りのした革の鞭を目の先に突きつけるのです。

かつて私は、お嬢さんのお供で映画を観に行きました。其の時の映画は洋画で、日本で云うならあちらの時代劇です。その中で、海賊に囚われた沢山の人が、奴隸市場で競売されてゆくシーンがありました。その時、お嬢さんも私も、昔はあのような残酷な事があったのかも知れない。けれども、あれは外国の事で日本の出来事ではないのだ、たとえ、あるとしてもお芝居か小説の世界だけのことだ。それに日本は人身売買なんて事は法律で禁止されている筈だ、と云った表面的な考え方に安心すると云うよりも、心に留めていなかったのです。しかし、今にして思えば、悪魔は当時すでに一年後の私達の運命を予言していたのでしよう。ここで売られてしまえば私達は映画のように永久に鞭打たれて暮さねばならない女奴隸に

なるのです。どうして二人共、こんな悪い星の下に生れたのでしょうか。いくら日本が敗れたからといって、こんなひどい世界が実在していたのかと思うと、目先が真暗になったような気がしました。

その時、ベルの低い音が聞えてきました。親方はこれを聞くと、さっと立ち上って鞭を手にして鎖を握んで、私達をぐんぐん引張って行きました。廊下を通り階段を降りて行くのですが何分、後手に縛られているのと、鎖の重さが頸にかかってくるので少しでも軽くしようと、自然と前屈みになるのです。そのために頸にかかっている札が胸を離れて、歩きたびにパタンパタンと胸板を打つのです。ああ、この音が私達の競売されるのを促すように、耳に響くではありませんか。降りて行く階段の一つ一つが、奴隷にされる物差しが目盛りのようにも感じました。時折お嬢さんが、つまづいて倒れかかりそうになさるのを見ながらも、どうしようにもありません、唯わずかに、私の体全体で以て支えてあげるのが精一杯の有様です。私と違って、荒仕事一つなされたことのないお嬢さんが、こんな酷い取扱いをお受けになって、さぞ御無念でしょうと考えると、知らず知らずに泣けてくるのです。その泣顔を又お嬢さんが御覧になって、私を慰めるかのように首を振って何かおっしゃるようです。

こうして主従二人は慰め合いながら、分厚いカーテンが下っている前に曳かれて行きました。立止る暇もなくカーテンが左右に引かれ、同時に二人はドンと背中を突かれて、よろめきながら二、三步前進しました。そしてふと前方を見ますと、学校等にある教壇位の高さの台があって、その台から三メートルばかり離れた処に簡単な木柵が立ててあります。その柵の向うには、およそ三十人ばかりの人達が皆、袋のような頭巾をスッポリと頭から冠っているのです。どの頭巾にも眼にあたる処だけ孔があいていて、鋭い眼つきで犠牲の私達を凝視しています。買われる奴隷の私達には、買う男の顔を見ることは出来ない。それなのに買う男達は、自分の顔を見られず

に相手を得心のゆくまで見詰めることが出来る。どんな買手であるかも判らずに、恥しい姿を晒さねばならない苦痛と侮辱感が、交々私の心を痛めつけるのでした。

私は自分の不明を今更ながら恥しく思いました。そして慌てて視線を外したとき、これは又、何という無惨な光景でしょう。この部屋は片隅に洋装、或は長襦袢姿などで三人の同性が、火鉢も欲しい十一月の末だというのに、二つの乳房も露わに双肌脱ぎに剥かれたまま、買手の方に向かされて椅子に縛りつけられているのです。そして、その人達にもやはり私達と同じ狼轡を嵌められて、胸にも木札が下っていました。同性達もこの屈辱に顔をあげている人はありません。光線の具合でよく判りませんが、みな美しい人達でした。洋装の一人は、色は余り白い方ではありませんが、そのお乳の見事なことは三人の中で一番でした。ピンと張り出した乳房の片方に縄が喰入って、奇妙な形になっています。余程、痛いのか眉を八の字に寄せて、折々、頸を横に振じりながら、目をあいたり閉じたりしているのです。長襦袢の人は玄人とも若奥さまとも見えるのですが無惨にも半つぶれになった島田の髪が、やや瘡形の青白い肩から胸へかけて、べっとりと絡みつき凄ううでした。この人も苦しいのか、肩で息をする毎に肩胛骨が現われたり消えたりして、乳房の間が膨れたり窪んだりしているのが見えるのです。残る一人は、小麦色の肌をした中肉の女学生のように見えますが、それでも發育は一人前の女性でした。この人は余程抵抗したのか、肩先から脇腹にかけて赤黒い縞模様が二本ばかり、くっきりと入っていました。多分鞭で打たれた痕だろうと思います。それ位ですから、この人だけは首縄をかけられて、その端を椅子の後へ引付けて縛ってありましたので、顔は斜に天井を向いていました。そして、その人は時々かっと思いたかと思うと又、つぶつぶしてしまうのです。そうして苦しむたびに、そり返った胸の上で二つの乳房がブルブルと揺れるので

す。それは全く生地獄です。私はこの様子を見て生きた心持もなく震えるのでした。

遂に私達の肉体を羅にかけられるときがやって来ました。私達二人は情容赦なく首の鎖を引っぱられ前に出されました。と同時に、買手の方に「わあっ」と云う声があちらこちらからあがったので、



私達は恥しきの余り台の上にへなへなと崩れてしまいました。
「やい、立つんだ！」

と鞭を鳴しながら鎖を強く引っばるので仕方なく立上りましたが足許がふらつき五体がガタガタ震え、ともすれば倒れそうになるのを堪えながら立っているのは、余程の努力が要りました。

「皆さま、大変お待たせしまして相済みません。皆さまの御支援によりまして、盛況裡にこの会も終ろうとして居ります。つきましては、当クラブ秘蔵のこの女性、こちらは実業家の令嬢で当年とって十九才、こちらは令嬢のおそば付きで当年二十才、御覧の通り実に美しい婦人でございます。」

親方は部下の男と共に、私達の顔を買手の方に捻じ向けながら、しやべり捲るです。

「お見かけの通り、二人は世間の汚れを知らない全く純真な女性であります。つきましては、この二人に限り今回は特に何卒セットでお買上げ下さるようお願い致します。そのため、羅はセットのお値段であることを御承知下さるよう……」

すると買手の中から太い声がして
「判った、早くやれ！」

「切売りをしろ、切売りを！」

この声を聞いて、私はこれは大変だ。別々の人に買われてしまえば、自分はいいとしても、それではお嬢さんがどんなにお悲しみになるか判らない。そして、たとえ私のようなものでもお側に居れば又、お慰めすることも出来るが、別れ別れになってはどうすることも出来ない。やはりどんな苦しくとも、お嬢さんと一緒に買って貰う方がまだしもだ。それに一緒に居れば、万一お嬢さんを救えるかも知れないと、ちょっと英雄気取りにもなってみるのでした。とにかく、切売りだけは何としてでも拒まねばと、私は狼狽の不自由な口ながら、必死になって親方に哀願するのですが、なかなか相手に通じないので私の気持は堪りませんでした。

「えいっ、やかましい、静かにしてろ！」

と私は頬を大きな手でパシリと打たれました。すると又、誰かが「そうだ、切売りしろよ、切売り切売り」

私はこの声の終るや否や、親方に向って烈しく首を左右に振りしました。親方も私の意志表示がやっと気がついたのか、

「折角の御希望ではございますが、先刻も申上げたように今回は是非セツトでお願い致します。御希望にそえず誠に残念だと存じますが、この理合せは次回におきましてさせて戴きます。今回は何卒セツトでお願い致します」

「どうしても駄目か、仕方がねえ」

私は、ほっとした思いです。さあ、これで二人はもう離れることはない。これからは、お嬢さんを慰め励ましたながら逃げる機会を狙うのだ、と固く心に誓いました。

やがて親方は

「お待ち兼ねの皆様、只今より始めることに致します」

と云って、買手に向って軽く手を挙げると、部下の『秀』と『しやも』が私達の背後へ廻りました。その時、買手のどよめきも静まっ

て部屋はシーンとしていました。親方は鞭で台をピシリッとして「先ず、今日の最終を飾りますのは、このセツトの女性でありまして、教育は申すまでもなく、お見かけ通りの天下一品、お値段は御晶氣に対する感謝の意味を持ちまして、お立会の旦那方からつけて頂きやしよう。さあ、セツトで幾ら！ ねえ、御覧の通り美しいことはこの上なし」

と云いながら、親方は二人の男に頸で合図をしました。すると二人は、いきなり私達の肩へ手をかけたと思った瞬間、さっと上衣とジューミーズを剥かれてしまったのです。その途端に冷たい部屋の空気が、ひんやりと私の肌に当るのを感じました、買手の方は薄暗いの反して、私達の前には昼も欺くばかりの強い電灯が二つも灯っているのです。その光線の下で半裸に剥かれた二人は、羞恥と屈辱に戦くばかりでした。隠くそうにも手の自由が利かず、買手の方に背を向けようとしても、男にガツチリと肩先を掴まれているためにどうにもなりません。どんなに恥しくとも又、どんなに情なく思っても、私達は買手がきまるまでは、いつまでもこの浅間しい裸形を衆目に晒していなければなりません。

「さあ、皆様、如何です！ このおっぱいの素晴らしいことはどうです」

親方はお嬢さんのお乳をぎゅっと掴んでいじって見せるのです。お嬢さんは「ウムムウ」と呻いて、お顔を烈しく動かされました。すると親方は今度は、お嬢さんの喉を拇指と人差指でつまむようにして

「へムムム、この柔かい喉の肌ざわりは格別ですぜ」

お嬢さんは首を振り動かして拒んでいられますが、無駄な努力でした。

「それにこの丸い肩から、おっぱいにかけての肉附は、何とも云えない魅力がありますよ。若さで張り切っている証拠に、ほうら御覧

よ、この通り」

と云いながら、お嬢さんの胸をつまんで離して見るのです。まるで子供が、張切ったゴム紐をブンブンと弾くような手つきです。映画で見た奴隷市場のシーンだって、こんな残酷なことをしなかったのに、この男達は全く鬼以上だと思いました。お嬢さんは、目に涙を一杯ためて、悶えていらっしやいました。

「さあ、如何です。御希望の方はありませんか、今日を外せば又と再びこんな良いお買物はございませんよ」

すると買手の中から

「五十！ 五十万」

と云う声が起りました。すると親方は

「御冗談おっしゃっては困ります。犬一匹買っても、五十万や六十万はするんです。このお嬢さんの半分にも足りねえや」

と、私の傍に来て、

「さあ、このお嬢さんはどうだ。この女には又、いいところがあるんだ。論より証拠」

と云って、鞭の元の方を私の腋下へぐいと差込んで、ぎゅうと開くのです。その痛いこと、私は思わず「ウウウ」と呻き声をあげました。

「多からず少なからず、まさに頃合いのアクセサリーです。それから旦那方も御承知の通り最近の流行は、あちら好みの体臭とやら成程、ちよいとおつなものでござんすよ」

私は、この親方と云う男は何んという人非人かと、恥しさと怒りに胸が燃えあがる思いでした。この時、誰かが

「六十」

と叫びました。

「旦那、駄目ですよ。そんなに小刻みに来ないで、パッと大きくおつけになる方はございませんか」

今度は

「七十」

と声がしました。

「旦那、こんな女神のようなお嬢さんを、そんなべらぼうな値段で売っちゃ、あつしら商売の冥利に尽きるといふものだ」

と云いながら、今度はお嬢さんの方へ行つて、耳の附根まで真赤にして俯向いていらっしやるお嬢さんの可愛いお胸を、ピチャピチャ叩きながら、

「どうだ、よく見るんだ。これがまことの生女神だ。この軟い両腕それに……」

と云いながら、上衣をぐいと押しひろげ

「この腹のあたりは断然いいだろう。臍が早く買つて頂戴と笑っているよ」

すると、突然

「よしきた、九十！ 九十！」

と叫んで立上った買手がありました。

「折角だが、まだまだ遠い。そんなけつちなことをおっしゃらずに気前のいいところをお願いしたいんだ。今日の旦那方は胆がこまいや。よろしい、それでは手前の方から申上げて閉会といたしやしよう」

「百五十！ 百五十！」

客席の買手達は一齊に

「うわあっ」

と云って、どよめきました。すると中程に坐っていた八番の頭巾がサツと立って

「買った！ 買ったよ！」

再び客席が騒々しくなつて、一齊に八番を見るのです。私達の運命はこれで決りました。八番の男に買われたのです。この先どんな

ことが私達を待っているのか、何れにしても私達二人は、今日から八番の奴隷です。人間と永久に別れねばならない日です。私もお嬢さんも「わっ」と舞台上に泣き崩れました。

やがて八番頭巾は、手の切れるような札束を親方に渡しています。思えば、このような運命に墜ちたのも、あのお札というものが、お家から次第に減ったからで、そのためにお嬢さんも収入のいいフアッジョン・モデルを御希望なさったのが、そもその始まりだ。旦那さまさえいらっしやったら、こんなことにもならなかっただろうにと、愚痴やら口惜しさで断腸の思いでした。

やがて、八番頭巾が云うのです。

「お前達、逃げ出せると思うなら逃げてもいいんだよ。しかし失敗した後は、どのような罰が待っているか、と云うことをよく考えて置くことが肝心だね」

「逃げたりなんか絶対しませんわ」

「そうかい、じゃあ、そういうことにしておこう」

と云って部屋を出て行きました。あの八番頭巾が女であることは競売された時に判っていたのですが、どうしても頭巾を冠っているのか、私達には合点がいかないのです。お嬢さんは、鎖のついた痛々しい足をくの字に曲げて、疲労とそれに少しは楽になった心持で、長いまつげをピッタリ合せて、スヤスヤと眠っていらっしやいました。あたりまえなら、柔い夜具に包まれて何不自由なくまどらかな夢でも見ていらっしやるのに、今は冷い鎖につながれたまま、寒い部屋で着のみのままの姿で眠らねばならない御不運を、まのあたりに見て、胸が張り裂ける思いです。そのうちに私も疲れが出たのか、うつらうつらとして一時間位、経った時です。廊下がざわめく音に、ハッと眼を覚ましたのです。廊下には八番の声に入り混って、聞き慣れない男の声がします。

「なあに、大丈夫ですよ。上に藁を積上げて置けばね」

すると八番の声で

「そうかい、じゃ一つ早いとこで、しかし充分用心してね」
間もなく八番が這入って来ました。

「お前達、しばらく窮屈だが我慢するんだよ」

と云って『秀』と二人でお嬢さんと私を後手に縛って、その縄尻を足の鎖に結びつけました。そしてタオルを鼻に押当てられました。すると、なんだか甘ったるい刺すような香りがしました。その途端ハット想出しました。それは、ドレス会社の庭園で嗅がされた、あれと同じものです。麻薬です。けれども私は眠るものかと頑張りましたが、次第に力が挫けていくようになる気持と、頭に何か厚い布でも冠ったような重苦しい気持がして来て堪りません。そのうちに体全体が物凄いスピードでどこかへ吸寄せられていくような感じがしたかと思うと、何も判らなくなりました。

それから何時間位、経ったか判りませんが、ふと気がついた時、私達は、夢かと思うほど素晴らしいベッドに、寝かされていました。眼を射るような原色の緞子に、金銀の縁取りを施した、まるで、お伽噺の女王様が着るような夜具です。そして枕元には、天国を思わせるような香気が豪華な香炉から、ゆらゆらと私達を楽しませるかのようになり立ち昇っています。部屋の広さは二十畳程ですが、調度の立派なことには私は勿論、お嬢さんもビックリしていらっしやいました。クリーム色の生地、緑と朱と茶の三色で古代の人物を織出した高級織物で、周囲は金糸で波模様を浮かした壁飾りが、四方の壁にかかっているのです。そして天井は白一色ですが、浮彫りのような式で、女神を取囲むエンゼル達が色んな楽器を吹奏している天国とでもいったような、のどかな図柄でした。そして、その中央から下っているシャンデリヤが間接照明でしたから、柔い光りが室内の調度を夢のように浮立たせて、全く話に聞く天国か、それともアラビヤナイトに出てくる宮殿とは、こんなところかと思いました。余

りにもかけ離れた現実二人はポーツとしていましたが、ようやく自分に還った私は

「ねえ、お嬢さん、これは一体どうしたんでございましょう」

「私達をこんな美しい部屋に寝かせて置くなんて、どう考えても変よ」「そうですわ。地獄から一足飛びに天国へ来るなんて、どうも変ですね。油断できないですわ」

すると、この時、ドアがスーッと開いて、一人の女が這入って来ました。年頃は十八、九でしょうか。小柄で丸顔なので、その人を子供っぽく見せます。ツーピースに作ったドレスがよく似合っています。やがてその人は、

「どうぞ、召し上って」

と香りの高い珈琲を卓上に置いたとき、私は「あっ」と心で叫びました。やさしい手首には頑丈な鎖が、噛むように嵌まっているではありませんか。その人も、さすがに恥しかったのでしよう。さっと顔を赤くして悲痛な表情でした。でも、あきらめたように、お盆を待った手をちよっと前にしたはずみに、胸の辺りからジャラジャラと音を立てて鎖がすべり出しました。丁度、

外国映画等に出てくる奴隷のそれと同じでした。この室内は、まるでローマ帝国の昔を偲ぶ活人画のようです。昭和の世に、お芝居で



もないのに、随分と変わった生活をしている人もあるものだ、と、呆れました。やがて、その人は

「一時間ばかり後で、あなた方をお迎えに参りますから、案内人と御一緒に主人の部屋までお出で下さいますように……それまでどうぞ御自由に御くつろぎ下さいませ」

と云って、私達の前に跪いて心持ち首を伸すような恰好をしましたが、そのまま立って静かに出て行きました。この時、私達はその人の後姿を見て、そのドレスの風変わりなデザインに目を惹きました。それは背中中の処の生地が、フックで止めてあるようです。そして、そのフックの線が腰の左脇から真直に上に伸びて、肩の辺りで四十センチ位、鍵形に右折して、そこから又、下へ腰の右脇まで伸びているのです。故にこのフックを全部外すと、背中にあたる処の生地が下に落ちて恰かも、お尻蒲団をしているような形になるのです。何故こんな形に仕立ててあるのだろう、あんな処から着脱する筈もないし、それとも暑い時には、あそこを開けておくのかしら……と思いましたが、何れにしても変ったドレスでした。しかし襷を使ったり、巧みに脇筋をミシンしてあるので、殆んど外観的には判りません。私達はドレッシングに或程度の関心を持っていたので、氣付いた位です。それにしても、今の今まで畜生のような扱いを受けていた私達が、現在はこの家のお客さまのような待遇をされているので、嬉しいことは嬉しいですが、考えれば考えるほど不思議でもあります。薄気味悪くもありました。私達を麻酔で眠らせ、ここへ運び込んだことが既に普通ではありません。そんな手段で運んだ私達を、賓客扱いにするのに何故でしょう。私達が部屋の立派さにビックリするその顔を見たいためでしょうか。それなら何も百五十万円の大金をかけなくとも驚かせる筈なのに、何れにしても私達が必要であることだけは間違いない事実です。それなら、その必要なこととはどんなことか。それからそれへと考えているうちに、一時間位経ったと思われる頃、案内の男が這入って来ました。私は、その途端に何んだか胸がドキドキしました。お嬢さんとしても、おそらく私と同じ気持でしょう。二人は無言でちよつと顔を見合せて、案内人の後について部屋を出ました。さて、この案内人の服装が又、変っているのです。足首の処でキュッと結えたダブルの白いズボンを

穿いた上から、振袖のように長い袖のついた真紅の繻絹のようなものをお尻のあたりまで長く着込んで、その上から黒地に錦糸で縫とりをした十センチ位の巾の帯を締めているのです。一体、何処の国の服装でしょうか。歐洲でなし、中華でなし、勿論、日本でもなく、しいて云うなら、お伽噺に出てくる人物のような服装です。その男が紫色のカーペットを踏みしめて、長い廊下を静かな足取りで進んで行く有様は、全く夢のようです。バックダットの映画に、これと似たシーンがよく出ます。私達は今、その人物となつて登場しているような錯覚を起すのです。そうして私達は或る部屋の前まで来ると案内人は振返って、

「ここで、ちよつとお待ち下さい」

と云ってドアを開けて入って行きましたが、間もなく再び出て来ました。

「どうぞ、こちらへ」

部屋の中へ入って見ると、正面に大きなカーテンが劇場の緞帳のように下っているだけで、何んの飾りもないがらんとした部屋でした。その部屋を通過して次の部屋のドアが開かれると、その部屋には唐草模様のあるカーテンが、八文字に分けられて下っているのです。お嬢さんの服装がシヨウに出られたままの姿なので、この部屋に大変よくマッチしています。お嬢さんは丁度、御殿のお姫さまのようで、私は侍女であるような気持が起きますのです。案内人はソファを指差しながら

「どうぞ、おかけになつてお待ち下さい。御主人はすぐ参りますから……」

中央に大きな円卓があつて、壁際にある花瓶台には、松に南天をあしらった和風の盛花が九谷焼の大花瓶に活けられてありました。そうかと思うと、支那によく棲んでいる鹿に似た『ノロ』という動物の剥製の首が枝のような角をつけたまま壁にかけてあつたりし

て、退屈する暇はありませんでした。しばらくして、カーテンがゆらぐと同時に主人が現われました。頭髪をバックにした四十恰好の一見紳士タイプの男でした。顔といっても別段これと云った特徴はなく平凡でしたが、唯、眼光が何となく凄く感じる位のことです。パジャマ風の上衣を無雑作に着込んで、部屋に入るなり。

「待たせましたね。私がこの邸の主人です。疲れたでしょうから、

街で見つけたフェチシズム (2)

とやま・かづひこ

ロマンチック・マゾヒズム

社用で毎週少くとも三回は訪問する日本橋馬喰町のSという洋品問屋は、私にとっては大切なお得意。この社長室につとめる秘書嬢のKさんは、ことし二十二の美しいお嬢さんで社長の大的お気に入りだが、まだヴァージンというわけで、五十人からいる社員たちの、あこがれのまとのひとである。

土一升金一升の土地柄、せまい社内を上手に設計して、社長室への渡り廊下の真下

が、応接室という、このへんのオフィスにはよくある構造である。

オフィスとはいえ、本社の名にそむく木造二階建、問題はその渡り廊下で、うすい板をぶつけたベカベカの廊下のこととて、ここを歩くその脚のひびきは、そのまま下の応接室へ伝わって、コツコツと通る足音はそのまま、音波となって下にいる者の頭上にかなりひどくひびいてくる。

朝少し早目に訪問したために、その廊下の下の応接間で社長の出勤を待たされていた私はすばらしいアイデアに、胸をドキン

楽にして話をしましょう」

私は、この意外な言葉に面喰らったかたちです。どんな横柄な、そしてどんな恐ろしい人間かと思っていました。見ることも聞くことも皆、予想を裏切って唯、ボンヤリとしていました。

「使の者が、どんなお扱いをしたか知りませんが、主人大事の一心から無意識に手荒な行動をとったとすれば、私から改めてお詫び致します。なぜなら、あなた達は私の賓客なんです。ですから、来賓を虐待するのは不合理ですからね。少くともお客さまである間はね！」

と、語尾を強く云うところが少し変だとは思いますが、差当っての感じは決して悪い気持はしないのです。

「私は日本を離れて、他国で散々に苦勞をして来たんです。しかし、お蔭様で衣食に不自由はなく、その上、小さなホテルなら顔負けする位の邸を建てる事が出来ました。けれども、この立派な建築物も所詮は、私以外の人を驚かし又、喜ばす以外に何もものもないことに気付きました。この邸が如何に立派であっても、それは『のみ』と『かな』による人工の所産で工夫と技術次第では、もっともっと立派なものが出来る筈だと信じています。要は、立派であるなしは人間の努力の程度如何によって定まるもので、努力と作品は相対性範囲から一步も出られない筈です。それに比べると人間は絶対的です。唯、造化の神の御思召によって生れ出てくるほか仕方がないので。これで、工芸品に比べて人体が

ときめかされた。

応接室の窓から何げなく外をうかがううちに、来た！来た！社長より一足先にK嬢が社へ入って来た。

そこで、すかさず私は、ソファの上に立ち自分の頭を応接室の天井にピタリと密着させてK嬢のお通りを待ったのだった。

待つ間もあらず、私の計算通りK嬢はコツコツとハイヒールをひびかせて、私の頭上を踏みつけるように、その渡り廊下を渡って社長室へ入って行った。

さすがに、薄い天井板はK嬢の踏み歩みのままに下へしなな、私の頭に快よくK嬢の身体の重みをそのままつたえてくれたのである。御本人の知らぬ間に、その御本人の足に踏まれる(?)快よきは、マゾヒストたる私にとっては、すばらしいものだった。

直接けられたり、踏まれたりする快よきを私は知らぬでもないが、このように、間接に思うさま(御本人は全然自覚がないので)踏んでくれるスリルは、たとえていえば、ロマンティックマゾヒズム。ほんのりと、やわらかに、ムードに包まれたマゾヒズムと、いえばいえるのではあるまいか。

電話ボックスにて

急ぎの連絡があつて、公衆電話を利用し

ようとした私は、ボックスの中に先客を見かけたので、しばらく待つことにした。

先客は中年の女性。何か商売人といったくだけた感じで横顔がすばらしく美しい。

それが、長い電話なのだ。

イライラと、ピース三本を煙にする頃ようやく話が終り、その先客はボックスから出ていった。

ボックスのなかには、彼女の残して行った移り香がただよい、それだけでも快よい気分を誘ってくれるのだが、それよりモット大きな置きみやげが、私をたのしませてくれた。

十七八分も握りつづけられた受話器は、彼女の手の汗にしめり、送話口は、美しいツバキのためであろう、濡れて、おそらく甘くかくわしいであろう彼女の息が、そのまま水滴となつて取り残されているのである。

しばし呆然と、急ぎの用事を忘れて、その受話器をにぎりしめた私だった。

わすれもの

これは銀座で拾った話。

喫茶店に入った私は例により、トイレットの入口近く陣取った。私は、美しいひとの御入来を待ちつつコーヒーをすすっていた。

如何に貴いものであるかが、お判りだと思いますが」

こう云つて、私達の顔を見詰めるのです。

私は内心、この主人の云うことが自分の考え方とほぼ一致していますので、コクリと肯きました。主人は我意を得たと云う風な表情で更に話すのです。

「そこで、人工の美を味わい尽した私としては、最早、自然の美以外に自分を満足させてくれるものはないと考えたのです。その中でも男性である私は、美しい婦人の方こそ自然の極致だと信じているのです。日本も敗戦の結果、社会の一般も女性の美しさに関心をもち出したようです。しかし私に云わせればこれとお座なりの批判に過ぎません。もっと深く掘り下げて、女性のみが持つ特異な美を求めなくては駄目だと思ふのです。貴女方はどう思いますか？」

主人は煙草を喫いつけて、じつと私達を見比べるのです。すると、お嬢さんが

「お話は大体、御尤だと思ひますが、只今の特異な美と申しますと……」

主人は、待っていましたと云わんばかりの顔で

「特異な美と云いますとね、たとえば貴女方が今こうして居られる時は普通の美しさ、即ち平常の静かな美しさです。処が人間には喜怒哀楽がありますね。そこで、それ等の感情

ものの二十分もした頃、キモノ姿の、どこやらのキヤパレーのホステスらしい女性が、トイレに姿を消した。私は、このチャンスを掴むことにしたのだ。

やがて、水の音をあとに出て来た彼女と入れ代りに、私はトイレットに入った。

何気なく、ふつうの用事の顔をして入ったことは申すまでもあるまい。

ドアに鍵をかければ、あとは何者にもおかしな私だけの別天地。

美しい女性が、流して行った水の流れはまだつづいていたが、そこに、或る物体が水流に取残されて、落し穴の中へ落ちのこされているのを発見した。

小指ほどの太さのそれは、彼女の忘れもの(?) 私という、『女の秘密を語る食欲のはてのもの』である。

鍵をかけた密室のなかで、彼女の残して行ったものに、私が、どんな行為に及んだかは読者の御推察にまかせておこう。

ステージからのプレゼント

浅草六区のF座といえば、ストリップの小屋としては全都に名のひびいたところ。

ここは、いつ行っても混雑でも又有名だ。十一月十七日(日)雨。この日私は、このF座の舞台真下で開幕を待っていた。気の短かい見物の一人が、待ち切れず、

下ろされた幕を下からまくり上げてのぞいたのへ、私もさそい込まれたように、首をつっ込んだ、舞台は丁度次のヌードショウの開幕寸前、と、私の目の前へツカツカと近よったおどり子の一人が、

(ネエ、すみません、すててちょうだい)

小声と共に、小さな紙の丸めたのをよこしたものである。

何かあるな。

直感した私は『ホイキタ』

と返事して、その紙包みを受取った。

その紙はジメジメとしめって、ズシリと重たい。

紙包みが気になると、私は、ステージなど見ている気にはなれなかった。

で、あとのショウはギセイにして、早々に場外へ出てしまふ。歩きながら、先程の紙づつみを開いてみた。

やはり、それは用済みのチリ紙だった。

うっすらと、口紅の赤味をぬぐったあとの中へ、鼻汁と、タンのまざった、落し紙だった。

思うに、踊り子は、出の衣裳をまといながら、鼻をかみ、ステージに出てしまつて捨て場に困り、心安だてに、見物の一人に自分のかんだ紙をすることを依頼したものであろう。(F座はそんな気安い小屋な

が肉体によって表現される事です。この表現されたものが、いわゆる特異な美なんです。そこで私がお願いするのは、その喜怒哀楽の主人公を貴女方にやって頂きたいのです。尤も、これはお芝居じやないから、それだけに迫力があり、真の特異な美を見せて頂けるんです」

そこで、私は尋ねました。

「お芝居でないとすれば、どういう事に……」

「それはですね。私が希望するプランに依つて、貴女方が心から喜怒哀楽を肉体に現わせずには居られない状態になって頂く事です」

主人の男は、何かに憑かれたように私達を見据えるので、ぞーっとしました。するとお嬢さんが

「つまり貴方は、私達が喜んだり苦しんだりする事に興味をお持ちのようですが、あたし達は、そのような事は不得手な上に、厭ですわ」

私も亦、云いました。

「それなら私達でなくとも、お金で自由になる女の人でもお相手になさっては如何ですの? 幾ら私が貴方の考えに同感しても、そんなことだけは共鳴致しかねますもの」

私は、この男の本心に怒りを覚えて、こう

云い放ちました。それでも男は、

「御尤もです。しかし、それは女心の不思議と云いますか、やがて、そうした事を反対※

のだ)

ステージに紙クズを捨てると叱られる。

ポケットもないヌードのコスチュームでは紙の入れ物もない、開演の時間を目前にした彼女は、セッパつまって、私にたのんだのにちがいない。

私は、こう解釈して、彼女からのプレゼントを受けとった。

歩きながら、私は、この思いがけないプレゼントを感謝した事だった。

デパートの屋上で

日本橋高島屋の屋上。

小春日和にぎわう屋上のベンチで、脚のすばらしく美しい女性が、ソフトクリームをなめている。

仲々よき風景だ。

その女性は、ソフトをなめなめ誰やらを待っている様子だ。

気づかれないように気をくばりつつ私は

彼女のそばへ腰かけて、空を見上げていた。

案の定、二十分ばかりすると、彼女の母親らしい婦人が、山のように買物包みをもって現れ、そのまま彼女は三分の一ほど残ったソフトクリームはそのままにイソイソと二人連れだって降り口へと姿を消した。残されたソフトクリームは、ふちに口紅のあとをつけられ、テーブルの上にある。

私は、あたりの人にあやしまれぬよう、そのソフトクリームを掌のなかへかくし、再び他のベンチを見つけて、ゆっくりと、そのソフトをなめだしたのである。

あんなに、ゆっくりなめていたのだからきつと、彼女のつばきだつて、相当クリームの中にとけ込んでいるにちがいない。と、ひそかに思いつつ、そのソフトをなめつくしていた。私だつて、ソフトを買う金くらいは持っている。しかし、このソフトは金では買えないんだ。

そう思うと、私の胸はおどるのであった。

※に要求されるようになるんですが、貴女方もキットそうですよ」

と、人を馬鹿にしたような云い草でしたので、私もむっとして

「まあ、失礼な！」

と腹を立てましたが、男は平気なもので

「幸いにして御協力が願えれば、お二人のお家に御心配をかけたお詫びの意味で五十万円宛、そして毎月、三十万円を送金する予定で

いるのです。それ程に、私は、貴女達のために尽力しているのです。協力して下さっては如何ですか」

私は、この剛頑無恥な男にたとえようもない憤りを感じて

「お金なんか結構ですわ。それより、そんなに尽力して下さるなら、私達を家に帰して下さい。それが私達に対して、貴方が真に最大の尽力をして下さった現われだと信じますわ」

すると、男は素頓狂な声で

「ハハハハ、貴女の方は、それが最大の希望かも知れませんが。だが私の方は、かりそめにも百五十万円の金を業者に支払い、その上危険を冒して、ここへお連れしたのですから折角ですが、そのお申入れはお断り致しますよう」

言葉は丁寧ですが、極めて冷たい態度です。

「すると、貴方は私達を監禁して置くつもりなんですか」

私が、こう云った時、例の給仕女がお茶を運んで来ました。そしてお茶を配ってしまつと、主人である男の前に跪いて、その足に丁寧な接吻をして出て行くのです。この光景を私達は呆然として眺めていました。

(以下次号へ続く)

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第四十一項 再び『毛皮を着たヴィナス』について

「群像」誌上に掲載された佐藤春夫訳の是非につき、数次に涉つて沼正三氏と麻生保氏の間に論争が戦わされたので、私として、発端を成した時評の立場から、もう一度注釈を加えておきたいと思う。

私が讃辞を呈したのは主として、これまで秘かにしか発刊されていなかった此種の創作が仮令古典とはいえ、大日本雄弁会講談社——この創始者、故野間清治氏の一貫した出版の方針は氏の著作に「私の半生」「世間実話」等によってすでに有名であるが——という最も健全、保守的な大出版社が、その月刊雑誌に堂々と異例の扱いをしてこの一篇の完訳に近いものを掲載したことについてである。かつて、子供の為に絵本の発刊に際して

「面白くて、為になる」というキャッチ・フレーズを付したこの出版社は、特殊な読者の好奇心に依存しなければならぬ程の弱体ではない。又、同時に、危険を冒してまで此種の読物を紹介せねばならない程、不安定ではない。講談社は傍系の光文社を始め、キング、テレフケン、ロンドン等の各レコードを発売し、今は廃刊したが、「日本」にとつて代られた「キング」によつて、我国随一の娯楽出版社である。岩波書店と比して劣る処のない本邦の文化の代表者である。私共の常識からいって、講談社とマゾッホの作品とは、余りにもかけ離れた存在であつた。それが、今回の挙に出た、更に、十一月下旬、会社は、單行本として、このマゾッホだけを刊行したのである。かつて、好事家の書棚にしか飾られず、又飾る事を不安がらざるを得なかった

「毛皮を着たヴィナス」は今や、講談社の刊行物として、有力な背景と正当な扱いを以つて純粹に商業的な企画の対象となり得たのである。この事は、單に誤訳、違訳の散在という様な枝葉末節の事柄と、問題の重要さが根本的に異なるのである。簡単に云うならば「家畜人ヤブー」が近い将来に此の国で岩波文庫たらずとも、新潮文庫位にはなる可能性が増えた一つの実証といえるのである。佐藤春夫についての私の讃辞も又、旧来の彼の作品についてである。今回の訳文についてではない。旧来の名作によつて名を為したこの老大家が仮令、一書生の訳文に名を貸したとしても、私達は、一つの「夜明け」を、その事自体の中に見出すことが出来るのではないか。私はそう思つて、あの項を書いた。最も正確な原文の意味は原文による以外にない。その為に

は、呼吸する如く容易に解説する語学力こそ必須である。偏向した本能の為に書かれたこの古典は、共通の精神をもつ読者に、多少の訳出上の手際の悪さに拘らず、原著と共通の感動を与えると思ふのである。文学は遂に語学ではなく、語学はそれのみでは遂に学問でさえない、という人もある。

復刊第四十二項『十六才』 フランス・ノ

リ著

私は、本書を麻生保氏の示唆によって知った。此の著作は総体として何等サド・マゾヒズムに関連を持つものではない。併し私は麻生氏と共に、実際の鞭打より印象の強い叙述をされている鞭打空想の部分を含むが故に敢えて採り上げるものである。

私達は日常の生活で多くの行為をするが、とりたてて、その中の一つが空想として脳裏に浮ぶとき、いかにユウジユアルな事柄も、悲劇や喜劇の一場面として鮮明に印象づけられることが往々ある。鞭打も、それが、珍奇な行為とされている間こそ、偏向性愛の重大な行為として採り上げられる。しかし、それが其の当人にとって全く日常的な慣行となつてしまったときに、次の段階へ進もうとする。第二の段階で多くの場合、人々にはより強い刺激を求めて行為自体を強めようとする。その結果、肉体の忍耐の極限にまで到達したときに、私達は始めて空想の強い刺激に思

当るのである。勿論、空想は実行の前にも屢々現れ、不満の一つの安易な排泄口としての役割をつとめる。この場合の空想は多く得手勝手な内容を持つ、しかし、実行の終焉時に新しい永遠的な魅力を発散する空想は最も実現性に富んだものであることが多いのである。一般的な困難を含まず、特殊な個別的な不可能の理由のみ飛躍によって求めることが多い。これは、その一例であるといつてよいと思う。老馬丁を鞭打つことを夢みる乙女の心の中に、私達は、ピンク色の衣裳をつけた愛すべきドミニナの姿を垣間見ることが出来る。

復刊第四十三項『妄想とその犠牲』

文芸春秋社最近数号連載中 竹山道雄

私が屢々本欄に紹介したナチス・ドイツの強制収容所に於ける残虐行為と大量抹殺とについて、ユダヤ人に対しての問題として採り上げている注目すべき労作である。

ドイツのみならず全欧が如何にユダヤ人の支配下にあり、その合法的な侵略が、如何にナチス・ドイツ政府の憎悪の的となつたかについて語り、人間としてのユダヤ人が如何に悪虐の限りをつくされたかを語る。非ユダヤ人のインフエオリテイ・コムプレックスと反動的なスプリオリテイ・コムプレックスとが奇怪に調和してゆく有様は、此種の収容所ものと称される作物の中で特異の光を放つかに

思われる。時評はしかし、数百万人の殺人や殺人方式や、政治経済の重大且複雑な問題の未解決にも拘らず、金髪の子が、ドロテア・ピンツ、イルゼ・コッホ、エリザベト・マルシャル等の存在に好奇の眼を瞞り、彼女等との関連に於いてのみ深い関心を寄せるのである。

復刊第四十四項 邦画『風雲アジアの女王』

新東宝(色彩シネマ・スコープ)新年封切

川島芳子の伝記映画、勿論史実に忠実なものではない。以前本項に紹介したので川島芳子については特に詳述を避けるが、現代のもつ最も進歩した再現法によって、川島芳子が如何にマゾヒストの対象として有意義であるかについて、得る所の多いものと考えられる。清朝正統の愛親覚羅惠生さんの情死事件が、清朝王室の果敢ないロマンスクな事件であったと共に、十代の惠生さんの執った途に勇敢な高貴な心理を知ることが出来た好き実例でもあったことと考へ合せて、川島芳子が、傳儀氏の幾分女性的の性格に反して、亜細亜の一角にヴィクトリア王朝の夢を描いた征服的な女性であったことに再び驚嘆の念をもつことも興味深いことと思われる。

復刊第四十五項邦画『ダダ博士の媚薬』

製作不明

この映画は上映時間約三十分の短篇モード

・ブルレスク映画である。我国で撮影され、現像されたいことは実物に当たってみる以外に判らないが、只、出演者が、駐留軍慰問の名目で我国を訪れた芸人ばかりであること製作メムバアの姓が悉く日本人らしい事によって憶測される。

さきに本欄で些か触れて諸賢の教示を仰いだモーリス夫妻の鞭の妙技が紹介されている。驚ろくべきは、タバコ切りや、余り上手でないダンスでなく、実際に夫人の裸身に血痕らしい鞭痕がついてゆく様子が実写されていることである。サド・マゾヒスト、或はフラゲロマニア何れにも好き映画といえよう。猶本映画は三十二年八月大阪地区で封切られ関西方面にずっと廻っており、三十二年十二月に至って東京では始めて上映された。

猶一項を設ける程ではないが、モーリス夫妻の後に追かけて日劇ミュージック・ホールに女二人男一人のウエスタン・ウィップ・シヨウが出演し、同様に男性による女性鞭打の実演があったことを附記しておく。

(以上)

【追記】本年(32年)十二月上旬、サン写真新聞に英国の婦人競馬についての写真記事が掲載された。これは前に本欄の紹介した女性競馬と同一のものである。

最近の時代劇の縛り映画から

瑛峨美也子

今後の封切の時代映画の「縛り映画」を最初に、正月映画の「縛り映画」について書いてみよう。

松竹の柴田錬三郎原作の「江戸群盗伝」は夕弱、タイハイ、キガの泰平の続く江戸の闇を彩る三人男と公方の落胤雪姫をめぐる正義の魔剣に生きる血みどろな火花の物語だが、劇を彩る二人の女性―瑛峨三智子の雪姫と福田公子の大阪屋花鳥が随所で縛りシーンを見せてくれる。瑛峨は公方の落胤だが、後見人の政治的暗斗のために、暴力的に冒されてひかれるようになった梅津長門(近衛十四郎)

にも会えず、捕えられ小伝馬町の女囚牢に入られる。危うく毒殺を花鳥の身代りで救われるが、再び須見嘉兵衛に捕えられ。猿グツワ、手足を縛られ身もたえる。切られお富で妖艶な縛り姿を見せた瑛峨のお姫様の縛りシーンが見もの、一方福田公子の遊女大阪屋花鳥は講談でもお馴染みの恋人梅津長門を逃すために、放火して捕えられ、長門の居所を白状せよとゴウ問される。講談ではついに石だきの刑にあうが知らぬ存ぜぬを通し、島送りになる。福田監督はこの豊満な福田をどのようなゴウモンするか。最後に雪姫を助け

るために身代りになって死ぬ。

角田喜久雄原作の「花太郎呪文」は大映で製作、女目明しお美年は怪盗花太郎に捕えられ秘宝の謎を秘める小鈴のありかを白状せよと長シユパン一枚にされ、ガンジカラムに縛られ烈しいゴウモンに会う。小説では長いゴウモンシーンだが、映画では近藤美恵子のお美年をどのように責めるか、大いにエロティシズムを盛り込むと安田監督はいっているから楽しみである。「銭形平次」で女目明しお品になり美しい縛られ姿を見せた彼女のことだから期待できよう。

同じく大映の「遊侠五人男」では、フアストシーンで、舟の中に中村玉緒のお千枝が縛られて猿ぐつわをかまされ、死んだように横たえられている。中村玉緒も「天馬小太郎」ではハリツケになったり、今年はこの大いに可愛がられるだろう。可憐女優の宿命というべきか。

編集部よりV 本稿は印刷直前に到着いたしましたので、御送稿の極く一部しか掲載できなかったことをお断りいたします。残りは来月号に発表いたします。

〔映画通信〕

縛られた女優達 拾遺

南方 佳 男

二月号迄に紹介出来なかった縛り映画を追加お知らせ致します。他の方と重複するようなことがあったらお許し下さい。

▽大映作品「赤胴鈴之助・新月塔の妖鬼」朝雲照代が立姿で柱にグルグル巻に縛られ、焼け火ばしで折檻をうけようとする。緊迫感に乏しいが朝雲照代の演技は巧い。

▽新東宝作品「天下の鬼夜叉姫」若杉嘉津子が数本の太縄で掛小屋の梁からモッコ形に吊られる。胸や腰へグルグルと幾重にも縄をかけていたが後手首の縛り目は最後まで見られなかった。しいたげられた若杉嘉津子の表情は非常によかった。

▽大映作品「穴」京マチ子がひどく雁字搦目に縛られる。胸と足首を太い荒縄、膝頭を細引きでグルグルと必要以上に巻かれていた。胸の縄目がさらに二の腕に巻きつけられて、腕を後に引き背中であ手首を本腰に縛っていた。珍らしく現代劇を観て偶然に出くわしたのだが、時代劇ではこんなリアルな縛りなん

かめつたに観れない。体に食い込む縄目の痛々しさがよくでていた。

▽東映作品「富士に立つ影」縛りシーンは無かったが、長谷川裕見子、円山栄子など四人娘が白帷子姿で人柱にされ、穴倉に入れられ生き埋めにされようとするシーンは圧巻。一人ずつ穴の中へモッコで降されて行く姿は美しく、穴の中で頭上から土がバラバラと落ちて来て胸もと近くまで埋められたところで救いが来る。下手な縛りよりずっと満足のゆく刺激がある。

▽大映作品「忍術若衆・天馬小太郎」中村玉緒が後手と磔の二つの縛られ方をする。中縄でワンカットの後手縛りはあまり印象に残らないが「近松物語」以来の大映作品での磔は興味深く観た。縄目が手首、肩、胸は綱目、腰膝頭と非常に厳重で理想に近い縛り方だった。▽東映作品「はやぶさ奉行」千原しのぶ、岡田敏子が二度縛られる。千原しのぶの最初の縛りは後手だが胸を三、四巻、帯の上を二巻

して縄尻は柱につながれていた。この形で二度目打ちの折檻をうける。二度目は岡田敏子と一緒に中縄の後手縛りだが猿ぐつわをかまされる。縛りとしては別段何の工夫も珍らしさもない。

▽東映作品「鬼面龍鬼隊・後編」円山栄子が後手と磔に縛られる。最後は数人の男達に両手をとられ後手に縛られ、次に同じ姿で弓の折れを手首にさし込まれてコシあげられる折檻をうける。最後は白衣で十字の磔で火焙りまた同じ映画で珍らしく星美智子が後手に縛られる。庭先にグルグル巻きに縛られて座らされ打首にされようとする。

なお、あまり観ない現代劇の中からだが、まだ誰も紹介しないので遅ればせに――

▽松竹作品「青い花の流れ」小山明子が姉の岡田茉莉子と就寝中、姉の愛人のヤクザ男（高橋貞二）の強盗が押入り、姉のために仕方なく主人の家の金庫を開けてやる。男の良心で「共犯に疑われないように」と椅子に縛られるが、大人しくベルトで胸を一巻きして後手縛り、猿ぐつわをかまされる。パジャマ姿で椅子に後手という縛りが一寸面白い。危険がからむわけでなく縛り方も形式的で緊迫感も乏しかったが、アイデアと小山明子の表情がいじらしく、印象に残っている。

（終）

『強盗事件』に関する新聞記事

についての一考察

南 時 夫

私は毎朝毎晩の新聞を或る一つの大きな関心をもって見ています。政治面も経済面も、又小説の欄も文化人の端くれとして読んでいますが、それ等の幾倍もの注意を払って眼を通すのは社会面——その中でも犯罪記事なのです。犯罪記事といっても、その種類は数ありますが、私の関心の焦点は、紙面のほんの片隅にしか載らない「強盗事件」なのです。社会悪のはんらんする現在の世相では、單なる押込み強盗事件を大きく取上げる新聞社も少くなく余程の特異な犯罪でもなければ、又特殊な人が被害者又は加害者でもなければ、ただほんの報告程度の記事に終らせるのが普通です。又その事は、この種の犯罪が実際には、もっと多く起っている事の証左にも

なりましよう。私は残忍な事がとても厭で、凶悪な殺人事件の記事などは読むのも気持が悪く、ただむごたらしさを感じるだけです。ところがこと強盗事件になると、この様な深い関心と興味を感じるのはどうしたことなのでしょう。奇巧の読者の方にはもう解って頂けたことと思います。私は女性緊縛愛好のサディスト。女性を対象とする縛りマニヤであることは、もうすでに告白しました。この私の性格と「強盗事件」に対する関心との連かりは今更説明いたしません。

額に汗して働くことをせず、平穩な家庭に押入って脅迫し金品を奪い去る強盗犯を私は非常に憎みます。どんな動機があつたにせよ

犯人は厳肅な法の裁きを受け已が罪の贖いをせねばなりません。不幸にして被害者になられた方々には深い同情を捧げます。私がここに書いていることは、この種の事件の起ることを期待し、又被害者の不幸をよるこんでいるのでは決してないということを解って頂きたいと思います。

私が女性緊縛愛好のサディストとして、『強盗事件』の記事を読むと異常な感情に襲われるのは、いけない事と思いますが、これも仕方ありません。それはどんな名文の小説よりも幾層倍も生々しいものだからです。私はあくまで女性のみを対象としたサディストです。で（も）っとも完全女装した男性はこの中に入りますが、この種の事件の被害者も女性に限られます。あの夜、あの時間に、あの場所で現実に一人の又は幾人かの女性が縛られ狼轡をはめられていたということが、その方々にはあのお気の毒だと思ふ反面、私の体内の何処かに異様な血の流れが感じられるのは避け難い事実なのです。その女性はどんな人なのか、どんな縛られ方をしたのか、縛られた後どんなにして縛しめから逃れたのか、一、二行の新聞記事からは汲み取れることは殆んど不可能です。ところが、その事が又私の想像力を発展させ、ますます大きな興味を与えるのです。

私はこの種の事件の記事は欠かさず切り抜きスクラップしており一時あることでそれ迄の分は殆んど焼き捨ててしまいましたが、最近のものだけでも可成りの数にのぼり、別な方面からも貴重な資料になるのではないかと考えております。一口に『強盗』といっても、ただ脅迫して金品を奪い被害者の身体に直接加害行為をしなくても強盗ですし、殺して金品を奪う殺人強盗もあり、又殺さないまでも傷つける場合もあります。私の集めた記事はあくまで『ある女性を』『縛り上げ』『狼ぐつわをはめ』といった記事内容のものに限ります。又ある人を縛っただけで金品を取らない場合は、『強盗』ではなく、『逮捕罪』又は、『監禁罪』ですけれど、これ等の記事

は勿論スクラップしてあります。強盗事件の記事とは例えば最近のものとして

「原宿の寮に賊！ 二十八日午前四時半ごろ渋谷区原宿三の二九二日本紡績協会寮に賊が入り階下三畳間に寝ていた女中の林静子さん（二六）は手ぬぐいでサルゲツワと目かくしをされたうえ手足も縛られ六百円と貯金通帳、印鑑一個を奪われたと原宿署に届出た」

などが代表的なものでしょう。新聞によって記事の書き方の相異や、時間、場所、被害者の名前、年令、使用された布縄の種類、奪われた金品等が必ずしも一致しないのですが、この様な記事を数多く読んでみるといろいろなことが分ってきます。題材が題材です。でなるべく統計的に考察してゆくことにしましょう。ここでこのことわりしておくのは、これ等の記事があくまで女性の縛られる強盗事件であること、女性といっても十二、三才から五十才位までであること、私の居住地の關係上東京都内のもものが大部分を占めていること等です。『見出し』からはじめて、『被害者』『手口』等々とお話を進めてゆきましょう。

（一）見出し

見出しについては、いろいろなものがありますが、まず普通のは「〇〇に〇人強盗」という風に場所や家業等をあらわしたものでしょう。例えば「浅草に強盗、白覆面の二人組」「麻布に白昼強盗」及び「芸者屋に強盗」「質屋（二人組）夫婦をしぼって奪う」などです。しかし、『見出し』はあくまで読者に対してアツピールするものであることを要するので変ったのも多くあります。「殴ったり暴行したり、目黒に手の込んだ強盗」「届出たら皆殺しだ！」「世田谷に覆面強盗槍せりふ残して立去る」「洋服店に暁の強盗、犯人間もなく捕る」「アイロンで身仕度、神楽坂に、おしやれ強盗」「自宅で昼寝の少女襲う」等々。次に、『縛る』とか、『狼ぐつわ』とかの

文句の入ったそのものズバリ式のもの、が非常に多くあります。これも矢張り読者の興味を引く為でしょう。簡単なもので、「針金でしぼり強奪」「一家三人を縛って奪う」「両手縛り押入に」「マダムをふとんむし」「荒ナワで縛り上ぐ」……。多少、長いもので「連れ込んだ女から強盗、しぼり上げて金を奪い逃走」「大家族全員を縛り酒盛り」「知合った大学生が強盗、女高生二人縛らる」「品川に麻薬強盗、女高生縛る」等があります。又短い変わったもので、「口に脱脂綿を押込む」とか「カーテンで縛る」とかの様に手口や使った材料そのものを見出しに使ったものもあります。この様に見出しは人眼を引く様につけられているのは当然ですが、「縛られる」とか「猿ぐつわ」とかの言葉は口に出してはなかなかいえないものの、これ等の記事をうら若い多くの女性が眼を通して、いることを思うと興味が湧いてきます。

(二) 被害者

被害者については、もうおことわりしておきました様に女性のみ



に限定し、それも中学生位から四、五十才位までの人を対象と致しました。私がこの様に年令の巾を広げた理由はたんなる新聞記事だけでは、その人の容姿を判断するのは不能であり、十二、三才の中学生でも充分發育した娘さんもいますし、四、五十才の奥様方の中でも二、三十才代の人以上の色香を持った人もおりますので、想像

の枠をこの様に広げたわけです。事件の記事と一緒に被害者の写真が載っていたらよく分るのですが有名人の外は殆んどありません。可成り前の記事だったと思いますが水谷八重子さん宅に強盗が入り彼女ともう一人の女性が縛られ風呂敷か何かをかぶせられたことがあります。正月の元旦の新聞だったのでよく覚えておりますが、その時は水谷さんが手を前に組んで、こんな風に縛られた……と話している写真が出ていました。この様に縛られた当時の模様をゼスチャア入りで話している写真はめずらしいことです。有名人の場合は記事そのものも相当に詳しく書れており、被害者のその時の感想もよく述べられています。普通の場合は全く簡単に片付けられてしまっているのは想像するより外はないのです。被害者は矢張り家庭の主婦が一番多い様です。家庭を守るといのが主婦の本分であり、そこに又被害を受ける率が多くなるのだと思います。白昼強盗の場合等には当然のこと乍ら奥さんが狙われているわけです。その他、バーのママ、女給、事務員、先生、学生、芸者等色々な人が被害者になっていますが、その点は後に一覧表としてお眼に掛ける積りです。被害者の服装は大半が夜中なので夜着のままだと思いますが、季節によって夏などはシユミーズ一枚とか又はブラジャーにパンティだけといった場合が考えられます。女給をしている人が家に帰った途端に縛り上げられたケースもあります。その様な場合は洋装和装を問わず盛装であったことと想われます。被害当時の服装はこの様に想像以外に何ら資料となるものはありませんが、唯一つだけその点に触れている記事がありましたので全文を御紹介しておきます。見出しは「女教員襲わる！」としてあり、『二十二日午後十時ごろ、板橋区の教員某女(22)が帰宅の途中、二十五、六才の男に短刀をつきつけられ、「おれのいうことをきけ」と、神社境内に連れこまれ、洋服をはがれて上半身ブラジャーだけの半裸にされた上、麻縄で手足をしばり、サルグツワをはめられて、短刀

で下腹部に全治一週間の傷をおわされた。」という記事です。

次に被害者の方の心理状態ですが、これは普通人の場合殆んど書かれておりません。勿論、恐ろしかったの一言に尽きるでしょうが……。この点に関しては何年の何月号だったか忘れましたが「強盗に入られた奥様ばかりの座談会」という記事が『主婦の友』に載っていたことがあります。お読みになった方もあるでしょうが、出席者は五人の婦人で、その中三人の方が縄で自由を奪われた時の模様を話しておられました。

(三) 用 具

ここに用具というのは強盗が被害者を脅迫する為に使用したピストル、短刀、庖丁等のものを指すのではなし被害者の自由を奪うのに用いた紐、縄、布片の類をいうことにします。被害者を縛るのに一番よく使われているのは、麻ナワであるようです。麻ナワで手足を縛り……という記事が最も多くみられます。その次に多くあらわれますのは、細ヒモです。この麻ナワ、細ヒモで縛った場合は強盗自身が持って入ったものだと思います。何故なら普通考えて、麻ナワの様なものは寝室には置いてないからです。荒ナワというのもありますが、これはその家の物置かどこかに在ったものが使われたのでしよう。細ヒモの場合は、後の「腰ヒモ」や「帯ヒモ」を一緒にして細ヒモと書かれているのが多い、と思いますし、そうであれば寝室などには特にこの種のヒモ類は沢山あると想像されますので強盗が用意しておかなくとも、すぐ使えたことでしょう。以上の麻ナワ、荒ナワ、細ヒモ(腰ヒモ、帯ヒモ)などが一般的なので、その他には其の場にあったものが何んでも使われています。ネクタイも手取り早く用いられるものでしょう。電気コードもよく使われています。寝室でスタンドが置かれている場合には手近に眼につくものだからでしょう。コードも随分長いもの

があり細目のもので厳しく縛られたら中に電線が入っていることだし、絶対に切れないものだと思います。「手拭」や「タオル」で縛ることもありますが、又風呂敷や「ネッカチーフ」が用いられることもありますが、これ等の場合はあまり緊縛はされていないものと思われれます。毛布や敷布を切りさいて用いる場合もありますが、恐怖におののいている被害者を眼の前にしてさも、これで縛るぞ」という様にこれらのものを切って用いるのは余程前科のある犯人だろうと思われれます。針金も二、三ありましたが、さぞ痛いことでしょう。変ったものでは、寸法を図るメージャーで縛られた婦人服店の女の人がありました。又古ホウタイの場合もみられます。被害者の哀願により一旦縛ったものをほどいて別なもので縛った例は、声楽家の佐藤美子さんの場合があります。これも可成り以前のことでと思いますが、佐藤さんが練習場で強盗に襲われ、荒（麻？）ナワで後手に縛られ階段を連れてゆかれたところ、あまりの痛さに「痛いから何んとかしてくれ」と賊にたのんだところ佐藤さんを縛ってあった縄を一旦解き、布切れで縛り直した、と出ていました。こんな例はめずらしいことと思います。もっとも有名人の場合だけに詳しく記事にされたからでしょうが。

次に猿轡に関してですが、これは「手口」として次の項に特殊なものは書きたいと思いますが猿ぐつわに用いるものは、その大部分が「手ぬぐい」であり「タオル」です。もっとも敷布をさいて手足を縛った場合などは猿ぐつわもその同じ布ではめたものと思われれますが、簡単な記事では單に「サルグツワをはめ……」と書いてあるだけで、どんなもので口又は鼻口を覆ったのかはつきりしません、枕もとにぬいであつた下着で猿轡をはめた場合もあります。

四手 口

賊が外から侵入して凶器をもって脅迫し、金品を奪うまでが手口

ですが、ここでは被害者の自由を奪う方法、もっと單的に縛り方、猿ぐつわのかませ方等を書くことにします。普通はただ「何々で縛り上げ……」か「手足を縛りサルグツワをはめ……」としか書いてありません。両手を縛った場合、それが後手だったのか前手なのかよく分りません。「後手に縛り上げ」と書いてあるものもありますが、そうでなければどちらか不明です。主婦の友座談会に出席した小間物商の奥さんの場合、その時の新聞記事では御主人と奥さんと女中さんの三人が細ヒモで手足を縛られサルグツワをはめられたと書かれてあつたのですが、座談会におけるお話では前手にタオルで縛られたとのこと。御参考までに、その部分を写しておきます。奥さんは石井さんといひます。

石井「……しばらくたっていきなり女中の部屋との境の襖がぱつと開けられたので、その音に眼がさめたんです。あッという間もな感じです、二人の男が、一人はナイフ一人は庖丁を私たちの胸のところに突つけて、『静かにしろ』と、いって、その辺にあつたタオルで私たちの両手を、丁度拝むように合わせてしぼり上げたんです。」

記者「女中さんは、どうしてたんですか？」

石井「それが、やっぱり、私たちのようにしぼられて、猿ぐつわをはめられているんです。騒いじや何をされるか分らないし、声を立てることも出来なかつたんですね」

新聞記事とは「細ヒモ」と「タオル」の違いがありますが、それは別として「丁度拝むように合わせて」というのですから前手に縛られたのだと思います。しかし前手と後手では矢張り後手の方が解き難いということは賊も知っているでしょうから、多くは後手だと思われれます。手首だけでなく身体も縛られたのかについては、これこそ想像する外ありません。ただ手拭やネクタイのような短いものは勿論手首又は足首だけでしようが、麻ナワ等では胸にも廻して縛

られたことも考えられます。又犯人の落着きの度合も関係ある様で相当の前科者の場合は十分計算の上で縄を掛けることが予想されます。初犯でのおどししている場合などでは早く金品をとって逃げようと考えているでしょうから、縛り方も、又その強さもあまりひどいものではないでしょう。賊が逃げたあと、すぐほどこいて届出るのが多いですが、それは賊がいる間は恐さでただじっとしているものであつて手足を縛られて動けなかったのではなかったことと思われるます。賊がまだ居る時に縄を解いたのもあり、大家族全員を縛るような場合に一人々々きびしく縛り上げることは出来ないと思われるます。しかし前科何犯とかの賊の場合は、縛る急所も知っているでしょうし相当にきびしく縛られたことも想像されます。復刊以前の奇クに載った一女学生の手記（「強盗に入られたときのこと」という題だったと思いますが）では女ばかり五、六人が手足を縛られたままほどこくことが出来ず隣の人に助けられたということでしたが、そんな場合の犯人は随分と悪事を重ねてきた者と思われるます。その程度を判断する材料として逃走的時間と届出時間との差があります、賊が逃走してから何時間後かに届出た場合、怖ろしさに動くことも出来なかったこともあるでしょうが、縄を解くのにそれだけ時間がかかったと思つてもよいでしょう。これから記事を御紹介しますがそれらは縛られた縄が自分では解けなかったことを想像される内容のものです。

縛られたままの姿で届出たものとしては、

「女三人縛りあぐ。二十三日午前三時ごろ、東京都中央区越前堀二ノ三菓子屋松本きんさん（四三）方に裏口の戸をこじ開け三人の賊が侵入、物音で起きようとしたきんさんに切出しを突付け、細ヒモでしばり上げ、敷布をさいてサルぐつわをかませ、さらに隣室で寝ていた妹の須永しもさん（四〇）とメイの江原君子さん（二〇）をしばった。三人組はタンスから……を奪い同四時二十分ごろ姿を

消した。きんさんは賊が逃げたあと、サルぐつわをかませられたまま近くの交番に届出たが……」

「知合った大学生が強盗、女高生二人縛らる。二日夜十一時頃日比谷公園裏の派出所にマンボスタイルの若い女が両手を後手にアサ縄で縛られたうえ、サルぐつわをかまされたままかけこんできたので直ちに事情を聞くと女は台東区忍岡高校三年のA子さん（一八）で同女の話では同校二年のS子さん（一七）と上野で知合った大学生三人にさそわれ自動車に乗ったところ、やにわに車内で短刀を突きつけられ、手足を縛り上げられてサルぐつわされた。男たちはそのまま日比谷公園に車を走らせ公園内で二人に暴行を加え、ハンドバッグを奪いA子さんらを残して車で逃げたとのこと。Aさんの届出により係員が現場で縛られたまま気を失っているS子さんを助けた。二人とも全治一週間の傷を負っている。」

次にサルぐつわの方面から緊縛を想像される記事として「坊さん風の強盗押入る……玄関わきで寝ていた女中小久保アイ子さん（二八）を静かに起し、もっていたヒモで後手にしばり上げサルグツワをかませて、アイ子さんの部屋を物色したが、金がなかったので次の部屋に寝ていた女中山本静子さん（三六）のマクラ元から現金千五百円を盗って逃げた。この間約一時間半、静子さんはアイ子さんがおどかされたのも自分のマクラ元を探られたのも全然知らず、アイ子さんがサルグツワを舌ではずし大声を上げたのでようやく分つたという。」

縄を解こうとしてもがいているところを発見された場合が二、三みられます。

「二十九日午前零時ごろ東京都……好川博三さんの長女尚子さん（三〇）が手足をしばられ、もがいているのを外出先から帰った博三さんが発見……」

「アパートに三人組……二階九号室の幸田幸子さん（二七）と妹の

しげるさん(二五)を短刀の様なもので脅迫、二人の手足を麻ナワで縛り上げ、手ぬぐいでサルぐつわをはめ室内を物色し現金五千円を奪い同十二時半頃逃走した。賊が逃げたあと、幸田さん姉妹が縛られた縄を必死にとこうとしたがとけずにもがいているところを隣室の人に発見された……」

又、被害者たちが苦心してほどこいた様子が記事になっているものとして

「保母を脅す、幼稚園に二人組、十三日午前三時半ごろ、東京都葛飾区本田原町一六四マール幼稚園に二十才ぐらいの二人の男が押入り、寝ていた保母の田辺ゆき(二九)高崎きよ(二四)杉本光子(二〇)さん等を裁ちバサミで脅して三人をしぼり上げ、子供たちの月謝袋から約一万六千円を抜きとり逃走した。しぼられた三人のうち足の自由な杉本さんが立ち上り、田辺さんが歯で杉本さんのナワをかみ切りなどしてナワを解き、六時過ぎ本田署に届出した。」

緊縛の度合をあらわしている記事としてこの他にまだまだ数多く書いておきたいものもありますが、長くなりますのでこの辺にしておきます。又、以上の様な点でなくとも変った記事で御紹介したいものもあります、例えば女優(演劇の)のもとへ押入り彼女を縛ってから逃走後に、電話で警察に「女優が縛られているから」と忠告(?)したり、縛り上げた娘に玄関まで送らせたり、まず主人に奥さんを縛らせた上で次に主人を縛り上げたり、友人のところに勉強に来た女高生が二人ともしぼられたり、賊が帰ったと思って縄をやとと解いたところ、まだ居た賊に発見され再び縛りあげられた芸者の場合など、多くのものがありますが、これも一々申上げるのを省きます。

そこで最後に猿轡の点に触れておきましょう。強盗の場合手足を縛ると同時に殆んど猿ぐつわをはめています。声を出されるのが賊にとって一番困るからでしょう。猿轡に関しては殆んどが「サルぐ

つわをはめ」と書いてあるだけでどんなもので、どんな風に噛まれたのか分かりません。用具の点では多少触れましたが、変ったものとしては、「口に紙をつめサルぐつわ」「口に脱脂綿を押し込んで」「枕もとの衣類でサルぐつわ」「口に布切れをつっこんで」「靴下で猿ぐつわをかませ」などがあります。猿ぐつわを一旦はずした娘が再びはめ直されたケースが一件みられます。

「……留守居をしていた長女三奈子さん(一七)に刃刀庖丁をつきつけ、店にあった荒縄で両手足をしぼり上げ、カーテンを破ってサルぐつわをはめた。賊が物色中気丈な三奈子さんはサルぐつわを舌ではずし、大声をあげようとしたが賊に発見され、再びサルぐつわをはめ直し、同女を押入れに押込んで逃走した」

目かくしをされた場合、ふとんむし、かやでくるんだ場合、着物カーディガンを頭からかぶされた場合等もみられます。

以上、強盗事件に関する新聞記事について、数項目に分析して考察してみました。その考察はあくまで女性の緊縛を対象としたものです。

私がここに書きましたものはあくまで日々ポストに入れられてくる新聞の記事を材料として、その事実そのままを分析してみたに過ぎません。冒頭にお断りしておいた様に、私はこの種事件の起ることを喜び、被害者の恐怖、不幸を喰いものにしているのでは決してありません。過去の一定時に起ったある事実について注目してみただけに過ぎないのです。脅迫し、抵抗不能に陥入れて金品を奪うことは憎むべきことであり、私たちはそれらの悪に対して十分心の備えをしておかねばなりません。強盗に入られた奥様ばかりの座談会、の結論にもありました様に、強盗に入られた家はどこかに油断があった。又、入られた場合には下手に抵抗せずに賊のいいなりになって、縛られたり、猿轡をはめられてもあくまで冷静に賊の人相や特

徴を擲んでおいて検査に役立つようにせねばなりません。氣に掛け過ぎて余分な事を書きました。賢明な奇巧の読者ならば私の書き足したいことの一端も分つて下さったことと思います。

最後にスクラップした記事からその一部、なるべく最近のものを表にしてみました。被害者名は本文では記事そのままを使いましたが表では職業とか身分で簡単にあらわすことにし、單に「夫婦」とあった場合はすべて「主婦」としておきました。数多くある中で五十件だけを記しましたが、この他に有名なカービン銃の被害者齊藤等子さんの場合とか、銀座の殺人事件の際の二女の場合とかがありますし、又、美容院で若い女性が三人緊縛されたものもあります。本文中に引用しました記事は重複しますので表からは省きました。

女性 の職 業 身 分 他 令 年	被 害 (緊 縛) の 態 様	備 考
女高生 18	サルグツワをはめられ両手を縛られ押入れに放りこまれる。	(午前三時) 二階で勉強中。
主 婦 37	寝ていたところを麻ヒモで縛られる。	(午前三時) 社長夫人。
主 婦 32	白昼電気スタンドのコードで後手にしばり上げられる。	(午後三時五十分) 後で自分でほどき 賊を追う。
主 婦 21	麻ナワで縛られ、布団むしにされる。	(午前三時半) 主人に足をしばられ、次に主人もし ばられる。
主 婦 29	着物の帯でしばられる。	(午後八時ごろ)
女子大生 20	手足を縛られ更にカヤでくるんでしばり上げられる。	(午前四時二十分)

主 婦 23	両手を麻ヒモで縛られ手ぬぐいで目かくし。	(午前八時四十分)
主 婦 25	白昼、口を押えナンキン袋をかぶせコードで縛られる。	(午前十一時五十分)
主 婦 26	サルグツワと目かくし、手足を荒ナワでしばられる。	(午前四時)
その店員 2223	細ヒモで縛り上げ。	(午前三時半)
主 婦 1947	手足を縛られ、カヤをかぶせられる。	(午前一時)
女高生 17	組み伏せへコ帯で後手に縛り、さるぐつわをはめ、服、下着を切り乱暴	(午後二時四十五分) 白昼、犯人は 中学生。
娘 28	外から帰宅、ヒモで手足をしばり、サルグツワをはめられる。	(午後八時半)
米人宅の メイド 31	手足をネクタイでしばられサルグツワ。	(午前十時)
主 婦 1239	後手に縛り上げられた上、口の中に紙をつめサルグツワ。	(午前三時四十分)
女 中 17	細ヒモで後手に縛り、サルグツワをはめられる。	(午後四時)
女 給 25	勤先から帰宅したとたん部屋にかくはれていた男に殴られ、暴行、五時間余の後に、同女を細ヒモでぐるぐる巻きにし、押入れに投込み、ヤナギとうり二個を体の上に乗せた、途中で同女が逃げようとしたがひき倒された。	(午前〇時) 見出しは「手の込んだ強盗」

主 女婦 2050	主 婦 23	主 婦 35	女 中 25	娘 23	娘 27	主 婦 33	主 婦 32	マ ダ ム 42	女 高 生 17	女 給 20
麻ナワでしぼり上げらる。三女がふ るえながら、しぼられたまま防犯 ベルを押してすぐ逮捕。	細ヒモで手足をしぼられ、ハンケチ でさるぐつわ。	ネッカチーフで後手に縛り上げらる	手足を荒ナワで縛られ、口にさるぐ つわ。	手足を麻ナワと細ヒモで縛り、口に 布切れをつっこんで。	同女の衣類でサルグツワをかませ、 両手を麻ナワでしぼり上げ暴行。	針金で手足を縛られる。	ネクタイ、細ヒモなどで手足をしぼ り、さるぐつわ。	手足を荒ナワで縛り上げ、フトンむ し。	後手に手足をしぼられ、意識不明の まま押入れに投込まる。	旅館に一緒に泊った男にサルグツワ をはめられ、手足をねまきのヒモで しぼり上げられた。朝に女中がウメ キ声を聞いて発見。
(午前三時半)	(午前三時半)	(午前一時)	(午後三時)	(午前三時半)	(午前三時)	(午後五時四十分)	(午前一時半)	(午前四時五十分)	(午後三時半)	(午後十一時)
			帰宅した家人に発 見されたもので、 盗品がなく、変だ と書かれていて、 マゾの女性か？		三時間後にやっと のことで麻ナワを ほどき届出る。				麻酔薬の香水をか がされたもの。	発見は朝の九時。

タバコ屋の娘	主婦 中婦	会社員	女 中	主 婦	女 中	女 中	女 中	主 婦	女 中	主 婦	中学生とその友達	主 婦	未亡人	主婦長三同居
28	1537	37	41	26	26	26	17	2033	1414	42	40	2810131943	2810131943	2810131943
サルグツワをかませ両手を縛り上げ。	細ヒモで手足をしぼりサルグツワをかませ、家内を案内させる。	フロシキで縛り。	しぼり上げ、さるぐつわ。	麻ナワで両手をしぼり、頭からカーデイガンをかぶせ。	手ぬぐいでサルグツワと目かくしをされたうえ手足をしぼられ。	手足をラジオ・コードと細ヒモでしぼられる。	手ぬぐいや細ヒモで両手足を縛りあげらる。	細ヒモで手足をしぼりさるぐつわをかませ、遊びにきた友達も同様にしぼりあげる。	家人が帰宅したところ、手足をしぼられてもがいているのを発見。	荒ナワで両手足をしぼりあげ、タオルでさるぐつわ。	五人を八畳間に押しこめてしぼりあげた上、さるぐつわかませ脅迫。	特につけ足しました。		
(午前四時)	(午前二時五十分)	(午後十一時)	(午前十一時)	(午前八時)	(午前四時半)	(午前四時半)	(午前三時半)	(午前二時)	(午後十時)	(午前三時半)	(午後四時四十五分ごろ)			

(代理部便り)

(代理部便り)

○代理部分讓品総目録は新しく掲載しました分を漸次追加しています。影しました分を漸次追加しています。お申込を頂いた皆様にお待たせして申訳ありません。なるべく完全なものの仕上げまして出来次第お申込下さった方々へ急送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願い致します。その時期は誌上に発表させて頂きます。それまでは本誌掲載の広告によって御注文願います。

○以前の目録によって御注文下さる方が時々ありますが、現在本誌上に広告していいない分は全部分譲打ち切りとなつていますので御諒承願います。○尚、本誌三十年度発行以前のものは旧刊号、復刊号全部売切れております。当方にての補充或は入手方法についてはございませぬから御送金や御紹介はお断りいたします。○本誌復刊号についての在庫状況は、最近号にその都度発表しております。売切品の補充はつきがねます。○只今「サジズム特集号」として、時代物賣画集、現代物賣画集、最近撮影の写真集、等をまとめて刊行するよう準備をすすめており、その大部分が揃いましたので、近々編集をすることになっております。今のところ、印刷方式、刊行方法、定価などについては確定しておりませんが、出来ればグラビヤ印刷によりたいと思つています。目鼻がつき次第本誌上に予告することになります。皆様の期待にそつた素晴らしいものが出来ることと思ひます。○現在本誌上に広告しております分該品は漸次打ち切り新しいものに切り換えたいと思ひますので、お求め洩れの方々は此の際お申込みをお待ちいたします。打ち切り後の御注文は勝手ながらお許し願います。○代理部へ対しての御申込は一切通信に寄られるようお願い致します。電話にての御問合せや直接の御訪問は固くお断りいたします。

女^お將^{かみ}と女^{じよ}装^{そう}の種^{しゆ}々^{じゆ}責^{ぜめ}

(新年宴会での緊縛遊戯)

岸 本 青 柳

お目出度い新春を迎えた元旦は、天も縁起を担いだのか朝から晴天、元気を出して早曉に床を蹴って起き、冷たい清らかな若水で顔を洗い、例に依って先ず四方を拝し一年中の健康と幸福、一家の繁栄などと随分虫の好い我身勝手な祈願を籠め、お屠蘇をお祝いしてから正装を整えて、鎮守の森の氏神様へ初詣でした。夫れから小学校で行われた新年拝賀式と祝賀会に列席、正午ごろから親友、知己取引関係方面への廻礼を済ませ、金時の火事見舞よろしく真ッ赤な顔をして文字通りの千

鳥足で夕刻ごろ、元旦の行事を終えて家庭に帰り、夫婦子供らと共に一家団樂、楽しくテレビを見ながら晚餐を済ませ、一家を挙げて双六遊戯に興じ、十一時ごろ暖かい寢床に潜り込んだが、朝まで白河夜船でグッスリ寝込んで終った。

明けて二日の朝早くから友人の初荷とてトラックに満載した化粧類の間に立った儘の法被姿で、お得意廻りを手伝い、晩の御祝儀膳に招かれたが一番先に帰宅して熟睡、三日朝から家庭連れで町の映画館で映画観賞したが

大入満員だったので汗ダクで観賞も祿々せず映画館を出て、町の繁華街をブラ付き、午後は夕刻ごろまで野球試合を見物、翌四日の官公署御用始め式の終ったころ、牧場に親友を訪問の上、互いに新年の挨拶を交歓、午後には家庭で家族と共に雑談に耽り、その夜は早く就寝した。いよいよ五日から自分の事業に取りかかり、午後は休業、勤務員にお年玉を贈り、形ばかりの新年宴会を催したが四時ごろ目出度く祝宴を終え一寸一腹。点燈ごろから久潤振りに、ネオンのまばゆい新柳町の花

街に足向け、門松とメ縄飾りに表道路は、正しい箒目の鮮やか、打水も清々しい瀟洒な門構えした料亭『ひさご』を親友の竹原君と共に訪ずれた。すると帳場から出て来た顔馴染仲居のお千代さんがニコニコ顔で、ホールの板間に両手をついて、

「いらっしやいませ、まア、ツーさん、ターさん、さア上って頂戴！」

下にも置かぬ鄭重な挨拶、愛嬌を振り撒きながら、長い廊下を通って内庭の景色の可い奥の座敷へと、手を取らんばかりイソイソと案内する。座蒲団、火鉢は勿論、お茶とお菓子を別仲居のお浪さんが運んで来る。そして二人の仲居は先ず新年の御挨拶をしている所へ女将の綾香が「御免下さい」と廊下に座り静かに障子を開け、また音せぬように障子を閉め畳に両手をつき、新年の御挨拶と平素のお礼とを申述べる。客の二人も互いにニコニコ顔で新年の挨拶を述べ、富士たばこをスパ吸っている。氣を利かせて女将は、お浪さんに二階の「梅」へ御案内するよう云うか早いか、自ら先に立って二人案内する。漸やく落ち着いた私達は、二階のガラス越しに綺麗な内庭を俯瞰しつつ、庭景色を激賞していた。聴てお酒と突出しが出る。お女将がお相手している内に、別の燗銚子、吸物、焼物などの調理氏自慢の御料理、御馳走が黒壇の広卓の上に並べられた。お酌の合間にお女将

が、

「お二人さんとも、真実にお久振りによくお越し下さいましたが、今晩は御悠づくりお遊び下さい、誰かお好きな妓を呼びましょうか……」

「イヤ、今晩は妓どもは要らないヨ、久し振りにお女将とユツクリ話したいんだ」

「まア、左様ですか、では御相手致しましょう」と夫れ以上問うともせぬ。

「どうだネ、この花街の景気は？」

「お蔭でボツボツと云うところでしょう」

「なら結構だネ、近ごろ可い芸妓がお見得したかネ」

「ええ、正月から二、三綺麗どころが顔を見せています」

「何れを見ても山家育ちというところだろうネエそうだろう」と笑いに紛らす。

「まア、相変らずお口の悪いこと、あの妓達に聞いたら癪癪でも引き起すことでしょう。みんなが田舎臭い者ばかりじゃありませんヨ」と一寸怒って見せる。

「ハハ……、これは失礼、時に今晩お女将に特別に頼み度いことがあるんだがネ、聞いて貰えるだろうか？」と謎をかける。

「ドンナことか存じませんが、妾の身に叶うことなら……」

「ハハ……、大変大きく出たネ、別段身に叶う叶わぬと云うような七、六ヶしいことじや

ないんだヨ」

「そんなら可いんですが、妾一寸おどかさねたんですもの……」

「聞いて呉れるとしたら安心したヨ、まア焦らずに一ぱい飲めヨ」

「ハイ、頂きます（口に猪口を当てて）お話って一体何のことでしょう」

こんな問答を繰り返しながら、二人とお女将との間に、盛んに盃の交換が行われた。

稍々暫らくしてツーさんで通っている津村君が、話題を転じてお女将との間に演芸ばなしに移って行った。

「お女将、君は芝居や映画がお好きか」

「ハイ、お芝居も映画も舞踊もみんな好きで度々見物に出かけます」

「旧劇ものか、新派ものかどちらかネ」

「ええ、時代ものが好きです、舞踊も日本舞踊の方が迎も好きで溜りません」

「時代もので何がお好きかナ——」

「まるでお巡りさんに調べられる見度いネ、そうねえ、幕末もの、それも町奴や町娘の真意気のあるところが好きです」

「では悪代官やお役人が町人を虐める場面だったら好んで観に行くんだネ」

「そうねえ、まアそう云ったところは凶星でしょう、ホ……」

「お女将は俠氣的な気質だからナ——、話はよく早解りするヨ」

「それがどうしたと仰言っるんでしよう」
 「お好きな悪役人が善良な町人を虐待する芝居を演って見たんだがネ……」
 「そんなお芝居なら、何を措いても見物させて頂きます」
 「いや、見物じやなくて、その真打の主人公の役を引受けて貰いたいんだ」
 「まア、妾にお芝居せよと仰言るんですが、そんなこと……出来るか知ら？」
 「何でもないんだヨ、簡単なものさ」
 「科白が長いんでしよう」
 「科白も何も要らない、無言劇じやヨ」
 「黙ってお芝居するんですか？」
 「そうだヨ、それで可いんだヨ」
 「何だか、妙なお芝居ネ」
 「君が下町のうどん屋の娘お妙という役を引受けて貰いたいのだ」
 「このお婆さんにですかい、女役なら出来ないこともなかろうと思ひますが……」
 「早速、今晚、この部屋で演って見よう」
 「えッ、この部屋ですか？、衣裳も道具の用意ありませんか？」
 「僕がその芝居の筋書を教へても可いんだが無言劇だから科白も要らないしネ、まアまア僕ら二人に委かせなさい」
 「ハイ、ではどうぞお手柔らかにお願いします、幸い見物人も見えないのだし！」
 と悪役人に町人娘の虐待劇に就いて簡単な



説明をしただけで、二人はお女将に娘風の衣裳に着替えて来いと半ば命令的に頼み込み、更に盃の数を重ねる。お女将は自分の部屋に戻り、幸い今晚の半公休を利用して、お千代

お浪の二人の仲居を映画観覧に行かせ、表門を閉めて終い、玄關も消燈する。
 お女将は茲数年前まで綾香の源氏名で、この花街で左様を取り、相当線香も稼ぎ或る材

木商の主人に落籍して貰い、今のところで料亭『ひさご』を開業したのだが、美貌と美声と踊り上手の三拍手揃っての猛者であつただけに、馴染客も多くそれらのお客を相手に営業は、相当以上の繁栄振りを示しており、特に俠氣を売ものに、この花街で覇振りを利かせ男勝りの尊称を奉られている。綾香女将は昔取った杵柄にものを見せようと、御叮嚀な化粧を施し、側の桐箆簞から娘風の着物の撰択に念を入れ、似合いの着物を着て朱塗の大鏡の前で立写する。その衣裳はというと、髪形は小晦日に結ったままの銀杏返し、着物は黒襟のかかった黄八丈（豎横三本並びとその中間に一本の同じ青筋の入った格子縞）袖長の袴（袖裏は赤、裾裏は薄緑色）、大柄菊の花を散らした緋縮緬の長襦袢、近田の緋の腰巻、赤三筋の黄色の伊達巻を巻き帯は黒と淡緑の昼夜帯、桃色の扱帯、緋の腰紐、キヤラコの白足袋などを用い完全な下町娘の装い。

何分この花街でも有名な元芸妓の装いであり、色飽くまで雪よりも白く背は普通だが、頗る美貌の持ち主だけあって、人形のような活きた物云う俳優が出来上った。そして腰に豆絞りの手拭を吊し、右手に幾筋かの麻製の長い縄と黒壇磨きの細いステッキを持って再び二階の客室へ、静かに足を運んで、

「どうもお待遠さまで済みません」

と頭を下げ挨拶をする。麻縄とステッキとを右側に置いて、お客の顔を見上げた。待ち疲れたというような顔付でツーさんが細い目の恵比須顔で、

「イヨウ、大した別嬪が出来たぞ、よく似合うア、これなら気分が出せるぜ……」

「いいえ、お粗末ですが、これで御勘弁をお願いします」

「イヤア、御粗末どころか綺麗な町娘が出来たヨ、着物の柄もよく似合うナ、流石は綾香姐さんだッ」

「冷やかしちや可厭ですワ、これでよろしかつたら、御辛抱下さいませ」

「冷やかしじやないヨ、真実だヨ、ではこれから実演と出かけようかネ、少し痛いかも知れないが我慢するッ？」

「ええ、お引受けさして貰ったからは、少々痛いぐらいは辛抱しますワ」

「では、ターさんが悪役人、僕はその下っ端役、姐さんはお妙の役としよう、お女将、この席を掃除して呉れヨ」

女将はイソイソと大卓、鉢、皿、酒德利などを隣の座敷へ運び出し、三人が仲よく火鉢で互いの両手を暖め、ツーさんが冷水二、三杯を飲んでから起ち上るや否や、綾香の背後に廻わり、繊弱な両手を高手小手に帯の上まで、側の麻縄で堅く縛り付け、袴がみを掴んで強く後へ引ッ張ると、綾香はアッと叫ん

で挫ッと後へ仰向けに倒れた。その裾を一す捌き両足を固く握って、腰部のあたりから二つに折り曲げ、両足を頭の上まで引き上げ頭と両足とを括り合わせ、達磨転がしという責めにかけ、綾香の身体を六畳の座敷中をウンと両手に力を籠めて転がす。綾香の髪も裾前も乱れ、帯と扱帯が緩み自然に胸前が捌けて来る。この芸当（責め）を十分間ぐらいで責め役のツーさんが、息切れの体で少憩、そして「酒を飲んだので、胸が苦しくなった、綾香姐さんもお休み」と優しく綾香を引き起して遣る。綾香も亦グッタリ体をツーさんの膝にもたせかけ、笑顔でツーさんの顔を見上げる。その風情はまた格別、横尻に座って紅いお腰をチラ付かせるさまは、まさに落花粉々の風情である。後手に縛られた綾香は別段縛り縄を解いて欲しいとも何とも云わず、唯だボンヤリとしている。これを眼の前に見せ付けられたターさんは突然起ち上って、

「お次の番を僕が引受ける、ツーさん、暫時休憩々々」

「妾、まだ責められるんですの？」

「もう可厭になったんか？」

「いいえ、あなたのお好きなように、思う存分に妾を虐めて頂戴！」

「そうか、その覚悟なら可いんだが、今度は少し前より痛いかも知れんヨ」

「ええ、痛かっても少し位なら辛抱するワ」

「綾香、裸になれヨ」

「裸になれと仰言っても、妾この通り両手を後手に縛られているんですもの」

綾香が身を起し乱れ姿のまま座り直すと同時に、ターさんは綾香の背後から帯、扱帯、腰紐を解き、縛られた縄をも解いて遣ると、綾香はホッと溜息を洩らす。その寸隙を狙って黄八丈の着物を引ン剥ぎ、長襦袢一枚にして仕舞い、「寒い寒い」と愚痴る綾香の両手を後にグッと燃じ上ると「アッ、痛い」と嘆声を洩らすのを聞えぬ振りして、再び高小手小手に縛り、手拭で狼轡をはめ縄尻を後ろに引ッ張り、綾香を起たそうとすると、綾香は洗面を作り、ヨロめきながらヤツとこのことで立ち上るのを俟って、邪怪に後へ縄尻を強く引ッ張る。引ッ張られた綾香は後退りにズルズル後へ〜と引ッ張られて行き、次の次の間の「松」の座敷の床柱に縛り附けられた。室内とは雖も寒中のことであり、長襦袢一枚に引き剥がれて、火の氣のない座敷でガタガタ震えている。その憐れな艶姿を凝々と眺めていたターさんは、懷中から手帖を取り出し白紙を引き破って、細い鉛筆で床柱に長襦袢一枚で髪や膝が乱れて胸の捌けた濃艶な綾香の立姿を写生して独り喜悅に耽っていたが、夫れにも飽き足らず細いステッキを振り上げ、綾香のふくよかな肩を右から左へ、左から右へと殴り付ける。その都度、綾香は

「アッ、痛い」も口の中、首や身体をばくくの字型に揺ぶし、頭を俯向け髪毛がお乳の辺りまで垂れ下がり、両膝を左右に割り、緋縮緬の腰巻をチラチラ覗かせる。今年三十六歳になった女盛りの綾香の顔は、見る見る内に真蒼になって来る。寒さと痛さでガタガタ震えが弥が上に激しくなる。遂にその苦痛と寒氣に堪え兼ねたのであろう綾香は「アッ、痛い。もう許して？」

微かな悲鳴を何遍も繰り返し、果ては両眼から冷たい涙を幾筋も、顔を濡らすのであった。漸やく写生を終えたターさんは、何とも云わず綾香の縄目を解いて遣り、その柔かい身体を抱えて元のお座敷に戻って来た。その酷たらしい綾香の姿を眺めたターさんは、同情するらしい口勿で、

「お女将、随分痛かったろうナ……」

「ええ、ほんとうに痛かったワ、それに長襦袢だけでしよう、随分寒かったワ」

「左様だろう、この寒中ではネ……」

「ツーさん、見て御覧、こんなになったワ」

と両手を差出し、縄目の跡形をお客二人の前に見せ付け怨めしそうな眼付きで、半泣き顔で苦痛を訴えながら、そこに脱ぎ捨てた着物を着直すや否や、二人の間へ座り込み、

「ああ寒い、一杯頂戴ナ……」

お客も寒いという顔付きで、主客三人が生温いお酒を交るゝ飲み続け、何れも身体の

暖ったころ、ツーさんは微笑を含んで、

「お女将、後手に縛られて責められた時の氣持というものは、可いもんだらう」

「ええ、最初に縛られて玉転がしにされた時はそれほどでもなかったが、長襦袢ぎりて柱に縛られステッキで無茶苦茶に殴られた時は随分と痛かったワ、それに寒いと来ているんでしよう、ほんとうに辛かったんです。早う止めて欲しくて泣いたワ」

「勝気なお女将に似合わぬ弱虫だナ……ハハ」

「でも、両手を堅う後に縛られているんでしよう、柱に縛られて自由が利かんでしよう、そこへターさんが継子虐め見たいに、人のものだと思ってビシヤビシヤ叩くんでしょう、痛いし寒いしね、でも叩かれる度毎に、モツと強く叩け死ぬほど叩けって意地になって歯を喰いしめて辛抱していたんですが、息も詰ったワ」

「それで許して呉れと悲鳴を挙げたんだネ」

「そう、痛かったし狼轡され、寒いんですもの……ほんとに泣かされてヨ……」

「ハハ……もうあんなお芝居なら可厭やと仰言つてるところかナ……」

「でも何とも云えない可い氣持したワ」

「そんなら、今一つ責められて見な？」

「そうね！、変ったお芝居ごとなら？」

三人の話は追々責め実験へ深刻化して来る

その好機を見出したツーさんが、お次は僕とお女将の二人が責められ役に廻わり、ターさん下ッ端役人を勤めて貰い、最終の悦唐気分を味うかと誘いをかけられ、ターさんと女将とが互いに顔を見合わせ、笑いながら快諾の様子を見せるのであった。

三人はなおも残りのお酒を汲み交わしてい



る内、ツーさんがお女将に別の娘風の着物を持ってくるよう頼んだ。ハイと答えて女将は階下の自分の部屋の簞笥から、彼れ此れと選び出した着物や縄を風呂敷に包んで、新らしい爛徳利数本と共に、二人のお客の前に差出し、二人にお酌をする。稍々あってツーさんが風呂敷包を開いて着物を取り出し、女将に

手伝わせて女装する。出来上った女装の姿は美事なこれも下町娘風である。

かづらは、芸妓用の高島田ではあるが、着物は紫地の銘仙、裏は桃色の総裏で、白の四本並びの碁番縞、帯は大柄牡丹を散らした広幅帯、赤地に桔梗大柄白抜ききのモスの長襦袢、薄桃色の扱帯と緋モスの腰巻、白足袋などを纏うたのである。

顔は比較的色彩白だと自惚れ、女将の勧めをも聞こうともせず素顔のままの姿である。

「まア、ほんとうに可愛らしいお嬢さんになったワ、妾、惚々するわヨホムム」

お愛嬌とも冷やかしとも付かぬお女将のお世辞にも耳を藉さぬツーさんは、女装姿で食卓の前にキチンと座る。側にターさんと綾香

とがニヤニヤ笑いつつ、また盃の数を重ねる。可い加減ごろを見計ったツーさんは、お女将の手を握って起ち上り、

「さア、美人の綾香女将と女装の僕との二人は、彼の下庭前でターさんに釣瓶責めにされるんだ? 可いかネ」

「釣瓶責めってどんなこと?」

「君と僕とが後手に縛られて、二人一緒に庭の井戸の上に吊られるのだ」

「でも彼の井戸はほんとうの井戸ではありません、唯だ井戸縁を板囲いしているだけヨ」

「それなら、水がなくて危険がないネ」

「そうそう、彼の釣瓶の綱も車も随分古いもので、二人が吊されたら直ぐ壊われて終うワ」

二人の押問答を側で聞いていたターさんは枯泉水の雪見の松よりも、春日燈籠の後の枝振りの可い赤松の方が可かろうと思って、二人をその松の枝に吊り上げようかと持ちかける。肝心主役の綾香は手を振って、

「庭前では迎も寒いから、お座敷でしましうヨ、不可なければ彼方の物置だったらどう？」

「何アニ寒い位はなんだい、お酒で身体中が温っているじやないか」

「でも妾、寒いんですもの」

どうしても綾香は屋外での吊り責めは可厭じやと、容易に首を縦に振らぬので止むを得ず、お粗末な物置で責められることに肚裏を決めたターさんは、少々場所は気に食わぬとしても、相手に頑張られては致方がないと断念したものか、強いて異議を申立てず、また盃を数杯挙げる。綾香も腰紐を解き着物の裾を長く曳き、ターさんも長裾を曳いて、三人ともにこのお座敷を出て、長い廊下伝いに内

庭に降り、十数間離れた物置の方へ足を向ける。お女將は前に進んで物置の戸を開けると中から味噌桶、沢庵漬、布切れなどの可厭な陰気な悪臭が鼻をついた。ターさんはお女將の後に続いて中に入るや否や、「これは可い恰好の責め場所じやわい！……」と独りハシヤいでいる。そして足場に奥の方に転っている石油箱と空樽とを持ち出し、天井を眺め吊り場を探している。お女將は隅の方の梁を指差し「彼れならどう？」というので男二人はそれに同意して、先ず足場と吊り場を見付けターさんは座敷から持って来た麻縄で後から、綾香の両手を高手小手に帯の上に緊縛してから、剩った縄尻を梁から吊り下げた。別の棕櫚の縄と共に帯の間に結び付ける。綾香の両足は石油箱の上で震えている。ターさんはまたターさんに、自ら両手を後に廻わし同じく後ろ手に強く縛って、綾香の縛った棕櫚の一端を帯の間に差込んで貰い、空樽の上に昇り釣瓶吊りの姿勢が整うたので、ターさんは綾香に目配せしてから二つの踏台を蹴り除けると、忽ち綾香とターさんの身体が一寸ほど下がり、背中合わせに釣瓶責めにされ、一塊となって二、三度クルクル廻わされた。二人とも俯向き両足をバタ付かすので、紅い腰巻が時を得顔にチラ付く。そこをターさんが、竹箒で吊り下げられた男女二人の背中と云わず、腰のあたりをビシヤビシヤ何回

となく殴り続ける。五、六分間もすると身体の重量で、縛られた縄目が身に喰い入り段々苦痛が増して来る。二人の顔は次第に蒼白となり、額に冷汗が滲み出て来る。首を左右に振る毎に髪の毛が乱れる。腰紐を締めていたので両足をバタ付かす毎に、着物の裾から膝前の崩れが拡がって来る。

特に同じ釣瓶責めに会っているターさんの鼻へは、苦痛に堪えている綾香の女肌の香、脂粉の匂いや、自分の体臭が同時に入ってきて、何とも云えぬ境地である。責め役のターさんも亦、始めて眼前に展開された。妖艶な綾香と女装のターさんとの、吊り責め釣瓶責めをジッと視詰めながら、絵や写真を見るよりも実物の責め場を、その雰囲気は恍惚として全身の血を逆上せしめるほどの醍醐味に耽っていた。全く男女の釣瓶責めは、徳川幕府創設当初に行われたという豊臣方の敗将石田三成の子と伝えられる。妙令の姉妹の釣瓶責めを地で行くようで、滅多に見られるものではないなろうと思ひながら、ターさんは竹箒を握ったまま暫らく責め手を休めていた。

「あッ、苦しい」と綾香が叫ぶ。

「うん、痛い」とターさんも叫ぶ。

「息が……息……が切れる……」

「ゆる……して……」

綾香もターさんも殆んど同時に、惨酷な釣瓶責めに「救けて……」と悲鳴を上げる。下

に突ッ立ったままのターさんは溜り兼ねて、転がしている石油箱を立て直し、その上に立って横合いから、綾香のお尻から腰のあたりを強く抱き締め、力を籠めて自分の方へ身体を引ッ張って行こうとする。

「あッ、痛い、苦しい、早う……タタ許して……」と綾香が身を藻掻く。

これを三遍繰り返し遂に大声を上げて泣き出した。ターさんもまたターさんの顔を恨めし相に睨んでいる。此の程度の責めで可かるう位に思ったのか、ターさんは元通り足場を整え、二人がその上に立ち直ったので吊り縄を解いて遣ったまでは可いが、二人の縄目を解こうとはせず、その縄尻を取って二階の元のお座敷に引摺り、二人をそこに座わらせた。「君達お二人は随分可い目を見ただろうが僕はまだ満足して居らんヨ」

「ではどうすれば一体可いんだらうかね」

「この部屋で一人々々逆さ吊りにして慰み度いんだがなア……」

「まア……この上に逆さ吊りですの、妾、もう可厭々々、可厭だワ」

「まアそう怒るな、逆さ吊りも可い気持ちするぜ？」

「もう沢山、釣瓶責めされて、充分可い気分でしたワ、随分痛かったけど……」

「ではその逆さ吊りに責められて見よう」

「ターさん、もうお止めなさいヨ」

「イヤ、僕はお女将の今着ている着物を着せて貰って、女将の肌の匂いをモ一度味わって見たいのだ」

「この着物なら着せて上げますから、逆さ吊りだけはお止しなさいヨ、お身体の為にはなりませんワ」

綾香とターさんとの話の遣り取りを凝つと

聞いていたターさんは、何を思ったか、その場で、堅く縛った二人の縄目を解いて遣る。

綾香は両手を大きく拡げて、ホッと溜息を吐くと、ターさんも側の冷酒を飲んでいた。お

女将は直ぐ様自分の着物を脱ぎ、ターさんの着物をも脱いで遣り、二人の着物の交換が終るのを俟っていたターさんが起ち上って、今

ターさんが座るや間髪を入れず、右足を上げて背後から帯のあたりを強かに蹴り上げた。

不意を衝かれたターさんが、前へ挫つと斜に転がったところを、情け容赦もなく再び後

手に縛り上げ、更に腰から下へグルグル巻に強く縛り、刺った麻縄を引き締めてターさん

の身体を、次ぎのお座敷まで畳の上を引ッ張り、鴨居に逆吊りにして責め折檻しようとし

たが、相当お酒に酔っているターさんは「頭を下に吊り下げられ充血してはたまらんから

逆吊り責めだけは廃めて呉れ」と哀願するので、逆吊りを取り止め再び両手両足を雁字が

らみに縛ったターさんの身体を、畳の上を引摺って元の綾香の居る座敷へ引返して、また

冷酒をグツと二、三杯飲み乾しながら、側に横たえられ着物が捌け、裾から紅いお腰の覗いている女装のターさんを飽かずに見入っていた。ターさんも亦縛られた身体を自ら四、五回座敷中を転がり、思う存分に、責められ役の醍醐味を満喫するのであった。

纏てターさんの縛りが、綾香女将の手で解かれ、三人は改めて「酒だ」と呼び合ひながら、階下帳場で大火鉢を囲んで、最後の酒盛りに移り、女将のみは着のみの儘で、ターさんは女装を解いて貰い、元の着物に着替えてから、三人は暫らく交盃していたが、新春早々の此の緊縛遊戯の幕を閉じ、夜の七時過ぎごろ、ターさんターさんのお友達が、綾香女将に表通りまで見送られ「またお近い内に……」の御愛嬌を後にサヨナラをするのであった。
(おわり)

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円(送共)

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妾、七、十郎左エ門と腰元八、小紫と悪徳本、以上八場面。

マヤの黄昏たそがれ

山 川 和 男

城門を出た葬列が街はずれの小高いピラミッドの丘に達して間もなく陽は西の山に沈んだ。荘厳なエク・バランの葬儀が最高潮になり、悲しみの歌声が丘に満ちた時、突然、闇の中から数十本の矢がまるで的を狙うような正確さで飛んで来た。忽ち数人の者がドツと倒れた。

矢は雨あられと降りそそぎ、それに混って投石具で投じる石も飛んで来る。

一瞬の中に葬儀は大混乱に陥り、人々は、右往左往逃げまどった。やがて、ときの声を挙げて、数百人の集団が、槍を、斧を振って打ちかかって来た。

イキ・バランは、とつさにマヤパンの反撃だと直感すると、父の敵とばかり、斧を振りかぶって、群がる敵の真只中に割って入った。エリカは、ふとエクスバの抱擁が少しゆるんで楽になったような

気がした。誰かが自分を助けてくれている様子、エクスバが、目を開こうとしても、まぶたが確り閉じられて、開かない。その中、また気が遠くなってしまった。

チチエン、イッサの軍は、完全に不意をつかれて、目茶苦茶に痛めつけられた。

イキ・バランは、辛うじて血路を切り開くと、城へ入った。ここでも又肉弾戦がくりひろげられていたが、城を守っていた兵士達の捨身の奮戦で、どうにかまだ持ちこたえていた。

しかし、城に残っていた兵は僅であつたし、外から囲みを破ってたどりついた者を合せても、満足に戦える者は百人に満たなかった。城をとり囲む高い城壁から闇を透して見ると、敵はすっかりと王城を包囲して、しきりに矢や、石を打ち込んでくるのが見えた。あちこつから聞えていた小競合の叫び声も一つ一つ消えて行く。

イキは口惜しさに氣も狂わんばかりであつた。おのれ卑怯者め、マヤパンの奴等、いまに、いまに目に物を見せてやるぞ、と、しきりに力むが、これだけの兵力では、明日の朝まで持ちこたえることも難しそうである。

どうせ駄目なものなら、一思いに打って出て切って切って切りまくろうと思案を定めた時、ふと、人の氣配に後をふり向いた。

マランだった。犠牲として捧げられるために体中にたき込められたオリガの香りが、まだ全身から強くただよっていた。不思議な笑いを浮べているマランをイキは、無氣味に感じた。生捕り競技の時の振舞、生贄となりながら、奇蹟的に命をとりとめ奴隷の身から解放された彼女には、不思議な力が潜んでいるように思われた。

「敵の攻撃を止めさせるよい方法があるんだけれど」

「何に、攻撃を止めさせる？」

「そう、ぴたりと止めさせる」

「何んだ、それは」

「エリカよ、エリカを使うの、エリカは敵の指揮者エクスバの恋人なの、だから、エリカを使えば……」

「そうか、しかし、あいつは犠牲にしてしまったじゃないか」

「ふふふ、ちゃんと私がここに連れて来てあるわ」



「よし、解った」

イキはあの混乱の中からエリカをつれて来たマランにあきれる位だった。すぐに兵士達に命令して、広場に面した城壁の上に十字架を立てさせた。マランは、いつの間にか粘液も、紅も洗い落した真白いエリカの身体をかかえて来た。兵士達は全裸のエリカを大の字型に十字架に括りつけ上から全身に薄い布をかけた。それから松明を十本程まとめて火をつけ、敵陣からよく見えるように照した。

赤々と燃える火に、エリカの裸身が白く浮んだ。敵はビタリと弓矢を止めた。

いくら女は財産としか認められてないマヤの社会でも王女ともなれば又話は別である。ましてや、今夜のマヤパンの指揮者若き貴族エクスバは、エリカの恋人であった。彼にとっては、先頃エク・パランにマヤパンの都ウスマルを襲った仕返しのためというより、エリカを奪い返さんが為に行った夜襲であったのだ。それが、今、目前に、エリカの痛ましいはりつけ姿を見ては、どうしても矢を打ち込むことが出来なかったのは当然である。

城内では、攻撃が止んだので、イキを始めとして皆ほっと一息ついた。

これからの処置をどうするか、種々の意見はあったが、一時城を落ちのびて、再起をはかろうということになった。

城には、あらかじめ秘密の地下道が掘ってあった。敵が攻撃を中止している間にこっそりと脱れ出るようになった。

「エリカも連れて行くわ、何かの役に立つかも知れないから」マランが云った。

「馬鹿、エリカは、ああやってはりつけにしてあるからこそ、敵が攻めて来ないのじゃないか、それをどうして……」

「この人を身代りにするのよ」

マランはそばに居た太守の娘を指した。なるほど、その顔、体つきは、エリカと似かよった所がある。夜ならば分らなくてすみそうだ。その娘は、ギクリとして一足後に下がったが、もうマランに手首をつかまれ、着物を脱がされ始めていた。女は裸にされた上、声を立てられぬよう、確りと狼嚙をかまされた。

松明の火を暗くしておいて、手早くその女とエリカをすり替えて、又、松明を輝かせた。

イキを先頭に兵士達は、水のたまった秘密の地下道を急いだ。

松明の光に、影法師がゆらゆらとゆれる。ビシヤビシヤと云う足音が、反響で、地下道を一杯にした。

イキパランのかたわらには、マランがびったりと寄り沿って歩んだ。

その後にはエリカが黒い布で全身を包まれた上、嚴重に縄をかけられて、まるで荷物のように、兵士の肩にかつがれている。

「地下道を抜けたら、皆ばらばらになって逃げるんだ。そして、次の満月の夜までに、ラブマの谷に集れ、よいか、分ったな」

イキの声がガンガンと反響した。

幸、地下道の出口には、敵も気がつかなかったらしく一人もその姿を見せなかった。

三人、五人と兵士達はばらばらになって闇の中に消えて行った。

イキは、五人の屈強な兵士と、マランそれにエリカの八人となって南の山地目がけて落ちのびて行った。

東の空が、かすかに白みかけた頃、エクスバは城の中が余りに静かなので、ふとある疑念に、ドキリと胸を突かれた。

すぐに、城門を叩き壊して入城すると、敵兵の姿はなく、十字架のエリカも、いつの間にか、別人と変っていた。

城の中には二百人余りの女奴隷がつかれていて、その中には、先頃、ウスマルから捕えられて来たマヤパンの女達が大勢混っていた。彼女達は、救い出された喜びに、踊り上らんばかりだったが、哀れなのは、その他の奴隷女と、新に捕えられた。チチエン・イツサの娘達であった。エクスバを始め、マヤパンの者共は、先日の恨を、これ等の女達の上に思い切りぶちまけた。

中でもエリカの身代りに十字架にかけられていた太守の娘は惨じめだった。エクスバは女を十字架から降すと、両足に別々に綱を結びつけ、その綱をマヤパンの女達に引かせ、股裂にした。

全捕虜の虐殺を部下に命令したエクスパは俊敏な手兵を率いて、エリカとイキ・バランを求めて城を後にした。

残された兵士共は、あらん限りの暴虐を、チチエンイッサの女達に加えた。

火焙り、磔、水漬け、串ざし、血に狂った兵士は我勝ちにと女達に襲いかかった。

女達の断末魔の叫び声が、至る所から響いて来た。マヤパンの女達も、今まで自分達を責めさいなんでも来たチチエンイッサの者を殺すために、ありとあらゆる残虐な方法を考え出しては、兵士と一緒に虐殺に協力した。

昼を過ぎた頃には、さしもの大虐殺もあらかた終り、まだ息絶えぬ女達のかすかなうめき声が、わずかに聞えてくるだけで、気の抜けたような静寂につつまれた。

建物のあらゆる柱、街のあらゆる樹木には裸女がくくりつけられて殺されている。

犠牲のセノーテは死体で埋ってしまった。

城内は血と脂でぬるぬると滑った。

風もないのか、かんかん照りつける太陽のもとに、血の匂がよどんでいる。

マヤパンの兵士達は昨夜からの疲れに、あっちこっちの樹蔭に睡り込んでしまった。時々、ケッサルが二声、三声高く鳴いて飛んで行った。

エクスパはエリカを探し求めて、草原を突切って急いだ。

草原を抜けて高地にかかる、はるか向うに五、六人の人影を見つけて、われこそと気負い立って追跡したが、追いついて見ると、エリカではなく、マヤパンの敗残兵であった。そんな事を何回が繰り返しているうちに時をすごして、とうとうイキバランの一行は逃れ去ってしまった。

イキ達八人は、山道をラブヤの谷に向っていた。しかしラブマの谷までは遠かった。追手の心配がうすらぐと、先ずはげしい喉の渇きに苦しめられ、次いで昨夜からの疲労と空腹に、一歩も歩けなくなった。仕方なく大きな岩蔭で一休みすると、いつの間にか、皆前後不覚に寝込んでしまった。

エリカは黒い布に包れたまま、かたわらに放り出されている。

マランは寒さにふと目を醒した。もうあたりは真暗になっていた。何か獣の音が聞える。不安にかられて、彼女は皆をゆすり起した。兵士達は、疲労がいくらかでも回復すると、しきりに空腹を訴えた。

「もう暫くの我慢だ。明日中にはラブマにつく。そうすれば食物も、酒も、いくらでもある。我慢しろ」

「明日まで持たないです」

「無理を云うな、ここに何も無いことは解っているだろう」

「ふふふ、イキそこに上等の肉があるじゃないの、黒い布に包んでね」

「馬鹿、エリカは大事な人質じゃないか」

「ふん、もうここまでくれば人質なんか必要ないじゃないの、エクスパなんて、ここまで追って来るものか。この柔らかい乳房、きつと美味しいよ」

云いながらマランは早くもエリカの縄を解き、黒布もはぎ取り始めた。

「待て」イキはマランの髪を掴んでひき倒した。

「俺が食物を探してくる。少し待っている」弓矢をとって歩き出した。

「ふん、何にもとれるもんか。一刻だって帰らなかったら、エリカは、皆のお腹の中に入れてしまうよ」マランはエリカを嫉妬してい

たのだ。

イキは仲々帰らなかった。

マランはエリカの縄をすっかりと解くと、エリカは殆んど息も絶えんばかりにぐったりとして、縄をとかれても、兵士共の目が光ろうとも、身動きもしなかった。マランはエリカの乳房をしきりにもて遊んだ。マランの固い乳房にくらべると、エリカのそれは、いかにも柔らかく、豊かだった。「イキはエリカが好きなんだ、なんだってこの女を、あの時ピラミッドから助け下したのだろうか。」思わず指先に力が籠った。エリカはかすかなうめき声を上げて、僅に身体を動かした。正気に返ったらしい。「この細い首を締てやろうか」マランはエリカの身体の上に馬乗りになった。

首に手をかけた丁度その時、イキが何かを重そうにひきずって帰って来た。

マランは手をはなした。

獲物は猪であった。

兵士達は急に元気づき、木をこすって火を起す者、皮を剥ぐ者、間もなく猪の肉の焼ける匂が皆の鼻をくすぐった。

兵士達は焼けるのも待ち切れずに貪り喰った。イキも、マランも、そしてほんの僅かではあったがエリカさえもその肉を口にした。忽ち元気が回復して来た。

イキは兵士に命じて、木の檻を作らせた。

黒布もはぎ取った。エ



これにエリカを入れると、棒を通して兵士にかつがせて、再び歩き出した。エリカを縄でくくるのが余りにも痛ましかったからである。満月の夜、ラブアの谷には、チチエン・イッサの残党の外に、チ

チエン・イッサとは深い関係のある幾つかの小部族の者も集り、総数は千人に近くなった。

イキ・バランはこれ等の軍勢を率つて、チチエン・イッサの街を奪い返しに山を下りた。

マラン、エリカ、その外十四、五人の女達だけが、ラブアの谷に残って、チチエン・イッサに帰れる日を待った。

エリカは、大分元氣になつてゐた。檻から出されたエリカは、やっと手だけは縄をかけないでもらつてゐたが、足には重い足枷を掛けられて、ヨチヨチと歩いてゐた。

マランはエリカが憎かつたが、その優雅な物腰と、云いつけに少しも逆らわない素直さに、愛情のようなものも感じてゐた。

マランはエリカの世話を誰にもまかせず一人でやつてゐた。

朝起きると、セノータで身体中を洗つてやつた。エリカはおとなしく身をまかせてゐた。食事は、マヤの常食である玉蜀黍で作つたトルテイリヤを口まで運んでやつたり、時にはマランが口で嚙んだのを口移しにエリカに喰べさせた。また或る時には、身体中に蜂蜜を塗つて肌を磨いてやつた。夜は、エリカの身体をしつかりと自分の身体に結びつけて眠つた。

しかし、気嫌の悪い時には、マランは憎しみに燃えてエリカを責折檻することもある。縛つたエリカをあお向けに寝かして、乳房の上に両足で乗つかつて踏みつけたり、口に粘土をつめ込んだり、ひどいいじめ方であつた。

しかし、エリカは、そんな乱暴なマランを少しも怖れなかつた。さからいもせず、おとなしくされるままになつて居た。マランは余りにおとなしいのに余計腹を立てて、ひどくいじめることもあつたが、何か拍子抜けして責を途中で止めてしまふこともあつた。

十日程たつて、イキ・バランから、チチエン・イッサを奪い返し

たから、もどつて来るようにとの連絡があつた。女達はやつと自分の生れた街に帰れることを踊り上つて喜んだが、マランは、エリカをイキと又会せるのかと思うと氣が重かつた。しかし、一人残るわけにもゆかず、チチエン・イッサに向つた。

チチエン・イッサの街は、まだ血の匂が消えてゐなかつた。至る所に血の痕がドス黒く浸み込んでゐた。王城の中も、柱や、壁に無数に血のあとが残つてゐた。

しかし、血なまぐさいことに慣れてゐるマヤ人たちは、それほど氣にもせず、再び住みついて、街は次第に活氣をとりもどした。

先頃、マヤパンの襲撃を受けた時に、若い娘の大半は殺されてしまつたので、チチエン・イッサの街は、女の姿が極く少なくなつてしまつた。それで、イキ・バランは、今度の反撃で捕えたマヤパンの女達を、兵士達の働きに応じて分配してやつた。

それ以後、街の通りには、不思議な二人連れの男女の姿が盛んに見られるようになった。

後手に括られた女と兵士、首かせをかけられた女と貴族、手枷の女と僧官、などなどが恋人同士か、夫婦のように腕を組んで歩いてゐた。まるで首かせは首飾り、手枷は腕輪、縄はアクセサリーであるかのようだった。

エリカは、外の奴隷達とは別に一室に檻禁され、相変らずマランが世話をやいたり、いじめつけたりして居た。

マランは、いつとはなしに、イキの妻、すなわち王妃のように振舞つてゐた。貴族達は奴隷の出で智るマランを心よくは思つてゐなかつたが、その妖しいまでの美しくさと、不思議な才智に押されて、不承不承、彼女の命令に服するようになってゐた。彼等には、マランをまるで魔女のように思い込んで恐れてゐた。

イキ、バランは、そんなマランを、苦笑しながら黙つて見てゐた。

彼には、マランが何んの変りもない唯の女そのものであることを知ってはいたが、幾分か彼女の才智と激情とを恐れる心もあった。

チチエン・イッサの国力が次第に回復してくると、イキ・バランは、再び兵を起し、マヤパンに対して、最後の決戦をいどんだ。

「エクスバを殺すか、俺が死ぬかだ」彼は心に誓って城を後にした。エリカはあんなに好きだったエクスバを殺しに行くイキを、何故か憎めなかった。打ち続く苦難に彼女の心はすり切れてしまったのか、或は……

マランは城に残っている事を命じられていたが、イキが出発するや否や、髪を切って男装をし、一人ひそかにイキの後を追った。

チチエン・イッサを出て、三日目の夜、イキの軍勢は、ウスマルに近い、小高い丘に陣取って夜営していた。

一人ポツンと離れて、明日の決戦に考えを巡らせていたイキは、ふとオリガの匂を鼻にした。「マランか？」振り返ると、矢張りマランが男装をして笑っていた。

「何を考えているの」

「馬鹿、城に残っていると云ったのに、何んで出て来た。」

「ふふふ、こわい顔して。何故来たかって、私がこなければ、イキあなたは今夜のうちに死骸になっていた所よ」

「何を、馬鹿な」

「まだ知らないのね、危ない危ない。ウスマルの街には今頃敵兵は一人も居ないわ、エクスバはもうそろそろその辺に現われる頃よ」

「本当か、それは」

彼の頭にあの葬儀の夜に受けた、手ひどい夜襲の光景がチラリとかすめ過ぎた。

彼は、直ちに全員を呼び集めると、ひそかに陣を移した。

移動が終るのを待っていたように、今までいた丘に、どこからともなく矢が狙い射ちに射かけられて来た。

エクスバは、まだチチエン・イッサの軍がそこに居るとばかり考えて居たが、幾ら矢を打ち込んでも何んの反応もないので、咄嗟に計略の失敗を覚り、あわててウスマルの城へ引き返そうとした時、行手から突然、弓矢を、雨のように注がれた。奇襲する積りが、逆に奇襲されて、大混乱となった。

イキは斧をふるってエクスバの軍に斬り込んだ。暗闇の中で激しい肉弾戦が繰り広げられた。暗さは暗し、次第に敵味方の区別もつかなくなった。

その時、誰かが草原に火を放った。乾季も終りに近づいて、草も枯れかけていたから、火は忽ちの内に燃え広がった。火を放ったのはマランらしかった。

赤い焰に照らされて、兵士達は地獄の赤鬼のようになって戦っている。

やがてエクスバの軍は総くずれとなって、ウスマルの城に逃げ込んだ。いつの間にかマランはその中にまぎれ込み城の中に入っていた。

イキの軍は、その後を追って城をとり巻いた。しかし城門はかたく閉され、城壁は高く攻めあぐねて、ただ徒らに周りから矢を射かけるだけであった。

城内に入ったマランは、先ず地下の奴隷倉に忍び寄り、中に捕えられていた奴隷達を解き放した所を通りかかった番兵に発見された。数十人の女奴隷達は右往、左往逃げ廻ったが、殆んど女はすぐに捕まってしまった。

マランは追いかけて来る兵士を、巧みにかわして、城内の石垣の間を逃げ廻ったが、段々追いつめられ、奥へ奥へと逃げ込んだ。次第に近づいてくる足音に、咄嗟に右手の扉を開いて中の部屋に入り

中からしつかりと扉を押えた。と、いきなり、後から強い力でぐっと抱きすくめられた。南無三、エクスパの部屋であった。忽ち、マランは息も止るばかりにひどく括し上げられた。エクスパは、今夜の夜襲の裏をかいたのはこいつだとさとしたか、怒りに体を震わせて、倒れているマランを力一杯けとぼし踏みつけた。

「こいつら、全部を城壁から逆さ吊りにしろ」エクスパは命じた。

兵士達は三十人からの女を、足首で括って城壁から、ダラリと吊り下げた。

特にマランは、全裸にされて、一段と高いやぐらから吊り下げられ、そばに立った兵士に、その均齊がとれて伸び伸びと発達した肢体を笞打たれた。

イキは、吊り責められている女がマランであることを知って、驚き身もだえた。

「早く、早くなんとかしてやらなくては殺されてしまう」、彼はあせった。吊されているマランを目前にして、彼はいかにマランを深く愛していたか、始めて解った。「あの門さえ開けば、あの門さえ」彼は門じつと見据えた。と、気のせい、門が少しずつ

開き始めた。彼は目を疑った。しかし、確かに門は開いて行く。

イキは敵の策戦かも知れぬとは思ったが、先頭に立って無二無三城内に突進した。

それは策戦ではなかった。マランに救われた女奴隷の一人が首尾よく逃げのびて、城門を開いたのである。

エクスパは、突然攻め込んで来た敵兵のために不意を打たれて、ほどこす術がなかった。彼はただ一人、血路も開いて城外に逃れ去



った。

イキは真先にやぐらに駆け昇り、マランを助けると、力一杯抱きしめた。マランは幸福そうにじつと目を閉じていた。

この戦でマヤパンは殆んど全滅してしまった。逃れたのはエクスパの外、ほんの僅かにすぎなかった。

しかし、イキは、エクスパが逃がしたと知ると、すぐに追撃をかけた。

マランは必死になって追撃することを止めた。それはエリカに対する嫉妬からばかりではなく、何か厭な予感に、しきりと胸が騒いだからであった。

しかし、イキはきかなかった。「エクスパの首を土産にすぐ帰ってくるから」と云って出て行った。

マランはしばらくの間、その場に泣き崩れていたが、やがて顔を上げると、ウスマルの城から抜け出した。

「イキがエクスパを殺すなら、私はエリカを殺してやる。」マランはチチエン・イツサに向って歩きだした。

それから二日目の昼頃、イキはやっとエクスパを見つけた。エクスパはたった一人であった。

イキの部下は、エクスパをぐるり取り囲んだ。

「命令するまでは手出しをするな。」イキは部下に命じると唯一人、エクスパに近ずいた。

「とうとう追いついたな、エクスパ、さ、一騎打だ。こいっ」

「よし、相手になってやろう。だがエリカはどうした」

「無事だ、ゆくぞ。」

イキは斧をふりかぶった。

エクスパは槍を低く構えた。

周りの兵士達は息を呑んで、じっとこの一騎打を見守った。

双方、じつとにらみ合ったまま、じりじりと近づいて行った。

「ヤーッ」エクスパが突っかった。イキは辛うじて、これをかわすと、エクスパの手もとに跳び込んで斧をふり降した。エクスパは槍でこれを防いだ。

両者は力の限り戦ったが仲々勝負がつかず、またじつとにらみ合った。

二人の頭に、ふとエリカの面影が浮んだ。

「エーイッ」二人同時に突っ込んだ。互に手ごたえあった、と見た瞬間、

ドドンと百雷の一時に落ちるような轟音とともに、目のくらむような光が閃めき、烈風が彼等の身体から吹き出した。周りを取り囲んでいた兵士達は、強い衝撃を受けて、地面に打ち倒された。

頭から砂をかぶった兵士達が、恐る恐る頭をもち上げると、そこにはイキの姿もエクスパの姿もなく、大きな穴が一つポカリと開いていた。兵士達には何にがなんだか解らなかった。すると、又ドドンと轟音を発して又火の玉がはじけた。

ドカーン、ドカーン

恐ろしい火の玉は、次から次へと爆発した。その度に幾人かの兵士がふっ飛んだ。兵士達は神の怒りにふれたものと考えてる外なかった。

爆発が一段落すると、向うの丘から、恐ろしく大きな怪物にまたがった、不思議な姿の人間が幾百人と押し寄せて来た。手に手に、キラキラ光る白い蛇のようなものを持って、何かわけのわからぬ叫び声を挙げて、すごい速さでせまってくる。

スペイン人の襲撃であった。

フランシスコ・コルテスに率いられたスペイン人の一隊は、メキシコのヴェラ・クルス附近に上陸し、メキシコ高地に栄えるアステック帝国を攻め立てたが、その別動隊は、ユカタン半島にも上陸し統一を失って、部族同士、互に相争っているマヤ帝国残党の各クランを、一つ一つ打ち破って進んで来たのだった。

エクスパとイキを一発の大砲で吹き飛ばし、怖れおののく、マヤ人達は馬のひずめかけサーベルで切り払った。

騎兵の一隊が通り魔のように過ぎ去ると、マヤの兵士は一人残らず、草を紅に染めて、死んでいた。

馬を知らないマヤ人達にとって、始めて見た馬は、大きな怪物と

しか見えなかったし、鉄のサーベルには、木の槍など一撃で断たれてしまった。

まして、大砲などは、どうにも理解出来ないのも当然であった。

スペイン人は、その日の内に、ウスマルの城を占領し、チチエン・イツサに向っていた。

こんな事は知らないマランは、やうとチチエン・イツサに帰りついた。

すぐにオリガの部屋に入ると、

「エクスパは殺されたよ」じっとオリガを見据えて云った。

オリガは何も云わなかった。ただ長いまつ毛を見せて目をつむり顔を伏せた。

「オリガは私が殺してやるわ」

マランはオリガに飛びかかり、引き倒した。馬乗りになると、めうで作った小さな短剣を抜いて、左の乳房に押しつけた。と、その瞬間、

ドカーンと又してもスペイン人の大砲が間近で炸裂した。あほりを喰って、マランは壁に叩きつけられて、気を失ってしまった。

ここでも、スペイン人は無敵だった。マヤ人達の僅かばかりの反抗を、苦もなく圧倒し、王城にスペイン国旗をはためかせた。

勝ち誇ったスペイン人は、若い女を除いてすべてのマヤ人を惨殺した。

射撃練習の的にしたり、フエッシングのけい古台にしたり。大勢集めて、石油を浴せて火を附けたり、ありとあらゆる方法で、殺りくを、ほしいまにした。

スペイン人の襲来のために、千五百万人と云われたマヤ・アズテッ

クの人民が、わずか百万以下になってしまったという事実は、スペイン人の暴虐が、どんなものであったか想像出来る。

チチエン・イツサに腰を据えたスペイン人達は、後から軍人以外の種々な人物が乗り込んで来た。女も居た。

商人も居た。商人達は略奪した金・銀・宝石、カカオなどの外にマヤの女奴隷を取り引きの対象にしていた。彼等は奴隷市で、女達を安く買い集め、一人一人小さな鉄の檻につめ込んで、馬車に積んで港まで運び、船に乗せた。

エリカとマヤは、幸か不幸か、奴隷商人の手で輸出はされなかったが、二人共スペイン軍の司令官の妾であるカルメンの所有物となっていた。

カルメンは、手のつけられない、じやじや馬女であった。二人のマヤ娘をよほど気に入ったと見えて、一日中、はなさずに、いじめて喜んでいた。夜寝る時も、裸にして細い革のバンドで縛った二人の間に入って寝た。そして、おまえの乳房は柔らかすぎると云ってエリカの乳房をつねったり、お前の乳房は固すぎると云っては、マランの乳房に噛みついた。

朝は、前手に鉄の手錠をかけ、足枷もかけた二人に、自分の身体を洗わせ、化粧をさせた。化粧の仕方が気に入らぬと云っては鞭を鳴らし、鎖の音がうるさいと云っては、平手打を喰せた。

食事は自分の喰べ残りを与えていたが、何にかと云うと、口に革製の狼嚙をかけて、鼻から、スーブやら、ミルクやらを流し込んだ。

カルメンは二人を縛るのが大好きだった。細い縄と、革バンドや手錠、足枷、それに鎖まで使って、二人をあられもない恰好に括り上げては悦に入っていた。夢中になると、食事も忘れて、新しい縛り方を考え出すのに没頭した。

時には、司令官も一緒になって、二人をいじめることもあった。

散歩する時には、犬を連れて歩くような調子で、二人を背中合せに、胸から胴、腰、腿から膝頭まで括り合せた上、首に鎖をつけて引っぱって歩いた。早く歩かないといつては邪慳に鎖を引っぱった。最近、カルメンは馬車の調教に熱心だった。今日も、特別にこしらえた革の馬具を二人につけて、車につなぎ、手綱をしぼって歩かせていた。

「足を揃えてっ、そももっと高く挙げるの」ピシリ、鞭が豊かな尻に鳴った。

「もっと速く」ピシリ。

二人共馬のように轡をはめられているので口をきけず、喘ぎ喘ぎ前のめりになって車を索いた。

「それ、そこを右にお曲り」ピシリ、鞭が鳴ると、ピクリと尻が痙攣し、太腿がこわばった。スペインの兵士が四五人笑いながら見送った。カルメンは得意そうに胸をそらした。道はゆるい下り坂になった。二人は勢よく転る車に轢かれないうちに必死に走った。

乳房がぶるんぶるん揺れ、汗が飛び散った。カルメンは楽しそうに、鞭をヒューヒュー鳴らした。

車は街を抜け、草原を越えて行った。二人の体から滝のように汗が流れた。

とうとうエリカが倒れてしまった。幾ら鞭打っても、もう起き上れなかった。

「チエッ」、舌打ちしてカルメンは車から下りた。実は、カルメンも疲れたのだった。下りると、カルメンは、あられもなく前をはだけると、倒れているエリカにハルンを浴せた。エリカはかすかに体を動かして避けようとしたが、馬具に身を固められた身では、どうしようなかった。

朝から怪しい空模様だったが、急に一段と暗くなると、大粒の雨がふり出した。エリカの身体を洗い流そうとするかのようにだった。

カルメンはあわてて車に乗り、鞭をふって車を街の方向に向けさせた。しかし、馬は疲れ切っていたし、ユカタン特有の石灰質の土地は早くもぬかって来た。雨は一層激しさを加えて来た。

カルメンは気狂のように鞭をふったが、車は二、三步、歩いては止り、五、六歩進んでは又止った。

辺りは、一面雨で煙り、見通しも効かなくなって来た。丘のゆるい上り道にさしかかると、もう車は二進も三進も行かなくなった。エリカは泥の中に倒れてしまった。

カルメンは車を降りると、エリカの轡を取って無理矢理に引き起した。体中泥だらけとなり、美しい顔も目茶苦茶だった。カルメンは轡を取って引っぱり、長い間かかって、やっと丘を上り切った頃には、低い土地には水がたまつて沼となつたり、濁流となつて流れたりしていた。

「明るい内に、街まで帰らなくては」カルメンはあせっていた。再び車に乗ると、またピシリと鞭を鳴らした。

今度は下りなので、泥水をはね上げて、車は勢よく走り出した。車に追れて二人は、ぬかるみに足をとられながら、必死に走った。と、突然、目の前に濁流が渦を巻いて流れて行くのが見えた。

「アッ」カルメンはあわてて、手綱を引きしぼった。ヨロヨロとよろけて、エリカは立ち止りそうになったが、マランは、かまわず車を索いた。スピードに乗って、車は、「キヤーツ」と云うカルメンの叫び声を乗せて、深い水の中に飛び込んだ。

エリカが水に没した。

ドドーツと濁流の波が襲った。

マランが倒れ、車は引っくり返った。

カルメンは必死に倒れた車にしがみつき助けを呼んだ。

又、濁流の波が押し寄せた。車がゴロゴロと横に転がった。必死にしがみついていたカルメンも見えなくなった。

濁流は怒ったように、牙をふりむいて、流れる。
暗くなった空に稲妻がきらめいた。
雨が更に激しくなった。

……丁度、今夜のような雨だったのでしような。ひどい雨だ。」

カステイリヨの長い話が終った。

私は雨の底から、エリカの、マランの白い顔が浮かんでくるような気がして、ぞくぞくっと身震をした。

「寒くは御座居ませんか」
「いや、別に」

カステイリヨは、だまってパイプの煙草に火をつけた。
私もシガレットを取り出してライターをともした。
暗くなっていった懐中電燈がフツと消えた。

煙草の火だけが、ぼうつと明るい。

「もうじき、夜が明けますよ。一寸居眠りでもしませんか」
私はうなずいたけれども、とても眠れるどころではなかった。
雨が幾らか小降りになったようだ。

(終り)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十二号を数えましたが、現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (30年11月号) △売切▽

復刊第3号 (31年4月号)	二百円 (送16)
復刊第4号 (31年5月号)	二百円 (送8)
復刊第5号 (31年6月号)	二百円 (送8)
復刊第6号 (31年7月号)	△売切▽
復刊第7号 (31年8月号)	△売切▽
復刊第8号 (31年9月号)	二百円 (送8)
復刊第9号 (31年10月号)	二百円 (送8)
復刊第10号 (31年12月号)	二百円 (送8)
復刊第11号 (32年1月号)	二百円 (送8)
復刊第12号 (32年2月号)	二百円 (送8)
復刊第13号 (32年3月号)	二百円 (送8)
復刊第14号 (32年4月号)	二百円 (送8)
復刊第15号 (32年6月号)	二百円 (送8)
復刊第16号 (32年7月号)	二百円 (送8)
復刊第17号 (32年8月号)	二百円 (送8)
復刊第18号 (32年9月号)	二百円 (送8)

復刊第19号 (32年10月号)	二百円 (送8)
復刊第20号 (32年11月号)	二百円 (送8)
復刊第21号 (32年12月号)	二百円 (送8)
復刊第22号 (33年1月号)	二百円 (送8)
復刊第23号 (臨時増刊号)	二百円 (送8)
復刊第24号 (33年2月号)	二百円 (送8)

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は三冊以上まとめてお申込の方には送料は当方にて負担いたします。六冊以上一緒にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキャビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。

ある夢想家の手帖から

番外 麻生保氏に答う

新年号の「生活と意見」欄で私への長文の書簡を御寄せ下さったことを感謝します。貴方への礼儀としても、自分の意見への責任をとる意味からも、一応お答えに及ばねばならぬ様です。——別に、そらおいでなすった、とは思いませんが。

読みながら思わずニヤニヤしてしまった。という失礼に当るかも知れませんが、貴方の立論が私の年齢の推定に及んだところは、飛躍し過ぎましたね。私は大正末期の生れですから、戦後派と自らいわれる貴方よりは年長にせよ、せいぜい兄貴位のところで、貴方の年代を理解すること貴方の父君の比ではないつもりです。今度の戦争に学徒出陣した時のことを度々書きましたから、まさか私をそんな老人と思う人がいるとは思ってなかったので、吃驚しました。

——貴方の錯覚は「不如帰」の引用から来た様ですが、良く読んで下さい。私は金田一氏の引用を再引用したのです。番外、漱石の作

品を云々したのは、明治時代には敬語が崩れていなかった為、彼等の作品には、敬語用法の好例が多いからです。貴方よりはこの二人の作家を重んじます。彼等を挙示した理由は貴方の推測とは違います。

現代における敬語の崩壊現象を簡単に肯定できぬ気持ちを私が持っていることは事実ですが、それは私が貴方の想像された様な古い時代への郷愁を感じるからではなく、私がマゾヒストだからです。私は身分差の標識としての語彙のニュアンスを貴方の様に「言方（喋り方）の違い」に簡単に解消してしまいたくないのです。（現実の問題としては、いくら乱れたといっても、二人称語彙による身分差の表現はまだまだ顕著で、貴方自身も、女中さんにと母君にとでは全く同じ語彙を使っておられないだろうと思いますが、根本的な方向、理念の点で、敬語の崩壊を肯定する如き口吻で貴方が議論されたことは、いささか心外でした。）

ですから、貴方と私との議論の喰い違いは、貴方の言われる様に

「年令の相違」からではありません。端的に申して、原作の精神を、どう把えるかの相違に懸つて来るのです。

私は治洲訳を推す理由としてワングの言葉が高圧的な点をあげ、それを敬語用法といった風に説明した為に、感覚の老人的なるを疑われてしまいました。そこで、私の意を悉す為に、今度は現代の日本語の範囲で、議論を進めて行くことにしましょう。

「あたし」と「私」。(これは貴方が「私」という字を、どう読まれるのか明らかになさぬと議論になりますね。私をあたしと読んでも良いのですから。——あたしが野卑だというのは貴方独特な感じ方だ。と私が申すのは、国語における一人称の使用区分を離れて、貴方が「あたし」という單語を下品ときめておられるからです。特定身分を示す一人称があります。拙者といえ侍を、わちきといえば昔の芸妓を連想します。然し現代では、「あたし」はそんな特定層の用語ではなく、むしろわたくし、わたしなどと一緒に女性一人称群を構成し、場面に応じて使用区分せられていいると思います。良家の奥様が姑に対してあたしとは言わないでしょうし、同様に女中に対してわたくしも少々滑稽でしょう。私の語感では、女中に対する令嬢の言葉に「私」という字が使つてあつたからとて、それをわたくしと読んではおかしいのです。明治の語感ではありません。貴方が戦後派の語感を主張されるなら私は戦中派として主張します。——尤も、私は上流社会には憧れこそすれ、縁はないので、もし貴方が「現代の上流令嬢は、女中にもわたくしと言うのだ」と断言されるなら、敢て争いませぬ。然し、その令嬢が言うことをきかぬ乗馬に鞭を使いながら、(私流の表現なら)「さあ、あたしつてもものを分らせてやるから……」と決意を示す様な場合、これをわたくしという一人称で話すことは、私には考えられないのです。が、どうでしょうか。結局、あたしという單語そのものには、上品も下品もないので、問題は文脈にあるのだと私は思います。

「あたしが解らないのね」と、「私をおわかりにならないのね」との選択に際して考えるべきことも、語勢の強弱より、これが女神の言葉だということとです。私の指摘したのはこの文脈なのです。アゴを引いても、眉根を寄せても、女神が人間に際して「おわかりになる」という様な敬語を使つておかしくないか、ということだったのです。

女神の用語の問題は、奴隷への用語の問題に通じましょう。現代の日本には奴隷はない。奴隷に対する用語は日本語としては定つたものがないのです。その日本語で奴隷への用語を訳す場合、近似的に何を持つて来れば良いか？貴方は、現代日本での召使階級への言葉遣を用いて足れりとされる。そしてその種の用語を使つた佐藤訳こそ作品の全体を良く把握させるものだと言われる。果してそうでしょうか？「奴隷」というものは人格を持たないのです。所有者の財産なのです。人権と自由とを保障せられた現代の召使とは違ひます。女中に対して「好きならそう仰言れば良いのに」と言う奥様も盗み喰ひした猫を叱る時はそうは言いますまい。運転手に対して、「あなたは行かなかつたの？」と訊く令嬢も、飼犬にはそういう口をきくことはしないでしょう。そして、奴隷というものは、現代日本において類似の存在を求めれば、恐らく女中や運転手よりは、犬や猫や馬に近いのです。鞭で打てるもの、足蹴にできるものは今の世の中では家畜しかないのです。

原作の精神と私の申すのは、このことです。『毛皮を着たヴェヌス』において、原作者に、従つて両当事者に意図せられたものは自由人たるセヴェリンが自由意志によつて(契約を通じて)奴隷となり下ることから生ずる戦慄を味うことなのですが、ここで奴隷といつてゐるのは、右に解説した文字通りの奴隷、人格も自由もない犬馬同様の存在なのです。それでこそ戦慄的な昂奮になるのです。マゾ・プレイとしての性格は勿論残っていますが、少くとも意図する

ところはそこなのです。だからワンダの口のきき方は、そういうものとしての奴隷グレゴールにふさわしく変らなければなりません。それは決して愛人セヴエリンに対する時の「あなた」「わたくし」という口吻ではないのです。翻訳はそれを伝えねばなりません。それはアゴや眉や喋り方ではカヴァし得ぬ言葉の選択の問題です。現代日本語において敬語の崩壊しつつあることを貴方は言われます。然しいくら乱れても、まだまだ身分差のニュアンスは可能です。佐藤訳はその最低のものを対象とする口のきき方をしているとは思えません。——（貴方は四這の馬になって女主人を背に乗せた時、彼女から「あなた」と言われたら不自然だと思いませんか？それとも貴方は、もし「お前」と呼び掛けられたら、*レ、デイ、の、セリ、フ、らしい、ない、から、と、動、か、な、い、つ、も、り、で、す、か、*、拍車を入れられますよ、そんな贅沢言ってる。——現代日本の女性が犬や馬にも「あなた」「わたくし」を使う様になるまでは、ワンダのグレゴールに対する言葉を「あなた」「わたくし」で訳すことは、原作者の意図を歪めると思われます。佐藤訳は、流麗で清潔かは知りませんが、一番大切なものが失われています。治州訳は、少くともワンダがグレゴールを「最下等のもの」として扱っている気持を、出そうと努力しています。上品さが失われたかも知れませんが、そこを汲んでやるべきではないでしょうか。貴方はグレゴールを現代の女中、運転手並のものとして読まれたのでしょうか、犬馬同様のものというつもりで、もう一度両訳を読み比べて見て下さいませんか。現代日本の上流社会人としての洗練された語感を貴方が所有せられることは良く分りましたが、奴隷が女主人から「あなた」と呼ばれることも、一体貴方のマゾヒストとしての語感が許すかどうかをお訊ねしたいのです。

両訳を対比する上から、佐藤訳を召使に対する言葉遣で終始する様に書きましたが、佐藤訳も「お前」という呼び掛けで奴隷に

対する言葉遣いを using しています。ただ時々「行つてらっしゃい、グレゴール」などとおかしくなるのです。それは前回に指摘した様に英訳によった為でしょう。

次に *voussoyer* のこと。貴方は私が、浪子は武男に *voussoyer* し女中に *tutoyer* すると説くものの様に敷衍しておられますが、とてもありません。良く読んで下さい。私は奴隷に対する言葉遣かどうかを問題とした上で、仏訳ではそこで *voussoyer* が用いられているか、と問うたのです。ここでも問題は奴隷なのです。私のフランス語は独習事仕込のたどたどしいものですが、夫婦間で *voussoyer* せぬこと位は知っています。然し女主人と奴隷との会話は、後者が *voussoyer* し、前者が *tutoyer* するのが普通だと思えますから、あ書いたので。貴方は二人称主語は親近感に左右され、身分の高下とは無関係と断ぜられますが、それは奴隷の出来来ない現代文学を沙汰されての結論ではないのでしょうか。貴方にはフランス語に経験も自信ありませんが、私は、奴隷に対してはその身分から *tutoyer* が結び附くのではないかと考えています。

例をあげましょう。『ジョジアヌとその奴隷』で、青年ユベールを奴隷化するジョジアヌは、*voussoyer* で始めながら *tutoyer* に移ります。移行の契機は身分の変化です。

——……*Nous sommes ici seuls tous deux, vous serez donc seul pour me servir et je suis exigeante et despotique. Votre service va commencer, et d'abord je vous dirai "tu" à la venir comme quand vous étiez petit…… Quant à toi, tu m'appelleras "maîtresse". Que dis-tu de ta nouvelle condition?*

ここに妾達二人きり、あんた一人で妾に仕え、妾はうんと気難しくしてやる。これからあんたに奉仕させるけど、先ず今後はあんたを子供の時の様に「お前」と呼ぶわ。……お前の方は妾のことを「御女主人様」と御云い。どう、それで？

これ以後全部 *tutoyer* です。奴隷という身分に関するので、交際の有無といった相互的親近性と直接関しないことは、例えば、ジョシアヌから「犬」を自慢された女友達が見に来た場面で、他処で会えば勿論、その家で会っても唯の召使としてなら *voussoyer* する筈のユベールに対し、彼をその「犬」と知って、初対面なのに *tutoyer* します。人格を認めない愛玩犬として扱うからです（尤も犬にだって格式ぶって *voussoyer* で話す場合がありますが）。ユベールは御客様への御挨拶として、接吻^{アンクサ}させられるのですが、跨った女客ドルジェル男爵夫人は瞑目し、頭の後に両腕を組んで、こう玩弄^{おもちゃ}しています。

—Je suis mieux aïusi, toi, nou! je sais bien, mais mon clitoris est sur la langue et ton nez entre dans mon vagin. Sens-tu mes lèvres aplaties sur tes joues, tes yeux,.....

何て良い気持。お前は辛かるうね！お前の舌も鼻も押えられてるんだから.....

身分の高下を反映せず、親近感文で解決できるものなら、ユベールの方も *tutoyer* しそうなものですが、彼は終始 *voussoyer* です。

—maintenant, mon petit Hubert, reste accroupi devant moi, et bois, tu vois tout cela sort de moi, cedit être bon, je te gâte, hein!

—Oh! oui, maîtresse.

—Vrai, tu aimes ça?

—Vous le savez bien.

「ユベールや、妾の前に蹲んだ儘でおいで。そしてお飲み。それは皆妾の身体から出たもの、きつと美味しいわ。御馳走するのよお前に。ねえ」「はい、御女主人様」「好きだろう、本当に」「御存じの通りでございます。」

例の『マゾヒストの会』でも、ジャンがソフィアに奴隷化されると、こんな対話ぶりです。

—Que veux-tu?

—Vous baisser les pieds.

—Tu ne les mérites pas encore.

「お前の望みって、」「御み足への接吻です」「まだそんな褒美を貰えることをしてないじゃないか」

結婚後はジャンも *tutoyer* しますが、夫婦だから不自然ではありません。一方ソフィアから女中への呼掛は *voussoyer* が使われています。奴隷とは区別してあります。

こういった点から見ると、ワンダがセヴェリンを奴隷化して後 *voussoyer* してるか *tutoyer* してるかは、やはり、仏訳者が奴隷化という原作の精神をどう解したか、佐藤訳の様に唯の召使に対する如く見たか、治州訳の様に犬に対する如く扱ったかを知る手掛りになると思われまふ。

間違っていれば改めるに憚りませんが、私としては、右の様な見解から「*voussoyer* が使ってあるでしようか」と問うたのです。女主人は *tutoyer* し、奴隷は *voussoyer* するという考え方が間違っているかどうか、改めて、フランス語に堪能な貴方に御教示をお願いします。（道化^{ぶざ}は誰に対しても *tutoyer* します。こうした例外的なことは色々あると思いますが、一般論として、二人称主語と身分とを無関係と断じ得るか否かを疑問とするのです。）

まだ書くことがある様な気がします。既に相当の紙幅を費しましたので、この位にしましょう。貴方の登場以来、私が感じて来た敬愛の情——額^{しほ}に同じ微ある者のみが相互にそれを直感し合うのです——が、こうして貴文に答えて、卑見を開陳するを得た機会に、一層強くなったことを、付け加えて置きます。

最後に一つお願い。今後、沼先生はやめて下さい。そんな年輩でなし、資格もなし、それに、もうお分りになった様に、私は二人称主語には人一倍敏感なのですからね。

女性文身考

女性文身に現われた倒錯美

南方純

大歌舞伎浜松屋店先の場で、御存知弁天小僧がサツと片肌ぬいで大あくらをかく瞬間、観客はハツとして息を飲む。今では誰でも筋を知っているから男が女に変装していると最初から思っており、驚きも少いのであるが、仮に全然筋を知らず、文金高島田、振袖姿の武家娘が急に肌ぬぎになって、しかもその玉の肌には鮮かな刺青が彫られていたのを見たとしたらその驚きは数倍であろう。稀にしか現わすことのない肌を見せ、しかも、それが單に白い肌でなくて、何か恐ろしい刺青である場合、倒錯した美感がそこに生じてくる。女性の刺青美の本質はこの稀少価値を伴った倒錯美で独特の性的アピールを備えたところにある。

刺青の研究については夥しい文献もあり、その歴史について、ここに触れることをしないが刺青の目的はまじない、刑罰および装身の三つに大別される。アイヌの婦人は、近年まで口辺、両手背に刺青していたが、これは

「婦人は悪血が多いからこの漏血によって強壯になる」という信念によるものであった。又沖繩でも婦人が手背に刺青する風習があり例えば子供が一人出来る毎に一点ずつ加えたものという。しかし両地とも現在では殆どこの遺風を絶った。

ここで問顔とするのは、このような呪術的な刺青ではなく、純装身的な刺青についてである。日本の刺青は江戸時代に発達しその時代に完成し終ったもので、あたかも歌舞伎劇の如く次の時代はほぼその継承にすぎない観がある。

男子の刺青についても、昔より特殊の職業身分の者、例えば鷹、博徒等に限られ時に国務大臣などという例外はあるとしても、それ程多く見られるものではないが、女子の場合はなおさらその範囲は狭く、史実に残るものも盗賊、酌婦等正業とは称し得ないものばかりである。それなら、現在では女性の刺青者は全然ないかという、実はそうでなく、かな

りいるのである。勿論その範囲は狭く、水商売の女性や二号さんといったところであるが、事の性質上その数は推定出来ない。

終戦後間もなく日本に來たライフの記者が苦心の末、ある博徒とその妻の刺青を写真に取りライフ誌上に発表したことがある。その妻は二十四五の均整のとれた体軀の女性で美事な全身彫であった。

戦後刺青についての長い禁制がとかれて、横浜の野毛には堂々と看板を出して刺青を行っている店が出現したし、その近所の飲屋にも刺青をした女給がおり、夏祭りには若い女給達の肌に刺青まがいの画をかくて、腕まくり、跣足袋姿で神輿をかつがせる悪戯をやっている。

女性の刺青美に傾倒した作者は、戦前には谷崎潤一郎と邦枝完二、戦後には田村泰次郎と高木彬光がある。

谷崎潤一郎の「刺青」は文学史上に残る名作で作者の唯美主義的感覚を遺憾なく表わしている。絹布のような乙女の肌に描かれた蜘蛛と桜の刺青に朝日が光をさしてくる。壮嚴ともいうべき美の極致である。

邦枝完二の「お伝地獄」では白く柔かな餅肌に墨をさして行く一針一針、自ら陶醉している如き描写には、果してお伝に刺青があつたかなという野暮な穿鑿は無用で、実物のお伝以上に真実な美神お伝を創造したものとい

つて過言でない。

田村泰次郎の「肉体の門」では刺青そのものの美よりも刺青される女性の苦痛に耐える美を描いたサジスチックな所に特色がある。尾崎政房演出の空気座の上演で大評判を取ったことがある。作では第一部の方が上であるが、第二部には露原千草が手をしばって全身刺青を施すという物凄い場面があった。この上演では歌舞伎でやるような肉襦袢でなく素肌刺青を描いたものだから、その迫力はすさまじかった。

高木彬光は推理小説の方だから自ら陶醉するのではなく、客観的にマニヤを描いているが、本質的には女性の刺青美に対する嗜好が強いと思われる。「刺青殺人事件」は傑作である。近作に「刺青一代女」があるというがまだ読んでいない。

歌舞伎では田圃の大夫で有名だった沢村源之助が毒婦もので、刺青を見せた片肌ぬぎでたっぷりした殺し場を見せ大いに観客を堪能させたものであるが、彼の死後それを継ぐ役者が全くいないのはさびしい。その代りとして梶原華嬢にはじまり、二代目大江美智子に至る女劔戟で源之助ばりの毒婦ものを上演し俱利伽羅紋々の肌ぬぎで派手な立廻りを行い倒錯美を発揮して、消長はあるものの根強い人気をつないでいる。ただこれ等ではいずれも肉襦袢に刺青を描いたものを着こんでおり

魅力に乏しい。

その点からすると映画の場合は素肌に刺青を描くのが普通で、より写実的で演劇よりは迫力が強いと思われる。戦前では「お伝地獄」の映画化で鈴木澄子の刺青姿が美しかった。彼女の最も脂の乗った時期で自信もあったようだ。後年いくらか化粧してもあの時の色気はもう出ないと淋しく述懐していた。まことに「花の生命は短くて」である。

「歌麿をめぐる五人の女」では、花魁役の飯塚敏子の肌に簀助の歌麿が山姥の刺青の下図を描く場面がある。飯塚がやせすぎているので少し肥えさせるのにいろいろ手を尽したという話もある。やせすぎても肥りすぎても魅力はなくなるわけである。飯塚は素直な好演であった。肌も花魁の肌はかくもあったかと思われるような繊細さであった。

比較的近い作では「火の車お万」の月丘千秋「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」の筑紫あけみが刺青姿をたっぷり見せてくれた。新東宝の「妖艶六死美人」は六人の美人の肌に刺青を施し、次から次に違った手口で殺害して行くという構想で面白かった。

さきに述べた高木彬光作「刺青殺人事件」が三浦光子主演で映画化されたが、原作に遙に及ばない出来ばえであった。大体主演の三浦が肌を見せるのをきらい、刺青の箇所はすべてスタンドインで間に合せ、スチールも首

は三浦、刺青を施した体はストリップ嬢でモンスタージュしたというひどさである。成程芸を売るんだという自惚からかも知れないが、芸能とはその全身から溢れる魅力で大衆を喜ばすべきものである。なぜその刺青美で天下の男子を悩殺しようと意気込むことが出来なかったものか。

刺青した皮膚を死体から剥取って鞆すと大鼓の皮のようになり、法医学の参考資料として東大などに数多く收藏されている。これは実物そのものであるから、生存時の美観を推測することは出来るわけであるが、何分にも死物であるから美を鑑賞するには極めて不十分である。美しい花でも賭葉にする時は植物学の参考にはなるが観賞に耐えないのと同様である。

演劇、映画等の作り物ではなく、実際の女性の刺青美を、その最も魅力溢れる時期において、親しく鑑賞する機会に極めて少い。甚深微妙の美は幾劫にわたっても遭遇し難いものかもしれない。誰か好事家があつて、財を惜しまず、時間を惜しまず、刺青美人の発見もしくは創造(?)につとめ、精密な天然色写真に撮影してアルバムを作成することが出来たら、素晴らしいものとなるのであろう。美は悖徳であるかも知れない、しかしその美を私は求めたい。

(終)



マゾヒズムへのざいない

(第六回)

黒田史朗

例の如く「暗い欲望」の一節から……その前に一言、何故に私がこの様に前作の「暗い欲望」をいつ迄も固執するのか、それには理由は一つしかない。マゾヒズムというどうにも制御の出来ぬ生きものを、を、出来るだけ正確に語りたいがためである。正確なマゾとは一体どんなものか、私にはまだそれを普遍的な意味に於て述べる資格はないようだ。しかし現実生き抜いてきた私のこれまでの三十一年の生涯を振り返るときそこには確かにただならぬ異常さを孕んだものがあつた。私のこの経歴こそが私のマゾに関する知識の全てであるといつても過言ではなからう。これを足場にして臆測していくより外、何の手がかりをも持ち合わせてはいない。読者の皆さ

んにも私のこの体験を知っておいてもらねば今後理解の届きかねる節も或いは出てくるかもしれぬ。それで敢て、書く手間、よむ手間、両方の手間を省りみず「暗い欲望」を紹介し続けることにした。

最近私は不愉快なことを耳にした。それは或る筋からの又聞きなので真疑の程は測りかねる。しかし全くの作り事とも思えぬので御披露する。本誌に発表された『鷹野めぐみ』氏は実は男性であつて、あの様な創作を体験談として誠しやかに発表したのだと、その当の筆者が何かの席でしゃべったそう。單なるデマであつてくれればいいと念じながら。しかしこれが本当ならばこの様な遊びとしての告白や体験談は世人の我々に対する不当な

誤解を招く源となるものであり、慎みたいものだ。勿論小説とことわつてのことならば大歓迎だが……。その点、杉本真三氏の告白「犬の生態」は生々しい真実感に溢れ次が期待出来、共鳴を呼ぶ。大分横道にそれて申訳ないが、「暗い欲望」の一節……

『私の内部には、如何なる激しい歴史的現実ですら、どうにも扱いかねたタブーの場が息づいて、それ自体、私の意識的な生命の成長とは全く無関係に成長していった。私自身ですら、ギョツとしてだじろがざるを得ない程の欲望の醜さ、その醜さがそれから脱れようと跳く私の意識を尻目に私をがんにがらめに捕えて離さないものである。(中略)』

私は十七才、一つの重大な転機にたたされ

ていた。(中略)神社参拝の帰り(その頃皇軍将士の武運長久と大戦必勝を祈願する為の神社参拝が、学校の定例行事として月一回、大詔奉戴日の八日に行われることになっていた)私が海岸の国道に面した大鳥居の石の柱によりそってゲートルをといっていると、ところへ桜井と田辺が通りかかった。彼等は二人共戦斗帽、カーキ色の制服にランドセルといった可憐な少年兵のいでたちで、私の目には非常に新鮮に、丁度もぎたての果物を見ているような爽かさを感じさせた。

.....(中略)

私は不思議に落着いた気持ちになっていた。最初、二人の下級生を見かけたとき私は気恥ずかしい程に興奮していた。田辺を市電の停留所に見送り、桜井と二人だけになったとき心臓はドクドクと音をたてて鳴り響いたのだ。しかし人ごみを離れ、木々の香りが鼻腔を擦るようになると、私の上ずった気持は冷え冷えと平静をとり戻した。二度と来そうもない絶好のチャンス 私は決して逃そうとはしなかった。

.....(中略)

私はその場に身を横たえ胸の上に彼を跨らせた。

.....(中略)

私はあくまで彼の意をききたかった。私の行為を私の意志によるものでなくして彼の

意志によるものとしたかった。とまどい乍らも桜井は微かに頷いた。彼の幼い恥じらいが彼の顔を上気させ、そしてその恥じらいが反射的に私を恥ずかしがらせた。

恥じらいが欲望を助長し欲望が恥じらいを助長する。その加速度のかたまりが私の神経の端々をまで硬直させるとき、私は生命を感じる。遠い昔、そして更に遠い未来へと、人間の営みの連綿と絶ゆることのない神秘さ！その宿命的な哀しさ！でもあまりにも滑稽な私の姿、私の姿を別な私があざ笑う。その笑いが愈々激しく私の行為を助長する。私は欲望に負け乍ら、同時に欲望を厭悪した。

.....(中略)

すべて、何もかもが不快だった。そして最も不快なのは自分自身だった。灰色の世界、索莫たる思い。そして醜く歪められた思念。私は健康で明るい未来をこんなにも切に願いつつ所詮逃れられぬ宿縁を知らされたのだ。人には押しなべて秘密があるとしても、私は私の秘密を「破戒」の主人公丑松のように只管大事にせねばならぬ。秘密が秘密でなくなるとき私の総ては破滅する。私はあく迄ひややかにあらねばならない。冷静な解剖こそ人生への復讐だ」といったフロオベルの様に。.....」

今回の「暗い欲望」からの引用は以上に止め、さて又次のおしやべりにとりかかるとする。KK一月号の私の原稿を読み直して先ず感じたことは厚顔にすぎる程の断定と押しつけ口調についてである。「こうして下さい」「ではやって上げましょう」といった言葉の約束事からくるお座敷プレイに真のマゾは成立しない、とさんざ言い放った挙句、おおよそ私には一種のナンセンスがグロにしか受けとれないといい切った部分、私は我ながらこの舌たらずの論議をいささかなりとの蛇足を附するの必要を痛切に感じたのである。売春婦の足の裏を舐め、或いは芸者の馬になってお座敷をハイドウハイドウと歩きまわる図を私は不見識にもグロかナンセンスだと言い切った。私の言いたかったのは実はこの様な意味合いのものではなかった積りでいた。ところが一月号には実にしたり顔な筆法で右の如く私自身述べていたのである。それで私はここに白状する。今迄思えばどれほど数多くの売春婦の足を押し戴き、そのつばきを嚥下してきたかについて、一月号杉本真三氏の「犬の生態」は外ならぬ私の生態でもあるのだ。しかし私はここで私の述べた主旨を全面的に撤回しようという意志は毛頭ないことをお断りします。私は過去及び現在におけるそうした各種のプレイを通じ一度も満足した体験を持

(次の頁下段へつづく)

「ボクの責め方」続稿

マニア通信 宝塚二三夫

第十一報

十二月二四日、イブの宵を避けて新世界のストリップへ行く。

これ又久しぶりで清水田鶴子の出演であった。彼女のセリフの中、マニア好みの喘えぎ声は、ここ三、四年來、益々冴えてきたようだ。

満足しての帰途、偶然「冥土の顔役」の再上映を見る。中田康子の大根振りには困るが宣伝スチールの中にスゴク見事に両手を背中へ振じ上げたものが一枚ある。KK誌に発表しては如何？

更にパンプ役の女優が主役の男前（どうやら鶴田らしい）に両靴下をズルズルと脱がされて脛を弄り乍ら、蚊の「喰あと」一つないキレイな脚だ。と、（余り大した脚でもないが）というようなフエッジュなラブ・シーンには、これ又久しぶりに満足して帰る。

唯々、今後共、責苦に喘えぐ清水田鶴子

のセリフ廻しだけはマニア諸君も忘れないで見てほしい。全く凄まじい進境であり、私の一座を見ていただくまでもなく楽しめましますよ。

私の一座も愈々正月よりグループを二つに分けて

A組は 芝居本位

B組は ミュジック・ホール

という具合にきめて、芝居の方は、責芝居を基本とし、ミュジック・ホールはパレスク基本としてストリップの和風化とすることに決定しました。昼は責芝居、夜はナイトショーとしてゆくわけで、今後益々諸君の目に止る率も多くなるわけです。

私がいくら伏せておいても何といつても公演しているものですから、いずれは判明することでしょうが、前便でも申しました通り十二月一日よりは臀をむき出すことになり、（従来は裾をまくるだけ）そこへ、一月からミュジック・ホール・システム採

たない。言いようのない悲哀とそれから矢張そうした己の姿をグロカナンセンスだとして考えられない点について反省するのだ。究極的に相手の女性を言葉によって理解させることの至難さを！サジ的な行為を一定のルールに従って受け得ることが出来たにしても、遂にそれが一人芝居に了らざるを得ない我々マゾヒストの宿命的なものに嘲りの言葉を浴びせたい衝動を抑え得なかったのだ。マゾヒズムとは形あるものではないのだ。強いていうならば一種の形容出来得ぬ程の性的狂熱とも言う外はない。その狂熱が一体私に何を要求するのか。足を舐め、汚物を口にし、馬になつて這うというその具体的な行為の一つ一つに総ては尽されるのか！そうではないのだ。それらは單なる方便としての意義しか有していない。その方便を踏まえた彼方のつびきならない生命的な実感をこそマゾヒズムというのではなからうか。甚だ抽象的な説明で恐縮だが本来マゾの実体とはこの様に一つの抽象にしか過ぎぬのではなからうか。それを多くの学者や世人はこれを具象的なものの中に認める。汚れたパンティに頬ずりしたり経血にまみれた綿を欲しがったりのその行為の一つ一つをマゾと見る。勿論マゾ的衝動はこの様な形で外に現われるのだが、その一つ一つの行為は單なる里程標にしか過ぎないのだ。その様な里程標を示すところの人間のの

用で一層の特異性が強調されることでしよう。

繰り返えすようだが、いずれにしても、清水田鶴子の責められる際の嬌声は素晴らしい。

「いやーん」「うわーん」「勘忍してエー」

「助けチエーエ」「ヒエーッ」等々

ボクも全く感心しましたです。四年程前道頓堀劇場で「逆吊りにされた令嬢」の時から考えると、全く素晴らしい進境であり、驚きである。清水田鶴子の出るところ必ず悦虐責めあり、既にここ五、六年続く事実である。さて、果して、そのカゲの人は誰？

第十二報

十二月二十七日

本日の朝の東京毎夕新聞で、かねてボクが云っているNTV忍術真田城の毎週の縛られ役津村悠子が出ているので同封しておく。

今後は映画の縛りシーンのメモリーに代ってテレビ等の楽しみがKK誌上を賑わすことになるだろう。更にカラー・テレビ、F・M放送が始まるのであるから、更に一層、その感が深い。

津村 悠子

○…さる三月結婚したばかり。そこで仕事

と奥様業の両立についてまずきいてみた。

「ええ、いまのところはどうか……でもときどき仕事でおそくなるときは、お台所などやらせてしまうの。」四時にNTVの『忍術真田城』の打ち合せから帰ってすぐ六時にはKRの『花は咲かず』の録音があるという忙しさ。このような状態でしょ、やっぱり悪いと思うが、その点理解して貰っています」

と早速聞かされるオノロケ。

○…彼女がテレビに出演したのは一昨年というから既にベテランといえるだろう。現在テレビでは『忍術真田城』に出ているが時代劇出演の弁を聞いてみると「初めはくわずぎらいだったが、やってみるとだんだん面白くなってきた」と語る。いままではラジオでもテレビでも、古い型のおとなしい役、メロドラマが多かったが、今後は「こういう役柄をぜんぜん捨ててしまうんじゃないくて、こういったものもやりながら現代的な役もやってみたいと思います」またLFからはミュージカルものの出演もきているがこういうものも今後やってみたいという、つまりもっと芸域をひろげたいというのが、彼女の抱負。

つびきならない苦悶の姿を学者はその儘のすがたで捕えねばならないだろう。

ここにアラビアの奴隷についての報道があるので、すこしふれてみよう。サウジアラビアのサウド王の壮麗な宮殿があるリヤド市の郊外にて三人の奴隷が逃亡未遂の罪で斬殺された事件につき、国連から調査員を派遣した様な報告を得た。

『この処刑は、十二人の男子奴隷が逃亡をはかった結果として行われたもので、逃亡は発見と共にサウジアラビア国内務省奴隷問題監察官に報告され、同監察官は武装捜索隊を派遣、一味を逮捕したものである』

三人は多勢の見物人の輪の中で、鞭によってひざまづかせられ首をはねられたということだが、私はここで感ずるのはマゾ的刺戟より多く義憤を覚ゆるのである。不合理な人権剝奪に抗議したいと思うのである。ところで次の事情、アラビアの富豪達は何れも奴隷を蓄え、あきれば又買い変えるという風習、特にメッカの大寺院に養われる奴隷達、去勢された男奴隷が宦官の鞭におびえ乍ら犬馬の奉仕を強要されるしきたりをきけば、又妖し気な興奮を感じ出すのである。マゾとはかようにとりとめのつかないものであり、且、至って卒直な正義感をもそのうちに蔵するものなのである。(未完)

魔^マ教^{キョウ}園^{エン}

No. 8

ナンバー・エイト

(その一)



土 路 草 一

悪 魔 教

ハルーン・アル・ラシッド朝の栄ある伝統を残し、チグリス河に千古の歴史を流す、城砦と白塔の都、バクダット。

アラビアン・ナイトの幻影華麗、今もって夢鮮かに語り継がれている、駱駝と熱砂の奴隸都市、バクダット。

このバクダットの北方、クルード国境の山嶽地帯に、或る一つの塔がある。

世に謂う悪魔教の本拠、イーダビー人崇拜の聖なる寺院である。

イーダビー人とは、中東から亜細亜奥地にかけて散在している砂漠や山嶽地帯の住人である。俗説に、大和民族、即ち高天原民族は天の掛橋を渡って此の島国へやって来た。その移動経路を手操り、風俗習慣を照合すると高天原民族の発生地は中部亜細亜高原であると唱えた学者があつたが、差詰、このイーダビー人の中でも、特に山嶽地帯に住む種族は顔形、習慣が日本人と酷似している。

只、違っている処は、神を信じているか、悪魔を仰いでいるかの相違である。

イーダビー人の起源に関しては奇妙な伝説がある。

人類はアダムとイブを以って嚆矢とするがその二人が或日、自分達の子供に就いて、こ

んない争いをした。

「この子供達は全部私のものだ。これ達の生命は私から生れたものだ」

アダムが断ずるようにいった。

「いいえ、これ達は私のものよ、私のお腹から生れたんじやありませんか」

イブが激しく抗弁した。

「違う、お前の腹は借りものなのだ。子供達が外へ生れる迄の單なる入れものに過ぎないのさ」

「何をいつているの、これ達は私の血が通い私の肉を預けて育てた、私の肉体の一部だわ」
「仕方がない。どっちが正しいか、調べてみるさ」

アダムは二個の素焼壺を持ち出して来た。

「さあ、この中にそれぞれの生命液を入れるのだ、そして十カ月間、砂に埋めて置くのだ」
二人は慎重に自分の生命液を各々密封して、温もりのある砂中深く埋藏した。

幾時、十月目の満月の夜、二人は期待に打ち震える手で砂を掻き除き壺の封を切った。

その結果は……アダムの壺からは萎びていたが男の赤ん坊が生れていたのに対し、イブの素焼壺には唯、塵だけが底に残っていたに過ぎなかった。

イブは遂にアダムに屈し、その後は緊密に和合して、今日の人類の祖先達を数多く生み育てたというのである。

が、この時、イブと無関係に素焼壺の中から生れた子が即ち、イーダビー人の祖先であるというのである。

この見放された種族、イーダビー人は一九五×年の今日も尚絶体的君主であり、悪魔教の司祭であるミール・サイド・ダグ王に依って統治されている。

悪魔教の総帥は誰であるか、それは未だ誰にも解っていない。解っていることは、クルジスタンからイランの西部を通り、チベットを縦断し、満州北部に及ぶ一線上に、それも人跡未踏の深山の奥に、この悪魔教の七つの寺院があることである。

この七つの寺院から発せられる電波が、悪魔の力強い団結となつて世界を戦争に誘い、人類を不幸の淵へ追いやるのだと謂う。

電波、それは一種の電波にも似て、数万軒離れていても自由に会話出来るとも伝えられている。

アメリカの土俗宗教探険家W・B・シーブルックに依つて明かにされた、この悪魔教と一つの拠点、黒天使の塔からこの物語を展開してゆこうと思う。

黒天使の塔

イーダビー人の君主、ミール・サイド・ダグ王の居城から約四里、樹木一つない峡谷と岩場を見下す山腹に、黒天使の塔は建っている。

る。

嚴重に囲らした高い石垣、段々島のような中庭、オリブと桑の森から突き出た前世紀風の尖塔。その尖塔から時折、白い怪光が放射される。

山頂は軟土に恵まれた高原で、色とりどりの花が四季を通じて咲り匂っているのだが、其処へ登ることは信者のイーダビー人でさえ許されていない。黒天使の菜園と称されて、崇拜の本尊が憩われ、宴を開かれる処であるからだ。司祭と数少い高僧だけが、その饗宴に参加することが出来る。

高原の三方は切り断つた断崖を形成し、現在の登山技術をもってしても到底登ることも降りることも出来ない鋼のような硬度を持った岩質の直截された絶壁である。

他の一方、即ち登り口は寺院に依つて扼され、更にその下は見通しのきく岩場と涉々と急流岩を噛む豁谷である。

黒天使高原は完全に隔絶された未知の世界であり、如何なる樂宴が催されているのか、ぎらぎら燃え熾かる太陽と夜空を鏤める星や月が知っているだけなのだ。裏返えせば、この高原に立入ったものは聖廟の許しがなければ絶体に入里へ戻れないのである。

話を塔へ戻そう。

アーチ風に切抜いた門を入つて石段を降りて行くと小さな石の扉がある。中へ入ると其

処は七、八十坪の庭である。この庭を蛇の中庭と謂う。

蛇は彼等にとって智慧の象徴なのである。我々は蛇を利財のシンボルと崇める（例えば己年生れは金を蓄えるのが上手だとか、商業の印に蛇を使う類に表われているが）財を成すことが一つの智慧から発することを思えば共通点がないでもない。

ユダヤの經典に、タルマッドでも蛇の前身はリスという名の美女であつて、アダムの前妻であり、蛇になつてからイブを欺いて智慧の木の実を食べさせるのである……と語られてゐる。

今しも、中庭を通過して蛇の浮彫のしてある扉を押して、聖所へ入つて行く一人の男がある。もじやもじやした頭、突き出ている鉤鼻、薄いが一文字に結んでいる唇、着古したジャンパーに、膝のぬけたズボン。

凡そ、この神秘的な国に相応しくない風貌風采である。広い額と鋭い眼が並の者でないことを知らしてはいるが……

聖廟の中は薄暗い。高窓から入る僅かな光線が、真赤な壁に反射して、室内を血のように鎮めている。

祭壇には紅蓮の絨氈が敷き詰められ、蛇が捲きついているような奇妙な形の燭台からは牛酪の油灯がじりじりと臭気を発して燃え点り、躍るような三本足の供物台には赤黒く血

の固まった肉が載っている。

悦楽、歡喜、激怒、号泣を表わす随神の中央に、燦然と金色に輝く黒天使の尊像が鎮座している。

胸を絞られるような妖しい雰囲気、五感を圧迫する莊嚴が支配する。

男は床に音もなくひれ伏す。そして、低い誦唱が唇を割つて洩れ出した。

私は此処で断り書を一つして置かなければならない。

それは黒聖書の中の禁止事項に就いてだ。私は今迄、悪魔教、悪魔の本尊等と悪魔という文字を数多く使用して来た。併し、彼等信者にとって、この『悪魔』という言葉は禁句なのだ。

その禁止事項とは

一、黒聖書に、我が名を語るなかれ、我が名を記すなかれ、汝等、之を犯せば罰せられん。汝等、真に知ることなきが故なり。汝等我が象徴我が形のみを褒め讃えよとあるからで、代りに悪魔を黒天使の別名で呼ぶのである。

二、青色のものは一切いけない。青色は魔除けの色で、回教徒のお守りや珠数も青色にしてある。所謂、青は悪魔の嫌いな色なのである。

三、火の中に唾を吐いたり、マッチの火を

足で踏み消してはいけない。火は絶体に神聖なものなのである。

神はこの世に七天使を創造された。その最初の天使が悪魔であつて神は悪魔に一万年間、地上最高支配者たる地位を与えられた。即ち、悪魔は地上の絶体権威者であり、この世の者は総て悪魔を尊崇せねばならず、それが生の繁栄を齎すものであり、この教儀を信奉せぬものは蛮獣に等しいと……

男の誦経が一段と高くなった。

瞑目していた險がかつと、瞳かれ、狂信的な眼光がはつしと尊像に投げつけられる。

それを境に声は次第に低くなった。最後に深々と拝礼を終ると静かに立上った。

男は祭壇を廻つて、裏手の扉を押した。

かつと、きらめくように眩しい黄金の間である。天井も壁も床も、一切、金色に光り輝いている。

その天井には駝のような頭をした四足の魔獣が咆哮し、欄間には七天使が雲上の奇巖に立ち、壁には悶え、苦しみ喘ぐ裸人の阿鼻叫喚が彫刻されている。仏教の地獄図に似て教唆の為の絵であろうが、豪華な色に輝いていてその図は莊重にして魔可、怪奇な威圧で迫っている。

男は伏眼勝ちに、足早やに細長い部屋を通り過ぎる。

突当りの小さな扉の前に、赤い長袍を着た

護衛が二人いて、男の姿を認めると片膝を折って、顔前で手を組むと拝むような礼をした。

これから先は、奥の院と呼ばれる信徒禁制の場所である。高官高僧以外は出入を許されていない。

男は軽く礼を返すと護衛の開けてくれた部厚い金属戸の奥へ入って行く。

道は灰色の階段になる。

じじっとえも云われぬ臭気を放って燃える脂の灯が、点々と地の底へ吸いこまれている。冷たい石肌の露出した装飾のない地下路である。

地獄へ降りるように、その通路は長い。男は黙々と靴音を反響させながら降りて行く。

もう、とつくに塔の下は通り過ぎて、山腹の地中へ入っているに違いない。ひやりとした冷気が吹き上ってくる。

やがて、道は尽きる。

又護衛がいて扉を開ける。

控の間を通り抜けると今度は黒色の靈廟があった。周囲全部が黒である。中央の祭壇に黒衣の裾を翻して、猛々しい魔獣に打跨った黒天使が、神通の鋒を振翳して下人を睨み据えている。

その祭神の足前に一人の黒衣僧が低く誦経している。布から覗かれる手や足は、瘦せさらばえた木乃伊^{ミイラ}そのもののようなだが、頭髮は雪のように光った白髪で、皺だらけの淡紙の

ような顔の中で眼だけが龍神の如く鋭光が煌いていた。

男は畏って下座に坐ると、僧に倣って祈りを捧げる。高僧は忘我の中で、重々しい誦経を続ける。やがて、勤行^{ゴンギョウ}が終った。

「師僧さま！」

崇敬を語外に溢れさせて呼びかける。

「ローシンか」

高僧は立上ると手を空に振った。

すると、黒天使像を囲繞していた灯が揺らいた。あっ！裸女が七人、頭と胸と腰に二重の輪を嵌められ、外側の輪を燭台として、牛酪の油を点していたのだ。

灯と皮膚の間隔は十種と離れていないであろう。女達の柔い肌は熱さを感じない筈はない。それなのに彼女達は虚ろな眼で、能面のように表情を動かさない。

高僧に招かれると輪に依って自由の奪われている白い裸身を、糸で手操られるあやつり人形のように僧の足下を囲んで踊った。

女達は灯の為、上体を傾けることも、反らすことも出来ない。真直に上体を立て熱気を上へ逃さねばならないからだ。よしんば、自分の身を焼いても筋の痛みに耐えかねて、軀を曲げたらどうであろうか？それは灯を落すことであり、消えることである。凡らく、その時は神への怠慢、冒瀆として嚴重な罰が待っているに違いない。たとえ、それが單なる

過ちであつたとしても……

何処の国の女達であろうか？皮膚は一樣に白い。髪は黒、褐色、金と混っている。肢体は揃って均齊の線を描き、選りすぐった美貌で、瑞々しい弾力は若さに充ち溢れている。だが、その動作と服従の態度は、まるで心を剝奪された抜殻のように虚脱している。果して信仰からの奉仕であろうか？中には暴主を恐れる戦のきのような眼を発見出来るのだ。燭女達は美々しく、僧を守神の如く照し出して、髪一筋動かさない。

「宗祖さまから御裁可を戴きました」

ローシンはやや頬を紅潮させていった。

「そうか、それで着手は？」

重々しく訊く。

「既定方針通り行いたいと存じますが、明日会議を開いて、細部の検討を致したいと思ひます」

「いいだろう、皆に通知しておくがよい」

高僧は頷くと静かに歩を移した。影のように素早く四人の灯女が先導して行手を照らし、三人が後衛となつて後に従う。

ローシンは恭々しく見送ってから、石廊下へ出た。灰色の壁は蛇のようにくねくねと幾曲りもしていた。そして幾つ目の角を曲ると頑丈な鉄扉があつた。

化学の設備

扉が開かれる。

果然！今迄の妖気に充ちた宗教の国は夢煙のように取り払われて、凝然と眼を疑わざるを得ない。信じられないのだ。

其処にあるものは……

真白な静電子塗装をした壁、磨かれたタイルの廊下、陰影なく間接照明する昼光灯。そして、立働く手術衣に似た白衣を纏った人々。

正に、神武幽玄の国から、一挙に一九五八年の文明世界へ飛びこんだ感じなのだ。信じられない。たったドア一つで……。あの奇妙な祭神は？枯木のような黒衣僧と従女達は？あや、まぼろしの幻覚なのか？今、眼前に展開している化学薬品工場らしい幾つものタンク、それを取り捲き継ぐダクトやパイプ、変圧器から天井へ這っている数々の配線、一角ではモーターが唸り、一隅では白い蒸気が吹いている光景は現実なのか？……

例を採ろう。且つてV2号を創り出したドイツ人が喧伝される強制収容所の残虐を併せ持っていた。即ち、ナチスのユダや殲滅教儀を信奉していたこと。又、人工衛星を打上げたソ連人が大戦末期満洲侵入時腕時計を知らなかったし、主義は別として肅清の冷酷を未だに示していること。又、我々の周囲の中から有名な知識人で新興宗教に凝っている人を発見することが出来ること。一つの頭脳に文化と野蛮、尖端的な科学知識と原始的な宗教

心、他を謀る冷酷を同居させることは、案外世人の多くがなしていることらしい。一つの国家では尚更だ。

イーダビー国にしてもそうだ。貧民は靴すら履いていない。併し、上層階級は西欧的文化の中で暮し、一部選ばれた者は各国の研究施設に名を連ね、ノーベル賞候補者さえある。だから、敢えてこの宗教王国に科学設備があつたからと云つて異とするに足りない。近年、七つの領国の各所では、土木技術者や建築技術者が入りこんで、何やら盛んに工事がなされているらしいが、嚴重な鎖国政策と悪魔の民と呼ばれる住民のひねくれた排他主義の為に世界に知れないだけである。

ローシンと呼ばれた男は勝手知った足取りで広い地下工場を通り抜けてゆく。

壁に向つてボタンを押す。音もなく開いてエレベーターが停つた。ボックスは僅かな震動を伝えながら上つて行く。ぽっかり陽が射して停止した。

出ると金網が張り廻してある、正面に危険区域と赤地に黒書した看板が立ち、制服の守衛が警戒している。男は、ずかずかと踏入つてゆく。

其処は黒天使高原の一部を割つて凹地にした処なのだ。上部は疎らに草で偽装してあるが、高さ三米余りの土塁が幾つか築かれてある。方形に区劃され、その間をコンクリート

道路が通り、処々、堀池が廃液らしいものを湛えている。

各土塁には同じようなアーチ型のトンネル入口があり、避雷針が知らせていた。

ちりんちりん鈴の音がして来た。

土塁の影からゆるゆると車が現われる。ああその車を押しているのは赤い人間なのだ。肩も胸も血を被つたように紅い、黒い豊かな髪が垂れている。胸乳が膨らんで柔かい曲線だ。女なのだ。顔も白い、下半身も白い。上半身だけが真赤なのだ。そうだ、赤い人間じゃない。一条纏わない腰から上を赤く塗られているのだ。

そろそろと乳母車のような手押し車を、佗しい鈴の音を響かせながら、用心深く押している。

ローシンは歩みを停めて土塁の陰に寄つた。車はその前をのろくさく動いて行く。

女は後手に手錠を嵌められている。囚人なのか、肩に装着された型木で静かに押している。眼はしっかりと行手を睨み、鼻孔は息を詰めて、口は固く結んでいる。緊張そのものだ。

車の横腹に黒い字が見えた。ニートログリン。グリ……セリン。あッ！ニートログリン。

それは、ちよつとした衝撃にでも起爆する危険な爆発物なのだ。

女のすらっと伸びた脚は、かすかに蹠撃を伝えながら歩を運んでいる。一步でも踏み過

まれば、躓けば、ゴム製のバケツから薬品が零れ、一瞬、総てを吹き飛ばして丁うだろう。

そうだ。此処は火薬工場なのだ。

女の上半身を赤く塗ったのも、鈴の音を聞かせるのも、爆発物運搬を知らせる警戒信号なのだ。作業室の周囲を土塁で築いてあるのも、爆発事故を、その一ヶ所だけで食い止め、他に波及させない為なのだ。

それにしても女の気持は、どんなであろうか。弱やかな手を縛められ、若い光沢の肌を赤く塗られ、死と直面しながら動いている心の中は……。

何が故に、このような境遇に苦しむのか？そして、黒天使王国は何が故にこのような工場を持つのか？

手押車はゆるゆると土塁の影に消えた。

ユーマ人の援助

だらだら降りているコンクリート道路の一番奥に石段があって、白堊の建物が土壇の上に建っていた。

「主任はあちらです」

建物から出て来た若い男がローシンを認めると下手の広場を指さした。

柱と屋根だけのボンベ置場と試験抗道のある傍で白衣の白人が、コンクリート台上のレールの上に載っている真黒なドラム罐程の白砲を操作していた。

白人が怒鳴るとボンベ置場から又、赤い女が鉄のボンベを鉤のついた綱で曳摺りながら出て来た。一人の助手が砲口から延びている雷管の銅線にコードを結線する。

抗道の中腹から飛出している細い注入管とボンベの口栓をゴムチューブで連結する。

白人が手を挙げた。助手がフアンのスイッチを入れる。他の助手がメタン・ボンベの口栓を開けた。

モーターの唸りとベルトのはためきが起り、抗道内部からフアン廻転の騒音が伝って来た。ボンベからは圧縮されたガスが注入管を通して噴出する烈しい音がした。

白人は台から降りて、メタン測定器を覗きダイヤルを廻してガス混和量を計る。

「よし！」

強く叫ぶと台上へ戻り、助手に警報を出すことを命ずる。

爆発予告のサイレンが高々と鳴り響いた。

白人の手が鋭く空気を截って合図する。

緊張が流れて、発破器のハンドルが廻る。

器内に放電が起り、瞬間、すさまじい轟音が地殻を震動した。

実験が終つて戻つて来る白人を呼び停めてローシンは

「どうだい？試験結果は？」

「ええ、十発の連続起爆が、〇・〇一秒でした」

「音響相殺効果はいい訳だな」

「はい、それに破壊も均等でした」

一回の電流で数発を起爆させて、その時間が極少な雷管を作り出すことは、爆音を相爆し低くすることになる。特にダイナマイト関係で鉱道等を破壊する場合、爆発に依つて飛び出した石が次の発破で尻を押されることになつて深く割り、而もその石が希望の大きさに揃う。彼等の実験結果はそれが非常に成功したことを意味する。

すると此処で改めて考えなければならぬことは、彼等がその爆薬を何に使用するのかと云うことだ。

七つの領国内に、金か、ダイヤモンドか、それとも多大のウラン鉱を発見したのか。或は、兵器爆薬の一つか、空へ打上げるロケット燃料の起爆装置なのか？……

「それはよかつた、一層の研究を望むよ。ミタリー君の生体実験も成功だったしな」

「えっ？ポツリチス菌の培養土が出来たつてのは大分前の話じやなかったのですか？」

「いや、ワクチンを作り出したのだよ、ポツリチス菌を百%防ぐ抗毒素さ。これで、我々の体には何の影響もなく、相手を殺すことが出来るのさ」

ポツリチス菌とは各国が密かに研究を続けている、一瓦で二百万人を殺すことの出来る猛烈な伝染力を持つ細菌である。細菌、それ

正月の時代劇映画より

初姿縛られ女優 大河原 珠樹

神変麝香猫（東映作品）大川恵子

將軍家暗殺など復讐鬼と化している麝香猫のお林こと高山右近の息妙姫らの隠謀をさえぎる隠密夢想小天治の許婚者由美が、江戸城抜け穴を知る黒縄巻との交換に人質として捕えられ、柱に後手縛り、猿ぐつわもかまされて座っている。僅か三カットで十分に観ることは出来なかったが、猿ぐつわは青色の布で口にかましてあり、縄は黒っぽい中縄で胸を数重巻いていた。縛り目はみられず、眼の前で乱斗があるので、大川恵子のややオドオドした表情を除けば感心出来ず。C級作品。

稲妻小天狗（東映作品）丘さとみ

大名の姫小百合、兄の留守の間に、隣国の悪人達に捕われて、大河内伝次郎の父、松浦築枝の母と共に磔にかけられる。十字架に白の囚衣姿で両手首と両足を揃えて縛りつけられ、柱ごと押したてられる比較的大写しが一瞬みられるだけで、あとは正面から遠景で2カット、背後から5カットばかり。あの愛くるしい顔でハリツケにされ

てもだえるシーンが心ゆくまで観たかったのに心残りな映画である。刑場に裸馬で引廻しになる時も縛られていないのは何故だろう。勿論、採点はC級。

稲妻小天狗（同）浦里はるみ

女忍者の雲切りおもん、妖術を破る百ガニ絵巻を衛守右馬之介から奪うため待伏せしているが、逆に稲妻道人に捕われ、同僚と共に後手の背中合せに縛られる。胸を数重縛り目はわからず。これもC級だ。

桃太郎侍（大映作品）木暮実千代

悪人一味を裏切ったために、短銃で撃たれ傷ついた体を氣を失ったまま雁字搦目の後手縛りで、茶室の中に転がされる。同じ部屋の柱には恋人が捕わって縛りつけられており、悪人達は二人をとじ込めたまま家に火をつける。火煙渦巻く中で気付く恋人を救うために自らの手を火中にさし込んで縄を焼き切る。縄目は非常に複雑だったが緊迫感もあり、うつ伏せに転がされているのでよくわかった。縄を焼ききるために手を火に近かつけながら、苦痛のため悲鳴を

は原爆より恐しいであろう。音もなく、声もなく、ひそかに人体に侵入し、忽ちにして伝播し人類を抹殺してうからだ。そして犯人は知られることなく超然と構えていられる。併し、彼等は何の為に？生体実験と云うからには人間を試験台上に横たえたに違いない。それまでの冷酷残虐を敢えてして、彼等は何を目論んでいるのか？

「君達、ユーマ人の協力のお陰だよ、それもいいよ宗祖の裁可が下りて決定だ」

ローレンは白人の顔を見て、明るく笑った。ユーマ人。世界の嫌われ者、豚人と嘲られる、祖国を持たない放浪の民、ユーマ人、守銭奴と呼ばれ、吸血鬼と罵られながらも世界の富の大半を所有し、一方、化学的頭脳を誇る恐るべき狡猾の民。

ユーマメーソンと称する秘密結社を組織し世界各地に紛争を煽り、巧みに武器弾薬資材で金を攫ってゆく戦争商人ユーマ人。

彼等が、この原始の国に見かけられるとすれば、この化学設備も何か悪どい企図あつてのことだ。あながち、この神秘と科学の対比も一場の夢物語ではなく、何か根拠のあることと考へねばならない。

彼等の来たる処、彼等の現われる処、そこには必ずと云つてよい程、紛争が惹起され、又謀略が渦巻くからだ。

「決定ですか、面白くなりますね」

あげるなど、演技もなかなかよかったようだ。A級作品に近い。

稲妻奉行（新東宝作品）宇治みさ子

鉄火芸者のおみよが、島津家の家宝の名刀を奪った悪浪人秋月を知っているばかりに秋月に捕わって、辻堂の中に縛られているシーンが1カットだけある。何分にも画面の右下隅にチラツと見えるだけだから後手の縛り目などは全く判らないが、胸をぐるぐると三巻ばかり中くらしい縄で巻いてあり、チヨコナンと座らされている。縄尻が柱にゆわえてあるとても想像せねばならない。また捕わって縛られるところも、逆に救い出されるところも省略されている。無論C級である。

戦雲アジヤの女王（新東宝作品）高倉みゆき

金司令こと川島芳子が、抗日馬賊達に武器を補給する悪商人達の証拠を握るために自ら一人の部下をつれただけで偵察に行くが部下は殺され、自らは捕わって手首だけ後手縛りのまま連行され牢に入れられる。

その牢にはかつて在日当時の恋人だった山野中尉も捕わっており、馬賊達は彼を笞打ち焼火ばしで責めて彼女が金司令であることを白状せよとする。彼女も後手に縛られたまま拷問に立会い、たえきれず自白する。支那服というより蒙古服といった

方が適切な服装。体には縄をかけず手首だけ堅く縛ってある。牢に投げ込まれた時に横転し「痛いっ！」と悲鳴をあげる。恋人が拷問される時に縄付きのために二三歩駆け寄っては引もどされて苦悶するところかなり良し。B級の作品だ。

宇宙艇と人工衛星の激突（新東宝作品）

三ツ矢歌子

秘密国家「黒い衛星」に捕わった山中博士の令嬢がおるが、博士と弟を救うため女子団員に化けて活躍するが、発見されて博士達ともどもに捕わり、前手錠、目かくしをされて銃殺されようとする。C級作品

このほか遊侠五人男（大映作品）では中村王緒が後手の猿ぐつわ、空飛ぶ若武者（大映作品）では若松和子が後手ぐるぐる巻きにされて折檻を、また三田登喜子も後手に縛られる。謎の蛇姫屋敷（東映作品）では大川恵子が後手に縛られ、花吹雪出世（東映作品）でも中原ひとみが縛られ猿ぐつわされて誘拐される。また女優の縛りのない時代劇として念のために、「おしどり駕籠」「東映、「鬨け狂女」」「松竹、「双龍秘剣」」「東宝、「競艶雪之丞変化」」「新東宝、「一本足の魔人」」「大映などを映画を観て失望しないよう参考までに書いておきます。

ユーマ人はにやっとした。

「うん、それで明日、最終会議を開く、出席してくれ給え」

「はい、承知しました。そうするとミタリー君は喜ぶだろうな」

含み笑いをする。

「どうして？」

「附録品の入荷で実験動物には事欠なくなるからですよ」

「それなら君だって同じじゃないか、労役動物を大量使用出来る」

ローシン、は助手達に督励されて臼砲を動かしている赤い裸の動物を見やった。

びゅっと鋭く、ユーマ人は口笛を吹いた。

赤い女は、はっと顔を向ける。そして呼ばれていることを知ると盛上った双つの乳房を揺すりながら懸命に早駆けて来た。はあはあ荒い息を吐きながら片膝をつき、ユーマ人の靴先に畏って美貌の頭を伏せる。

「此奴の国でしたね、我々の指向圏内の第8目標国は」

「うん」

ローシンはじろっと女を見下す。

「ははは、お前の国は悪魔に魅入られた」ユーマ人は高々と笑うと裸女の肩先を、丸めた図面の先で叩いた。

「黒天使様を悪魔と云ってはならない」ローシンは青筋をたてて、ユーマ人を激しく叱責した。



女の肌が驚愕で凍んだように思えた……が服従の姿勢は地べたの上で動かない。

黒い髪、黒い瞳、ふくよかな頬、そして、きめの細い滑らかな肌。

ああ、それは日本の女が持っている清らかさなのだ。

寂しように頂垂れ、素直に柔かい肩をつぼめ、大理石のような白腿をびったり合わして

いる淑ましさは……日本の女だけが持つて

いるしとやかさなのだ。

まだ二十才になるやならずであろう。華やかな衣裳に包まれて、いるべき嬌やかな肉体は、家畜のように識別の色を塗られ、毛むじやらの異人の足下の土の上へべったり跪いている。広い額、さわやかな眼色、知性のある美貌である。

「パリに永くいたのだから国の友達にも久しく逢っていないだろう。親しい友達がいたら名を云え、攫ってくるように頼んでおく」

女はフランス留学生だったのだ。シヤンゼリゼーでふと知り合ったこのユーマ人に言葉巧みに誘拐され、厳しい折檻の末、馴致されたのだ。

女は淋しそうにかぶりを振った。

「そうか、でも前に聞いたことがあるぞ。お

前より奇麗で心だてのやさしい従妹の名を、

確か、比奈地路子と云ったな」

女はあつと眼をあげた。そして、わなわなと唇を震わせながら激しく哀願した。

「やめて下さい！路子さんだけは……あんな良い女をこんな暮しに堕すなんて……たまらないわ、可哀相だわ」

女は泣きそうに声を湿らせた。

「ははは、そんなに云うと尚更連れて来たくなるぜ、ははは」

ユーマ人は、濡れ瞬いて哀訴している瞳をよそに高々と哄笑した。

併し、彼等は日本に対して何を企図しているのか？化学と原始を包含する彼等は何を日本に惹き起そうとするのか？

それは、さておき、舞台を東京に移し、其処で起った数々の事件から述べて行こう思う。

(未完)

花坂道子嬢 優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付 (タテ十八糎
ヨコ十三糎)

花坂道子嬢全裸緊縛集 (はな
1) 花坂道子嬢股間縛り集 (

点から狙いをつけた作品を提
供いたします。

★ヌード縛り (略号
二枚一組 三百円

★股間縛り (略号
二枚一組 三百円

はな2) の大好評により更に
素晴らしい作品の発表を強く要
望されていまして、ここ
に前二作とは変った新しい観

◎女体切腹フォト◎

「腰元自刃」

村井知可子嬢

大中判印画紙焼付 六枚一組 八百円

お家の重宝を紛失した美貌の
腰元が激しい責折檻の末、遂
に敵方から忍び込んだ間諜で
あることを白状する。そして
今は、せめて武士の娘らし
く潔く切腹して果てることを
願う。彼女に秘かな好意を寄
せていた御側の若侍は彼女の
介錯を願って出て許される。
今迄の折檻の場は忽ち凄惨な

美女切腹の場と変る。という
構想のもとに六枚連続の切腹
フォト (全場面切腹) 六枚の
中、二枚は若侍介錯の場面。
女体切腹マニアの方は是非一
度ごらん下さい。日本髪をふ
り乱して苦悶するさまは、必
ずや皆様を魅了せずにはおか
ないでしょう。(女性モデル
の外、美男男性モデル登場)

臨時増刊号

「責小説特集号」目下発売中!

売切れぬうち即刻お申込を! 定価一部二百円 (送料八円)

大好評! (表紙色刷、本文中質紙使用)

「責小説特集号」は主として
昭和二十七年に発行した
た本誌の中から悦虐作品とし
て好評を得ました作品二十篇
を選び出し、全部新しく挿絵
を描いて再録したものであり
ます。この特集号一冊によつて
り、昭和二十七年発行の本誌
の主要な作品を網羅している
ことになり、八葉の口絵は
氏、北原純子氏の二人を煩
すから、これだけの力作ばかり
十分に観賞価値のあるものと
思います。

巻頭口絵

拷問 (片矢薫・作) 滝れい子画
吸血女流画家 (岡田咲子・作)

ある奇術師の恋 (吉丘垣根・作)

鬼兵衛刺青異譚 (二俣志津子・作)

遊女葦水の最期 (片矢薫・作)

縛られた妻 (早川新二郎・作)

巫女屋敷の責絵巻 (岡田咲子・作)

誘切傑作責小説 滝れい子画

拷問 (特高刑事の惨虐行為) 片矢薫

賭博 (淫奔マダム狂騒曲) 二俣志津子

巫女屋敷の責め絵巻 岡田咲子

老いらくの恋異聞 榛ノ木参一

復讐のドラマ 片矢薫

鬼兵衛刺青異譚 二俣志津子

吸血女流画家 岡田咲子

ある奇術師の恋 吉丘垣根

惨虐戦慄の微用女工 片矢薫

遊女葦水の最期 片矢薫

囚衣 古川裕子

奴隷妻 片矢薫

悪魔と口紅 桂牧次郎

縛られた妻 早川新二郎

廊の灯影 片矢薫

MとS 岡田咲子

責苦 竹谷十三

記録係 岡田咲子

赤に憑かれた男 上村久秀雄



読者通信

○ 小生もKK愛読者の一人です。御誌を手にしてから二年程ですが現在では小生にとってなくてはならない存在になってしまいました。自分は縛られた女性に非常に興味を持つ者です。これが実現出来る機会に恵まれたら、どんなにか何物にもかえ難い幸福だと常に思っています。しかし、女性の自由を奪う(この場合、承諾を得た相手)以外に、その女性に対して苦痛を与えることは小生自身、見るに忍びません。このことは(女性に対して憧れを持っている卑怯な女性崇拜家だ)と友達にも云われる所以でしょうか。小生は二十六才の青年ですが、どなたか小生に共鳴なさる方、お友達になり

ましょう。この夢を叶えてやろうと思召し下さる方の現れる様に念願して居ります。神戸の八潮三枝子様、貴女の御意向をお伺い致したいと存じますが如何でしょうか。(神戸 G・F生)

○ 横浜のA・Y様。早速のモデル志望で有難うございます。左記の名宛で御一報下さい。安全確実に私の許へ連絡がつくようになっていきます。(浜松市下池川町一五五中村隆)他にも男性マードのモデル御希望の方、又は興味を持たれる方々の御通信をお待ちします。兵庫凡様、貴兄の御意見、私の氣持を代弁しているようで大いに心強く思いました。文通出来れば幸いです。失念様も御手紙頂けたら嬉しく思います。氏名を一寸忘れましたが確に東京の方で軍人の責めに関する通信を発表された方、私も同じ興味を持って居るので連絡して下されば意見の交換等したいと思えます。少いスペースで無理かもしれませんが口面に一頁の四分の一でもいいのですから男性マードを欲しいのです。必ずしも嗜虐的なものでなくてもオースドックスのマードや浴場のスナップ

でも、我々ソドミヤをどんなに慰めてくれるかわかりません。毎号が難しければ隔月でも結構です。一度、ぜひ御検討下さい。(青葉慎一)

○ 皆様の御便りにより、この中部地方に意外に同好の方の多いのを知り、嬉しく思っています。小生は二十三才、奇巧は心の糧として今では無くてならぬ存在となりました。「ヤブー」、「被虐の一日」、「マゾへのいざない」等、皆々素晴らしい読物でした。矢部様貴女は奴隷を一週間もお責めにな

◎写真特写引受◎
特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によって写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他にっいてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

つたそうですが、どんな責めを行われしたか。長期のお仕置と聞いた丈でも身の内がぞくぞくする様な気が致します。小生も、あの震えるようなマゾの快感への思い止み難く色々研究して見ました

中々よいパートナーを得ることが出来ずいつも不満足なまま終っています。両足縛り程度までは自分で出来るのですが、後手とか吊り海老責のような完全に自由を奪った縛りは、相手なしには不可能です。一度、心ゆくまで小生を責め苛んで下さる方はありませんでしょうか。柱に身動きも出来ない位に六尺縄一本の身体をぐるぐる巻きに縛られて革の鞭を受けたり、逆吊りにされ水責を受けたり、寒風の吹き荒ぶ庭で海老縛りにされたら、どれ程楽しいでしょう。毎日こんな想像ばかり描いて一人楽しんで居りますが、空想はどこまでも空想で、現実の私の心を慰めてはくれません。一度、このような方が私の前に現われて下されば、真実に大馬の労もいといません。どなたか私の御主人になって下さる方はごさいませんか。御便り楽しみにして居ります。

(Y・I生)

○ 最近号には「脱腸帯」の三字を見かけられる事は私のような脱腸帯マニアにとっては嬉しい限りです。幼児、少年等が締めているのは、何かマゾ的なことを連想させるに充分です。又、脱腸帯はゴム

製に限るようです。白い肌に喰い込む赤いゴム……。その魅力は、私にとつては白い襪以上です。最近手術をする人が多くなつて、脱腸帯をして居る人は少なくなつたようです。私は、少年期、幼児期又、現在も脱腸帯を締めています（すでに全治しています）一度、締めれば其の感触は忘れられぬのではないかと思います。使用されて居られる方、又は過去に使用された方は御存知かと思ひますが、長期間締めて居ることは相当苦痛を覚えるものですから、責めや何かにものもつと利用できるのではないかと思ひます。締めて居ることによる（脱腸による）屈辱感、銭湯へ行けば人の注視を受け、学校では変な仇名をつけられる等々、脱腸ほど子供に屈辱を持たせるものはないと思ひます。又その反面、脱腸の者は自分の身体に人並以上の愛着を感じることは事実のようです。どうぞ御誌でも今後、脱腸帯等をもつと取り上げて欲しいと思ひます。例えば二月号の杉俊夫氏のアイデアに於ける臨床講義に於ける一シーン。こういう場面は是非、脱腸帯をつけた写真、又は画にして欲しい。又、色々なゴム製医療器、痔バンド、

夜尿帯、子宮バンド等々、私も一通り揃えて時々、使用して楽しんであります。読者の方で不用の脱腸帯等を持って居られる方がありませんれば適当な価格でお譲り願ひたいと思ひます。（但しゴム製、大人用に限る）医療器械のコレクションも又、楽しいものです。これも杉俊夫氏の文中にありました。包茎矯正バンド、是非、欲しいと思ひますが、どなたか売っている処を御存知の方はお教え下さい。（野原美喜夫）

○ K Kも復刊四年を迎え、順調に毎月刊行を続ける努力には敬意を表します。地味な刊行を続けるK Kも、読者が相当に増大して来たことと思ひます。二月号は本調子とは云えなかつた様子ですが、表紙は前号に比較すると、まだしもよかつた様です。裏表紙の「カタツムリ」は効果的。本文に入つて山川和男氏の「マヤの黄昏」が、第一回から佳境で素晴らしい。次号が待たれてならない。浦田紀夫氏の「嵐の中の花」も面白い。但し挿画はよろしくない。北原さんの麗筆を望みたかつた。「磔刑と女優」を書かれた奈加田須磨尾氏に。私も「唐獅子城」は覚えてい

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』

（略号）

四馬孝画 大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○ 胃の洗滌 ○ ヒマシ油責

ます。なかなか面白い小説でした。作者は下村悦夫氏でした。

（東京 東一郎）

○ 私は二十五才のマゾ的男性です。中学生の時に廊下に立たされたことが、楽しい思い出になっています。私はエプロン（婦人用サロン）をかけるのが好きです。部屋の中でエプロンをして楽しんでます。と云つても単なるフェティシズムではなく私の場合、女性に対する服従の表現としてエプロンをかけて居るのです。女性の方で私を召使として足下に膝まづかせて下さる方がおられませんか。貴女の奴隷として奉仕します。

（東京 S・S生）

○ 最近切腹記事が少くなり、実に残念に存じます。須藤律夫氏の

「私のスクラップ」に第二項「忠長の淫虐……及び……」の記事がありましたが早速、手許にある「古今武家盛衰記」三十巻、と対照致しました。忠長は秀康の子ではなく又、越前福井に封ぜられたこともないので多分、忠直の誤認ではないでしょうか。最近、先輩Y氏より女性切腹の実話を聞きまして、御伝えたいと思ひます。昭和代のことと思ひますが、九州の或る農家で、長男の嫁が姑の虐待に耐えかね、夫に訴えても母に気がねして取合つてくれないので、思い余つて自殺を決意、五月の或る早朝、裏の柿の木に縄をかけて首を吊つたが、縄が腐つていた故か切れてしまったので、家より刺身庖丁を持ち出し裏の土蔵にもたれて左乳下三寸位の処を突き刺し、右に引き廻わしたのが力及

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』

（略号）

四馬孝画 大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○ 申し責 ○ 苦悶のコルセット ○ 浣腸責

ばず、止む得ず臍の下の処で深く突き刺し、地面に倒れて苦悶中、転んで溝に落ち込み死亡したと云うことです。藤山氏に依頼して、氏の墨筆に生かして頂ければ幸いです。尙、右の他、前記の古今武家盛衰記には色々の切腹記事が記載してありますので、中康先生は既に御存知かと思ひます。

(福岡 千原桐男)

矢部かず子様、あなたの奴隷が羨しくなりませんか。私は東京に在住の若くて健康な男性です。どうぞ私もあなた様の奴隷として召して下さい。きつと失望なさらないでしようし、御迷惑をおかけ致しません。心より御召を待っています。

(東京 H・S 生)

小生は奴隷志願者です。狂暴な女王様の足下にひれ伏す哀れな男奴隷——つまり小生はマゾヒストなのです。小生を全的支配の下に完全に屈服せしめ、あらゆる屈辱と責苦を加え、従順な奴隷として訓練するような残酷無比な女性こそ、小生の渴望であり憧れなのです。小生を馬鹿な奴と軽蔑するか、もしくは、なんと云われても、これは小生にとって天国の歓

びなのです。残酷な女性の生贄となつて、様々な屈辱と強圧的支配を受けることが出来ましたら、なんと云う幸福でしょう。特に小生は、一度に数人の女性に苛められたいのです。小生は、女性はおもつともつとサジスチックになるべきだという主張を持っています。男性に比して肉体的、精神的にもすぐれている女性が男性を支配してこそ、もつとも理想的であると考へます。人間の歴史には女性が男性を支配した時代があり、それが男性の支配に変わつて数百年経ちましたが、再び女性支配が復活すべきだと小生は考えています。小生は画を描く女性のモデル、男の身体を鑑賞したい御婦人の要求にもそえると思ひます。この哀れな奴隷志願者の夢を叶えて下さる方が居られましたら、何卒お便り下さい。

(東京 田口生)

杉俊夫氏の「少年の禪美に関するある構想」は、私のイメージにかなりピッタリしたものでした。しかし私はむしろ二十代、三十代の男の禪姿に、より強い関心を持つています。禪（出来れば前部をびったり被う程度の巾の六尺禪なら臀部に喰い入るように締め上げ

最新作

女体緊縛写真

花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。

(略号はな1)

◎花坂道子嬢

股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。

(略号はな2)

◎以上二集二十枚にて

千五百円

た姿が好ましい)をかけさせた男を色々もて遊んだり、また自分をもて遊ばされたりすることを望んでいます。適当な希望者はいないものでしょうか。東京のY生が提案した禪にMO号という番号をつけて、禪愛好者の交流をはかる案は賛成です。Y生と禪一本で語り合ったら、どんなに愉快でしょう。角田新一氏とは、ぜひお会いする機会を得たいものです。ヘコとして存分に使用してみたいと思ふのですが、機会がないのは残念です。「一禪亭雜記」続編は折に

(内田武男)

神戸、八潮三枝子様。私は現在神戸の或る会社に勤務しております。三十四才の男子、奇巧の大ファン。二月号で貴女の御便り拝読貴女のお呼びかけは私の念願に

つたり、真に嬉しくなつかしく思
います。文中の御意見は一つ一つ
御もつともなことです。まったく
私も同意見です。同志として、せ
めても貴女の御希望にそい得たい
と思い、筆をとりました。三枝子
様、失礼なことに存じますが、若
しお許し願えるならば文通なりと
交換、色々と話し合い貴女のお気持
の一端なりともお慰めしたいと思
います。御返信をお待ちして居り
ます。
(兵庫 渋谷生)

○

山口幸一氏の御質問にお答え致
します。房総九十九里浜で見かけ
た輝姿の高校生らしき少年達が、
如何にして六尺輝の常用者である
と認めたかとの御質問ですが、九
十九里浜の荒磯で見かけた少年達
は、水泳を終えて海から上ると濡
れた輝を取りはずして、砂浜に脱
ぎ捨ててあった彼等の衣類の中か
ら、新しい六尺輝を取り出して締
めました。八人居りました中で六
尺輝三人、越中二人、パンツ三人

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙(タテ十八糎ヨコ十三糎)焼付 八枚一組 八百円

の割合でした。彼等はズボンを穿
かず丸首シャツを上に着て帰って
行きました。又、八日市場の近く
の漁村の中を通った時、夏でした
ので部落の家は皆、入口や窓を明
けてありましたが、逞しい壮年の
男が六尺輝一本で大の字になって
昼寝しているのを沢山見かけまし
た。漁村のことなので往來でも輝
一本の男を可成り見ました。軒端
の物干竿には、六尺輝と思われる
白の晒木綿が真夏の風に翻って居
りました。以上の理由で、六尺輝
の常用者であると判断致しまし
た。私は今まで海浜や輝祭等での
輝姿のスナップ写真を可成り持つ
て居りますが、山口氏がお望みな
れば喜んで進呈致します。
(大阪 中井光夫)

○

二十三才になる縄と輝にあこが
れる男です。二月号の杉俊夫氏の
「輝美に関する構想」に感銘し、
何かあることを期待してペンを取
りました。もつとも、杉氏のイメ

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案 北原純子女史画
キヤビネ版印画紙密着焼付 八枚一組 千円(送共)

ージにある十五、六才の美少年と
は違い、すでに私は二十台を過ぎ
ていますので、その構想の主人役
は演じ難いのですが、自分自身は
大いに若返った？つもりで一人芝
居を打ってみました。しかし乍ら
一人ではやはり物足りなく、良い
相手を欲しいのは云うまでもあり
ません。更に私は、学生時代から
覚えた縄の魅力が忘れ難く、毎月
の奇巧も、これを一番の楽しみと
して待ちわびています。私は異性
には何の興味も抱きませんから、
対象はやはり男性的な人、色あせ
た輝を前垂れの巾も細めにぐつと
締め上げられて後手にされ、あら
ゆる屈辱を受けることに無上の喜
びを感じます。強いられて友人か
らヌード写真も撮られたこともあ
りますが、やはり縄、及び輝を用
いたものが一番好きです。二月号
通信の「東京A生」静岡平林要
助氏等と文通したいと存じま
す。
(静岡市 北沢孝司)

○

八潮三枝子様、二月号で貴女の

お便りを拝見しました。貴女を縛
り上げて鼻責めのプレイを二人で
楽しみたいと心から希うもので
す。大学時代から女性の身体の内
由を奪って、顔や鼻などを弄んで
みたい願望に駆られながら、相手
が得られぬままに現在に至って居
ります。残忍な拷問の責めは、思
っただけでも嫌なので、あくまで
お互いの了解により責められる貴女
自身も安心してプレイ出来るよう
な、なごやかな交際をお願いした
いのですが、如何でしょうか。二
十六才、五尺六寸、十六貫、それ
程まづい顔ではありません。孤独
なサラリーマンです。是非、お便
り下さる様、御願い致します。
(森 芳朗)

○

私は数年前より貴誌を愛読して
いる二十五才の青年です。私達の
ような性格者にとっては、貴誌の
存在は重宝であり無くてはならな
い読物であります。復刊前の
「ゲイナスの重石」や「美しき暴
君」のような読物は私の好む物で

す。最近マゾヒスト読物が少く残念です。今後はマゾ小説も多分に載せて頂きたく希望します。

(大阪 藤木恭助)

○ 東京のM・H子さん、貴女のお便りを二月号で拝見しました。貴女は女の人を求められています。小生ではいけません。小生は貴女のお便りを読んで、貴女こそ小生の希望していた人であると思えました。と同時に、小生は必ず貴女を御満足させられると思っています。その自信はあります。云つても小生は、そのような経験のない至って気の弱いサディストなのですが……。ですから血を見るような乱暴なことは大嫌いです。お互に未経験者同志、一緒にサドとマゾの楽しみを研究し味わおうではありませんか。

(東京 S生)

○ 私は最近、貴誌を知った二十二年の地方出身の学生です。自分乍ら云うのも変ですが、隆々とした身体をしています。それに似合わず大変内気で恥しがり屋のマゾヒストです。これまで随分このマゾヒストと斗つて来ましたが、今ではもうどうにもならない

運命と諦め、ひたすらサディステイクな女性のお出ましを請い願っている次第です。女性によって加えられる、ありとあらゆる責め苦恥辱こそ私にとっては唯一の生甲斐なのです。女性に組敷かれ残酷にも奴隷としての烙印を押され入墨されたら、どんなにか幸せなことでしようか。どなたか都内、若くは東京近辺にお住いの女性で、私を奴隷として御入用の方が居られましたら、無上の幸福として御奉仕致します。何卒お召し下さい。まだ、うぶですから十二分に御意に叶わないかも知れませんが、又それだけに調教のしがいがあるのではないかと思います。尙女性の方で、男性に加える責めの素晴らしいアイデアをお持ちの方は是非とも誌上に発表して下さい。

(マゾ学生)

○ 十二月の読者通信欄を見ている内に驚いた。私の拙い原稿が活字になっていたからだ。どうやら、これで私の手紙が貴社に届いている証拠だ。私は同人雑誌やら学校新聞等の編集、出版等を散々手がけてきているので自分の考えていることを印刷文等にしたいとはあるが、部数が少いので仲々「活

字」にしたのを見たことはないし、私の拙文が貴誌に掲載されたのは、その意味で嬉しく思っている。掲載の光栄に浴したことに一言、御礼申し上げます。さて、十二月号でよかつたのは「ある女給の体験」で、最も魅力があつた。体験の告白と云う形式を取っているのが、とてもリアルに読めるのだ。新地で脱走婦の専用だつたと云う、革の手錠というのは、どんなものなのか？ それから脱走婦に科せられたという「台かつぎ」という名称の責様式の挿入面が欲しかった。とにかく、この物語は現

代的で実際にありそうなことだ。私は読んでいる内に、自分がこの脱走婦になつて、折檻されてみたくなつた。事実、この物語の主人公に私自身になりすまして、責められている気分になつてくれるのが、貴誌の存在の理由の一つである。私には云えるのだ。編集者又は読者の方は、私を内向的マゾとのラク印を押すことであらう。新年号にはグラビヤに女学生が載つていたが、あの写真は中学一、二年の年令だろう。オッパイ臭くて第一漫画的だし、どうせ載せてくれるなら、高校上級の成熟した

【新版】女体緊縛フォト ○分譲○

R組 六十組

(印画紙の大きさ 9 x 13 cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しばり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

(東京 阿倍能磨)

(ヤブー生)

今『血を呼ぶ部屋』『関東伝女一

けるよし、よろしくお願いしま
す。
(東京 R・K生)

新春を迎え貴誌の益々御繁栄御

発展を心から御歓迎申し上げま
す。小生事永らく貴誌の愛読をさ
せて頂いて参りました。と、申し
ます事は、小生生来のフエチシ
トの傾向があり此の特殊な感情を
満足させる様な書物は貴誌以外に
は求められませんでした。数年前
本屋の店頭で貴誌を発見致しまし
た時、正に天が我々に与えて下さ
ったのかと感激した事を忘れる事
が出来ません。さて、此の度御便
りを致しましたのは常々女性の鼻
孔に魅力を感じて居ります小生に
取りまして二月号の読者通信の欄
で神戸の八潮三枝子様の御便りを
拝見致しまして、これこそ神の福
音の様に感じ幾久しく八潮様の様
な方の出現を待ちに待った甲斐が
有ったと、此の時程貴誌の存在の
有難さを味った事は有りませんで
した。

(中島 陸)

○ 尻切れトンボで終わっている「L
T商会」について時々どうしたの
かという読者通信を拝見致します
が、どうも書くのが嫌気がさして
放りばなしにして居ます。多少で
も期待して下さった人が居りまし
たならば申し訳ない事だとは思って
居ますが、アマチュアの勝手な所
でどうかお許し願いたいと思いま

す。一応下書きはあることはある
のですが、全然気に入らないので
書くとはすれは、すっかり書き直さ
なくてはならないと思うと面倒臭
くてどうも。何か書く事を刺激さ
れるような出来事があったら又書
かせてもらおう事として、当分の間
「LT商会」休業ということにさ
せて頂きます。

(東京 佐川増夫)

○ 同好者の多くが読者欄で、屢々
嘆くところ、最近の奇巧には我々
の望む記事が余りにも少い。男と
男、輝の魅力、逞ましき、口絵に
すら思い出したようにしか発表さ
れず、男性緊縛フォトは絶版後未
だに着手の声を聞いて居ません。
マニアも多種多様、様々の好みが
あって編集企画も中々楽ではない
と思ひますが、たまには我々にも
満足を与えて頂きたいと思いま
す。二月号では「少年の輝美に関
する或る構想」(杉俊夫氏)に渴
をいやされたような感じを受けま
した。特に二枚目の挿絵は文中、
六尺輝とあり乍ら、一見もつこ輝
のように画かれていました。そ
の腹に喰い込むような緊縛状態の
表現は、まことに嬉しく感じまし
た。

(ソドミア生)

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	一枚	一枚
五枚	六〇〇円	(送共)
十枚	一〇〇〇円	

G1	鉄鎖と柔肌(高瀬 忍)
G2	股間縛正面(高瀬 忍)
G3	海老晒し(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子(菅登紀子)
G5	最感の帯(伊吹真佐子)
G6	アイデア(萩千恵子)
G7	叫喚の森(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し(村田那美子)
G9	優すがた(花坂道子)
G10	開股一番(萩千恵子)
E組	(9×13cm印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集(佐賀)

ES2	三枚一組 二〇〇円
ES3	全裸悦集(須川)
ES4	四枚一組 二五〇円
ES5	三枚一組 二〇〇円
ES6	酒宴の弄者(佐賀)
ES7	二枚一組 一五〇円
ES8	脱がされる娘(須川)
ES9	五枚一組 三〇〇円
ES10	二枚一組 一五〇円
	緊縛のベッド・シーン(佐賀美智子)
	六枚一組 三五〇円

○ 美少女責め、女学生玩弄につか
れた私の一文に対し、二月号にて
兵庫YM氏と共に名古屋のMM氏
より早速の御賛意を戴いて、正に
百万の味方を得たような気持ちで
す。是非文通させて戴きたいと存
じます。宛名は日通病院内宮津
様で宜しいのでしょうか。私は北
の果て青森に住む二十八才の一公

務員ですが、旧号時代より奇巧の
愛読者であつたにも拘わらず、殆
んど満足らしい満足を味った事は
ありません。特に最近号に於てグ
ラビアその他に美少女責めの全く
影をひそめたのはどうした事とし
ようか。小生が過去十年近く、あ
りとあらゆる雑誌単行本より蒐集
した美少女責めに関するスクラッ
プは、既にみかん箱で二つにもな

りました。奇巧を入手した場合でも、私は少女責めに關するもののみをスクラップ用に取り去つて他は殆んど顧みて居ないので。それすらも最近では一冊から二、三枚しか取る事が出来なくなりました。清楚な美少女に対する痛ましくも美しい責めの数々を是非とも滝先生等の麗筆にのせてグラビヤに飾つて欲しいのです。(女史の旧作『体操倉庫』の感激を小生未だに忘れません。)又、浦田氏の「嵐の中の花」中、女学生晴美への責めを注目して居ります。なお小生は右の美少女責めに關して、若干の分析研究、体験記等を準備して居り、現在は空想的物語をも創作して居ります。奇巧誌上に於て『美少女責め』の新分野を開拓するために、恥しいものですが他日未熟なペン画挿絵と共に公表する機会を願つて居る次第です。M、Y、M、両氏の外、美少女責めを女性責めとは異質の美として御認め下さる方々の御支援を願つて止みません。(青森 Y・T生)

○ 昔の隆間、今のシスターボーイ熟れも女装趣味で所詮、女性代用品、転性は論外として、人工女性だの、文化女性だのと云つても、

◆新版マゾフオト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフオト。

第一組 凌辱篇 (略号 ま1)

大中判印画紙焼付、五枚一組 七百円

第二組 屈伏篇 (略号 ま2)

大中判印画紙焼付 五枚一組 七百円

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組(凌辱篇)では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組(屈伏篇)では、尻の下敷になつて屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。

× プーム並みに、流行らなくなればジャーナリストがソツポを向くと同時に、マスコミから蹴落されスター級のドル箱以外は、永久に咲かぬ凋み花と化するのではあるまいか。何も「男らしく」とか、「男性を誇れ」と云うのではない。「彫刻」に示される様に若さの躍動した成長期の青年、筋肉の完成せる成人男子の洗練された力こそ新しい美の典型であり象徴だと思ふ。それらは寧ろ「処女の清浄美」以上に貴重な美を有っているも

のである。中学上級から高校に至る年代の若者の肉体は、美と力と清潔が結集されて、其処から漂う匂は天然自然だから、人生で最高の材料であるのに不拘、依然女性及びそれに準ずる形状のみ評価されるのが不思議でならぬ。需要商品として徐々に市価を呼ぶ事実は必定ゆえ、先ず御誌から取材され後世の先鞭を揮われては如何？女と異り男性は禪を要するが……

(原 俊行)

○ 乗杉貴代子様。お願い！障碍とびのことを書いて頂けませんか？その征服慾に満ちたスリルと快感それから馬が障碍を拒否した場合の懲戒の方法などを是非くわしく書いて頂きたいと思ひます。なぜなら、僕にとつて、鞭を鳴らし乍ら障碍とびをしている女性程、美しく崇高なものはこの世の中にあり得ないので。そして、ダイアナ夫人こそは常に僕の理想の女性像なのです。(麻生保)

○ 臨時増刊号の責小説集、楽しみにして見た所、殆どが女性の責ばかりで、すっかり失望しました。どうか、あのような時に半分ぐらいの割合で男性の責小説をのせて下さい。KKの特徴は、何と云つてもソドミニア的なものが独特の読物で、この程のものは他にないだけに大切です。どうか今後の編集には毎月、三、四篇の男性責の小説や口絵をのせて下さい。二月号はそれに引かえて十分に満足しました。先ず「家畜人ヤブー」が佳境に入つて来た事です。哀れな麟一郎が去勢された姿で、曾ての婚約者クララやその他の前に引出されて、家畜適性検査を受ける描写は

◎次号の本誌は二月下旬発売です

思わず胸がつまりました。殊に、鉄の車輪に仰向に縛りつけられたボティーフは、あの種の責の最上のものでした。挿絵もみごとでした。どうかあの責をもっと刻明に描いて、口絵にでも出して下さったらと切望します。これから麟一郎は、例の自分のもので作った皮製の鞭でセシルやドリスに鞭打たれるのでしようが、どうかこのあたり力を入れて書いて下さい。もつともつと、麟一郎が恥かしめられ責めさいなまれるのを楽しみにしています。次に沼正三氏の「ある夢想家の手帖から」のイルゼ・コツホの話堪能しました。イルゼが男子の政治犯を全裸にして整列させ、長時間挑発的な刺戟を与え、昂奮したものを夜伽にえらぶあたりは、どうか沼正三氏の名筆で充分な描写を加えて何かの機会に書いていただきたいと思えます。次は「十三の階段」でチャンギー刑務所の日本軍将兵に対する残虐、私も最も好む筋で実は私も、あのテーマの小説を一篇もっています。陸軍中尉が戦犯者として、英国兵にあらゆる恥辱と残虐

を受ける筋です。「少年の禪美の構想」杉俊夫氏のもものは山口幸一氏のものに似ていますが、あの種のもものは嫌いではありませんが、やはり禪美は青年が最上ではないでしようか、「大阪屋花鳥」は、さすがに圧巻ですが、私はあの苛められる新入りの女囚を男に置き替えてみました。無実の罪の若い武士が新入りとして牢に入れられ武士なるが故に一そう牢名主から苛められ、全裸のスッテン踊りや大ぜいから男として耐え難い凌辱をうける場面を想像しました。青葉慎一氏の「病者の獄」ソドミアとして面白いのですが、いささか青白く病的なのが欠点です。しかし、青葉氏のもものは毎号たのしみです。どうか今月のように、男性責やマゾ、ソドミヤを満足させる記事をお願いします。

(R・S生)

○ 神戸の八潮三枝子様。小生三十才、会社員で妻と死別して目下独身です。奇俱は貴女と、同じく数年前からの愛読者でして、特に『読者通信』欄には貴女の如き女

性が現われないかと特に注目していた者です。今日までマゾ的な女性の投稿はかなりありました。が、地域的に遠方であつたり、又そうでなくとも貴女の如きはつきり意思表示された方は小生の記憶している限りでは一人もありませんでした。それだけに貴女の文を読んだ小生強く心引かれるものを感じ、更に貴女のマゾの程度と小生のサディズムの程度が一致にも思ひましてこの欄に初めて貴女に呼び掛けの一文を呈した次第であります。貴女の如き女性がこの世に矢張り存在するということを知っただけでも小生にとつては大いなる喜びでありまして、これも奇俱を愛読しておればこそなればで序作ら奇俱に厚く感謝致します。必ず御便りあるものと期待して筆をおきます。尚あくまで紳士的な交際をする事は云うまでもありません。

(大阪 二葉浩)

○ 謹賀新年、良識と芸術的香気を備えた特殊研究誌として一層の御発展を祈る次第です。編集については自肅の一線を堅持して永続性について慎重な考慮をはらわれていると共にそれが記事の低調を来すことのないようみなみなならぬ

御苦心を重ねておられる様子がうかがわれます。先の「生首礼讃」同感の意を表する読者通信が出て驚きました。今度は同じようなエッセーで「女性文身考」を書きましたからよろしかったら御掲載願います。二月号口絵、滝れい子氏の「女体自刃」はよいと思ひました。しばらく専門でなく時々この種類のものを入れて下さい。擬態写真で迫真の傑作を入れてもらいたいと思ひますが、少し無理でしうか。但し写真ならなお結構です。

(南方 純)

○ KK女体切腹愛好者の皆様、お

北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕

(略号女学生)

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

〔ハートの的女体洗滌室〕

(略号はあと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕

(略号ぬうと)

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

便り下さい、お願いいたします。お返
事切腹面等差し上げます。

(岡崎市伊賀町北三番地 梅村
和子)

愛読者の皆様、明けましておめ
でとございます。小生の事は毎
号の口絵及び速報欄で御存知と思
います。新年を迎えたと共に小
生も親しく皆様と文通などしたく
存じます。是非お便り御寄せ下
さいませ。(千葉市通町一一五
鈴木章夫方 阿部 秀)

寒さもいよいよ厳しくなりゆく
折柄貴社益々御盛祥の段御よろこ
び申し上げます。さて小生は地方
の小都市に住む二十九才の一公務
員であります。旧号時代より貴誌
を愛読致して居るものです。十二
月号にては初投稿にもかかわらず
小生の拙い一文を読者通信欄に御
載録下さいまして誠に感激して居
る次第です。これを機会に小生も
このみちのく果から貴誌の誌友
に加えて頂きたく存じます。小生
は過去十年間信奉し続けてきた「
鼻、乳房、腋、臍等による責め」の
新分野を貴誌に於て開拓する事を
悲願にして居ります。すでに右に
関し、アイデア百余(ペン画付)

少女責より見た貴誌の批評、少女
責の特異性(論文)少女の鼻の美
(同)蕾の美につかれて(告白文)
少年少女雑誌に於ける少女責

(研究)少女暴行の実態(研究)
等を準備してありますが、これを
「少女責シリーズ」として貴誌の
寸頁を借りられたら、どんなに嬉
しい事でしょうか。中には公開不
能のものもありましようが、「鼻
いじめ」を中心としてフェチッ
シエなものは支障ないのではない
かと思ひます。同封した資料は右の
うち、貴誌批評とアイデア集で
す。何分未熟なペン画ではあり、
又印刷するのに不向きかも知れま
せん。御指示があればいつにても
書き直したいと思ひますので何卒
よろしく御指導下さい。なるべく
は右のペン画そのまま掲載して
頂きたいと存じますが、そうでな
い場合でも淹れい子先生の女学生
責めの参考になれば非常な幸せで
す。更に無理な注文かも知れませ
んが、小生滝女史の画風をこよな
く愛好する者として是非直接同女
史と文通したいと思うのです。が
如何なものでしょうか。先ずは右
の通り手前勝手な注文を並べ立て
ました。無礼な点がありましたら
何卒御許し下さい。そして末永く

貴誌の誌友となれますよう改めて
御願い致します。

(青森 Y・T生)

私が貴誌を知ったのも、もう随
分と前のことになってしまいまし
た。創刊号(大判の頃)から一応
全部目を通してあります。復刊も
偶然の機会から早々に知り、もう
何冊になるか数えなければわかり
ませんが、全巻揃え得たことは私
の喜びの一つです。私は先ず純粹
のS型といったところですが、そ
れに幾分のMと背、腰のフェチが
加っているようです。ところで、
もう十数年にもなりますか、この
道に親しんで妙に思うことは、緊
縛、伸し、吊り、といろいろな責
苦が考えられていますが、あまり
固定という型が出てこないことで
す。例えばギブスなどによつて首
胴、又は手足を固めてしまふ。ど
こからどの部分迄、どのような形
に固定するのも自由であり、又、
片足を自由にして行動させ、その
固定のみは長期間除去せずに不
由な身体で生活させる。とまあ、
この種の応用は相当広範囲にわた
って考えられるのではないでしょ
うか。この種の記事が全く見当ら
ないのを妙に思います。更に注目

すべき点として、今挙げたような
事が現実にはこの社会で行われてい
るということ。整形外科的責
めともいいましようか。先ず先
天性股関節脱臼の場合、患者は完
全に股を百八十度を開いた形でギ
ブス固定されます。みぞおちから
足首まで。大体は子供の病気で
が、実際に外国では十五才位の少
女迄この方法を行った記録があり
ます。第二の例としては背椎カリ
エスの治療です。まずギブスベッ
ドに寝なくてはなりません。うつ
むけに寝かせて背中にギブスをあ
て型をとった亀の甲羅のようなも
のに、すっぽりと包まされて寝るの
ですが、この石にはまった生活を
十数年続けなければなりません。
尚、最後に映画「オクラホマ」に
あつたコルセット姿の娘が大勢
で踊るシーン、あの場合のステー
ルを誌上に発表していただかせ
んか。その他外国映画のコルセッ
ト・シーンの写真をぜひ、「フレ
ンチカンカン」や「掠奪された七
人の花嫁」にすばらしいのがあり
ました。

(大分、春田生)

○ 私のはじめて貴誌を知ったのは
貴誌旧刊号時代のことです。いま
す。爾来、味けない生活にとかく

「潰滅の前夜」のアイデアに依る賣画

四馬孝画『美しき女体家畜飼育室』(略号しま)

大中判印画紙(タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

負け勝ちな私を力づけて呉れたのは貴重な、この奇譚クラブであります。懇意にしている古本屋の主人が時折り見せて呉れるものの中から気に入ったものを二、三買集めては日夜愛読して居りますが、然し乍らお便りを致すのは、これからはじめてでございます。常日頃貴誌編集部御健闘に対するお礼やら貴誌に対する希望や不備も、いざペンを執りますと、何から書いてよいものやらとまどいます。が、最近号に目を通しますと多くの愛読者諸氏の指摘して居られる様に、何か線の細さというのでしようか、旧刊号に比べて確かに学術的ではあれ、多くは至って表面的に流れて旧刊号の様なズバリとした表現(復刊号に見る学術的な読物も結局はこのズバリと表現された、或いはされるものを暗示している様ですが)の少いことを認めざるを得ません。ズバリ表現、(この言葉は余り適当ではない様

ですが例えば一九五四年一月号の中の絵物語「置屋の主人と芸妓」とか、写真「愉悦」とか、「猿轡と私」の文章にもあるし、同じく四月号の中「慟哭の記」、「闇雲博士の回想」とか、その他数え切れぬ程ありますが)というものは確かに賢明なる諸兄は単純すぎてじきに飽きるといふかも知れませんが、私共には単純であるだけに時を経て読む時、いつでもその中に溶け込んで行くことが出来ます。勿論、「潰滅の前夜」とか「美容病院」とかの読物は私達(いや全人類といつても過言ではありません)の中に秘められた夢を誘い出させる楽しい読物です。又、「黒いベチコート」や「浣腸日記」の類は心ほのぼのとした快い作品ですが……。又、口絵についても、復刊号のそれは何か、あわただしくあつさりといひてしまった(こんなことを書くといふ伯連を馬鹿にしている様ですが、決してそんな

つもりではありません、悪しからず)という様な印象を受けがちになるのです。前記の「置屋の主人と芸妓」「轢殺」等は素晴らしい。又、「アメリカカフオト」などは線が素晴らしいと思います。大変身勝手なことを書き並べましたが、どうぞお許し下さい。然し、一冊、二冊と集めて参りますと何かしらその一冊一冊に云うに云われぬ愛着覚えて参ります。出来ることなら旧刊号から現在迄の全部を如何に高価になろうとも集めてみたいと思う様になつて参りましたが、(これは多分無理かも知れません)然し今年の臨時収入でこの夢の一部でもかなえたいと思います

(東京 大泉ひろし)

持っていますので岡田咲子氏の作品には、すっかり魅了されてしまいました。絵画では北原純子氏の作品の美しさに目をみはりました。特に乳房と太股の描き方が旨いと思います。わたくしは、何分にも若くうぶな青年なので小説においても女性を鞭打つこと自身よりも、それによつて相手が恥しがるという描写のエロチックな味を好みます。清純な感じの、やさしい美しい女を、手なら手だけ、足なら足だけ縛り、助けを求めて泣き叫び、逃げようとすると女から、即座に裸にするのではなく、ゆっくりと一枚一枚着物を剥ぎ脱がすというような描写を好みます。

(岡山 TK生)

○ 奇クの増刊号「貴小説特集号」を読んで非常に興味を覚えました。わたしはサドに興味を持つと同時に、女性の同性愛に興味を

○ 編集部よりV 手紙の転送や文通の斡旋は、原則として現在中止いたしておりますから左様御諒承願います。

新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号えつ)

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真V

大中判印画紙(タテ十八糎 ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

奇譚クラブ臨時増刊号

マゾヒズム随筆

予告

「ある夢想家の手帖から」

沼 正三

定価一部 二百円(送料八円)

二月中旬発売予定、即刻御予約下さい。

(発売と同時に予約者へ急送申し上げます)

本書は著者沼正三氏が直接旧稿に手を入られた外、新しく書き起された新稿多数を加えてありますので、マゾヒストの宝典として汎く同好者の座右に供せられるは勿論、他の傾向の方々に対しても広くアブノーマル全般に亘る好参考書として珍重されるべきものと信じます。口絵には氏のアイデアになる画集を挿入し、本文も又、他では絶対に伺い知ることの出来ない秘録を特集いたしました。どうか永く保存し愛読して下さいさるようお願い致します。大体二月中旬発売の予定で進行させておりますが、部数は多くありませんので一度売切れますと、その後の入手は殆ど絶望となりますから、今の中から御予約下されば安全であります。

◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

愛川悦子嬢の巻

★ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

★全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

大塚啓子嬢の巻

★股間縛り(略号しん3)

六枚一組 四〇〇円

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

★全裸縛り(略号しん4)

五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

田中芳代嬢の巻

★セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとうて縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

★股間しばり(略号しん6)

四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

手帖雑報欄

一八一 土屋久男「夢想のドミナを巷に求めて」(実話と秘録増刊風俗読本) マゾヒストの回想記という体裁を整えたものだが、作り癖かも知れない。本誌読者には別に感興あるものではない。

一八二 ブッシャーン及びモル著齊藤良象訳『性と芸術』(世界性学全集) 昭和初期に杉浦という人の全訳刊行が試みられたことのあるアルバート・モルの『性科学大系』の中の一部を訳出したもの。杉浦訳はひどい訳だった、分量的には原著の面目を伝えていると言えた。この訳本では余りに量が少な過ぎる。それに訳の質も大して上等ではない。マゾヒズムに関係のあるのは、モルの手になる「文学及び芸術におけるエロティック」(原著第五部)の部分であるが、本誌読者には既に名前文は紹介済みの奴隷小説作家ゴーテを文豪ゲーテと誤っている(これは杉浦訳本も同じ)など、こういう特殊文献を訳す文の予備知識に不足している様に思われる。

一八三 岡田甫編『現代風俗艶句選』末摘花研究の好者ある編者が十万余句中から三千句を選んで、先の『新川柳未摘花』の続編としたもの。異常心理の部門にマゾヒズムの目あり。「鮫の棲む淵で死にたいマゾヒスト」「かまきりの雄になりたいマゾヒスト」「マゾヒスト夫汗の足なめたがり」等々十数句を収めている。サディズム・フェティシズム、男色等の項もある。

一八四 村上信彦『女の風俗史』「女のズボン」とか「女のあぐら」とかいった題目に興味ある向きに、この書物自体は別箇の目的をもっているのであるが、例えば靴下の項目に収められた写真にフェティシストが昂奮することをおの著者は咎めはしないだろう。

一八五 太田三郎『女』同じ様な意味で、この本の「足」とか「裸形の皇后」とかの項目。「女の風俗史」の様に一つの主張を伴った述作ではなく、好事の著に過ぎぬが。

一八六 柴田錬三郎『デカダン作家行状記』終戦直後の作「狂者譚」の再録である第二話、第三話に、マゾ向きの所がある。妻を友人に寝取られながら、それを認め、その妻に願使せられて、妻の為に座敷に床を取り、自分分は三ツ指をつけてオヤスミナサイマセと挨拶して下って、女中部屋で寝る夫……を描いた小説が紹介される第二話。旦那を四ツ道にして愛の馬として乗り廻す若い妾の出て来る第三話。……尚この作者の眠狂四郎ものにもサド向き、マゾ向きの場面少からぬことは改めて言うまでもあるまい。

一八七 榎本捨三『戦雲アジアの女王』史伝的小説体で川島芳子の一生を述べたもの。彼女については、速報二五で村松梢風の文を紹介しておいたし、復刊後も原氏の時評(三年二月号十九項)で取り上げられた。男装の麗人金壁輝司令として満蒙の地に三軍を叱咤したM型女性であり、清朝の末裔として王者の血を引く貴婦人でもあった。悲劇的な最後と共に吾等マゾ族の空想をかき立てて止ま

ぬこの妖星の光輝千変する生涯を描き尽すには、恐らくツヴァイクの筆が必要で、この作者には少々荷が勝った様であるが、努力は認められる。少女時代に道で捨猫を拾うと、首に縄を付けて振り廻して海に放り、連れの男の子をゾツとさせたという非情の血統は、長じて宴会の席で、名立たる俳優を叱りつけ、罰として部屋の際に立たせて一晩中余興の歌を唱わせた——(まことに女王の業だ!)

——という逸話にも示される。この人がマゾヒストを相手にしたら、どんな夜を過ごしただろうか、と思わずにはいられない。

一八八 マゾツホ作、佐藤春夫訳『毛皮を著たヴィーナス』 雑報一五三、一七四で取り上げた訳文が、豪華な單行本になった。先に指摘した誤訳の一部、例えば、Princessを「値うちのない」とし、Messalinaを「綾絹」とした如きは、それぞれ「無価の」「メッサリナ」と訂正されているが、Lillis Parkの如きは、依然「公園」となっている。私の文によって正誤されたものではないらしい。——巻末のエッセイは(先の群像誌にもあったが)好論である。

番外 人工衛星犬ライカを廻って、人類に奉仕する犬という生物の存在意義を考えたりそれが雌であることから男女の優劣に思い及んだりすることにもマゾ的考察の種は尽きぬが、既に時機を逸したので、省略する。尚文学界新年号に、菊村到「奴隷たち」、大江健三郎「飼育」とマゾ好みの題名二篇があるが、内容はマゾ向きではない。